# 仮面ライダードゥーツ

緑紫　混離

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

**注意事項**

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面ライダードゥーツ

【Ｎコード】
Ｎ５５２４Ｎ

【作者名】
緑紫　混離

【あらすじ】
…ある世界のある日本にある街…風都。

そこには、人間を怪人…ドーパントへと変化させる悪魔の機械『ガイアメモリ』がある危険な町でもある。

その町で、ドーパント犯罪に立ち向かう戦士がいた…！

『さぁ…天罰タイムだ！！』

これで、決まりだ。

3／13・挿絵追加。プロローグとキャラ設定にて合計4枚の挿絵公開中。

絵師はかがるさん。

4／6・アンケート実施。

# プロローグ

■　■　■

風都近くの海　とある島にあるビルにて。

純白の雪の様な髪の長い美しい少女が一人、塔のような装置の最下部に繋がれていた。

それに近づいた黒のシャツを着た茶髪の少年は、その少女に近づき手を差し出す。

少女はそれに答えるように力なく笑って、手を差し伸べる。

だがその瞬間、そのビル全体に警報が鳴り響き、更にはヘリコプターのローター音までもが聞こえた。

少年の隣にいた黒帽子の壮年の男は、少年と少女を連れ、この場から逃げ出すため、走ろうとする。

だが、その中の少年は突然やってきた警備員達に問答無用で背中を撃たれそうになる……が、壮年の男がそれを庇い、その場に倒れ込んでしまった。

少年は撃たれた男に駆け寄った。

「だ…旦那!!しっかりしろ!!なぁ!!旦那!!」

旦那と呼ばれた男は、苦しげに息をしながら、自分のかぶっていた

黒色の帽子を少年の頭に被せ、なにか口を動かし…そのまま息を引き取った。

「旦那ァァァーー！！」

少年は叫んだ。

だが、隣の少女はきょとんとした顔のまま、少年を見ている。

すると突然、男の倒れた近くの床が膨らみ…そこから蛇を彷彿とさせる姿をする僧侶の様な異形が現れ、男はその異形の開けた穴に落ちていった。

その異形は宙に浮き、左手に持っていた黒光りする杓杖に光の弾を集めると、それを少年と少女に向けていくつも放つ。

少年は、異形の放った光の弾が着弾する前に少女の手を引っ張り、その光の玉から逃げるために反対に走る…

が、二人をヘリのサーチライトの閃光が襲う。

その刹那、横殴りに銃弾の雨が降り注ぐ。

その凶弾は外から窓にへばりつくように滞空しているヘリから、数えきれないほどに二人に向けて放たれる。

少年は少女の手を引っ張り階段の陰へ隠れる。

肩で息をしている少年を見て、少女は持っていたケースを開け少年に言った。

「悪魔と相乗り…出来ますか？」

その中には、今の状況には場違いな光沢を持つＵＳＢメモリが数本入っていた。

灰色、紫色、オレンジ色、藍色、黒色、銀色…さまざまな色がある。

そして、二つのスロットの様な物がついた何かの機械も入っていた。

…初めて会ったばかりのはずだが、この少女の言うことを不思議と信用できる事を少年――左之宮（さのみやはじめ）一は感じた。

一は、その少女の手をとり、笑顔を向ける。

＞ｉ１９７０５―２１６５＜

そして、意を決したように、一は紫色のＵＳＢメモリ、少女は灰色のＵＳＢメモリをケースから取り出す。

「あああああーーっ！！」

力の限りと一は叫び声をあげ、ベルト…《ドゥーツドライバー》にＵＳＢメモリを装填する。

瞬間、二人が光に包まれ、二人がいた場所には別のなにかがいた。

昆虫…蝉や蜻蛉、飛蝗などを連想させる赤色の複眼と灰色と紫の体を持ち、首からは銀色のマフラーをつけた戦士がそこにいた。

その戦士が振り向いた途端、一帯に強い風と砂の様な何かが吹き荒れ、ヘリはバランスを崩し落下、爆発する。

拳銃を持った警備員達も、ヘリと同じようにその風に吹き飛ばされていった。

「……。」

戦士は胸の前で十字を切り、その場で一礼する。

そして、マフラーを風にたなびかせ、戦士はその場を去っていった。

それから一年後　風都。

物語は、そこから始まる。

# プロローグ（後書き）

はい、どうも。緑紫です。

……ヴィケイドもほっぽり出して、何やってるんだろうか、オレ……。

ダブル終わったばかりですが、いろいろと原作に沿ってやっていきますので、どうかご容赦のほどを…

とりあえず、キャラ設定とかも考えないと…それでは。

# Dの検索／探偵は二人で一人（前書き）

はい、第二話…スタート。

# Dの検索／探偵は二人で一人

…ここは、風とエコの町…風都。

その町の一角では、短めの金髪をした一人の少女が街を歩いていた。

少女はメモ用紙サイズの地図を広げ、目的地を探しているようだ。

■　■　■

…そして一時間後、その少女は一軒の事務所についた。

「えーっと…、地図だとたしかこの辺…なんだけど…？」

少女の目の前にある看板には「鞍坂探偵事務所」と書かれていた。

その時、灰色と紫のに塗り分けられている、一風変わった色調のバイクが少女のそばに止まる。

バイクには、黒色のスーツの様な服を着た一人の青年が乗っていた。

メットをとり、青年――一（はじめ）は黒い帽子をかぶって、その金髪の少女に尋ねた。

「…我が探偵事務所に何か御用ですか？」

その質問を無視して、金髪の少女は一に尋ねる。

「なぁ……ここに書いてある「紳士」ってなんやねん。」

金髪の少女は看板に張ってあった《どんな事件も紳士的に解決します》という貼り紙をみて一に尋ねている。

ひとまず一は金髪の少女を事務所に迎え入れ、机の椅子に腰掛ける。

そしてココアを自分と少女の二人分淹れ、渡す。

ココアを一口飲んでから、一は近くの本棚から一冊の本を取り出し、机の上に置く。そしてゆっくりと説明を始めた。

「如何なる事態にも心揺れず、どんな人にも優しく接する。それが紳士です…」

が、少女は一の説明を聞く様子もなく机に上着を置き、本は下敷きにされた。

「あ……」

一は少し調子を狂わされたようだった。

少女はココアを飲んでから、バックから何かの書類らしきものを取り出し、一言。

「こっから立ち退いてもらうで。はいこれ権利書。」

「ブフォッ！！」

少女の言った突然の言葉に、一はよくあるマンガのキャラクターの如くココアを威勢良くその権利所に噴いた。

「ゲホッゲホッ、な、何だって！？」

少女の突然の言葉に一は寝耳に水と言わんばかりに少女に尋ねる。

すると少女は、権利所を慌てて拭きながら答える。

「うち、ここの大家なんや。変な探偵モドキには、即刻出ていってもらうで！」

と、そう答えて、ココアをグイッと飲み干し、立ち去ろうとする。

一は本が濡れていないかどうか確認した後、少女に向かって言った。

「いけませんね…。質問に質問で返していますし、何より近くの学生が、小難しい裏社会の大人をからかっては……」

「うちは今日この街に来たばっかや！おまけにうちはもう二十歳や！！」

「ほら、それがいけません。」

少女のその返答に一は、全く信じてなかった様子だった

■　■　■

「鞍坂アカネ……え、まさか旦那の娘さんですか！？」

一は驚きながら少女――アカネに聞いた

「せやで。お父ちゃんはどこなんや？」

その返答を聞いた途端、一の表情が暗くなる。

そして、少し間をおいてから一は口を開いた。

「旦那なら…当分の間戻りませんよ？」

「はぁ？うちそんなん聞いとらんで！？」

アカネがそういうのも無理もないだろう。

いると思っていた父親がいない上に全く見知らぬ男に当分戻らないと言われてしまったのだから。

「旦那は……」

一がそう言いかけたとき、一年前のあの光景が脳裏に蘇る。

「旦那は、私を……」

一はそこまで言うと口を閉じ、帽子を目深にかぶる。

「…なんや、はっきり言いや。」

そうアカネが訝しんでいると、玄関の呼び鈴が鳴る。

「む？今出ますよ…。」

一が玄関を開けると、そこには一人の女性がいた。

「あ…いっちゃん、久しぶり！」

「…もしかして…麻宮？麻宮真理那では！？」

一に真理那と呼ばれた女性は一の顔を見ると笑顔になるが…またすぐに沈んだ表情に戻った。

それを見た一は麻宮を事務所に上げ、ソファに一度座らせ、またココアを淹れ、渡す。

麻宮は出されたココアを一口飲み、唇を湿らせてから話し始める。

「いっちゃん…実は、探してほしい人がいるの」

「探してほしい人？」

と、麻宮は一枚の写真を取り出し、テーブルの上に置き、一に見せる。

その写真には麻宮ともう一人、男性が笑顔で写っていた。

「名前は井上雅人。ですか……彼氏なのですか？」

一は麻宮に訪ねた。

麻宮は顔を伏せながらその問いに答えた。

「…この人が姿を消してしまってから、もう一週間もたつの…。お願い、探して……」

一はおもむろに椅子から離れ、帽子をかぶると話し始める。

「この街は私の庭も同然です。安心して待っていて下さい。」

■　■　■

――私は左之宮一。私立探偵です。この街では、小さな幸せも、大きな不幸も、常に風が運んでくる…。高校時代の同級生・麻宮真理那の依頼は――

「…まさに、舞い込んだ一陣の風なのでした…」

「アンタ何一人でモノローグ語っとんねん!?」

と、アカネはどこからかスリッパを取り出し、漫才のツッコミ役よろしく勢いよく一の頭を叩く。

「あダァッ!!って貴女!!…なんでついてきてるんですか!?」

一は痛そうに頭をさすりながら若干困惑気味になりながらアカネに問う。

「アンタの事、間近で審査してやろうと思てな……で、どうしてその井上っていうヤツが消えたか分かったんか?」

「あぁ、はい……どうやら会社をリストラされた事が原因らしいです。」

「へぇ…自分に自信でも無いんかな?」

「多分そうでしょう。」

そう、二人で話していると…近くからパトカーのサイレン音が聞こえる。

一とアカネがそのサイレン音に聞こえたほうを見ると…トンネルから黒煙が吹き出し、警察や消防の交通規制による渋滞が起きていて慌ただしい雰囲気を出していた。

一とアカネはそのトンネルに向かって走り、警官の目を盗み姿勢を低くしながら二人はトンネルへと入っていった。

「…刃さん、なにか会ったんですか?」

「おおっ?!…って、お前かよ一…。」

近くのパトカーに肘をかけていた中年の刑事…刃野警部に話しかけると、刃野警部は大きく驚く。

「またドーパント…ですか?」

「ああ。見ろよこれ。ひっでぇもんだろ…?」

「な、なんや……これ……?」

刃野警部が指さす方を見ると、そこはビルが沈んでいる光景……それは普通では考えられない光景だった。

既に警察による検証が始まっていた。

一は自分の被っていたハットを見ながらアカネに言う。

「“ウィンド・スケール”……井上さんの元職場ですよ。」

「…ってことは…？」

「リストラされた逆恨みでしょうね。」

「で、メモリを買ってドーパントか…めんどくさいなおい。」

「あ、そう言えばマッキーはどうしました？」

「今日は休みだ。」

「平和で何より。」

刃野警部と会話しながら、一は陥没したビルに近づく。

刃野は陥没したビルを指差しながら続ける。

「下で土台の鉄骨が溶けたりしない限りこんな事にはならないってよ。」

一はデジタルカメラ型ガジェット…《パピヨンショット》で陥没したビルを写しながら呟いた。

「ドーパント……ですね。」

「ドーパント？」

一の言葉にアカネが問いかける…が一と刃野はアカネに構わず話を続ける。

「先週から数えても似た事件が三件目…さすがにここまで派手にやっちゃいなかったがな…」

「御苦労、お察しします。」

「全くだ…あ、これ資料な。何か分かったら言えよ?」

刃野警部は一に事件に関する書類入りの封筒を渡し、再び現場に戻っていった。

「了解しましたよ…」

一はアカネと一緒に、トンネルから出ていく。

祐規はかがみからもらった別の事故現場の写真を見ながら独り言を漏らす。

「やれやれ…人捜しのはずが、ドーパントにたどり着くとは……。」

「ドーパント?」

アカネがまたドーパントについて一に問う…が、またスルーされ、一は腕にかけたステッキを振り回しんがら独り言を言い続ける。

「これはまた、私達の出番という…風向きでしょうか?」

…そこで、いい加減散々無視された事に怒りを覚えたアカネはカバンから取り出した銀色のハリセンで一の頭を勢いよく叩いた。

「あギャッ!!」

アカネは一の頭をハリセンで叩いてさらに後ろに回り込み、体をがっちりとホールドし一の首を捻りな、そのまま聞く。

「カッコつけとらんで早う説明せいや!!ドーパントって一体なんなんや!?カーネルさんと同じ目に会いとうなかったら、さっさと言い!」

「あだだあだっだだ!!ぼ、暴力は反対ですって!!しかもカーネルさんと同じって私を沈める気ですか、貴女はっ!!」

一がそう言った直後、携帯電話の着信音がなる。

一は助かった、という顔をしてため息をつき、携帯電話を取り出して相手と通話する。

「もしもし?マープル、私ですけど。」

「マープル?」

アカネはまた聞くが…さすがに、電話中はハリセンを自重する。

「シケードフォンでそっちのパソコンに送った画像見ました?」

電話口からは、おっとりとした声が聞こえる。

『はい♪ちょっと面白そうですね～…色々、漲ってくる感じですよ～♪』

「犯人の正体を知りたいのです。ガイアメモリの正体を調べてほし……かったのですが。」

一は近くの地下通路の入り口あたりに何かが居るのを見つけ、再び口を開く。

「……やはり無駄です。」

『どうしてですか～？』

「ご本人がいらっしゃるからだよ……それも目の前に……！！」

ななこを後ろに下げ、祐規は続ける。

「ガイアメモリの正体は……」

『「ＭＡＧＭＡ…です（ね）？！」』

そして、何かの容貌はすぐに分かった。人の形こそ留めてはいるものの…その姿はまるで荒れ狂う炎と溶岩を身に纏ったような姿をした怪人だった。

理性がある様には到底見えない、本能をさらけ出している様な顔つきだ。

怪人は全身に炎を纏わせ、力を溜めるように吠え声を上げる。

そして左手を前に突き出す…と、手から放たれた溶岩と炎の奔流が二人に迫る。

「まずいです！！全力で走りなさい！！」

一はアカネの手を掴み、その場から逃れるべく必死に走りだす。

だが炎と溶岩の奔流は二人が考えるより早く追いかけてくる…！！

……しばらくして、炎と溶岩の奔流の跡には二人の姿はなかった。

炎と溶岩の怪人はそれを確認し、その場から立ち去って行った……

……

## Dの検索／探偵は二人で一人（後書き）

…さて、次はキャラ紹介をば。

## キャラ設定（前書き）

はい、キャラ設定でーす。

ガイアメモリの事で、若干ネタバレ。

## キャラ設定

名前：左乃宮一（さのみやはじめ）

年齢：２１歳

容姿：首の後ろでまとめた胸までの茶髪に、頭には『Ｓ＆Ｍ』と刺繍された山高帽をかぶっている。

服は動きやすく改造したような黒いスーツに似たもの。動きやすいよう、皮の様な素材で出来た頑丈なスニーカーを履いている。

片手にはステッキを持ち、そのステッキと帽子だけは肌身離さず持ち歩いている。

性格：基本人情に厚く、お人よし。

誰に対しても敬語だが、ドーパントやミュージアムの人間に対しては乱暴な口調になり、毒舌を吐く。

好物はミルク＆砂糖たっぷりのコーヒーと、マープルの手料理。

＞ｉ１７６１６―２１６５＜

所持メモリ：《ＰＯＩＳＯＮ》《ＢＵＳＴＥＲ》《ＳＰＩＲＩＴ》

《ＧＥＮＴＬＥＭＡＮ》

ギジメモリで、《ＰＡＰＩＬＬＯＮ》《ＳＮＡＫＥ》《ＣＩＣＡＤＡ》の全7本を所有。

備考：マープルとは恋人同士。

■■■

名前：マープル

年齢：１７歳

容姿：雪の様に白い肌と髪を持つ。髪は腰までの長さで、胸のあたりで縛って止めている。

服は少し大きめの男物のコートを羽織り、その中に白色のタンクトップと長ズボンを着ている。

髪には黒いダイヤ型の髪留めをつけ、肌身離さず大切にしている。

性格：おっとりとしていて優しい。

ほんわかとしたいい子…なのだが、自信が持つ、世界と連結した巨大な検索エンジン、通称宙の本棚（ソラノホンダナ）で検索するときは暴走する。

未成年だが、偶に酒を飲んで倒れている。

＞ｉ１７６１７―２１６５＜

所持メモリ：《ＡＳＨ》《ＤＲＥＡＭ》《ＭＡＧＩＣＩＡＮ》ギジメモリで《ＬＩＺＡＲＤ》《ＴＵＲＴＬＥ》《ＳＷＡＬＬＯＷ》の全６本を所有。

備考：一とは相思相愛。本棚で検索したものをすぐに行動に移して騒ぎを起こすこともしばしば。

■■■

名前：鞍坂鍛治（くらさかだんじ）

年齢：４５歳

容姿：短く刈った金髪に、真っ白のスーツを着込んでいる。頭には山高帽をかぶり、腰にはいつもステッキを携えている。

性格：？？？

所有メモリ：《？？？？？？》《ＧＥＮＴＬＥＭＡＮ》（ジェントルマンメモリは現在一が所有。）

備考：一年前、ある依頼の事故によりマープルを助け出した後死亡。

イギリス人と日本人のハーフ。

名前：鞍坂（くらさか）アカネ

年齢：２０歳

容姿：肩までの金髪で、カジュアルなワンピースを着ている。
顔はどちらかというと外人よりだが、口調などは完全に関西人。

性格：明るく、元気。父親の事が大好きだった。

一応イギリス人とのクォーターだが、生まれも育ちの大阪のため、
そんなそぶりは全くない。

＞ｉ１７６１９―２１６５＜

所有メモリ：無し。

備考：銀と金のハリセンをもち、なぜかその一撃はたまにドーパントの攻撃よりも痛い。

## キャラ設定（後書き）

……とりあえず、こんな感じで。

また更新しますよー？

■　■　■

…また溶岩が冷めてもいない道路。

だが…二人は、生きていた。

炎の奔流に飲まれる前に一は腕時計型のメカ《リザードショック》から尻尾型のワイヤーを射出し、上へ逃げ延びていた。

「どうなってんのやこの街…？うち…こんなの聞いてへんで…」

「分かったでしょう？危ないですから、故郷へ帰った方がいいですよ。」

一はアカネを抱き上げながらワイヤーを下ろしながらやりとりを続ける……が。

「……うがぁーー！！」

アカネは一をハリセンで殴りつけ、先に地面に降りる。

一瞬バランスを崩し溶岩に落ちそうになるのもなんとか持ち直し、ふてくされた顔で歩き去っていってしまった。

「ちょ、ちょっと？！アカネさん？！」

一はアカネを呼び止めるべくスパイダーショックのワイヤーを伸ば

し地面に降りようと画面をタッチするが……

「あ、あら？コレどうやって下に降りるんでしたっけ？」

なぜか上がったり下がったりを繰り返してしまい、結局ワイヤーは使い捨てでもう戻せない事を思い出し、ワイヤーを分離させて一が地面に降りられたのはそれから２０分後。

当然の如く、アカネは既にその場から居なくなっていた……

■

■

■

それと時を同じくして……風都郊外　園咲邸

風都の郊外にあるその豪奢な屋敷に一台の黒塗りのリムジンが入っていった。

そこにある大食堂で、初老の男と二十代程の女性が豪華な料理を楽しみながら何か笑いながら話している。

その二人が話していると…近くの扉が開き、華麗なドレスを着たまだ若々しい女性が慌ただしい様子で入ってきた。

それを見た女性がそのドレスの女性を見るなり少しイラついているように言い放った。

「遅刻者はクビよ若菜。私の会社ならね…。」

その女性の言った言葉に若菜と呼ばれた女性は軽く舌打ちする。

「だって渋滞だったんですのよ！？本ッ当に腹立たしい！久しぶりの晩餐会の日に……！」

若菜は席へ歩きながら不満をぐちぐちという。

「ビルが溶け、人が死ぬ。この街では、よくあることだ。」

一番奥の席に座っている初老の男――園咲琉兵衛が、膝に置いた猫――ミックに自分の分の食事をフォークで食べさせようとしながら続ける。

「ま、我々の仕事のせいでもあるのだがね……」

「あれは《ＭＡＧＭＡ》のメモリでしょ？一体誰が売ったのかしら…？」

琉兵衛は若菜の問いになおもミックに食事を食べさせながらその問いに答える。

「最近、非常に販売業績の良い若手がいると聞いたんだが？」

琉兵衛のその問いにもう一人の女性は口を開く。

「お父様。」

「何だね冴子？」

「実は私……」

冴子と呼ばれた女性は大きめのＵＳＢメモリのようなものを取り出し、それを腰に現れた金属製の無骨なベルトのスロットに差し込んだ。

―ＢＩＳＨＯＰ！―

電子音声と共に、冴子の姿が蛇と僧侶を合わせたような異形――ビショップ・ドーパントの姿に変わる。

「結婚したい人が見つかったのよ。」

冴子のその言葉に琉兵衛はただ静かに笑っていた。

■

■

■

園咲家でそんな会話があった少し後……風都某所　鞍坂探偵事務所

アカネは一足先にここに帰り、一の荷物…壁にかけていた帽子や時計などを片っ端からダンボールに詰め込み、処分しまくっていた。

「どりゃっ！！…アイツ本ッ当にムカつく！！絶ッッ対にこっから追い出したる！！」

肩で息をしながらそう言うも、再び一の荷物や私物をダンボールに詰め、捨てに行こうとする。

…と、今まで気付かなかった扉がそこにあった。

「なんやろ…これ？」

アカネは好奇心に負け、おもむろにその扉を開け、中に入る。

その扉を開けて最初に耳に入ったのは、ラジオと女性の呟き声だった。

見渡すと、そこは若干薄暗く、広々としておりガレージを連想させるような空間だった。

壁にはずらりと大きなホワイトボードがあり、そこにはアカネにも…いや、普通の大人でも全く分からないであろう暗号じみた数式、化学式、自然現象……

それについての難解な解説や歴史上の出来事に関する事柄など、様々なものが書かれていた。

アカネは近くの階段を降りて据え付けの梯子で金網の床に登り、なにか空間一つ空いた向こうのホワイトボードでぶつぶつ言いながら本を片手に持ちペンを走らせている女性に近づく。

「なぁ…」

アカネの呼びかけに女性は振り向く。

真っ白の長い髪に、胸のあたりでそれを止めた優しげな顔立ちの少女だ。

季節外れのコートを着て、どうでもいい様にアカネを見ている。

「なんですか？今忙しいんですけど…」

女性はそれだけ言うと再び本を見ながら別のホワイトボードに移り、再びぶつぶつ言い始める。

「現在《二酸化ケイ素》《厳土岩》で、１５万１８０件該当…うち１４万２６５０件が既に閲覧済みで…」

「あんた、もしかしてマープルちゃんか？あの変態紳士の相方の…」

また没頭し始めたマープルにアカネが問う。

「鞍坂アカネ」

「え？」

マープルはアカネのフルネームを突然言い、本を読みながら言う。

「あなたの事に関しては既に閲覧し終わってます。もう見る気もわきません…。早くオオサカタカという街に帰った方が賢明ですよ。」

マープルのその言葉を聞いた途端アカネは一瞬驚く。

「オオサカタカって……あんた大阪知らないの？…少なくともこの風都よりはずっと有名だけど。例えば…あ、たこ焼きとか……」

…その《たこ焼き》という単語を聞いたとたん、マープルが一瞬ピクッと反応し、再び本を片手にホワイトボードにペンを走らせ始めた。

■　■　■

……そして、それから数分たって。

アカネが入ってきた扉から今度は一が入ってくる。

「アカネさん…！！ちょっと、何で貴女がここに！？」

一は敬語で声を荒げながらアカネに問う。

だがそれに答えのはアカネではなくマープルだった。

「お帰りいーちゃん…この子は凄いですよ？ムラムラしそう……新しい検索体験だよ！…いーちゃんは知らないでしょ？《たこ焼き》っていう食べ物を！！！！！」

マープルのその言葉を聞いた途端、一は一瞬ビキッと固まり……まるで錆び付いた機械のように後ろのホワイトボードを見る。

……そこには、たこ焼きに関する記述がびっしりとホワイトボードを埋め尽かさんとばかりに書かれていた。

だしの分量・粉の分量・神戸焼き・ちょぼ焼き…など、たこ焼きについて様々な事が書かれている。

「《たこ焼き》《神戸》《だし》で３５４万３２８０件該当…なかなか面白い食べ方ですね。今晩はこれにしましょう…」

一はアカネに駆け寄りステッキで指しながらアカネに言う。

「やってくれましたね！！マープルの気を散らせて！！」

「ヒィッ！…な、なんなんやこの子！？」

アカネは怯えた様子で祐規に問う。

「マープルが調べてくれなければ、ドーパントの事件が追えませんですよ！！」

「またそれ！！ドーパントって何なんや！？」

一はまた詰め寄ってくるアカネに心が折れ…ドーパントについて語り始めた。

まず最初に、一は机のパソコンを起動し、一枚の画像ファイルを呼び出す。

そこには、大きめのＵＳＢメモリのようなものが写った写真で、どこか骨を連想させるようなデザインだった。

中心には赤色の《Ｉ》にも見えるマークがかかれ、左上には《ＩＮＪＵＲＹ》と書かれている。

「ＩＮＪＵＲＹ……傷？」

「…今、この街にこんな物をばらまいている奴らがいます。《ガイアメモリ》という名前ですね。コレが、手にした人間をものすごい超人…いえ、怪人に変異させます。で、その怪人というのが……」

「《ドーパント》…？」

アカネのがそういうと、一は「大正解。」と言って近くのソファに座る。

「そんな馬鹿な話が「さっき本物に襲われたでしょう？」……」

アカネはそう言いかけるが、一に遮られてしまい、言い返せない。

「明石焼き？神戸たこ焼き？？玉子焼き？あ、こっちははどうでしょう……」

瞳が若干濁り、ハァハァと息を荒げながらも、たこ焼きの事を調べまくっているマープルを見るとため息をつきながらアカネに言う。

「……しかし…。マープルは一度こうなると歯止めがききませんからねぇ……」

「じゃどーすんのー？」

「マープルが全て見終えるまで待つしか…ないですね…」

「う〜〜……」

自分にも責任はあるので、強く言い返せないアカネ…

■　■　■

「ふぅ……。待たせてごめんね、いーちゃん。たこ焼きの全て、閲覧し終えましたよ！」

と、マープルは本をバタンという大きな音を立てて閉じ、可愛らしい笑顔を見せながら一に言った。

たこ焼きを調べはじめてから数時間……アカネにいたっては、居眠りをしていた。

一はだるそうに欠伸をしながらマープルに言う。

「……それでは早く入って下さい。宙の本棚（ソラノホンダナ）に……」

「うん♪」

マープルが目を閉じると、その周りを淡い光が照らし、その瞬間マープルの脳内に白い空間と無数の巨大な本棚が現れる。

アカネは目の前に起こっていることがあまり理解できていないようだった。

まぁ、はたから見れば変にポーズをとって目を閉じているだけだからだろうが。

「検索を開始です。メモリのタイプは…《ＭＡＧＭＡ》。」

マープルが脳内で一言言うと、ものすごい勢いで本棚と本が飛ぶように減っていく。

アカネはマープルが一体何をしているのか分からず、一に聞こうと思ったが遮られる。

宙の本棚にアクセスしているマープルに一は問う。

「奴が次に襲う場所をお願いします。まず一つ目のキーワードは《井上雅人》。」

マープルの前で先ほどと同じように本と本棚が飛ぶように減っていき…本棚の数がかなり減った。

「いきなり減りました…」

「ま、人名だからでしょう。二つ目は［ウィンド・スケール］。奴が辞めた会社の名です。」

マープルがその言葉を聞くと、またしても本棚が減り…一つの本棚が残る。

一は写真を見ながらマープルに言う。

「…では、三つ目に次の数字を。［ＷＡＳ－０９Ｋ－０９７１Ｓ］…です。」

その言葉を聞くと、マープルの前で残っていた一つの本棚から本が文字通り飛ぶように減り…最終的に一冊の［ＰＬＡＣＥ］と書かれた本が残る。

マープルはその本を手にとりページをめくる…と、瞬間アクセスが

解除される。

そして、マープルは本を見ながら一に言う。

「タグの商品番号を入れるとはいい思いつきです。これは特定店舗で限定販売されている商品。…この商品を取り扱っている店舗でまだ襲われていないのは…［ウィンド・スケール　風谷支店］です。」

「了解しました。行きますよ、マープル。」

「はぁい♪」

そのまま事務所を出ていく一を見送るマープル。

それを見たアカネが、不思議そうになぜ一緒にいかないのかを尋ねる。

「もちろん行きますよ？だって私達は……」

―二人で一人の探偵だもの♪―

そう、マープルは魅惑的な笑顔で笑った…

■　■　■

数十分後　ウィンド・スケール　風谷支店。

一はバイクを駐車場に停め、井上の姿を探す。

日曜日ということもあって人でかなり賑わっていたが…幸運な事に井上はすぐに見つかる。

人だかりの中でただ一人、大柄な茶髪の男――井上が怒りに満ちた表情で立っていた。

一は井上に近づき、聞く。

「井上雅人さん…ですね？」

井上はそのまま怒りの矛先を一に変えた様子で口を開いた。

「おまえも……ここの社員か…？ならば……燃え尽きろ！！」

と、井上は左腕の袖をめくり上げ、左手首にある生体コネクタに赤色の、火山を模した《M》の字が書かれたガイアメモリを差し込む。

―MAGMA！―

そのガイアウィスパーからの音声とともに、ガイアメモリから炎が発せられ、井上を包み込む。

その姿を見るなり、周りにいた群衆達はパニックの嵐となる。

そして井上は、荒れ狂う炎ドロドロと溶けていく岩石を纏ったような姿をした怪人――マグマ・ドーパントとなった。

「AAAAAAAAAAAAAAAAA！！」

「うおっと？…って、一大事？！」

マグマ・ドーパントは叫びながら炎を纏い、一の山高帽にその火が燃え移りそうになり、一は慌てて消した。

気を取り直して、一は少し焦げた山高帽をもう一度被り直し、マグマ・ドーパントに静かに言い放つ。

「止めましょう…私が…いえ、俺達が…」

と、祐規は懐から、機械（ドゥーツドライバー）を取り出し、それを下腹部に取り付けると、まるでベルトのように変化する。。

同じ頃、事務所ではなぜか金網の床から降りて本を読んでいたマープルの下腹部に一と同じドゥーツドライバーが現れる。

一は上着の内ポケットから紫のガイアメモリを取り出す。

それには、髑髏のかかれた瓶の口から、不思議な色の液体が垂れている絵で、《P》の字のようにも見える。

ガイアメモリのスイッチを押すと、電子音声が鳴る。

―POISON!―

「ッ!?」

マグマ・ドーパントは一の手の紫色のガイアメモリを見ると一瞬驚いた。

それも仕方ない、種類が違うとはいえ相手もガイアメモリを持っていたのだから。

一はガイアメモリを構えながら今は事務所にいるマープルに向かって呟く。

「マープル…行くぞ。」

■　■　■

事務所のマープルも灰色のガイアメモリを構え、一と同じポーズをとる。

そのメモリには、サラサラと崩れていく灰の塊で出来た《A》の字のようにも見える。

―ASH!―

「あ!まさか……ガイアメモリ?!」

驚くアカネにも、マープルは全く意を介さない。

「「変身!!」」

異なる場所で二人は同時に言う。

マープルはダブルドライバーの右のスロットにアッシュのメモリを

装填すると、灰色の小さな光とともにアッシュのメモリが消え、同時にマープルが目を閉じ、ぽてんと倒れ込む。

「ちょ、マープルちゃん!?どうしたの!?マープルちゃん!!」

アカネは、倒れたマープルに駆け寄る。

だが、マープルは起きない。

まるで、先ほどのメモリとともに意識まで消えた様に……

■　■　■

ウィンドスケールの前にいる一のドライバーの右スロットにアッシュのメモリが転送される。

一はそのままメモリを押し込み、もう片方の手に持っていたポイズンメモリを左側に装填する。

そして、ドライバーを操作し、アルファベット《W》の形にすると、再び電子音声が鳴り響く。

―ＡＳＨ！ＰＯＩＳＯＮ！―

灰が吹き荒れるような音と、なにかが毒々しく溶けていくような音が鳴り…灰色と紫の光の破片が一の体を包む。

次の瞬間には、灰色と紫の体を持つ戦士――仮面ライダーＤＯＴＷＯ（ドゥー・ツ）・アッシュポイズンとなった。

一がドゥーツに変身した瞬間、強い灰混じりの突風が吹き荒れ、マグマ・ドーパントもその風にバランスを崩す。

その突風が止むと、ドゥーツはマグマ・ドーパントを指差し言い放つ。

「「さぁ、天罰タイムだ！」」

ドゥーツはマグマ・ドーパントにそう言い放つと、マグマドーパントめがけて走り出す…！

## Dの検索／仮面の戦士、その名は…（後書き）

……どこできるか分からず、こんな事に…！！

しかも途中で半分以上データが消えたりと散々でした。

お楽しみいただけたら幸いです。

## Dの検索／街を泣かせるもの

■　■　■

ドゥーツはマグマ・ドーパントにそう決め台詞を言うと、自分から向かい、腰にさしたステッキを抜き、それをレイピアの様にした突き、そしてパンチとキックを主体にした攻撃でマグマ・ドーパントにダメージを与えていく。

『さっさと砕けろ、ゴラァッ！！』

『…いーちゃん、落ち着いて。』

…ドーパントなどとの戦いになると、とたんに毒舌になり乱暴な言葉遣いにもなる一を、マープルが宥める。

…はたから見ると、左の眼と右の眼が明滅しているだけなので、マグマ・ドーパントは困惑して、さらに攻撃を受けている。

そして、怒りのままに繰り出されたパンチ二発からの跳び蹴りをくらい、マグマ・ドーパントは大きく吹き飛ばされる。

「GA…AAAAAAAAA?！」

『ふん…どうだ、毒の打撃の味は？さっさとブレイクしやがれ、このたき火野郎。』

マグマ・ドーパントは、吹き飛んでも立ちあがるが、飛び蹴りを喰らった場所から紫の何かが体を蝕み、それに苦しんでいるようだ。

ポイズンメモリ…それは、『病毒の記憶』をもつ、非常に癖のあるメモリだ。

持っている能力は、『病原体・毒の支配』…それは、『感染の記憶』を持つバイラスメモリにも似ているが、汎用性がケタ違いだ。このポイズンは、毒の濃度操作や、改造さえできるのだから。

その攻撃に、マグマ・ドーパントは叫びながら体に炎を纏わせて無数の火の玉をドゥーツに向けて撃ち込んでくる。

ドゥーツはステッキを投げ捨て、火の玉を蹴りで弾いたり避けたりするが……さすがにこれだけの数の火の玉を避けきることは出来ず、何発か受けてしまう。

だが、ドゥーツは全く気にした風も無く突き進む。

『……全然効かねぇなぁ、オイ!!』

『いま、アッシュメモリ使ってますしね…。』

…アッシュメモリは、『灰燼の記憶』を持つメモリ。

持つ能力は、『灰の自在操作』と、弱弱しいものだが、もう一つ大きな力を持っている。

それは…炎や雷攻撃に完全な耐性を持つことである。

灰とは、もう完全に燃え尽きた後の物…二度と、燃えることはないのである。

その代わり、水や風の攻撃には極端に弱いのであるが。

『…だが、ウザってぇな。どうにかするか？』

『なら、これですよ～♪』

そう言うと、ドゥーツ右半身に宿ったマープルはドライバーのスロットからアッシュのメモリを抜き、今度はオレンジ色のメモリを取り出し、スイッチを押す。

―ＤＲＥＡＭ！―

そのメモリには、ふわふわとした雲の様なもので書かれた、《Ｄ》にも見える絵が描かれたメモリ。

ドリームメモリをスロットに装填し、再びドライバーをＷの形にすると、先ほどは異なる音が鳴り響く。

―ＤＲＥＡＭ！ＰＯＩＳＯＮ！―

次は、何やら子守唄にも似た音と、先ほどの毒々しい音が鳴ると、さっきまで灰色だった右半身が明るいオレンジ色となり、ドリームポイズンへと姿を変える。

マグマ・ドーパントは一瞬動揺したものの、再び火弾を飛ばしてくる。

すると、ドゥーツの右手の指が鞭の様に伸び、飛んできた火弾を全て弾く。

まるで、夢でも見ているように。

…『夢の記憶』を持つドリームメモリの能力は一つ。

『体を万物に変化させる』事だ。その能力は、他のどのメモリよりも恐ろしい。

体を液体にも、動物にも、兵器にも変質させる事が出来る…味方にすればまさに夢のようだが…敵に回せば、それは悪夢に他ならない。

一は突然のマープルの行動に少し文句を言う。

『おい！勝手に変えんなよ、殴りづらい！』

『いいじゃないですかー。』

マグマ・ドーパントは再び動揺して火弾を飛ばしてくるが、ドリームの伸びる指の前に全て弾かれてしまった。

ドゥーツは体をゲル状化し、飛んで一気に間合いを詰める。

『オラァっ！！』

「ＧＹＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！！！」

パンチを仕掛けると思いきや、その拳が剣の様になり、しかもそれが鞭のように曲がるので、マグマ・ドーパントは思うようにガード出来ないまま追い詰められていく。

そして、最後にドゥーツのスパイク付きの脚による跳び蹴りを喰らい、吹き飛ばされてしまう。

『いーちゃん、どうします？』

ドゥームの右半身のマープルの意志が一に話し掛ける。

『無論…メモリブレイクに決まってんだろ。』

マープルはドリームメモリをスロットから抜き、再びアッシュメモリを装填する。

―ＡＳＨ！ＰＯＩＳＯＮ！―

アッシュメモリの変身音が鳴り、ドゥーツはドリームポイズンからアッシュポイズンへと戻る。

マープルの意志はそのまま左のスロットからポイズンメモリを抜き、ベルトの右側部にあるスロットに装填した。

―ＰＯＩＳＯＮ！　ＭＡＸＩＭＡＭ　ＤＲＩＶＥ！―

その瞬間、風と灰が吹き荒れ、ドゥーツはその風の中心に立ち、まるで竜巻の中心で上がっていくように、ゆっくりと宙に浮きはじめる。

「「ポイズン・エクストリーム！！」」

ドゥーツは技の名前を叫びながら跳び蹴りの姿勢を取り、マグマ・ドーパントへ突っ込んで行く。

ドゥーツとドーパントとの距離があと少し…というところまで差し掛かった所で、ドゥーツの体が左右半分に分かれ、それぞれマグマ・ドーパントへ突っ込む。

その時間差の蹴りを受け…爆発したと同時にマグマ・ドーパントは吹き飛ばされ、ドゥーツは灰が雪の様に散る中、ゆっくりと地に降り立った。

マグマ・ドーパントは爆発と共に井上に戻り、地面に倒れ込んだ。

そして、井上が倒れ込むと同時に体から排出されたＭＡＧＭＡのガイアメモリも砕け散る。

「あ…ぁ……！」

井上は砕け散った自分のガイアメモリを見て絶句する。

『…ふぅ。後は警察ですね…刃さんになんて言いましょうか。』

『やっと、落ち着いてくれた…。』

頭を冷やした一に、安堵の声を出すマープル。

そんな事をドゥーツは呟きながら井上へ歩み寄ろうとする。

……だがその瞬間地響きが起こり、井上の後ろから地面を割りながら巨大な恐竜の頭が雄叫びをあげながら井上に近づいてくる。

『な、なんですかあれは！？』

「や…やめろ!!やめてくれ!!誰か助けてくれぇぇ!!」

だが恐竜はそんな井上の命乞いなど初めから耳に入っておらず、雄叫びを上げながら井上に喰らい、井上の断末魔が響く。

「ぎゃあああああああ!!」

『っ…!やめなさい!』

ドゥーツは井上を助けるべく恐竜に向かっていくが…尻尾を使った攻撃にはじき飛ばされ、壁に叩きつけられる。

『あいたた…』

『大丈夫…?』

『平気ですよ。』

そう言いながらドゥーツは携帯電話――シケーダフォンを取り出し、何か操作し始める。

■　■　■

同時刻　鞍坂探偵事務所

「…なぁ～。マープルちゃん?返事してぇな…。」

アカネはを団扇でマープルを扇ぎながら問い掛ける。

…当然、意識がないので返事も無いが。

と、その瞬間、アカネの背後で大きな音が聞こえる。

「ッ！？な、なんや…今の？」

アカネは怯えたように独り言を漏らす。

すると、上にあった金網の床が収納され、轟音とともに大型車両の四輪の下部部分と車輪がドッキング……。

そして最後に上部カバーが閉まるのを見たアカネは、パニックを起こしながらマープルに呼びかける。

「ま、マープルちゃん早よ起きぃ！！ここから逃げんと！！」

だがマープルは当然目を開けることはない。

そうこうしているうちに上部カバーが閉まり、巨大なバギーのような車両――リボルギャリーへと変形する。

前方にある多重シャッターが開き、タイヤが勢い良く回転し、リボルギャリーはガレージから猛スピードで発進した。

「動いた……。うわぁ！！何なんやこれぇぇぇぇぇ！！？？」

巨大な車両がドゥーツのもとへ向かうべく猛スピードでトンネルを翔ける。

■　■　■

『うわあぁぁッ！！』

先ほどから井上を取り戻そうとしているドゥーツは……力及ばす、再び恐竜に吹き飛ばされる。

恐竜は地面に潜ると、地面の下からの頭突きでドゥーツを天高く吹き飛ばす。

『ちょっと…これはヤバ…？！』

下には恐竜の巨大な牙が待ち受け、落ちてきたドゥーツが恐竜に喰われそうになった……そのとき。

恐竜の目の前に巨大な黒い鉄の塊――リボルギャリーが現れて、ドゥーツを救い出した。

『おお！リボルちゃん、ナイスですよ～！！』

『今度、洗車してあげましょう！』

リボルギャリー嬉しそうなエンジン音をあげ、ドゥーツを上に乗せると着地し急停車する。

なにげにリボルギャリーの内部ではアカネが急停車のせいでバランスを崩し転びそうになる。

しかも、アカネは外部カメラからの映像に映った異形――ドゥーツを見ると若干泣きそうになる。

「ひっ！！？？な、なんやアレ！？半分こや！？」

ドゥーツは再び地中に逃げた恐竜を探し始める。

『くっ…！何処に行きました！』

ドゥーツがそう言った途端、恐竜はリボルギャリーの真下の地を割り、ドゥーツとリボルギャリーを吹き飛ばした。

『ぬあああああっ？！』

リボルギャリーは宙を舞いながら落下し…落下した拍子に横転してしまい身動きがとれない状態になってしまう。

恐竜は地を割りながら横転したリボルギャリーに向かって突っ込んでいく。

内部のアカネはモニター越しに見えたその光景に耐えていた恐怖で…遂には泣き出してしまった。

「うわぁぁぁぁん！！嫌やぁー！！せめて、彼氏が欲しかったー！！」

そんな風に取り乱しているアカネは兎も角、ドゥーツはシケーダフォンを取り出し操作する。

すると、リボルギャリーの背部の大型ファンが物凄い勢いで回転し、それから発せられた突風で横転したリボルギャリーを操作し、ファンを恐竜の口へと叩きこむ。

恐竜の口からファンの回転で大量の火花が発せられ、遂に耐えきれなくなったのか、恐竜はリボルギャリーに食らいつくのをやめる。

そしてリボルギャリーを空中に吐き捨てると再び地に潜り…その場から逃げてしまった。

投げ出されたリボルギャリーはその反動で空中で姿勢を制御し、横転状態から回復する。

『待ちなさいっ！！』

『いーちゃん…手遅れ。』

ドゥーツは恐竜を追いかけようとするがすでに恐竜は逃げた後だった。

『……無念…私の失態です。』

ドゥーツはそう吐き捨て、変身を解除する。

■　■　■

…井上がさらわれた次の日。鞍坂探偵事務所にて

「私、聞いてへんで！？アンタら一体何がどうなっとんのや？！あのお化け車とか、さっきの半分こ怪人は一体何なんや！？」

アカネは半ばキレ気味に一とマープルに問う。

マープルは可愛らしくデフォルメされた、某星の戦士ことピンクの悪魔のぬいぐるみを抱きかかえ、ソファに横たわり眠そうに目を擦り本を読みながらうとうとと料理本を読み、アカネの話は全く聞いていなかった。

…おそらく、アカネが話している事さえ気づいていない。

一はうんざりというように椅子に深々と腰掛けていたが半分こ怪人と聞いた途端、口を尖らせながらアカネに反論する。

「半分こ怪人はないでしょう…あれは、ＤＯＴＷＯ（ドゥーツ）です。」

「んじゃそのドゥーツについて、事務所の大家に分かり易く説明せい！！」

と、そこで一が話そうとした時……マープルの隣にあったラジオから、ニュースが聞こえてくる。

『――昨夜××時〇〇分頃、風都の風谷港の第一埠頭で男性の死体が発見されました……男性は風都在住の井上雅人さん、２８歳。埠頭の作業員が作業中に水に浮かんでいる井上さんを発見し……』

ラジオのニュースを聞くなり、一は慌ただしく上着をを羽織り、ステッキを持って玄関へと走っていく。

「別のガイアメモリを持った共犯者が口封じですねぇ……」

アヤノはそう独り言を漏らすと、カ〇ビィのぬいぐるみを抱きしめながら一人ソファに倒れ込み眠り始める。

…事務所にはまだ納得していないアカネと、熟睡しているマープルが取り残された。

■　■　■

事務所から出た一はシケーダフォンを取り出し、麻宮に電話を掛ける。

「もしもし…麻宮さんですか？」

「いっちゃん？どうしたの？」

「今から少しでいいので…会えませんか？」

「…どうしたの？」

「井上さんが……死にました。」

一はそれだけ言い、待ち合わせ場所と時間を言うと通話を切った。

それから一時間後…風谷公園

「いっちゃん……」

一が軽く放心しながら風車を眺めていると…一を呼ぶ声が聞こえる。

「……麻宮さん。」

一が振り向くとそこには…悲しそうにする麻宮がいた。

「いっちゃん……あぁぁぁぁっ！！」

麻宮はその場で泣き崩れる。

……一はただ、しゃがみこんで麻宮の背中をただ撫でることしか出来なかった…。

■　■　■

…慰めていると、やっと麻宮は落ち着いてくれた。

「スイマセン…貴方を、泣かせてしまい…」

一と麻宮はベンチに腰掛け、一は伏し目がちに言った。

「いっちゃんは……変わらないんだね……」

そんな一に対し、麻宮は僅かに微笑む。

■　■　■

…それは十数年前。

小学校の社会科見学だろうか、作業員に連れられ、子供達が初めて見る…この街の象徴である風都タワーを見ながら子供たちははしゃいでいた。

その子供たちの中に、幼い一と麻宮もいた。

「すげぇ～～！！」

「すごいね、いっちゃん！！」

「ああ！！」

一がそう言ったとき…突然、風が吹き抜け、麻宮の帽子を吹き飛ばした。

二人は帽子を取ろうと追いかけたが、帽子は川へと落ちてしまう。

麻宮は残念そうに落ちていく帽子を見つめていたが、一が口を開く。

「心配すんな、俺が捜してきてやるよ。この街は俺の庭だ。そこで誰一人……泣いてて欲しくない。」

■■■

「……そういえば、そんなこともありましたね…私はまた、取り戻せませんでした……」

一は風車を見上げ呟いた。

「すいませんね。急に呼び出してしまって。」

「ううん、いいの。教えてくれてありがと……。私、仕事があるから……」

麻宮はそう礼を述べるとその場を去っていった。

「……やりきれない、ですねぇ…」

一はしばらくたそがれていたが、ポツリと独り言を漏らした。

「さて…そろそろ、助っ人が必要ですね。」

一はシケーダフォンを取り出し、とある電話番号を呼び出すと相手に向かって通話を始める。

「はい、もしもしー♪」

「やぁ、マルちゃん。すいませんが、四月一日（ワタヌキ）はいますか？」

「ワタヌキ、いるよー♪」

「それでは、情報を買いたいので、二時間ほど後に伺います、と伝えて下さい。」

「分かったー♪じゃねー♪」

一は通話を切り、近くに停めていたバイク…ジェントルーダーに乗り、エンジンを掛け発進させる。

## Dの検索／街を泣かせるもの（後書き）

はい、どうも…あとがきで、メモリ紹介しまーす。

《ＡＳＨ》・・・『灰燼の記憶』を持つメモリ。

『灰の自在操作』と、『炎熱・雷電攻撃の完全無効化』の力を持つ。

弱点は、水や風の力。

《ＰＯＩＳＯＮ》…病毒の記憶を持つメモリ。

『病原体・毒の支配』の力を持つ。

高すぎる高温が弱点だが、アッシュメモリと同時使用することでその弱点は消える。

《ＤＲＥＡＭ》・・・夢の記憶を持つメモリ。

『体を万物に変化させる』能力を持つ。

ナイトメアのメモリの対の力で、夢に入り込むこともできる。

## Dの検索／今、戦いの時

■　■　■

風都　風吹丘…ある店の店内にて。

一は店の近くにジェントルーダーを停め、後ろにつけていた袋を持ちドアを開けて店に入る。

「いらっしゃーい♪」

「いらっしゃーい♪」

「やぁ、マルちゃんにモロちゃん。お久しぶりですね。」

「主様、こっちー♪」

「主様、こっちー♪」

桃色の髪をした天使の様な服を着モロ・ダシ、青色の髪をし、悪魔の様な服を着たマル・ダシの二人が出迎えてくれる。

「……やぁ、久々ですね、四月一日。」

「よ…確かに久々だな、一。」

そして、その二人に連れてこられた部屋には、一の昔からの友達である、眼鏡をかけた背の高い男…四月一日君尋（ワタヌキキミヒロ）がいた。

「さっそくであいさつも無しに申し訳ありませんが…情報が欲しいのです。」

一がそう言ったとたん、四月一日の面持ちが真剣なものになった。

「例の井上殺しの件だな？」

一も真剣な面立ちで答えた。

「ええ。」

「……で、対価は？」

「……マープルから、マル＆モロの二人に洋服を十着ほど。」

「……ま、それでいいだろ。」

そういうと、四月一日は話し始める。

「井上と麻宮はもともとウィンド・スケールの同じ部署で働いてたんだ。そこで井上は麻宮と知り合い交際を始めた。」

そこで四月一日は一口紅茶を飲み、また話し始める。

「だけど…井上は一年前から職場の上司と方向性の違いから揉める事が多くなって、今年の６月に上司と揉めてる最中に上司をぶん殴って上から解雇処分を言い渡され、今に至るってわけだ。」

「ふむ……で、ガイアメモリを渡したとみられる人物については？」

四月一日は少し残念そうな顔をすると一の問いに答える。

「…それにはちょっと対価が足りないな。それに、俺これからちょっと用事あるからさ、また機会があったら俺からお前に連絡よこすってことでいいか？」

「……仕方ないですね。それが貴方の仕事ですし。」

そういうと、一は立ち上がってそのまま店から出ていこうとするが

「…おい、一。」

「ん？なんですか？」

振り返ると、四月一日が一つの大きめな封筒を渡してくる。

「それ、今まで井上が襲ったところのリストな。餞別だ。」

「…助かります。」

「……この世に偶然はない。あるのは必然だけだ。」

「…？」

神妙な表情で語る四月一日に一は訝しげな顔になる。

「何があっても……それは、必然だ。気に病むなよ。」

「…そいつはどうも。」

そういうと、今度こそ一は店から出ていく…

■　■　■

一は四月一日の資料に書いてあった、井上が一週間前に起こした事件の現場に来ていた。

既に警察の現場封鎖はとかれ、工場作業員が釘をたたく音や電動ドリルの音が慌ただしく響いていた。

「ここが一週間前の事件現場……」

一は辺りを見回し一人呟く。

…その時、一は自分の様子を伺う異形の存在に気付かなかった。

扉を開け、一は先へ進む。だが突然、入ってきた扉が音を立てて閉まった。

一は当然それに気付き、扉を叩きながら近くに人がいるを信じて叫ぶ。

「?!ちょ、ちょっと!誰かいませんか?!」

すると、その背後から何かが歩く音が聞こえる…。

「…え…？」

その何かが近づくにつれ、そいつの姿が鮮明に見えた。

それは……身の丈の半分以上もあるアンバランス過ぎる巨大な恐竜の頭を持った怪人だった。

■　■　■

「ＧＵＯＯＯＯＯＯＯＯＯ！！」

その恐竜頭の怪人は雄叫びを上げると問答無用で一に突っ込んできた。

祐規は持ち前の運動能力で怪人の頭にステッキを突き、上にジャンプする。

だが、怪人は気にもせずには一に再び突っ込んできた。

一は慣れた手つきで怪人をかわし、ステッキの持ち手部分で足を引っ掛け、怪人をこけさせる。

「これ以上嗅ぎまわるなということですね…！」

と、一はそう漏らすと、カメラのパピヨンショットとそのメモリを取り出し、それをパピヨンショットに装填する。

―ＰＡＰＩＬＬＯＮ―

音が鳴り、一が手を突き出すと、パピヨンショットは蝶のような姿に変形し…一の手から離れ、その頭に当たる部分からの連続フラッシュで怪人はたまらず怯み、後ずさりする。

「もう一つ、おまけです。」

一は次にシケーダフォンとシケーダメモリを取り出しそれを装填する。

―ＣＩＣＡＤＡ―

パピヨンショットと同じように音が鳴ると、祐規の手のひらのシケードフォンがセミの形に変形し、怪人に向かって手元から飛んでいく。

…その二体の攻撃に、ダメージこそ軽微だが、怪人は翻弄されるばかりでどうにも身動きがとれない。

「さぁ…お仕置きですよ♪」

《ＧＥＮＴＬＥＭＡＮ》

一は、二本のステッキと黒帽子で描かれた《Ｇ》のマークがかかれた茶色のメモリを取り出し、腰のステッキの柄に装填する。

「…喰らえや、ボケ。」

《ＧＥＮＴＬＥＭＡＮ！ＲＥＶＯＬＶＥＲ！！》

その音がすると、ステッキが半ばから折れ…まるで、二つの銃口を持つ銃の様に変化する。

「それっと。」

ステッキを使い、頭上にある電気ケーブルを撃つ…と、それが千切れて地面の水たまりに落ちる。

「ＧＡＡＡＡＡＡ？！」

怪人は感電による大きなダメージを受け、そのフロアが一瞬暗闇に包まれた。

一瞬空いてフロアに電気が戻ると、怪人はその場から姿を消していた。

「……ふぅ。」

ステッキからメモリを引き抜き、帰ろうとすると…一はあるものが目に入った。

「む？」

それは風に流れる木の葉をイメージさせるようなデザインの服だった。

……そして、一が家へ帰ろうとすると…ちょうど、スーツ姿の友人、百目鬼（ドウメキ）と出会う。

「やぁ♪」

「…おう。」

笑顔の一に対し、百目鬼は全くの無表情だ。

「これ…四月一日から、お前へ。」

「ほぅ……それは感謝しますよ。」

「……じゃ。」

「ええ。それでは♪」

そういと、百目鬼はその場をすぐに立ち去る……。

「……ほほぅ。」

一は、その資料を読み始める…そこには、さまざまな事が書かれていた。

井上にメモリを売ったのは、黒い高級スーツを着こなし、白地に一点だけ血が滲んだような模様のスカーフを首に巻いた男。

井上と一緒にメモリを買った人物はいるらしいが、暗くて男が女かまではよくわからなかったらしい。

「ふむ……また面倒くさい事になりそうですね。」

■　■　■

一が情報を知ったのと時を同じくして…風都某所。

「じっくりご覧ください。安い買い物ではありませんが、それだけの価値はあります。」

高価な黒いスーツと血が滲んだような模様のスカーフを着た若い男が営業スマイルを見せながら客の初老の男に持っていたケースを開け、見せる。

中には、沢山のガイアメモリが入っていた。

犬の様な形をした《D》のメモリ、コイン四枚で表現された《M》のメモリ、湾曲した仮面で表現された《M》…さまざまな種類があった。

初老の男は一本のガイアメモリ…歌舞伎の隈取の様に表現された《K》のメモリを手に取ると売人の男に尋ねる。

「これで本当に、私は超人になれるんだろうね!?」

売人の男は相変わらずの営業スマイルを浮かべ、男の問いに答えた。

「超人?陳腐な言葉ですねぇ…。どちらかと言えば神に近い存在ですよ。」

初老の男はそれを聞くなり、近くに控えていた自分の部下から茶封

筒を受け取り、それを売人の男に手渡した。

中には、万札の分厚い束が入っており、売人はそれを取り出し、慣れた手つきで数えると、封筒に戻しそれをケースの中にしまい込んだ。

「確かに７０万円ぴったり頂戴しました。お買い上げ、ありがとうございました。」

売人の男は相変わらず営業スマイルを浮かべ、初老の男は喜々とした表情で近くに停めてあった黒塗りの車に乗り込むと、車はその場から去っていった。

「……まさか、イロモノのカブキメモリを買う人がいるとは…」

スカーフの男はそう呟き、自分も歩いて去っていった…

■　■　■

鞍坂探偵事務所　地下ガレージ。

「マープル、宙の本棚へお願いできますか？」

「うん…分かった、いーちゃん。」

帰ってきてそうそう言った一に、マープルは嫌な顔一つせず、本を片手に金網の床から下に降りる。

そして目を閉じるとマープルのまわりが淡い白色の光に包まれ…マープルの脳内には白い空間と幾つもの巨大な本棚が現れる。

「なぁ…ずっと気になってるんやけど、宙の本棚って…一体何の事なん？」

アカネは不思議そうにマープルを見ながら一に問う。

「マープルの頭の中には、地球…いや、この次元の全てと言っても過言ではない程の知識が詰まっているのですよ。ドーパントに関しての情報も、その中に潜んでいるのです。」

「意外と当たり前なこと知らへんかったりするけど？」

アカネの問いに一は苦笑しつつ更に続ける。

「膨大な知識を抱えているのですが…マープルはまだその全てを読み終わった訳でも、理解している訳でもないのですよ。」

「ふ～ん。」

アカネはあまりよく分かっていないようだった。

「…貴女に分かりやすく説明するなら、メニューは分かっていても、まだ全く手をつけていない料理…と言ったところでしょうか。」

「…なんとなく分かったわ。」

「検索条件その1…T―レックス。」

マープルがそう言うと、該当しない本と本棚が文字通り飛ぶ様にに減っていく。

「検索を開始します。検索項目は《井上を殺した犯人の名前》。キーワードをどうぞ。」

マープルのその言葉に一は言う。

「一つ目は《ウィンド・スケール》。」

一の言葉を聞いた途端、本棚で同じように該当しない本や本棚が減っていく。

「二つ目は《木の葉》。」

一の言葉を聞き、マープルの目前の本棚では再び本と本棚が減り、一つの本棚が残った。

「……いーちゃん。最後のキーワードは?」

マープルは一に問うが…一は口を閉ざしている。

「…何か、掴んでるんじゃないですか?」

そう言うマープルに、しばらくたってから絞り出すように、一は口を開いた。

「最後は……《女性》です。」

そう聞くと、マープルの前では残った本棚から本棚と本が飛んでい

き、表紙に［ＮＡＭＥ］と書かれた本が一冊だけ残る。

マープルがその本を手に取り表紙を開いた瞬間…その情報へのアクセスが解除された。

「……いーちゃん。ビンゴしちゃいました…。Ｔ－レックスのメモリに体質が合って、尚且つ関連するキーワードに合致する人物は一人しかいません……。」

マープルは本を片手にホワイトボードに歩み寄り、いやいやと何かを書き始めた。

そこにはローマ字で［ＭＡＭＩＹＡ　ＭＡＲＩＮＡ］と書かれていた。

アカネはそれを見るなり絶句する。

「そんな…嘘やろ……！？ＭＡＭＩＹＡって……あの依頼主の人やろ？！」

アカネの問いに、一はおもむろに口を開く。

「……麻宮さんも、ウィンド・スケールのデザイナーでした。……あの会社を恨んでいたのは、井上だけではなかったのです……。最初の二つのビル破壊事件は、井上と麻宮さんの共犯……。」

そこで、初めはソファに座り、帽子で目元を隠す。

「だがその後、井上はＭＡＧＭＡの力に飲まれて暴走。ボロが出る事を恐れ、麻宮さんは私に奴を捜させて……」

そこで、一は手の親指を立て、首を掻き切るポーズをとる。

「…やりきれませんね。」

一はガレージの出口に向かって歩み寄るが、突然、マープルに服の袖をつかまれ、呼び止められる。

「…いーちゃん、本当に行くの？」

それは、いつものおっとりとした雰囲気を持った声ではなく、少しトーンを落とした、暗い声だった。

一は立ち止り、ゆっくりとマープルの方を向いた。

マープルはなおも続ける。

「いーちゃんは…優しすぎるから、甘い考えを実行しようとして…悪意に満ちた犯人に殺されるかも……。あの人は、もういーちゃんの知ってる人じゃなくて…もう、今はただのＴ－レックスの魔人ですよ？」

「例えそうでも、私は信じたいのです…」

一は真剣な面立ちでマープルに対し言う。

「でも…」

マープルは、続けて言う。

「いーちゃんは…優しすぎるから、また傷ついて……そんなの…嫌です。いーちゃんには…傷ついてほしくないから…！」

マープルは、泣きそうな声でそう言う。

マープルがそういうと、一はマープルに近づき…自分の帽子をかぶせる。

「…男は、傷ついて成長するのですよ。紳士ですからね？」

一はそう言うと上着の内ポケットから持っていたガイアメモリとドライバーを取り出し、マープルに渡す。

「…いーちゃん、これ…」

「紳士が、女性との対話に武器を持ちこむのはいささか無粋でしょう…。」

―ご心配なく、ジェントルマンだけは持っていきます。不本意ではありますがね。―

そう言い残すと、一は事務所から出ていく……。

■　■　■

一は事務所から出て、缶コーヒーを飲みながら近くの公園で一人ベンチに腰掛けながらたそがれていた。

すると、おもむろに一はシケードフォンを取り出すと、麻宮の携帯番号を呼び出すと通話を始める。

「もしもし…麻宮さんですか？」

「いっちゃん？どうかしたの？」

「なぁ、明日会えませんか？大事な話があるのです。」

「いいけど……どこで会うの？」

「それでは、十時に風谷第一公園で。」

「うん、分かった。それじゃぁね。」

一はそう言うと通話を切る。

■　■　■

次の日　風谷第一公園。

ぼーっとベンチに座りながら待っていると…一の前に、麻宮が現れる。

「……やぁ、麻宮さん。」

「うん…いっちゃん、話って？」

「実はですね…。」

そう言いながら、一はシケードフォンを持ち、ギジメモリを入れる。

―ＣＩＣＡＤＡ―

メモリを装填すると、音とともにセミ型に変形して、麻宮のバッグへと飛んでいく。

黒木は飛んできたシケードフォンに気付き、目をつむってしまう。

「きゃっ！」

だがシケードフォンは麻宮を傷付けず、すれ違いざまに麻宮のバッグの底を切り裂くと、一の手元に戻った。

そこから財布や携帯、化粧ポーチに混じって…一本の灰色のガイアメモリがこぼれ落ちた。

「あっ…？！」

携帯や財布には目もくれず、麻宮は慌てた様子でガイアメモリを探す。

ガイアメモリを手に取った瞬間、麻宮は近くに一がいたことに気付き、慌ててメモリを持った手を背中に隠した。

「ッ！？いっちゃん…」

「見ましたよ……麻宮さん…」

一は麻宮を指差し言い放つ。。

「貴女がＴ－レックスの魔人……。ビル破壊事件及び……井上雅人殺しの犯人です。」

「…な、なんやってー…！」

一方、一を尾行していたアカネは、二人の様子を物陰に隠れながら、声をひそめて驚いていた。

麻宮は一の言い放った言葉に答えるように語り始めた。

「…犯行現場に会ったあの服…ウィンド・スケールで作られたものですね。」

「そう……。あの服は、私がデザインしたものよ……。でもウィンド・スケールには一人、最低な重役がいたの……。仕事や功績を全て奪って、私を追放した男が……。」

麻宮は、狂気を宿した目で話し続ける。

「ずっと、ずっとそいつが憎くてたまらなかった……！！私はただ、私の好きなこの街に合う服や帽子が作りたかっただけなのに！！」

一はただ黙って麻宮の言葉を聞いている。

「お願いいっちゃん…見逃して！！…私…私…ッ！」

麻宮は涙をこぼしながら恥ｍの目の前で土下座する。

だが一は何も言わず歩いている。

「いっ…ちゃん…？」

麻宮が一の後を追いかけると、一は歩みを止めた。

「……っ！？」

麻宮と一の前に見える広場には、一からの通報を受けた刃野警部達が麻宮を逮捕すべく編成した、警察の機動隊と警官隊が刃野警部の指揮下となって展開していた。

「いっちゃん……」

麻宮はその様子を見ると絶句する。一はそんな麻宮を見下しつつ言った。

「昔言ったでしょう？私はこの街で誰一人泣いてて欲しくないのです。…貴女は…この街そのものを泣かせました……！！」

一の言葉に麻宮はうつむいてしまう。

「…ぷっ、くくく……あはははははははははははははははっはははははは！！」

麻宮は突然高笑いを始め、一に言った。

「なぁんだ、ポーズだけじゃなかったんだぁ…。…意外と、血も涙もない人ねぇ！？」

突然の麻宮の言葉も気にせず一は睨み続ける。

麻宮はそんな一をよそにそのまま歩き去ろうとする。

だが…一は再び麻宮の説得を試みた。

「裁きを受けて、昔の貴女に戻って下さい！！メモリを捨てるのです、麻宮さん……！！」

だが麻宮は薄く笑みを浮かべ服の肩の微分をはだけさせると、そこには皮膚と一体化した生体コネクタがあった。

麻宮はガイアメモリを手に取る。

それは、まるで恐竜の横顔の様な形の《T》が書かれたメモリだった。

そしてそれを首筋のコネクタにメモリを差し込んだ。

―T―REX！―

ガイアウィスパーからの音とともに麻宮の首筋にガイアメモリが埋まっていき……一は麻宮を制止すべく近付こうとした。

「お…おい！やめなさい！！うわぁッ！！」

だが…麻宮がメモリを装填した際に発せられた衝撃波で一は吹き飛ばされてしまう。

そして麻宮は光に包まれ、自分の身の丈の半分以上もある巨大な恐竜の頭を持った怪人――T―レックス・ドーパントに変身する。

T―レックス・ドーパントは警官隊の目の前に降り立った。

「GUOOOOOOOOOOOOO!!」

T―レックス・ドーパントが雄叫びをあげると衝撃波が発せられ、地面をえぐりコンクリート片とともに機動隊と警官隊を吹き飛ばす。

…刃野警部が「シェー!」の様なポーズで吹き飛んで言ったのは秘密だ。

一はとりあえず近くの物陰に隠れるが、近くからアカネのものらしき悲鳴が聞こえ…本人が登場する。

「えええええええええええええええええ?!」

「うわあああああああ!!嫌あああああ!!」

一はアカネの手を引っ張り、声を荒げる。

「なんでここにいるんですかっ!!」

アカネは泣きそうになりながら一の問いに答える。

「だ、だって気になって~!!」

「…あああもう!!これだから女性の扱いは面倒臭ぇんだよ!!」

若干、素を出しながら一が隠れていると…壁を破ってT―レックス・ドーパントの牙が二人に襲いかかった。

…多分、もう少しずれていたなら二人とも確実に餌食にされていただろう。

「…逃げますよっ！」

「も、もちろんっ！！」

瓦礫の雨を避けながら一はアカネの手をとって走っていると、目の前にT―レックス・ドーパントが立ちふさがった。

一はアカネを守るように、ステッキを構えて立ちはだかるが…アカネは遂に恐怖に打ち負け泣き出してしまう。

「も、もう嫌やぁ～～！！」

「素敵ないっちゃん……愛してる。だから……食べてあ・げ・る♪」

T―レックス・ドーパントがそう言うと…雄叫びを上げ、一に飛びかかった。

「なんのっ！」

《ＧＥＮＴＬＥＭＡＮ！ＳＷＯＲＤ！》

一はとっさにアカネを横に払いのけ、自分は剣と化したステッキでT―レックス・ドーパントの飛び込みをいなす。

T―レックス・ドーパントは再び雄叫びを上げ、衝撃波とともに瓦礫を飛ばしてくる。

凄まじい振動と音量に一は動けず、その頭上から瓦礫が落ちてきた。

「ぬ、ぬおっ?!」

一はそれをステッキで弾こうとするが、間に合わないことを察し、一が目をつむった……

その瞬間、何処からともなく現れたリボルギャリーが瓦礫を弾き飛ばし、T―レックス・ドーパントを吹き飛ばすとすぐ近くに急停車する。

リボルギャリーの一部が開き、そこからマープルが出てきた。

「ま、マープルちゃん!?」

アカネがその名を呼ぶが、マープルは真っ直ぐ一のもとへ歩み寄る。

「…何で来たんですか。」

一は不機嫌な表情でマープルに言う。

「あれから考えたんですけど…やっぱり、私はいーちゃんと一緒にいた方がいいと思って…。」

マープルはいつもの穏やかな調子で一に笑いかけ、静かに手を差し伸べた。

一はマープルの手を掴んで立ち上がると、おもむろに口を開く。

「半分力貸して下さい。相棒？」

その言葉にマープルはまた微笑みかけ、一のガイアメモリを手渡し、一はそれを受け取る。

一はドゥーツドライバーを取り出し腹部に付けると、ベルトの形になりマープルにも同じベルトが現れた。

すると、Ｔ－レックス・ドーパントが起き上がり、マープルと一の方を向く。

「なによ…あんたたち、なんなのよ！？」

「あら、知りませんか？私達は二人で一人の探偵です。」

マープルはあっさりと、笑顔で答えた。

「行きましょう、マープル」

二人はそれぞれ灰色と紫のメモリを取り出し、スイッチを押した。

―ＡＳＨ！―

―ＰＯＩＳＯＮ！―

音が鳴り、二人は同時にメモリを構え、同時に言う。

「「変身！！」」

マープルがドライバーにアッシュメモリを装填すると、それは小さな灰色の光とともに消え、一のドライバーに転送される。

一は転送されたアッシュメモリをスロットに装填し、自分のポイズンメモリをもう一つのスロットに装填し、ドライバーをWの形に操作し、音が鳴る。

―ＡＳＨ！ＰＯＩＳＯＮ！―

灰が吹き荒れるような音と、なにかが毒々しく溶けていくような音が鳴り…灰色と紫の光の破片が一の体を包む。

次の瞬間には、灰色と紫の体を持つ戦士――仮面ライダーＤＯＴ（ドウー）ＷＯ（ッ）へと、変身していた。

そして、同時にマープルがゆっくりと目を閉じて倒れそうになるが…それをドゥーツとなった一が優しく抱きとめる。

「！？ふ、二人が半分こ怪人になった！！」

アカネは強風でその金髪がグチャグチャになりながらも驚いていた。

ドゥーツはＴ－レックス・ドーパントを指差し、決めゼリフを言い放つ。

「「さぁ、天罰タイムだ！！」」

その言葉に、Ｔ－レックス・ドーパントは雄叫びをあげると、ドゥーツに向かって突っ込んできた。

## Dの検索／そして始まるP

■　■　■

ドゥーツはアカネの方に向き直り、右半身に宿ったマープルの意志が右目を明滅させながら言う。

「私の体、お願いします。」

それだけ言うとドゥーツは突っ込んでくるT―レックス・ドーパントに向かい、前転ジャンプで突進をかわした。

「はぁ！？私そんなの聞いてない！？」

アカネは怯えながらドゥーツに言うが、全く意に介さない。

『ハッハァ！』

『…いーちゃんを誑かさないでくださいっ！』

ドゥーツはステッキを牽制としてキックを基軸にした攻撃でドーパントにダメージを与えていく…が、T―レックスはそれに怯むことなく突っ込んでくる。

「なんで私がこんな目にー！」

アカネはマープルを背負いながら安全な場所に隠れようとするが…

近くにＴ－レックスが吹き飛ばされ、怯えながらマープルを起こそうとする。

「うわぁ！来よった！マープルちゃん早よ起きてや！！」

パニックを起こしているアカネを見つけ、ドゥーツは叫ぶ。

『お、おい！！早く逃げろ！！』

ドゥーツがそう言った瞬間…Ｔ－レックスが雄叫びをあげ、衝撃波と瓦礫がドゥーツに向かって襲いかかり、その勢いで壁にたたきつけられた。

『ッが…！』

『いーちゃん！！』

アカネは近くに停めてあったパトカーに近づき、近くの壁の欠片でガラスを叩き割り、カギを外してドアを開け、マープルを助手席に乗せて自分は運転席に乗り込む。

……だがＴ－レックスは瓦礫を自分の周りに引き寄せ始め…それに合わせてだんだん体が大きくなっていく。

そして、Ｔ－レックスに引き寄せられた瓦礫の中に混じっていたワイヤーがにパトカーに引っかかり……Ｔ－レックスの方に引きずられていくのを見るなりアカネは焦り始める。

「！？な、なんなんや！？」

更にティーレックス・ドーパントの体は巨大化し…不必要な瓦礫を払いのけると…

そこには瓦礫を使ったつみ木で作った出来の悪い恐竜の様な姿をした怪人…Ｔ－レックス・ドーパント暴走態へとなった。

「うわあああああ！！」

アカネはそのドーパントを見るなり悲鳴を上げる。

そしてドーパントは体を震わせ、体の瓦礫をドゥーツに向かって投げ飛ばしてくる。

『ぬおおっ！』

ドゥーツは迫り来る巨大なコンクリート片を冷静に回し蹴りで壊すが…そこにはドーパントの牙が眼前に迫り、ドゥーツを牙に捕らえるとそのまま近くの建物を突き抜け、放り投げる。

その途轍もない勢いに、ドゥーツは再び壁にたたきつけられた。

『あいたたた…やりやがったなこの女郎！』

ドゥーツは体を痛そうにさすりながら一人叫ぶ。

『では、次の組み合わせ行きましょうか？』

そうマープルは言い…一は、ニヤリと笑って答える。

『あぁ、とびっきりのをかましてやっか！！』

そして、一はドライバーから二つともメモリを抜き、右手に黒いメモリを、左手に銀色のメモリを持ちスイッチを押すと、電子音声が鳴る。

一本はシルクハットと白い手袋で作られた《M》のメモリ。

もう一本は白い二つの人魂の様なもので作られた《S》のメモリ。

―MAGICIAN!―

―SPIRIT!―

―MAGICIAN!SPIRIT!―

メモリを二本差し込むと、陽気なピアノにも似た音と、神聖な鈴の音にも似た音がし…右半身は黒、左半身は銀色の、仮面ライダードゥーツ・マジシャンスピリットへと変身(フォームチェンジ)する。

それと同時に、手に持っていたステッキの先端が変化し、巨大な大槌……《スピリットバンカー》へと変化する。

『オラアアアアアアアアアアアアアアアアアァァッ!!』

―GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAOO!―

完全に理性を失ったT―レックスに力の限りスピリットバンカーを打ち込むドゥーツ。

その一撃一撃は、まさに魂の一撃。

スピリットメモリ…『神霊の記憶』をもつ、レアなメモリだ。

その力は『全てを通じさせる』こと。

ダメージだろうと、言葉だろうと…それは、相手の魂に直接響くものとなる。

例え防御できたとしても、このメモリの前では確実にダメージを残す。

『ははっ！ダメージ受けてるぜ！』

『不燃ごみですけど…燃やしちゃいます！』

マープルが言うと…スピリットバンカーが紅く燃え上がり、炎を纏ってドーパントを殴りつける。

マジシャンメモリは『奇術師の記憶』を持つメモリ。

能力は、『物質創造』ができるということ。

例えば、今スピリットバンカーが燃えているように、炎を生み出すことも可能。そして、さらにはもう一本のバンカーを生み出すこと

さえも可能なのである。

『ウラウラウラウラウラウラウラウラウラァ！』

『…奇妙な物語ですか？』

ドゥーツはそのままバンカーでタコ殴りをし……最後には、更に炎を燃え上がらせて渾身の力で殴る。

―GYOOOOOOOOOOOOOOOOOO！―

ドーパントは、叫び声をあげて近くの道路へと逃げる…が。

『…ちょ、なんで貴女がそこに？！』

『アカネちゃん！！…って、私の体も！！』

「た、助けて〜〜！！」

ドーパントの体の一部に、今アカネとマープルが乗っているパトカーが引きずられているのである。

アカネに向かって叫ぶがすでにパトカーはドーパントに引きずられてしまい、居なくなってしまう…

『あ…い、行くぞッ！』

『はい〜！』

ドゥーツはジェントルーダーに跨るとエンジンをスタートさせ、アカネを追うべく急発進させた。

公道に出たドーパントは、車線を逆走し車を吹き飛ばしながら走る。

―ギャアアアアアアアア？！―

―アッ――――！？―

―ぶるぁぁあっぁあっぁぁぁぁぁぁ？！―

車に乗っている人達は、様々な叫び声をあげて吹っ飛んでいく…！

アカネはパニックになりそうな自分を必死で押さえ、サイレンを鳴らして対向車に避けるようスピーカーで叫ぶ。

「どいてやぁあぁぁぁ！！お互いのためにどいてやぁああ！！！」

サイレンに気付き、対向車はドーパントから慌てて避け始め、被害の拡大はなんとか防いだ。

「な…なんだありゃ…うわっ？！」

一台の車の主が何事か分からず走り去っていく巨大なドーパントを呆然と見つめていると…バイクのエンジン音とともに一陣の風が駆け抜けた。

ドゥーツはジェントルーダーを駆り、反対車線から迫り来る車両を巧みによけながら敵を追い掛ける。

『全く…面倒かけんなよ、あの餓鬼ィ?!』

『まだ若いからじゃないですか?』

そんな会話をよそにドーパントは急カーブを曲がって高架下に入り込み、パトカーを工事の足場にぶつけ崩して、ドゥーツの道を塞ごうとする。

ドゥーツはそれを冷静にアクセルをふかしスピードを上げ、瓦礫が道を塞ぐ前に駆け抜ける。

だがドーパントは自分の走る速度を上げ、再び信号機や標識を壊す。

それはドゥーツが近くに行き着くより早く道を塞いでしまうが…ドゥーツは火花を散らせながらバイクを地面ギリギリまで横滑りさせて僅かな隙間を通り抜け、体勢を戻すと再び敵を追い始める。

リボルギャリーがパトカーの左側を併走しているのを見た瞬間、アカネは一瞬驚くが、すぐに一に助けを求める。

「おーーい!!こっちやぁーー!!たすけてぇー!!」

ドゥーツはジェントルーダーをパトカーの右側に併走させ、リボルギャリーを指差しながらアカネに一言。

『飛び移れ!!』

アカネは首を縦に振りリボルギャリーの方を向くが…

「あ、ああ！って出来るかアホーー！！」

もっともらしい事を突っ込む。

『全く…しゃぁねぇな。』

『早く助けてあげましょう。』

ドゥーツはバイクを左側に併走させ、マープルが乗っている側のドアをむしり取る。

「ひゃっ！！」

アカネは一瞬驚くが、ドゥーツはマープルの体を掴むと、リボルギャリーの窓を開いて、併走していたリボルギャリーに優しく投げる。

マープルの体はふわりと宙を舞い、見事にリボルギャリーの内部に消えていった。

『ほら、お前もだ！』

「あ…うん…って！！」

ドゥーツはアカネにも向かって手を伸ばすが、アカネがその手を掴む事はなかった。

突然、ドーパントがビルを駆け上ったからである。

「！？な、なんや！？どうなっとるん！？」

アカネは突然の事態に何が何だか分からなくなっている。

数瞬遅れてジェントルーダーとリボルギャリーが到着し、ドゥーツはシケードフォンを取り出すと操作を始めた。

すると、リボルギャリーのシールドが開き、三つの機械が現れる。

ドゥーツはそれに上り、ジェントルーダーの後輪部分を後ろに停めると、後輪部分が外される。

そして後部のリボルバーハンガーが回転し、赤いユニットが代わりにジェントルーダーの後部に装着された。

『さ…行くぜ行くぜ行くぜー！！』

ジェントルーダーは後部の飛行ユニットのウィングを展開し、ジェンタービュラーと呼ばれる飛行形態になった。

タービュラーユニットのフローターを回転させ、ジェットエンジンの轟音と共にジェンタービュラーは宙に浮かび、ドーパントのもとへ向かうべく急上昇を始めた。

『……オッシャ、着いた…ってあぁ？！』

ビルの屋上でドゥーツを出迎えたのは、ドーパントの尻尾だった。

だがジェンタービュラーは簡単に避ける。

今度は体の瓦礫を飛ばしてドゥーツに食らいつこうとするが…ドゥーツはジェンタービュラーから宙返りをしてかわし、お返しといわ

んばかりにに前輪部分のバルカン砲で攻撃を仕掛けた。

―ＧＡ……ＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！！―

だがバルカン砲のダメージは小さく、苛立ったドーパントも瓦礫を飛ばして弾幕を張ってくる。

ドゥーツはジェンタービュラーを操作し一度ドーパントから距離を置く。

『いーちゃん…もうメモリブレイクしか！』

と、ドゥーツの右目を明滅させてマープルは一に言う。

そして、ドゥーツはジェンタービュラーの上に立ち、ドーパントの飛ばしてくる瓦礫の雨をスピリットバンカーで弾きながらアヤノの言葉に答えた。

『あぁ！分かってる！！』

ドゥーツはドライバーからメモリを抜き、スピリットバンカーの柄部分のスロットに装填した。

―ＳＰＩＲＩＴ！ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ！―

電子音声とともにスピリットバンカーの周りに炎、氷、雷…様々な物で出来た巨大な杭が生まれる。

それに狙いを定め…ドゥーツはジェントタービュラーでドーパントに向かって突っ込む。

瓦礫の雨を払いのけながら二人は技の名前を叫ぶ。

『『はあぁぁぁぁッ!!スピリット・ブレイキング!!』』

ドゥーツはその杭を連続で打ち込み、更に最後に一発、渾身の一撃を叩きこむ。

―GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!!!―

断末魔をあげたドーパントは倒れ込むように爆発し、引きずっていたアカネの乗るパトカーが瓦礫とともに落ちていく。

「うわあああああん!!嫌やあああああ!!」

アカネは恐怖に耐えかね、遂に泣き出してしまう。

…だからと言ってパトカーが止まるはずもない。

その時、ドゥーツの目に瓦礫とともに真っ逆様に落ちていく麻宮の姿が映った。

『麻宮……!!』

一は思わず呟く。

『…いーちゃんは麻宮さんを助けてあげて！！』

『…助かりますっ！！』

一はドライバーから二本ともメモリを引き抜き、右にアッシュメモリを、左にポイズンメモリを装填した。

―ＡＳＨ！ＰＯＩＳＯＮ！―

電子音声と共にドゥーツはマジシャンスピリットからアッシュポイズンに戻り、ジェンタービュラーから麻宮目掛けて飛び降りる。

ドゥーツは麻宮の脚を掴むと、シケードフォンを取り出し片手で操作する。

すると、ジェンタービュラーが勝手に動き、地面まであと数メートルの所まで来ていたアカネのパトカーに絡まっていたワイヤーを引っかけると、そのまま地面に下ろした。

「ぎゃあっ……し、死ぬかと思った…！！」

同時にドゥーツが麻宮を優しく抱きかかえながらゆっくりと着地した。

「んっ……」

麻宮が声をあげると、首筋からガイアメモリが出て来て、地に落ちると…カシャンという音を立てて砕け散った。

アカネは性根尽き果てた様子でパトカーから出てきた。

「はぁ……今回は生きた心地がしなかったで……」

アカネはそのまま地にへたり込みながら独り言を漏らした。

■　■　■

麻宮が倒されたのと同時刻　風都郊外　園咲邸。

「お父様、須藤霧彦（すどうきりひこ）さんです…」

薄暗い空間で、園崎冴子――ビショップ・ドーパントが玉座に座るキング・ドーパント――園崎琉兵衛に言う。

その言葉とともに、一人の若い男――須藤霧彦が入ってきた。

「あら、見た目はまぁまぁね。」

と、ビショップ・ドーパントの近くにいた塔と熊を模した様な姿をした怪人――ルーク・ドーパントこと、園崎若菜が言う。

そして、霧彦は玉座にいるドーパントの元に歩み寄る。

何もいわずに霧彦は腹部にバックルをつけると、それはベルトのような形になった。

キング・ドーパントはガイアメモリを手に持ちながら霧彦に訪ねた。

そのガイアメモリには、兵士と剣、そして盾が集まった《P》の字の様なマークがある。

「これは園咲の家の者にのみ与えられるガイアメモリだ。最悪これで死ぬ場合もあるが……言い残すことはあるかね？」

だが、霧彦は不敵な笑みを浮かべ、キング・ドーパントに言った。

「自慢の婿の誕生です。……お義父さん♪」

と、霧彦はガイアメモリを受け取ると、躊躇わずにバックルにメモリを差し込んだ。

■

■

■

一は机に座り、羽ペンでレポート用紙に報告書を書いていた。

「…麻宮は警察、井上は二度と戻らない。それがこの街、風都の現実……。けれど、例えそれが現実だとしても、変えて見せる……。きっとこの私が…」

「そこは、『私達』とか、複数形であるべきです…」

マープルは近くに座り込んで本を読み、拗ねたような笑みを浮かべて一に言った。

一はマープルの言葉に笑みを返し、『私が』という文章を消す。

「ふっ…分かりましたよ。私…達…が…っと。よし。」

文章を改めて書き、その用紙を片付けようとすると…

「よっ、待たせたね！」

いきなり現れたアカネの声を聞いた瞬間、一は手元がずれて、書いた報告書全てにインクがかかってしまった。

「あああ！！」

一は思わず叫んでしまう。

それを気にしていないアカネの手には看板のようなものがあった。

「誰も待ってません！！」

一はアカネに歩み寄り半ばキレ気味に言う。

だがアカネの表情はどこか輝いていた。

「喜びな、アンタ達……ジャジャーン！！」

と、アカネは手に持っていた看板を見せた。

そこには、水色に茜色の水玉模様にピンク色の文字で「鞍坂探偵事務所」と書かれ、さらに付け足しで貼ったと思わしき看板には「所長　鞍坂アカネ」と書かれていた。

「……あああああ！！ッて貴女が所長！？」

一は一瞬何が何だか分からなくなったが…それを気にせず隣でマープルが何か少し驚いた表情で言った。

「凄い……超がつくほど計算外です！どうしましょう、今晩は御馳走にします？！」

「しなくていいです！！」

一は頭を抱えるが、アカネは喜々とした表情で言った。

「さぁ……、これからもあたし等三人であらゆる事件を紳士的に解決するでぇ～！！」

「貴女は絶対紳士ではなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁいぃッ！！！！！！」

風都に一の声がこだました……そして。

「あ…あの…すいません…。」

「む…？はい、どうぞ。」

一が言うと、玄関から五十代くらいの男女が入ってきて、男が入るなり尋ねる。

「あの…名探偵の鞍坂さんという方は「鞍坂はあたしですッ！！」」

アカネは男の言葉を遮りながら現れ言った。

「それは貴女ではなく旦那の事ですっ！」

一がもっともらしい事をアカネに突っ込むと不満そうに頬を膨らませ後ろを向くが…もう一人の女がアカネに頭を下げ言う。

「お願いします！！うちの娘を調べてください！！」

続いて男がアカネに言う。

「娘が…！！うちの悠子が！！ミリオン・ピクチャーズに！！」

「……その話、じっくりお聞かせ願います。」

そして、また新たな事件が舞い込む……！

## Dの検索／そして始まるP（後書き）

…次から、ちょっと違った原作沿いというか…頑張ります。

# Pに手を出すな／天国への逝き方

■　■　■

…風都某所　ある美術商の店。

―和泉悠子。彼女の行動を調べるのが今回の依頼。一人娘が謎のオークションに関わってるとご両親は言ってるんだが……―

一は、いつもの様にモノローグ風に言う。

一はアカネを引き連れ、監視対象である和泉悠子の尾行を行っていた。

すると…悠子はある美術商の店へと入っていき、一とアカネは依頼主のご両親から貰ったまんじゅうをかじりながら店の様子を窺っている。

「…これ、美味しいですね。」

「うんうん…あ、もう一個もらうね。」

「最後に一個残しておいて下さいね。あとマープルの分も。」

…その時、一のシケードフォンの着信音が鳴り、一は通話に応じる。

「もしもし？」

「あ、いーちゃん？検索完了しました。和泉和菓子店は風都名物、風花饅頭の元祖と言われていて、和泉悠子さんはその看板娘で、常に店の仕事を手伝っていたみたいです。」

しかし、と言ってマープルは続ける。

「最近は、自宅に絵を飾りだして、そのせいで店のお金にも手を出して散在しているそうです。」

「そうか…分かった、ありがとうございます、マープル。」

「うん♪いーちゃんも気をつけてね？」

一は通話を切り、悠子の写真を見ながら呟く。

「成る程……それがああなったら流石に親御さんも心配しますか……」

店の中では何やら店の支配人らしき男が悠子に頭を下げて謝っているのが見えた。

「すいません！！申し訳ありません悠子様！！」

悠子は支配人の顔を平手打ちすると言い放った。

「申し訳ないで済むか！！私を買う気にしないなんてそれでも美術品どころかこんなの子供が書いた絵の方がましよ！こんな品揃えしか出来ないならひいき先を変えるよ！？」

と、悠子は怒りを露わにしながら出口へと歩いていく。

「うわ…」

「なんや…あの娘!?」

一は呆然としながらその様子を見ていて、アカネはなんかムカつき、悠子のもとに歩み寄ろうとするが…一に止められ、再び隠れて様子を見る。

すると悠子が店から現れ、不機嫌な表情で一人吐き捨てるように言った。

「ああ!腹立つ!!気晴らしにあそこに行ってまた絵でも買ってくっかぁ!!」

悠子はそう言うと、どこかへと歩き去っていった。

「まさかほんとにあるのでしょうか…ミリオン・ピクチャーズ……。」

一はそう呟くと、アカネを引き連れ再び悠子の尾行を開始した。

暫く進んだ所で悠子が足を止め、一はアカネの手を引っ張り慌てて物陰に隠れる。

悠子が後ろを振り向いたが何もなかった。

「?…気のせいか。」

と、悠子は若干訝しみながらも歩き去っていく。

「…あ、危なかったですね…。」

「ギリギリやったな…。」

肩で息をしながらも、一達は再び尾行を開始する。

と、そこで一がアカネに振り返って言う。

「アカネさん。貴女は先に帰って下さい。ここからは私だけで行きます。」

「んなっ!?何でうちが!?」

当然のごとくアカネは一に反論する。

「プロにはプロの追跡テクニックがあります、貴女がいると若干邪魔です。」

一はそれだけ言うと、悠子の尾行を開始する。

「待たんかいっ!!」

「タピオカッ?!」

……が、突然アカネは一の背中に飛びつくと、その首を捻りながら言う。

「うちは所長やで！！」

一は本気で痛がりながらアカネに言う。

「あでででで！！く、首が折れる！！……って、あぁ？！」

「え、どした？」

「……いません…。」

「……え゛。」

アカネが一の指さす方を見ると…確かに悠子は姿を消していた。

「あれ！？ホンマや…」

アカネが呆然としながら言う。

「ノオォォォォッ！！有り得ねえぇぇ！！」

一は思わず素を出して叫んでしまう。

そんな一に、アカネはどこからかハリセンを取り出すとそれで「オーマイガッ！！」なポーズをしている一の頭を思い切り叩いた。

「ちょっとアンタ！！あっさり逃げられてるやん！！責任問題を追求します！！」

アカネは一の襟首を掴み言い放つ。

だが…それをステッキでコツンと後ろに追いやり、一言言う。

「完全に貴女の性ですよ。責任転嫁カッコ悪い。」

「なっ……ゴメンナサイ。」

「よろしい。所長とはいえ、探偵業はまだまだなのですからそこら辺をわきまえて下さい。」

さらりと言われ、逆に落ち込むアカネ。

「まァ待って下さい。紳士探偵にぬかりはありません……」

一はアカネにそう言うと電話を始める。

「……ああ、すいません。ファイさんですか?…ええ、少し情報を知りたいのです…ええ。では、いおりょ…失礼、黒鋼さんも一緒に、そうですね…あ、今から向かいますので。それでは。」

そう言うと、電話を切って一はアカネに向き直る。

「ちょっと木枯坂二丁目に向かいますよ。そこに手掛かりがあるそうです。」

「ん。わかったで。」

そういうと、二人はそのまま歩きだす…。

■　■　■

それから１０分後…風都・木枯坂二丁目。

ここ木枯坂は郊外沿いの閑静な住宅街が立ち並ぶ場所である。

一が、アカネを引き連れ、この木枯坂を訪れていた。

「おーい、こっちこっちー。」

暫く歩いていると、短い金髪の背の高い男…ファイ・Ｄ・フローライトが手を振りながらこちらを呼んでいるのが見えた。

その隣には、その相棒の短い黒髪にがっちりした体格の男…黒鋼の姿も見える。

「どうも、待たせましたね。」

一はファイに歩み寄ろうとするが…逆にファイに払いのけられ、ファイはアカネの手を取る。

そしてアカネに自分の名刺を渡すと自己紹介を始める。

「どうも！俺、ファイ・Ｄ・フローライト～長いからファイでいいよ。それにしても～…君、可愛いね～。一から聞いてた通りだよ～。」

「え？そ、そんなぁ～♪」

アカネは可愛いと言われとたんに上機嫌になる。

ファイはおもむろに携帯電話を取り出し、アカネに訪ねる。

「ねぇ、写メ撮って俺のブログにアップしてもいい～？」

「あ、もちろんいいですよ！」

ななこは笑顔になりながらファイに近寄りポーズを取る。

「おいテメェ！後にしろ」

と、黒鋼はファイの手を叩き、その拍子にファイは携帯電話のシャッターボタンを押してしまい、僅かに声を漏らした後、携帯電話に写った自分のアホ面を見てファイに残念そうな表情で言う。

「ちょっとファイさん……」

一はファイと肩を組みながら問う。

「そんなことより…見つけたんでしょう？神のオークションと言われるミリオン・ピクチャーズから帰ってきた男を……」

ファイはいつもの顔のまま、へにゃりと一の問いに答えた。

「い～や。神っていうよりは……悪魔なんじゃないかなぁ～？」

と、ファイは家の表札に貼られていた《競売物件》という札を捲りながら三人に言った。

■　■　■

一はアカネを引き連れ家に入っていくと、最初に出迎えたのは家の中の至る所に貼られた《競売物件》や《差し押さえ》という紙と、酒を飲みながら狂ったように笑ったり泣いたりし、唯一差し押さえの紙がない絵を抱き抱えている男だった。

「…貴方は、あのオークションにいたんですね？」

「ひゃはははは！！…そうさ…よく聞いてくれた……わしは強かった……強かったんだよぉ……！！有り得ないくらい買ったもんさぁ…あのオークションでよぉ？！…ひゃはははは！！」

アカネは端っこに隠れ、男にただ気味悪さしか感じなかった。

「どうやら本当にあるらしいな……。なぁ、場所はどこだ？」

一は男に歩み寄り訪ねるが、男はまた同じ様に気味悪く笑うだけだった。

この場にいても埒があかないと思い、一はアカネを引き連れ一旦家の外に出、シケードフォンを取り出しマープルに電話を掛ける。

「どうでした？」

「ああ。とりあえず、証人の名前は丹波隆です。」

「…他にキーワードはありますか？」

「それがまともに答えられない様で……。オークションで散財して、家族に見捨てられ、我が家すら失ったということくらいです。」

「……家族…？…我が家……？」

マープルは向こうでそう言ったきり、何一つ言わなくなった。

「…マープル？どうかしましたか？マープル？」

一は呼びかけるが…マープルは返事を返さなかった。一は仕方なく通話を切る。

「マープルちゃん、どうかしたの？」

アカネが一に問う。

「いえ…なんでも無いですよ。」

アカネの問いに一は少し歯切れ悪く答えた。

■　■　■

「ひゃはははははは……！！次は……今度こそ俺にツキが来るはずだ……！まず、この絵を売って金にして…！」

と、そこで隆が人の気配を感じ振り向くと、そこには男物のスーツを着た、肩までの黒髪の女性が椅子に座っていた。

「…どうも、丹波さん。」

隆はその男を見るなり悲鳴を上げ、怯えた様子で男に訪ねる。

「た…田島さん！待ってくれ！！必ず金は用意する！！」

田島と呼ばれた女は吾郎の問いに答える。

「私は三日も待ってあげたんですよ？丹波さん、いい加減、支払って下さい。でなければ…！！」

と、田島…田島美帆は吾郎のメガネを外し、それを踏みつけ、緑色のガイアメモリを取り出しスイッチを押した。

そのメモリには、絵筆とパレットで作られた《Ｐ》の字が書かれていた。

―ＰＩＣＴＵＲＥ！―

電子音声が鳴り、田島は手首にあるスロットにガイアメモリを差し込んだ。

そして…田島はマーブル色の光に包まれ、幾つもの額縁と絵が集まった左腕、絵筆の右腕、そしてどろどろに溶けた絵の具の体、パレットと額縁の中の絵で作られた顔を持つ怪人…ピクチャー・ドーパントとなった。

丹波はピクチャー・ドーパントに変貌した田島を見た瞬間悲鳴を上げた。

ピクチャー・ドーパントは小さな額縁のような物を取り出し男に言った。

「お金の代わりに…貴方の魂をいただきましょう！」

と、ピクチャー・ドーパントはその小さな額縁を丹波の額に押し当てると…丹波は一際大きく悲鳴を上げ、倒れ込み、そのまま事切れた。

するとピクチャー・ドーパントが持っていた額縁に、必死に助けを求めている姿の丹波の絵が映し出される。

外にいた一達は悲鳴に気付き、玄関を開けて中に入る。

ピクチャー・ドーパントはその場から立ち去ろうとしたが、直後にやって来た一達に気付く。

「ドーパントぉぉぉ！！」

アカネは裏声気味に叫ぶ。

「ッ！？面倒ですね！！くそッ！！」

ピクチャー・ドーパントはそう吐き捨てながら走り去っていく。

「アカネさん、ここで待っていて下さい！！」

一はアカネに向かって言う。

「あ、あぁ…」

アカネはそれに怯えた様子で答える。

一はそのまま、家から逃げたピクチャー・ドーパントを追うべく走り出した…

「おい待て！！」

一は走りながらドゥーツドライバーを腹部に付け、ベルトの形にする。

「マープル！ドーパントです！」

マープルの腹部にそれぞれドライバーが現れる。…が、マープルはそれに反応しない。

「…マープル！？おい！！マープル！？」

一はマープルに問いかけるが、返事はない。

一は、マープルがいなければドゥーツには変身出来ない。

一が迷っていると…近くでのんびり歩いているピクチャー・ドーパントの姿を見つけた。

一はピクチャー・ドーパントに走り寄り、飛びかかる。

「…なっ？！」

「捕まえたぞ…この野郎が！！」

ピクチャー・ドーパントは一が飛びかかる前に気付くが、体を拘束させられた。

「さっき家にいた子供たちね……！！」

「マープル！！…起きろ！！」

一がそう言った瞬間、マープルはカッと目を見開き意識を回復させた。

「あ…分かりました！」

と、マープルはアッシュメモリを取り出し、スイッチを押す。

―ＡＳＨ！―

同じく一もポイズンメモリを取り出しスイッチを押す。

―ＰＯＩＳＯＮ！―

「え？ガイアメモリ？」

ピクチャー・ドーパントは取り出したガイアメモリを見ながら訝しむ。

「「変身！」」

マープルと一が言い、右のスロットにアッシュメモリを装填し、灰色の小さな光と共に消える。

転送されてきたアッシュメモリを右のスロットに装填し、左のスロットにポイズンメモリを装填すると一のドライバーから同時に電子音声が鳴る。

―ＡＳＨ！ＰＯＩＳＯＮ！―

アッシュとポイズンの変身音が鳴り…二人は、ＤＯＴ（ドゥーツ）ＷＯに変身する。

ピクチャー・ドーパントはドゥーツの姿を見るなり逃げ出そうとするが、膨らんだ足のせいでぽてぽてと重い足取りながらも逃げる。

『逃がすか、オラァっ！』

と、ドゥーツはピクチャー・ドーパントに向かって走り、蹴りとパンチを主流にした攻撃でダメージを与えていく。

『ハッ！』

「うわわっと！？」

ドゥーツは足払いでドーパントを転ばせる。

それに慌てて、ドーパントは一に大声で叫ぶように聞いた。

「くっ！…お前は一体何者だ！？」

一はドーパントから離れ、問いに答える。

「俺達はドゥーツ！！街の涙を拭う、二色のハンカチ…！！覚えとけ！！」

ドーパントは立ち上がりドゥーツに向かって言う。

「ふん…！下らない！理想ばかり言っててもね、現実は厳しいものなのだよ！」

ドーパントは、そのどこか悲しい叫びを上げると再び逃げ出そうとする。

『理想だぁ？！オモシれェ、理想じゃねぇ事を教えてやんよぉ？！』

戦闘モードの一は勘に障ったのか、怒りをあらわにしながらドーパントの頭にパンチを食らわす。

「キャっ？！」

『…って、お前女かよ？！』

更には、パンチを基軸にした攻撃で確実にダメージを与えていき、回し蹴りを放ち、マネー・ドーパントを吹き飛ばす。

『…ま、女だからって、容赦はねぇぞ？』

そして、ドゥーツは右のスロットからメモリを抜き、マジシャンメ

モリのスイッチを押すと電子音声が鳴る。

―ＭＡＧＩＣＩＡＮ！―

―ＭＡＧＩＣＩＡＮ！ＰＯＩＳＯＮ！―

その音が鳴ると…右半身は黒、左半身は紫色の、ドゥーツ・マジシャンポイズンに変身する。

ドーパントはドゥーツの姿が変わったとたんに怯えながら逃げ出した。

ドゥーツは右手に炎を纏わせて飛び込み、攻撃を仕掛ける。

『ハァーーッ！！』

だが、ドーパントまで後少し…と言うところで突然矢の様な光弾がドゥーツの背後に命中し、体勢を崩してしまった。

『グぁっ？！』

そのダメージが消えたとき…ドーパントは既にその場から姿を消していた。

二人は近くの高台を見上げる。すると、一瞬黒色の光沢を持つ人影のようなものが見えたが…そいつはすぐに姿を消してしまった。

ドゥーツはドライバーのスロットからメモリを引き抜き、僅かな旋風と共に装甲が砕ける。

「……ひょっとしたら新手のドーパント…？」

そう考えていると、ドライバーを通してマープルが念話で一に話し掛けてきた。

『大丈夫？いーちゃんが、オークションへの手掛かり、逃しちゃって……』

「なにを他人事みたいに……変身するとき、一瞬貴女が止まりさえしなければ…」

「止まった？……私、止まりましたか？」

「…もういいです。」

一は呆れた様子でダブルドライバーを腹部から外す…。

■　■　■

……一が立ち去るのを高台から見つめていた一人の黒色の体を持ったドーパントは変身を解いて、霧彦に戻り呟いた。

「…アッシュ…ポイズン…マジシャン……この私が聞いたことのないメモリばかりとは……」

すると、背後からドーパントが現れ、霧彦に礼を述べた。

「ありがとう…おかげで、助かりましたよ。」

霧彦は得意の営業スマイルを浮かべながら答えた。

「なに、アフターサービスですよ。メモリを４本もお買い上げになった貴女へのね。今後もじっくりお楽しみ下さい♪」

霧彦はドーパントに一礼するとその場を立ち去っていった……。

■　■　■

「左右非対照のドーパント？」

園崎冴子は結婚式のドレスやアクセサリーを見定めながら、自分の夫である霧彦に問う。

「あぁ…あいつらは一体何者なんだろうね……？」

霧彦はソファに座り、紅茶を飲みながら一人呟く。

冴子は一度人を下げ、部屋から出させる。

そして、霧彦の呟きに答える。

「霧彦さん…ガイアメモリの秘密は底が知れない……慌てて全てを知る必要はないわ。でも大丈夫…あなたなら必ずこの街の暗闇を支配する男になる…。」

冴子は霧彦の唇に人差し指を立てながら言う。

「よろしく、ご教授頼むよ。」

と、そうしていると近くの扉が開き、若菜が入ってくるなり二人に言う。

「あらら?お邪魔だったかしら?」

霧彦は入ってきた若菜に気付き言う。

「ああ、若菜ちゃんか。今日のラジオ聴いたけど良かったよ♪」

霧彦がそう言うと若菜は舌打ちの後に吐き捨てるように言った。

「ヒネリのないお世辞ね……」

バタンと音を立てながら扉を閉め、若菜は去っていく。

「ん～…拗ねちゃったかな?…」

霧彦は少し困ったような表情をしていた。

本人はお世辞ではなく本当に褒めてたつもりだったからだ。

園崎霧彦。生まれついて損をする男なのかもしれない。

■

■

■

風都某所　和泉和菓子店

悠子は引き出しから通帳を取り出し立ち去ろうとする。

「や、止めなさい悠子！！うわっ！！」

両親は立ち去ろうとする悠子を止めようとするが逆に払いのけられる。

「うっせんだよ！！安心しな……この金より数倍は価値のある絵にしてやっから！！」

と、悠子は歩き去ろうとするが、突然現れたアカネに通帳を奪い取られる。

「いい加減にしい！！」

アカネが堪忍袋の尾が切れ、般若と見間違わんばかりに言う。

悠子も流石に気に入らなかったのかアカネに向かって睨み付けながら言う。

「んだよテメェ！？関係ねぇならすっ込んでろよぉ！？」

アカネも先程の勢いを衰えさせず悠子に返す。

「アンタ、自分の両親一体何だと思っとるん！？」

「はぁ！？」

一触即発の雰囲気の中、一が現れその場を制止する。

「ちょっとちょっと…調査対象者に会っちゃダメですよ……」

一のその言葉を聞くなり悠子の顔が怒りのものへと変わる。

「テメェら探偵かァ？…尾けさせてたんだな！！ざけんなよ！！」

と、悠子は近くの椅子を蹴り飛ばし両親を怯えさせる。

だが、一はステッキを突き付け、その場を収めるべく、悠子に向かって言う。

「聞きなさいお嬢ちゃん。ミリオン・ピクチャーズは怪ぶ「怪物のやってるオークションだって言うんだろ…？」…なに？」

一は途中まで言いかけたところで悠子に遮られ、さらに続けられる。

「そんな事は百も承知さ！！誰がやろうと関係ないね！！…あんなに美しい絵がある場所は他にないんだから……」

アカネは悠子に問う。

「絵と家族……どっちが大事なの…！？」

悠子はさっきと同じように答える。

「絵に決まってんだろ！現実にあるもんなんて、所詮つまらないんだよ…？」

一達は何とか悠子に思いとどまらせるべく説得を試みる。

「いきまいたってアンタらには行き方も分からないだろ！？ウスノロ探偵！！」

悠子はアカネを払いのけ、そのままどこかへと歩き去っていった。
突き飛ばされつつも、アカネは悠子を追いかけようとするが…一に止められる。

「待って下さい。そうか…。行き方です。行き方に秘密があるはずです。」

一は何かをつかんだ様子でにやりと笑う……。

■
■
■

一はアカネをいったん事務所へ送り、ラジオ局へと来ていた。

…マープルが常日頃聞いているラジオ、《園崎若菜のヒーリング☆プリンセス》が収録されている場所だ。

一は、そのラジオのコーナーの投稿にあったミリオン・ピクチャーズのあるという地名を調べにきたのだ。

「…えーと、まず木枯坂…」

「木枯坂…」

ラジオ局の局員がリスナーの投稿ハガキに書かれているミリオン・ピクチャーズのあると言われる地名を読み上げ、その隣で一は手帳に地名を書く。

「んと、四条通り…」

「四条通り…」

「あと…十文字交差点…」

「十文字交差点…」

「えーと、中央街道…」

「中央街道…」

一が地名を手帳に書いていると、マッキー…いや、真倉俊が一礼して入ってきた。

「失礼しまーす。…おい、探偵…お前なんでここにいんだ?」

マッキーが、ガラ悪く一に問う。

「別にいいでしょう。貴方の様に紳士の欠片も無いヒトと喋りたくない…。」

「んだとぉ?!」

「…はいはいはい…やめろって~……。」

と、刃野警部が一とマッキーの間を通り、一の手帳を奪いそれを見る。

「あ、ちょっと！」

「…やっぱりな…ラジオの投稿に出て来た実際の地名を調べてたかぁ……。お前さんの目当ても、噂のミリオン・ピクチャーズ？」

「…警察も追っていたのですね…」

刃野警部は一に歩み寄り言う。

「分かってるな一。この場を見逃すからにはいつも通り、情報を頼むぞ？」

「それはもう、分かっておりますとも。」

と、そう二人が話していると…若菜が収録にやってきた。

「おはようございます♪」

一と刃野が、その若菜の声に振り向くと、そこでは若菜がマッキーと何やら会話していた。

「あ！若菜姫だ！！」

若菜の姿を見るなり目の色を変え、刃野警部は一とマッキーを払いのけ、若菜のもとに歩み寄る。

「あぁ姫……ゴホン！あ、私は風都署で刑事をやっております刃野といいまぁっ！！」

警部がそこまで言いかけた時…一に払いのけられ、そのまま壁に叩

きつけられた。

なぜか微妙に笑顔で。

「どうも、風都のシティ・エンジェル……。この街で何かあっても警察じゃ心許ないこともおありでしょう。困ったことがあったらこの鋼のジェントルマン…紳士探偵、左乃宮一に連絡をば…」

と、一は若菜に名刺といつのまにか持っていた花を手渡す。

「ふふ…面白い方ですね。よろしければこれ、差し上げます♪」

と、若菜はポストカードを三枚とりだし、手渡した。

「おお！…これはこれは、感謝します…！！」

一は顔を喜々とした表情でスキップしながら帰っていった。

……そしてその数分後。

控え室に入った若菜は一からもらった名刺を破り捨て、花と一緒にゴミ箱に投げ捨てた。

「ほんと…面白いくらいのマヌケね…何が紳士よ。」

若菜は手を洗いながらそう呟いた。

■　■　■

……一が帰ってきてから5分後。鞍坂探偵事務所　地下ガレージ。

マープルはホワイトボードに若菜のポストカードをマグネットで貼り付け、じっと見つめながら呟く。

「不思議……。女の子同士でも、なんでこんなに惹かれるんでしょうか…？」

一とアカネはソファに座り、そんなマープルを見ていた。

「いい物もらったねぇ…」

「ええ、全くです…。」

一がそうアカネに返し、懐から若菜のポストカードを取り出し、それに向かって言う。

「ありがとう……アイドル……」

と、ポストカードに軽くキスしようとした瞬間、アカネは一の手から若菜のポストカードを奪い、少し引き気味に言う。

「げ、自分の分もあるんか…」

「ちょっと、返しなさい！！」

一はアカネからポストカードを取り返そうとする。

「嫌や♪…って言うか、あんたにはマープルちゃんおるから浮気ち

やうの？」

「な…！！あああああああ、紳士の私が…！！すいません、マープル！私は貴女一筋に生きます！」

…なんだか、カオスになってきたガレージ。

と、そこでニコニコと嬉しそうなマープルがゆっくりと立ち上がり言う。

「さ…検索を始めましょう？」

そう言って、マープルが目を閉じた瞬間、体が淡い光に照らされ、脳内の宙の本棚のアクセスを開始する。

「「あ……お願いしまーす……」」

二人は揃って口にした。

…マープルが嬉しそうな理由は…言うまでも無い。

マープルの脳内に白い空間と幾つもの本棚が現れる。

「知りたい項目は、人間をそのオークションに連れ去る方法ですよね？」

「ああ。基本キーワードは、《風都》《オークション》《ピクチャーズ》。そこにリスナーからの投稿にあった地名を片っ端から加えて下さい。」

「うん…頑張るね。」

そういて、手帳を取り出して一は読み始める。

「まずは木枯坂。」

そう言った瞬間、マープルの目前で該当しない本棚が飛ぶように減っていき、一は続ける。

「《四条通り》《十文字交差点》《中央街道》…」

そして、マープルの目前に一冊の［ＲＯＵＴＥ　ＢＵＳ］と書かれた本が残り、その本を手に取った瞬間、本棚へのアクセスが解除される。

「…大正解です、いーちゃん。成る程…面白い答えが出ました。路線バスですよ。」

「路線バスですか？」

一が、マープルに問う。

「あ…そうや…そう言えばあの時も…！」

アカネがハッとした様子で先日の記憶を思い返す。

マープルはホワイトボードに地図を書き、バスの予想できるだけのルートを書き示しながら言う。

「通常運行のバスのふりをして客を運ぶ闇バスが走っているみたい

ですね。周回ルートと停止場所、時間は利用している人たちしか知らない…。」

「…あの態度の理由が分かりましたよ。」

「そしてこれが予想される通過ルート。行き先は分からないけど、この時間、この場所を通るのは間違いないはずです！」

と、マープルは地図の一点を円で囲み、その下に時間帯を書き示す。

「…凄いな！！いつにも増して快調やね、マープルちゃん！！」

アカネはマープルを褒めているが、一だけは杞憂な表情を浮かべ呟く。

「だといいですけど……」

「…いーちゃん？どうかしたの？」

マープルは一の杞憂な表情を察し、心配そうに訪ねる。

「いや…お前のコンディションが気になるだけです。大丈夫ですよね？」

一は、マープルに杞憂な表情で逆に問う。

「心配いらないですよ、私は大丈夫だから…」

マープルは柔らかな微笑みを浮かべその問いに答える。

「よーし、ほんなら善は急げや！！一くん、早速出発や！！」

アカネは一人張り切るが、

「ははは…バカおっしゃい。」

一にそう言われ、アカネは一瞬固まる。

「ドーパントは危険です。戦闘手段がない貴女ではあまりにも危険ですよ。」

と、一は、アカネの額を軽く指で弾くと、そのままガレージの出口へと歩いていく。

「ちょ…ちょっと待ってな！」

アカネは慌てて一の後を追う。

「…私は貴女の安全のために言っているのですが…」

「うちは所長やで！？」

「素手の所長と銃を持った平社員…どちらが強いかはおわかりでしょう？」

「…だ、だけどやなぁ？！」

なおも食い下がるアカネに、一が呆れていると…マープルが、そこで助け船を出す。

「…いーちゃん、いいじゃないですか…。」

「しかしですね…。」

「アカネちゃんには、一般人として潜入してもらい、その後いーちゃんが普通に行けばいいんじゃないですか？」

「…はぁ…仕方ないですね…。」

「な、なら？！」

一がため息をついて言うと、アカネは身を乗り出してくる。

「…た・だ・し。絶対無理はしないこと。いいですね…？」

そう言うと、一はある物をアカネに渡す。

それは、メンテナンスを終えたパピヨンショットとそのギジメモリだった。

「それでは…よろしくお願いしますね？」

「まかしとき！」

薄い胸を張って、アカネは嬉しそうに言うのだった…。

■　■　■

風都某所　ある交差点

一は、ジェントルーダーを止め、アカネを近くの道路まで乗せてから件のバスを待っていた。

一はリザードショックの液晶を見ながら時間帯を確認する。

「そろそろですか……」

すると、バス停の無いところに一台のバスが停まり、何人かの人が急いでそのバスに乗り込む。

もちろん、変装したアカネも乗っている。

「バス停以外で停ましましたか…ドンピシャですね…」

一はメットのバイザーを下ろし、ジェントルーダーのエンジンをスタートさせ、バスの追跡を開始する。

～探偵追跡中～

しばらく進んだところでバスは人気の少ない倉庫街に入っていく。

すると、バスの運転手がバックミラーに追跡している一の姿に気付いたのか、アクセルを踏み込みスピードを上げ、蛇行しながら対向車を避ける。

一は難なくジェントルーダーを操り、バスの後ろにつける。

バスはなおも蛇行しながら逃げ続け、前方の車にぶつかり横転させ

る。

「猪口才な…！」

一は、ジェントルーダーを持ち上げ、横転した車を飛び越えた。

一はそのままジェントルーダーをバスの真横につける。

だがバスはバイクをガードレールに追いやり、バイクはガードレールに擦られながら火花を放つ。

「仕方ないっ！！」

一も流石にやばいと判断したようで、ジェントルーダーからバスに向かって飛び移り、主の居なくなったジェントルーダーはそのまま転がっていった。

何とか飛び乗る事に成功し、体勢を立て直そうとすると…バスの窓から、アカネが『頑張れ！』と書かれたハリセンを小さく振っているのが見える。

「…分かってますとも…。」

体勢を立て直し、なんとか立ち上がることに成功すると…突然近くから笑い声とともにピクチャー・ドーパントが現れ二人に言う。

「ははははは…まさに招かれざる客ねぇ？」

「野郎ぉ…」

一は若干キレ気味にメモリを取り出し、ステッキにそれを装填した。

《ＧＥＮＴＬＥＭＡＮ！ＲＥＶＯＬＶＥＲ！！》

音が鳴り、ステッキが銃の形へと変形する。

そしてそのままドーパントを撃つ。

一はヘルメットを投げ捨て、ドゥーツドライバーを取り出し言う。

「マープル、行きますよ！」

一は、ドライバーを腹部に装着しベルトの形にする。

一方、ガレージでマープルが読書していると、腹部にドライバーが現れ、それを見たマープルはメモリを取り出しスイッチを押す。

―ＡＳＨ！―

同じく一もメモリを取り出しスイッチを押す。

―ＰＯＩＳＯＮ！―

二人と二人は同時に離れた場所で同時に言う。

「「変身！！」」

マープルがアッシュメモリをドライバーの右スロットに装填する。

メモリは小さな灰色の光と共に消え、それと同時にマープルはぽて

んと倒れる。

そして、アッシュメモリは、一のドライバーの右スロットに転送される。

一はメモリを装填し、続いてポイズンメモリを左のスロットに装填しドライバーを操作する。

―ＡＳＨ！ＰＯＩＳＯＮ！―

電子音声がドライバーから鳴り、その後に変身メロディと共に灰色と紫の破片が一の体を覆い…一は、ドゥーツとなった。

『天罰タイムだ！！今日をミリオン・ピクチャーズの閉店日にしてやるよ…』

ドゥーツはそうドーパントに言い放つ。

「何だとぉ！」

と、若干一のギャップに驚きつつも、ドーパントはドゥーツに襲い掛かる。

ドーパントは、絵筆から絵具の様な光弾を飛ばし、攻撃してくる。

ドゥーツはそれにキックとパンチを基軸とし、華麗に避けながら攻撃で応戦する。

そしてドゥーツはドーパントにつかみかかり、バスから叩き落とす。

『そのまま転がってろ！！』

ドゥーツはそう言うと、ドーパントを尻目にバスを追いかけようとする。

「くそっ！！逃がすか！！いけ、兵士達！！」

ドーパントは両手を突き出す……するとその両手から、ドロドロに溶けた体を持つ、赤、青、黄色の怪人が現れる。

「さぁ…これでどうだぁ？！」

ピクチャー・ドーパントは、手に更に三本のガイアメモリを持ち、その怪人たちに投げる…！

《ＢＯＸＩＮＧ！》

《ＲＩＦＲＥ！》

《ＣＬＵＢ！》

その音がすると…怪人達の姿が変化する。

赤色の怪人は、拳が壁を殴った輝で作られた《Ｂ》のガイアメモリを使い、四本の太い腕と、見軽いそうな、真紅の鎖帷子の様な体を持つ《拳闘の記憶》の怪人…ボクシング・ドーパントに。

青色の怪人は、二つのライフルによって作られた《Ｒ》のガイアメモリにより、無数の銃口を背中からハリネズミの様に生やし、片腕が巨大な銃口になった青色の《狙撃銃の記憶》の怪人…ライフル・

ドーパントに。

黄色の怪人は、二本の棍棒で作られた《C》のガイアメモリの力で、砲台にも見える巨大な銀色の丁髷にも見える背骨の様な武器を持ち、黄色の蛙にも見える《棍の記憶》の怪人…クラブ・ドーパントに。

それぞれが、変身する。

―…ｓｉｈ！―

『がっ…？！』

そして、ライフル・ドーパントの一撃がドゥーツに命中する…！

**Pに手を出すな／本棚は家族の夢を見るか**

■　■　■

『…ってぇぇ～～！！』

『い、いーちゃん大丈夫ですか？！』

『ああ…痛みはそこまでないからな…っつぅ。』

ドゥーツはライフル・ドーパントのビームを背中に食らい、バランスを崩して転んでしまう。

『…厄介に増えやがって…！そんな攻撃…これで…！！』

一は吐き捨てるように言い、ドライバーからメモリを二つとも抜き、メモリを手に取りスイッチを押すと電子音声が鳴る。

―ＤＲＥＡＭ！―

―ＢＵＳＴＥＲ！―

一本はドリーム。

もう一本は、銃で撃たれて穴があいた様に見える、輝だらけの《Ｂ》の字が書かれた、藍色のメモリだ。

ドライバーに二つともメモリを装填すると、電子音声が鳴る。

―ＤＲＥＡＭ！ＢＵＳＴＥＲ！―

電子音声の後にドリームメモリの変身音と、新たに無数の砲撃の音にも聞こえる変身音がし…ドゥーツは、オレンジと藍色の体を持つ姿…ドゥーツ・ドリームバスターへと変身する。

『さぁ、死ぬ気で潰してやるぜぇぇぇぇ！』

そう言うと、ドゥーツは手に持った無骨な藍色の拳銃…バスターマグナムを構え、ライフル・ドーパントに向けて連射する。

―ｓｉ……ｚｙａ！！―

ライフル・ドーパントとお互いに撃ち合うが…それはあっさりとドゥーツが打ち勝ち、ライフル・ドーパントに命中し、倒れる。

ライフルは、《狙撃銃の記憶》に対して、バスターは《砲撃の記憶》…それは、圧倒的なまでに威力が違う。

狙撃銃は、一発で急所を狙う一撃必殺の力を持つものだ。

だが、砲撃とは大砲の力すら持つ銃の力を持つ記憶としては最強ともいえる、砲撃量に任せた殲滅を行う力だ。

撃ち合う時点で、ライフル・ドーパントは負けている様なものである。

ピクチャー・ドーパントはドゥーツに向かって問う。

「お、お前一体幾つメモリを持ってるんだ!?」

『あぁ?えっと…1、2、3…ああもう!!面倒くせえ!!』

と、ドゥーツはバスターマグナムをトンファーの様に持ち、三体のドーパントに向かっていく。

クラブ・ドーパントの懐に潜り込み、二、三発撃ってから片足をハンマーに変化させ、弾き飛ばす。

―…ｇｅｒｏｏｏ!!―

クラブ・ドーパントは、口から蛙が舌を出すかのように棍を幾つも発射し、ドゥーツに攻撃する。

『ハッハァ!!』

だが、ドゥーツはその棍を銃で撃って弾き、そのまま頭を数回撃つ。

―ｇｅ…ａａａａａａ!!―

そのままクラブ・ドーパントは吹き飛び、爆散する。

…その爆発の後には、一本のガイアメモリと、水風船に詰まっていた黄色の絵の具が、割れて飛び散った様な跡が残った。

『さぁ、次ぃ来い!』

ドゥーツが自信満々に、ボクシングとライフルのに二体のドーパントに向かってそう言う…

しかし、ピクチャー・ドーパントは臆する様子も見せず二人に言う。

「…まさかここまでやるとは…驚きよ……でも、君には私は倒せない。」

『??』

ピクチャーは、一度二体のドーパントをガイアメモリを回収させて下がらせる。

そしてドゥーツに見せる様に、左腕の額縁を見せる。

その額縁には、あの家にいた男が助けを求めている様な絵が書かれていた。

「私の体中には、絵が一杯だよ。私を倒せばこれも全て砕け散る。この額縁の題の文字が読める?」

そこにはローマ字で［ＲＹＵ　ＴＡＮＢＡ］と刻まれていた。

『ＴＡＮＢＡって…まさか!?』

二人の脳裏に丹波家での光景が蘇る。

ピクチャーは更に続ける。

「このライフアートには客の生命力が詰まっている。ミリオン・ピ

クチャーズでは、どうしても絵が買えない者は、己自身を担保に絵を買うのだよ…」

ピクチャーは、なぜか悲しそうに笑い、更に続ける。

「彼らは全てを捨ててもなお勝負がしたいのよ。仕事も…我が家…家族もさえも…ね…」

『テメエ…なんてことを！！』

「…フン、あいつらが、悪いのさ……。」

ドーパントに向かって言うが、ドゥーツの右半身に宿ったマープルが呟く。

『我が家……？家族……？』

すると突然、一の目の前にある映像が現れる。

それは、三人の子供とその両親らしき男女が楽しげに海辺を散歩しているという映像だった。

そして、次の瞬間マープルに異変が訪れる。

『ぁ……嫌…嫌ぁ…イヤァァァァァァァァ！！』

突然マープルが悲鳴をを上げはじめ、それと共にマープルとの精神リンクが強制解除され、右半身が一気に重くなる。

『マープル！？どうした！？マープル！！』

一は、マープルに問いかけるが返事を返すことはなかった。

「な…なんだ？」

ピクチャーは突然の事態に一瞬困惑するものの、大丈夫だと判断し、それを気にボクシング・ドーパントが本来の力をだせなくなったドゥーツに殴りかかる。

―ｗｈｙｙｙｙｙｙｙ！！―

『グっ……！がぁあああっ！！』

ドゥーツは何とか自由の利かない右半身に耐えながらボクシングの攻撃を防ごうとするが、防ぎきれずに吹き飛ばされてしまう。

『マープル！！どうした！？おい！！』

一はなおもマープルに呼びかけるが返事を返ってこない。

ボクシングはこの瞬間を狙い、両手を突き出し拳型のビームを一に向かって撃ち込み、一のいた場所は悲鳴とともに爆炎に包まれた。

『うわあああああああッ！！』

「…やられた分の借りは返した。……さらばだ。」

ピクチャーはそういい、自分の体から一つの額縁を取り外し、その中に吸い込まれるように消えその場から去っていった。

■　■　■

ミリオン・ピクチャーズの客を乗せたバスはトンネルに入り半ばまで差し掛かった所で停車し、客達が次々と降りていった。

（止まった……なんや薄気味悪いな…なんでこない所で…？）

アカネは内心で訝しむが、とりあえずバスから降りた。

立ち入り禁止と書かれた扉が開き、覆面を付けたボーイが一礼しながら入っていく客に仮面を渡していく。

アカネも仮面を受け取り、客達の後を付いていった。

階段をしばらく降りたところで扉を開けると、そこにはオークション会場と言うにふさわしい煌びやかな光景があった。

（ここが…ミリオン・ピクチャーズ……）

アカネは辺りを見回し、内心で呟いた。

■　■　■

……ボクシングの無数の攻撃を受けたドゥーツ。

だが、一は生きていた。

あれだけの攻撃を食らっても無傷で済んだのは奇跡としか言いようがなかった。

「…奇跡…ですかねぇ…？」

一は変身を解き、ゆっくりと立ち上がる。

「いたた…なんとか、無事なようですね…。」

一はマープルの異変と、脳裏に浮かんだ映像の事について思案を巡らせていた。

（私にも見えた……。あれが……マープルの家族……？）

同じ頃、鞍坂探偵事務所では、マープルが、ゆっくりと目を覚ました。

「あ…ァ…！！いやぁぁあああぁあああッ！！」

マープルは目を覚ますなりふらふらとした歩調で近くの机に歩み寄り、狂ったように叫びながら荒々しく机の上の物を払いのける。

自分自身の手が傷つくことも気にせず、カッターや尖った鉛筆を払いのけ、手から血が出てしまう。

「あぁぁぁあッァァあぁあッ！！」

マープルは遂に極度の錯乱状態に陥り、辺りの物を見境なく壊したり散らかしまくる。

暫く嵐の様に暴れるマープル…だが。

「ひ…ァ…っ…！！？」

マープルは怯える様にそう声を上げると、そのまま意識を手放した。

■　■　■

同時刻　風都某所　ミリオン・ピクチャーズ

マープルは近くのテーブルでワインを楽しみながらオークションのカタログを見る悠子に歩み寄り、手を引っ張りその場から離れる。

「お前…ヘナチョコ探偵？」

悠子は鼻で笑いながらアカネに言う。

アカネは悠子の肩を掴みなんとか思い直させようと説得する。

「早く家に帰りぃ！ここは天国なんかやあらへんで！！」

だが悠子はアカネの手を払いのけ言い放つ。

「今更引けるか！今日あの絵を待ちわびてたんだ！！」

すると突然流れていたＢＧＭが止まり、田島が現れた。

「皆さん、ようこそ。神のオークション《ミリオン・ピクチャーズ》へ……。今回の秘宝ともいえる絵を買うオークションへの挑戦権を獲得した者がまた現れました。…その勇気あるチャレンジャーの名は、和泉悠子！！」

田島がそう言ったとたんスポットライトが悠子を照らし、同時に周囲の客から拍手と喝采が響いた

■　■　■

同時刻　？？？？？？？？

マープルは何もない真っ白な空間で息を切らしながら何かを探していた。

「はぁ…はぁ……家族…私の家族……」

そんな中、タイトルに【ＭＹ　ＦＡＭＩＬＹ】と書かれた一冊の黒い本がマープルの目に入った。

マープルは縋る様な気持ちでその本を手に取り、ページを開いた。

だが……その本のページは全て破り取られており、マープルの顔が蒼白になる。

「ない……ない！！…ない！…！どうして！？」

マープルは縋りつく様な気持ちと何年もの間ずっと一人でいる様な

不安に駆られ、破り取られたページを焦りながらめくる。

「……ぁ…アァ…いやあああああああ！！」

…そうマープルが声を上げたと同時に、意識が戻る。

目に映るのは、見慣れた事務所の風景。

ドゥーツとして変身していた時に気を失い、その間眠り続けていたようだった。

「ぅう…あ…ぁ…？」

「…起きましたか、マープル。」

その声のする方にマープルが目を向けると…そこには、心配そうな顔をした一が据わっていた。

「…わ…わた、し…は……？」

「…気を失っていただけですよ。……しかし、貴女の倒れた原因のせいで、心配していましたが…これほどとは。」

その言葉を聞き、先ほどまで痛みが走っていた手を見ると…ガーゼと包帯がまいてあり、しっかりと手当てがしてあった。

そして、一度ため息をつくと、マープルに向かって一は口を開く。

「全ての知識を手に入れられる貴女が唯一知ることの出来ない唯一……それが自分の過去…ですものね？」

と、一はできるだけ穏やかな口調で諭すように言い、マープルの肩を優しく抱く。

だがマープルは一の手を荒っぽく払いのけ、普段のおっとりとしたマープルからは想像もつかないような口調で言い放つ。

「ぅ…うるさいッ！！何が分かるって言うの！？どうせいーちゃんだって私のこと笑ってるんでしょ！？私は、そな……そんな見せかけだけの優しさなんか要らない！！」

そう言ったマープルの表情は狂気に満ち溢れていた恐ろしい表情をしていた。

だが一は臆する事なくマープルに言う。

「笑ってません…」

「嘘だよ…！そんなの…嘘……！」

「……嘘じゃねえッ！！」

一に言うが、一はいつもの紳士然としたもので泣く、ドーパントと戦う時のような乱暴にも聞こえる口調になる。

「…っ…マープル、旦那が、こんなことを言っていました…。」

…一は、再び平静を取り戻しなおも続ける。

「【完璧な人間なんていない……。お互いに支え合い、生きていく

のが人生(くだらないゲーム)…とね。」

「…でも…でも……」

その言葉にマープルは涙を流し、ぐしゃぐしゃの顔で、懇願するように見つめながら、言う。

「私が…なんなのかも……分からないよ……いーちゃぁん……！」

「……マープル……。」

事務所には気まずく重い空気が流れ、天井の風車が風を切る音だけが虚しく部屋中に響いていた……。

そして、しばらくたってその静寂を打ち破ったのは一のパピヨンフォンの着信音だった。

一は若干苛ついた様子でパピヨンフォンを取り出し通話に応じる。

「何です？今忙しくて……」

「もしもし、こちらカ〇ネル、本部応答せよ。」

「川底からこんにちは？！っていうか、アカネさん、何してるんですかっ！」

「…え！？」

マープルはそのやりとりを聞いて思わず声を上げた。

「現在ミリオン・ピクチャーズに潜入中。何か普通ちゃうでここ……。とりあえずそっちに中継するから見てや。」

と、アカネは一度通話を切り、一から渡されたパピヨンショットにギジメモリを装填した。

―ＰＡＰＩＬＬＯＮ―

電子音声とともにパピヨンショットはライブモードに変形し、アカネの手元から音もなく飛び立つ。そして天井にぶら下がると辺り一帯の映像を一のパピヨンフォンにリアルタイム中継させる。

程なくして一のパピヨンフォンの液晶モニタにアカネから中継された映像が映る。

「はぁ……何でこういう時だけ変に行動力抜群なんでしょう…？」

一は頭を抱えながら映像を見る。

「わ…私は、１００万円！！」

「出ました、１００万円！さぁ、他に誰かもっと上の人はいらっしゃいませんか？！」

そこでは、優美な額縁の中に収められた抽象的な絵を前に、血走った目でそれを買おうとする悠子がいた。

その周りには、黒いスーツと白い仮面をかぶった男達がいる。

「２００万円。」

「さぁ、出ました２００万円！」

白い仮面の男がそう言うと、悠子はこの世の終わりの様な顔になる。
…が、そのすぐ後になにか怪しい目をし、叫ぶ。

「わ…私は、私自身を賭ける！」

「おっと……出ました…さぁ、魂より重い物を賭ける方はいらしゃいますか！」

ディーラーの男がそう言うが…周りの男達は、何も反応しない。

「…では、この絵は魂と引き換えに、悠子さまの手に渡りました、おめでとうございます！！」

そういうと、奥からどこか辛そうにも見える表情をした、田島が出てくる。

ディーラーの男が田島を前に出し、メモリを差し出す。

「…支払いの、時間です…。」

と、田島はガイアメモリのスイッチを押した。

―ＰＩＣＴＵＲＥ！―

メモリから電子音声が鳴り、田島はスロットにガイアメモリを差し込む。

…それはゆっくりと体内に消え、田島はマーブル色の光とともにピクチャー・ドーパントとなった。

「え…絵が…絵が…！買える…！」

悠子は狂気を宿した表情のまま、ピクチャーにゆっくりと近づく。

「代償は貰うよ……キッチリと、ね…」

ピクチャーが、手から額縁を取り出すと、それを悠子の額にあてる。

「あぐっ…ァ…ゥァ…！」

悠子は最後に苦しげにそう漏らすと、糸の切れた人形のように地に伏し、事切れた。

持っていた額縁には、狂気の笑顔をした悠子の顔が、描かれていた…。

「……。」

「さぁ、皆さんお楽しみいただけたでしょうか?!次は…そうですね、この絵をオークションに…。」

ディーラーの男がそう言うと、物陰から一部始終を見ていたアカネがハリセンを取り出し、ピクチャーとディーラーの男がの頭を思い切り叩く。

「ふざけんな!!」

叩くと、「ヴァチーンッ！！」と、とても痛そうな音がする。

「痛っ。」

「あダァッ！！」

ピクチャーと、ディーラーの男がは思わず声を上げてしまう。

「あ、アカネさぁぁぁぁんッ！！？？」

一は叫び、マープルは困ったような笑顔を浮かべた。

■　■　■

…同じ頃、風都某所　とある教会にて。

冴子が結婚式のドレスを身に纏い、最後の確認を部下に任せているところだった。

霧彦が何気なく外を歩いていると、琉兵衛が立っているのが見えた。

「あれ？お義父さん…こんな所で何を？」

霧彦が琉兵衛に問うと、琉兵衛は霧彦に向き直った。

「霧彦君……婚礼を挙げる前に、君を一発殴らせてくれんかな？」

琉兵衛は霧彦に歩み寄りながら訪ねる。

だが霧彦はあまり本気とは思ってはおらず軽いジョークのつもりで琉兵衛に言う。

「ふっ…まるでホームドラマですね。下っ端の私が娘さんを奪っていくからですか？」

だが琉兵衛は霧彦の問いに答えず、ただ静かな笑みを浮かべながら霧彦に近寄り、ガイアメモリを取り出しスイッチを押した。

―ＫＩＮＧ！―

電子音声が鳴り、それを見た霧彦の表情が凍りつき、身構える。

そして琉兵衛は静かに口を開く。

「園咲家の者は皆、我ら［ミュージアム］の中枢……。この街の、いや全ての人類の統率者だ。君がナスカメモリの能力を極めているかどうか…それを確かめねば式を挙げさせられん…」

「お父様？」

琉兵衛がそこまで言ったところで若菜の声が聞こえた。

霧彦と琉兵衛が見上げると、バルコニーに若菜の姿があった。

「私が代わりますわ…」

若菜がそういうと、琉兵衛と同じようにガイアメモリを取り出しスイッチを押した。

―ＲＯＯＫ！―

電子音声が鳴り、ガイアメモリを天に投げると、若菜はどこからかガイアドライバーを取り出し、それを腰の後ろに装着すると、ベルトの形になった。

そして若菜は飛び降り、同時にガイアメモリがドライバーのスロットに差し込まれ、若菜は熊と城を模した様な大柄な怪人…ルーク・ドーパントとなった。

そして、クレイドールは琉兵衛に言う。

「私、気取った男のメッキを剥がすの大好きなの…ふふふ…」

琉兵衛はただ静かに笑みを浮かべていた。

## Pに手を出すな／愚か者の最期

■　■　■

「？…誰…貴女。」

ピクチャーはアカネの仮面を外し問う。

だがアカネは若干おびえながらも強い口調でピクチャーに向かって答える。

「この街の平和を愛する探偵所の所長様や！！」

「……いずれにせよ、このまま帰すわけにはいかないな…」

ディーラーの男が静かな口調でアカネに歩み寄り、アカネは恐怖に負け、思わず地にへたり込んでしまう。

「う、うちに手ぇ出したら部下たちが黙っとらんで！！イマイチ頼りなさ過ぎのが一人いるけど、それでも最後の一人はものすごい天才なんやから！！アンタなんか簡単に一捻りや！！」

その一部始終をパピヨンフォンで見ていた一は、呆れたように声を出す。

「…売り言葉に買い言葉ですか…。」

そう一が言うと、マープルはパピヨンフォンを手に取りどこかに通話を始める。

「ひ…ひゃあ！！」

ピクチャーはアカネの首を掴み上げ問う。

「何を言って？…その天才はどこに？」

ピクチャーがそうアカネに言った時、アカネの携帯の着信音が鳴り、アカネは少し通話すると、ピクチャーの耳元と思われる耳の絵が描かれた額縁の前に運ぶ。

「ものすごい天才のほうですよ。すぐにゲームに参加するから、待ってて下さい」

「……へぇ。」

「こっちが客になってあげるって言ってるんですよ。どうですか？」

「ちょっと、そんなのは…！」

一が慌てるが、マープルは気にせず通話を続ける。

「あなたの絵は、ピクチャーの能力の一つの『描いた絵の催眠効果の付与』で買わせているだけですよ。そんな絵、魂かけるほどの価値はないでしょう。」

「……勝負したとして、こちらのメリットは？」

「私達はガイアメモリを7本持ってる……そう言っても受けないのですか？」

マープルは挑戦的な口調で電話の向こうの田島に対し言う。

そのセリフに対し、田島よりもディーラーの男が反応し、電話を奪い取る。

「……いいだろう、迎えを出すから待っていたまえ…ふはははははは！！」

「どうも…それでは午後二時に風谷町に迎えを。」

マープルはそう言うと通話を切り、一人地下ガレージへと消えていった。

■

■

■

ピクチャーは絵の具をこぼれ落としながら光とともに田島の姿に戻り、ギャラリーに言う。

「会場の諸君、今日はお開きよ…」

そして、ディーラーはアカネに向き直り言い放つ。

「自慢のものすごい天才とやらの実力を見せて貰おうか…？」

アカネは挑戦的な表情で親指を下に立てた。

■　■　■

そのころ　教会では。

ルークが左手の大砲から火の玉を霧彦に向けて放つ。

だが、霧彦は顔色一つ変えず僅か半歩動くだけでそれを全てよけきる。

ルークはそんな霧彦が気に入らないのか、霧彦に向かい問う。

「……余裕のつもり？触れただけで死ぬわよ！？」

だが霧彦は相変わらずの笑顔でその問いに答える。

「つもりじゃない…本物の余裕だよ。若菜ちゃん♪」

と、霧彦は僅かに乱れた服を直しながらルークに言う。

「…腹立たしい…！！！」

遂にルークがキレたのか、目を光らせると、今度は右手に炎を纏い、霧彦に向かって突っ込んでくる。

「ハァァァァァッ！！」

だが霧彦は顔色一つ変えずガイアメモリとドライバーを取り出し、メモリのスイッチを押すと電子音声が鳴る。

―ＰＡＷＮ！―

霧彦はドライバーを腹部に装着し、ベルトの形にし、そしてメモリをバックルに差し込む。

そして、黒く丸い顔と、武者鎧と騎士鎧を混ぜたような黒い光沢の身体を持った怪人――ポーン・ドーパントとなった。

そのポーンは、ルークのパンチを身じろぎ一つせず受けきり、耐えきった。

そして、琉兵衛の手をたたく音が聞こえ、二人は変身を解除した。

「合格と言わざるを得ないようだな…ははは。」

霧彦は一礼し、若菜は不機嫌な表情をしながらその場から歩き去っていった。

■

■

■

同時刻　事務所近くの臨海公園で。

一は缶カフェオレ片手にベンチに座り一人海を見つめながらたそがれていた。

一は近くにいた家族連れを眺めながらマープルの事を考えていた。

「（マープルは自分でも薄々気付いてるはず……心のどこかが、家族というものに引っかかってるのを……。今回ばかりは私がどうにかしないと……またマープルは……）あ～！！こういう時旦那だったらなんて言うんでしょぉぉ～！？」

一は頭を掻きながら自問したが、当然その問いに答える者はいない。

やけくそ気味に、一は仰向けに寝転がり、被っていた帽子を目隠し代わりにして一人目を瞑った。

「…おい……いー…。」

…と、一が目を瞑っていると、若い女の声が聞こえた。

一が帽子を取ると、そこには、長袖の「２－３」と書かれたジャージと、半ズボンをはいたきれいな金髪の少女がいた。

「何だ…ニノですか。」

一は身を起こし、金髪の少女――ニノに言う。

「村長が、いーにこれを…と。」

と、ニノは無表情のまま、一に何かを手渡した。

それは、袋一杯に入った野菜と生きている魚に、何かのキャラクターが描かれたトランプだった。

一は困ったような笑みを浮かべながら言う。

「ぁ…いや…今こんなの貰っても「気にすることはない。」……」

だがニノは全く表情を変えずに淡々と言う。

「……分かりましたよ…村長によろしく。」

「うん…いつでも、帰ってこいよ?」

ニノは最後にそう言うと、そのまま歩き去って行った…。

「…もう、帰れるとは思えないんですがねぇ…。」

一はそう漏らすと、貰ったトランプと魚を取りあえず上着の内ポケットに入れる。

すると、近くの橋に一台のバスが止まり、一を呼ぶようにクラクションを鳴らした。

一がバスの方に振り向くと、背後からマープルが現れた。

「これですね…乗りましょうか。」

「…ええ。」

二人は取りあえずそのバスに乗り、バスは三人を乗せると発車した。

しばらく進んで、バスはトンネルへと入っていった。

すると、マープルが突然一に向かって言う。

「今回に備えて世界中のあらゆるものの必勝法を読んできたから、今日は私の横で見てるだけでいいですよ。」

程なくしてバスはトンネルの半ば辺りで止まり、自動ドアが開き、取りあえず二人はバスから下りた。

すると、一の近くに会った［立ち入り禁止］と書かれた扉が開き、そこに覆面を付けたボーイが一礼していた。

「オ待チシテオリマシタ。ゴ案内致シマス。」

ボーイに促され、一達は後を付いていく。

「…このボーイ、まさか…」

「はい…多分、メモリの力で生まれたんだと思いますよ。」

そんな会話をしながらもしばらく階段を降りていき、扉を開けると煌びやかな空間があった。

「さぁ、ぶっ潰しに来てやりましたよ！」

すると、マープルはさっさと歩いていく。

「待っとったで～マープルちゃーん！！頼んだで！？〇ーネル様にもお祈りするで！」

「それ、呪いがかかりそうなんですけど？」

オークション会場の隅っこで座っていたアカネの顔が明るくなり、マープルに駆け寄りながら一のツッコミも気にせず言う。

「心配ないよ、アカネちゃん。勝つのは私ですから…」

マープルはアカネに笑顔でそう返す。

「その子供がものすごい天才？」

奥から現れた、目元を仮面で隠した田島がアカネに問う。

「いいでしょ……。ようこそ、我がオークションへ……」

田島がマープルにそう言うと、周りが一瞬でぐにゃりと変化し…カジノ場へと変わる。

「…ピクチャーの能力ね？」

「御名答。」

そう田島が言うと、ディーラーの男二人が、マープルと田島をルーレットの場所へと案内する。

「…私達はスルーですか…」

一はそう呟くと、近くで事切れている悠子に歩み寄り、突っついたりしてみるが…勿論のこと返事はない。

アカネは二人の勝負を傍らで見守っている。

テーブルにはすでに田島のライフアートの山が置かれ、マープルは自分と一から回収したガイアメモリ7本を自分の側に置く。

「今日は貸し切り。私の賭ける物は…これ。」

田島がそう言うと、ライフアートを一枚取り出し、マープルに言う。

「このライフコイン一山を君たちのガイアメモリと等価値とする。16対16の勝負だ」

「わかりました。」

マープルは素っ気なく答える。

田島がディーラーに指示を出し、ディーラーはルーレットを回転させ、同時に玉をルーレットに入れる。

「（台は1880年度オータムスクエア社製…玉の反発力と回転速度を加算して…）赤の21です！」

マープルは驚異の頭脳処理能力で即座に逡巡し、まずはアッシュメモリを赤の21の所に置く。

「…じゃぁ、私は黒の18。」

田島はライフアートの一山を黒の18の所に置く。一は離れて、アカネは傍らで固唾をのみ、勝負の行く末を見届ける。

しばらくたって回転が緩やかになり、カランと音を立て、玉が穴に

落ちる。

その穴は――赤の２１。マープルの勝ちだ。

「やったーー！！」

「…素晴らしい。」

アカネと田島は素直に手を叩き、マープルの健闘を称える。

「次は…黒の１９。」

「赤の３２。」

～少女賭博中～

それからも勝負は続き、田島のライフアートはどんどんマープルに取られていき、僅か２０分後には7個あった田島のライフアートの山はすでに三つになっていた。

この状況では焦るのも仕方がない……はずであるが、田島は無表情だ。

「…ねぇ…なんで、こんな勝負したの？」

田島はマープルに問う。

「別に…ただ何となくです。」

マープルはそんな田島の問いにサラリと答えた。

「…被害者の家族にでも泣きつかれたの…？」

何気なく口にした田島のその言葉にマープルの表情が変わる。

「我が家……！？家族……！？」

すると、マープルの目の前に再びあの映像が現れる。

「いや…いや…！…嫌っ！！」

マープルはその映像を振り払おうと混乱し、慌ててテーブルの上のコップを落としてしまう。

ディーラーの男が嫌らしい笑みを浮かべ、マープルに問う。

「家族に何か嫌な思い出でも？」

すると、もう一人のディーラーが近くの押し鈴を鳴らす。

「黒の３５。」

「ぁ…赤の４！」

マープルは慌ててアッシュメモリを適当な台に置く。

田島はマープルの弱点を見つけたはずだが…いまだに無表情のままだ。

そして、ルーレットの玉が落ちたのは黒の３５――田島の賭けた所

だ。

案の定、マープルが賭けたアッシュメモリは田島の側に没収される。

「まずい…！」

一は思わず呟いた。

■　■　■

「家族なんて……興味ないです…！！」

田島の何気ない一言に調子を狂わされたマープルはあれから負け続けている一方だった。

既に7個あったライフアートの山とガイアメモリ6本は加賀の手元に渡ってしまい、この勝負で賭けたジェントルマンメモリも加賀の手にわたってしまった。

「ふふん、崩れたね……。呆れた脆さだ！くはははは！！」

ディーラーの男が後ろでは下卑た笑い声を上げる。

マープルはふらふらと立ち上がると、倒れ込むように近くのテーブルに肘をついてしまう。

「大丈夫かマープルちゃん！？さっきから全然勝てなくなっとるやん！？カ〇ネルの呪い？！」

「無理やり話をギャグ系に変えないでください。」

アカネは焦りを隠さずマープルに心配そうに訪ねる。

「だめ……集中出来ないの…」

…これでは…万策尽きた。

そう思った矢先、一に天啓が下ったようにある事を閃き、一はニノからもらったトランプを思い出した。

「ラストゲーム…する？」

田島は無表情で、マープルに追い討ちをかけるように言う。

「ちょっと待ちなさい。……選手交代だ。私が相手になりましょう…。そして次のゲームがラストゲーム……。アートとコイン、全てを賭けなさい。」

一は田島にそう言い放つ。

「はぁ？」

田島より、ディーラーの男は突然の一の提案に驚く。

「は…一くん?!」

「いーちゃん…?!」

マープルとアカネも思わず声をあげてしまう。

「君がぁ？ルーレットをぉ？」

ディーラーは、嘲るように一に問う。

「いえ、私の最も得意なゲームで勝負をば…」

と、一は上着の内ポケットからニノから貰ったトランプを取り出し、それを田島に見せながら言う。

「ババ抜きです…！！」

ちなみにトランプには様々なキャラクターと共に［荒川　ＵＮＤＥＲ　ＴＨＥ　ＢＲＩＤＧＥ　トランプ］と書かれていたのは…余談である。

■　■　■

そのころ　教会。

ウェディングドレスを身に纏った冴子が琉兵衛に付き添いバージンロードを静かに歩き、琉兵衛に言う。

「お父様…私、幸せよ…」

「ああ……。世界一幸福な家族だよ…我々は…」

だが、そんな二人を気に入らないのか、近くにいた若菜は軽く睨みながら舌打ちし、近くにいた琉兵衛の飼い猫のミックは唸っていた。

「指輪ノ、交換ヲ。」

なぜか外国人の神父が霧彦と冴子に言う。

霧彦は神父に言われたとおり、冴子のウェディンググローブを外し、神父から渡された指輪を冴子の左手の薬指にはめる。

■　■　■

再び同じ頃　ミリオン・ピクチャーズ。

田島と一がババ抜きの勝負で、ジャンケンの結果は田島が後攻、一が先攻ということになった。

田島がイラストを裏にしながらカードの扇を一の目の前にやり、言う。

「次に君はクラブのキング…取るよ。」

「え？」

一が何気なく一枚のカードを取ると、そこには白いタイハクオウムの顔をした白スーツの男のイラストが描かれたカードに、右上端と左下端に確かにクラブのKと書かれていた。

「「おお…」」

一だけでなく傍らにいたアカネも思わず感嘆の声をあげてしまう。

「情けで、ここらでＪＯＫＥＲを…。…これ。」

と、田島は迷わずに一のカードの束から迷わずモグラの頭をした背広の男のカードを取った。

「なっ……?!」

一は何故ＪＯＫＥＲの位置が分かったのか分からずにいた。

「なんでババ抜きなんや!?さっきからアイツの言いなりやんか、も～～～!!」

アカネは頭を抱えながらマープルに言う。

「…彼はいーちゃんのかすかな体の変化などを完璧に読んでいるの……。だからＪＯＫＥＲの位置やいーちゃんの狙うカードが分かるんです。それに…カード捌きも神業…。自分の好きなカードを相手に引かせることが出来る…と思うんですけど…」

「…?どうしたん?」

「なんだか…違う気がするんですよ…今のは、そうとしか説明できないのに…」

二人がそう話している間に、田島と一の勝負も終わりが近付いていた。

ディーラーの一人がいやらしい笑みを浮かべながら一に言う。

「…いよいよだ。次はお前に田島様がＪＯＫＥＲを引かせる！そして田島様がスペードのクイーンを引く！！それで終わりだ…ふっふふふ！！」

追い詰められた一の体中から冷や汗がどっと吹き出、自分でも緊張しているのが分かっていた。

だがディーラーの男は一に追い討ちをかけるように続ける。

「いい顔ですね～！！恐怖する負け犬の顔はさぁ！！これだから賭け事を観戦するのは止められない！！くははははははは！！」

ディーラーの男二人は下卑た笑い声を上げる。

「一くん……」

アカネが悲しそうに言う。

「だめ……アウトだよ……」

マープルも諦めがちに言う。

だが、一は焦りを隠しながら帽子を被り直し、マープルに言う。

「大丈夫……黙って見ていなさい……。旦那の言葉ですが…《男の仕事の八割は決断。そこからはおまけだ…》とね…。私はたとえ無謀でも、貴女を守って勝負すると決めた……だから結果がどうなろ

うと悔いはない…。貴女は……旦那から託された大事な相棒だから……！！」

だが、マープルはそんな一に悲痛な声で言う。

「無理よ……無意味だよ…！！いーちゃん…」

そう言うと、急に立ち上がったアカネがどこからかハリセンを取り出し、マープルの頭をはたく。

「ちょっと！一くんはアンタを必要としてくれてるんや！？アンタがそんな諦めムードでどうするんやねん！？…アンタら、二人で一人の探偵っていったやないか！？…そんなら、一くんを信じたりや！！」

そのアカネの言葉に一とマープルはハッとなった。

そして、一が口を開く。

「そうだ……。私達はドゥーツ……二人で一人……いつも二人で一人ですね？マープル……」

と、一はマープルに軽くウィンクを飛ばす。

マープルはその意図に気付き、明るい表情で肯定した。

「はいっ！」

一はマープルに笑顔で返し、田島に向き直り言い放つ。

「勝負だ…！次で決めましょう！！」

「…どうぞ。」

田島は手持ちの二枚のカードを一の目の前に突き出し言う。

すると突然、マープルが静かに目を閉じ、一が一枚のカードをディーラーに向けて指で弾き飛ばした。

「うわっ！！」

ディーラーは思わずたじろいだ。

一の引いたカードはジョーカーであるモグラ頭の男カード…ではなく、長袖ジャージに半ズボンをはいた、ロングの金髪を持つ少女の描かれたカード…スペードのクイーンだった。

軍配は、一に上がったのだった。

そして、一がディーラーと田島に言い放つ。

「残った札は要りません……。オークションにでも出品しなさいな…」

アカネはそのカードを見るなり飛びあがって喜んだ。

「やったぁーーー！！！！」

「んなぁぁ～？！馬鹿な！！な、なぜだ！？」

なぜか、完全に確信していた自分の勝利が打ち砕かれた田島より、ディーラーの二人の方が思わず声を上げてしまう。

「ふっ…なら教えてあげましょう。」

男の問いに一は腰に巻いたドライバーを見せながら答える。

「このドライバーを装着した瞬間、私とマープルの意識はリンクする…。さっき右手がカードを引いたのは私でなくマープルの意志なんですよ」

一はマープルに向き直り言う。

「よく気付いてくれましたね。…この勝負、私た『私達の勝ちやな!!』」

一がそう言いかけた所でアカネに払いのけられ遮られた。

「だから貴女はカッコいい所で出て来ないで下さいっ!!」

一が折角の見せ場を邪魔されたことに少しキレ気味に言う。

「…おい!!何をやっているんだ!?」

「飽きたのよ…もう、いいでしょう?」

「なにを言って…!!」

「…な、なんやなんや?!」

アカネと一が喋っていると、ディーラーの男と田島がもめている。

「…ねぇ、探偵さん…これ、どうぞ？」

田島は、一に仮面と、ガイアメモリを投げてくる。

「な…？！…って、この仮面…？！」

その仮面をよく見ると…目の部分に、画面の様な物が付いており、それにはトランプの絵柄が、裏からでもわかるような仕掛けがしてあった。

「ね？イカサマももう嫌だし…メモリは砕いておいて？」

「…ええ。分かりましたよ…」

その言葉を言うが早く、一はガイアメモリを握りつぶす。

「…おのれ…よくも金儲けを潰してくれたな！」

「殺してやる…！！」

ディーラーの二人はガイアメモリを取り出し、スイッチを押した。

―ＢＯＸＩＮＧ！―

―ＲＩＦＬＥ！―

メモリから電子音声が発せられ、二人が仮面を外した目元のスロットに差し込むと、メモリは体の中に消え、二人は赤色と青色の光の

中、ボクシング・ドーパントとライフル・ドーパントとなった。

「おお…アンタ達！！やっちまいな！！」

アカネが女王様よろしく二人にガイアメモリを手渡し言い放つ。

一はドライバーを腹部に装着し、ベルトの形にすると、マープルの腹部に同じようにドライバーが現れた。

そして、一はポイズンメモリを、マープルはアッシュメモリを取り出し、スイッチを押す。

―ＡＳＨ！―

―ＰＯＩＳＯＮ！―

それぞれのメモリから電子音声が発せられ、二人はメモリを構え同時に言う。

「「変身！！」」

マープルがドライバーの右スロットにメモリを装填すると、淡い光と共にメモリは一のドライバーの右スロットに転送される。

それを押し込むと、次に一はポイズンメモリを左スロットに装填し、ドライバーを操作すると、電子音声が鳴る。

―ＡＳＨ！ＰＯＩＳＯＮ！―

アッシュとポイズンの変身メロディが鳴り、一はＤＯＴＷＯ（ドゥーツ）に変身

し、マープルは糸の切れた人形のように地に倒れ込んだ。

「ッ！？くそっ！！覚えてろ！！」

「逃げるが勝ちっ！！」

ボクシングとライフルは、ドゥーツを見るなり逃げ出した。

『待てゴラァ！！』

ドゥーツは、ガラ悪く二体の後を追いかけた。

「うひょひょ！さっさと回収するで～！」

「あ。こっちにもまだあるよ。」

「マジでか！アリガト！」

田島とアカネは、周りにあるライフアートを手当たりしだい鞄に詰め込んでいた…。

■

■

■

同じ頃　ミリオン・コロッセオ外部

一台の車のドライバーがトンネルを走って逃げていたドーパントに気付き、慌てて車を止める。

「うわああ！！」

「邪魔だ！！」

「この鉄クズがっ！！」

二体は苛つきながら車のドライバーに言う。

ライフルにいたっては、周りの車のタイヤを撃ち抜くほどだ。

すると、背後からバイクのエンジン音が聞こえ、二体が恐る恐る振り返ると…ドゥーツがジェントルーダーを駆り、二体に迫っていた。

ドゥーツはジェントルーダーを持ち上げ、そのままボクシングに体当たりを仕掛ける。

「うわあああぁぁッ！！」

「あ、アイボ…っグギャ！！」

そして二体は吹き飛ばされた。

ボクシングのかなり重い体が宙を舞い、近くに転げ落ちる。それに巻き込まれたライフルも、共に転んでいるが。

「お、おい！！何なんだあいつ等は！？」

近くにいた通行人がドゥーツの姿を見るなり叫ぶ。

ドゥーツはジェントルーダーの機首を二体に向けると、今度は直接

体当たりを仕掛け、トンネルの上に吹き飛ばす。

ドゥーツはジェントルーダーから降り、高くジャンプしてそこに登る。

そして、ドゥーツは二体に対しお決まりのセリフを言い放つ。

『さァ、天罰タイムだ!!』

「う…ひぃぃぃぃっ!!」

「何を!ほざくな!!」

怯えるライフルとは対照的に、ボクシングはドゥーツに殴りかかってくる。

ドゥーツは軽く避け、蹴りを主体とした攻撃でボクシングを追い詰め、最後に強いキックを食らわし、ボクシングは吹き飛ぶ。

■　■　■

同じ頃　教会にて

「誓いのキスをして、クダサイ。」

神父がそう言うと、霧彦は冴子のベールを上げ、冴子の唇に自らの唇を重ね、同時に二人はドーパントになった。

鐘の音と参列者の拍手が響き…二体の禍々しきドーパントによる悪魔の婚礼は終わった。

園咲家の一同が教会の前で記念写真をの撮影の為に集まっていた。

霧彦と冴子と琉兵衛は嬉しそうに笑顔を浮かべているが、若菜だけは不機嫌そうな表情を浮かべていた。

「それでは参ります！」

カメラマンがシャッターを切り、撮影が終わった。

だが写っていたのは園咲家の一同ではなく、さまざまなドーパント達…異形の連中達だった……。

そして周りから、黒いスーツに顔はムカデと背骨を合わせた様になった怪人たちが現れ、クラッカーを鳴らしたり、拍手を送った…

■

■

■

―ＤＲＥＡＭ！ＰＯＩＳＯＮ！―

変身メロディと共にドゥーツはアッシュポイズンからドリームポイズンに変わり、ライフルの撃ち出すレーザービームを伸縮自在の右腕を操って弾き返す。

その間にも間合いを詰め、蹴りを主体にした戦術でライフルを追い詰め、とどめとばかりにに大きな蹴りを当てマネーを吹き飛ばす。

そして、ドゥーツはポイズンメモリを右スロットから引き抜き、代わりにスピリットメモリを取り出し、スイッチを押す。

―ＳＰＩＲＩＴ！―

電子音声が鳴り、スピリットメモリを右スロットに装填し、ベルトを戻すと再び電子音声が鳴る。

―ＤＲＥＡＭ！ＳＰＩＲＩＴ！―

ドリームの変身メロディが鳴り、ドゥーツの左半身が紫から銀色に変わり、ドリームポイズンからドリームスピリットとなる。

『ハイ、ハイ…ハイィィィ！！』

ドゥーツはそう言うと、背中のスピリットバンカーを構え、変幻自在の攻撃を仕掛ける。

巨大化したハンマーでの攻撃や、持ち手部分での鞭攻撃で二体は思うように態勢を整えらずダメージが蓄積していく。

だがはドゥーツは鞭攻撃を仕掛けながら間合いを詰め、二体に向かって通常棒術での攻撃に切り替えた。

その時、ボクシングが必死で偶然つかんだスピリットバンカーの先端を押さえていると、後ろのライフルから言葉が飛ぶ。

「オイ！そいつの弱点は…！！！」

「はっ！？（そうだ！こいつの家族の事を…！）クズな家族の心の傷でも舐め合ってろ！！このクソガキが！！」

『ッ！！マープル…！！」

一は思わずマープルの名を言う。

『家族？……家族…』

すると、マープルの脳内の破れた本に一とアカネの笑顔が浮かび上がったのち、ドーパントと一に向かって答える。

『それなら代わりがいます…色々心配も尽きないですけど♪』

『ふっ…そうですか……』

一は嬉しそうに言う。

『さぁ…メモリブレイクです。』

「ひっ…！！ひぃぃぃぃ！！！」

「あ…あぁぁ…！！」

一が（仮面の中で）ニヤリと悪役っぽく笑うとその雰囲気を感じ取ったのか、二体のドーパントは張って逃げようとする。

『逃がすか…！！』

そして一は、スピリットメモリをドライバーから抜き、スピリット

バンカーへと装填する。

―ＳＰＩＲＩＴ！Ｍａｘｉｍｕｍ Ｄｒｉｖｅ！！―

『スピリットスタンピング……はぁぁぁ！！！』

そう一が言うと、スピリットバンカーの先端が巨大化し、さらには分裂して無数に増える。

更に、その一つ一つが鞭の様な動きで二体のドーパントを捕える…！！！

「「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああ！！！！」」

そして、その断末魔とともに爆発が起き……そこに残ったのは、砕けた二本のメモリと、倒れる二人の男だけだった……

『…終わりましたねぇ…。』

そう言って、ドゥーツは変身を解除する……

■　■　■

事件のあった翌日。

「……さて、報告書でも書きますか…」

一は机の上のレポート用紙に向かい、羽ペンにインクをつけ報告書を書き始めていた。

一は報告書の文面を口にしながら作業を続ける。

「ライフアートの命は全て持ち主に帰した。ミリオン・ピクチャーズは警察の家宅捜査により実態が明るみになり崩壊した。ドーパントである田島美帆は、ピクチャーの能力をディーラーの二人に利用されていただけなので、罪は軽く、今はイラストレーターになるための勉強中…」

一は、呟き続ける。

「そして和泉家だが、これからも変わらぬ借金の山が待っている。けれども、家族全員でいられることに意味があると私は思う…。家族が揃えば、いつか何とかなる…っと。」

そこで一は羽ペンを置き、一服しようとコーヒーを淹れようとする。

『風都・ミステリー・ツアー!!今回のお題は、ラジオネーム、時代はちょんまげさんからのリクエストの［仮面ライダー］です!!』

一が作業を終え一服していると、マープルの聞いているラジオからの単語に反応した。

「えっ!?［仮面ライダー］!?」

『この投稿凄く多いです!!バイクを駆り怪物を倒す二色の超人!!……いや、若菜は信じてます♪』

「おおおー！若菜姫に微笑んでいただけたー！！仮面ライダーですってマープル！！私達、如何わしい都市伝説扱いされてますぞ！？」

マープルも満面の笑みで一に抱きつき、言う。

「二人で一人の仮面ライダー『ドゥーツ！』かぁ♪」

こうして、この二人は晴れて都市伝説の仲間入りを果たし、喜ぶのだった…

## Pに手を出すな／愚か者の最期（後書き）

今回は、１００００万字分データが吹き飛びましたが…

…な、何とか６０００字分はデータが残っていて、書きなおせた…

！！

## 少女A／パパは仮面ライダー（前書き）

感想、ドーパントアイデアなど、お待ちしております。

# 少女A／パパは仮面ライダー

■　■　■

風都　第三風力研究所。

今日この場で、市議会議員の川井知美が、マスコミや報道陣、地元の市民を集め、第二風都タワーの建設計画の説明会が執り行われていた。

「第二風都タワー、本日、その建設計画が議会で承認されました。この第二風都タワーが風都に供給するのは、環境に一切負担を掛けないクリーンなエネルギーです。鏡花？」

「はい♪」

知美が隣に座っていた娘の鏡花に声をかけ、その少女…鏡花は壇上に上がり、聴衆に一礼して言う。

「川井鏡花です。これが、わたしたちのタワーです。」

と、鏡花は近くに置いてある台に掛けられた幕を下ろす。

そこには、ＳＦ映画に出てきてもおかしくない、近代的なデザインの塔の完成イメージのイラストが描かれていた。

その絵を見ながら、鏡花は知美に言う。

「ママ、わたし早く本物が見たい♪」

知美は鏡花に笑顔で返しながら歩み寄り、如何にもな愛想笑いを浮かべ聴衆に言う。

「子供たちの未来のために、どうか市民の皆様のご支持、ご理解をお願いいたします！！」

そして、聴衆から一斉に拍手が響きわたる。

「…面倒くさいですね…。」

「そう言うな。こういう政治家も必要なんだよ…。」

と、その中で川井知美の護衛についていた二人の刑事…真倉と、刃野がため息をついていた。

すると、近くから一が現れ、独り言を漏らす。

「騒々しい……。わざと子連れで政策をアピールですか……」

「あぁ…全く……って、左乃宮！！何でお前が居るんだよ！？」

マッキーは一に気づき、驚いた様に問う。

一と後ろにいたアカネは入場証を見せながらマッキーの問いに答える。

「川井議員からボディガードを依頼されたんや。」

すると、刃野は一に問う。

「え?一の所にも議員が来たのか?」

「ん?ええ。そうなんですよ。」

一は素っ気なく答える。

だがマッキーは相変わらず一が気に入らないようで不満げに言う。

「な、何でお前なんかに!?俺ら警察がいれば十分じゃねぇか!?」

だが一はマッキーの問いに一息つきながら答える。

「いや…それは私も心から同意するのですがね…「お客様は神様や。」……ということです。」

アカネに遮られ、一はバツの悪い表情をする。

その様子を見たマッキーは、鼻で笑いながら一に言う。

「ふっ、天下の左乃宮一様でも女の前じゃ形無しかぁ?」

「……言ってくれんじゃねェか…ゴラ。」

マッキーの言葉を聞き、一とマッキーは互いに向き直り、どす黒いオーラを放ちながら睨み合い始める。

…と、その時突然、銃弾が演壇の看板に当たり、それを皮切りに幾つもの銃弾が雨のように会場を襲う。

―うわあああぁぁぁぁぁっ！！―

―ぎゃあああああ！！―

―ひいいいいいいっ！！―

一人が叫ぶと、その悲鳴を皮切りに会場は一気にパニックになる。

「ッ…！！早く、こちらへ！」

「え…ええ！！」

一は慌てては鏡花と知美を近くの植え込みに避難させる…が、対処が遅れたマッキーは流れ弾に当たり相になる…が、それを刃野警部が庇って左肩を負傷してしまう。

「……ッ！！！」

刃野は思わず激痛に声を上げそうになるが、痛みに耐えながら椅子の下に潜り込む。

植え込みに隠れた一達だが、突然の襲撃に事態を把握出来ずにいた。

マッキーは、刃野警部が庇ってくれたおかげで何とか植え込みに逃げ込めたが…その肩は震えている。

「じ…刃野さんが…！！」

「落ち着きなさい。刃さんがそう簡単にくたばるはずがありません。」

一はそう答えながら、何やら手を動かし、アカネに向かって両手で《D》のマークのサインを見せ、アカネはそれに対しOKサインを見せる。

一は銃弾の雨の一点の隙を探す。

しばらくして、一瞬銃弾の雨の勢いが弱まり、祐規は合図を出す。

「よし!!ダッシュ!!」

一はがそう言うと、一気に走り出す。

「さ、左乃宮さん!?うわぁ!!」

知美がそう言いかけた所で近くに流れ弾が当たり、知美はたじろぐ。

「お、おい!!一ー!!お前だけ逃げる気かよ!?うわぁッ!!」

椅子の下に隠れた刃野警部が走り去っていく一の姿を見るなり叫ぶが、顔前を弾丸が掠め、慌てて頭を引っ込める。

一は近くの物陰に隠れ、ドライバーを取り出し、それをを腹部に装着する。

するとドライバーがベルトの形になり、事務所のマープルの腹部にも同時にベルトが具現化する。

マープルがアッシュメモリをドライバーの右スロットに差し込み、一のドライバーの右スロットに転送され、一はポイズンメモリを左スロットに装填し、ドライバーを操作する。

―ＡＳＨ！ＰＯＩＳＯＮ！―

電子音声がドライバーから発せられ、一はドゥーツへと変身し…事務所のマープルは地に倒れ込む。

『…さ、助けに行きますよッ！』

『はーい♪』

同じ頃、知美達の隠れている植え込みにも流れ弾が当たるようになり、ここも安全ではなくなりはじめていた。

アカネは恐怖に耐えながらもしっかりと鏡花を抱きしめ、銃弾から守ろうとする。

鏡花はもっていたカバンに手を入れ、中に入っていた不思議な人形を握り締め、祈るように言う。

「怖いよ……パパぁ……早く助けに来て……」

近くの風車に銃弾が当たり砕け散った時、ドゥーツが知美達の目の前に躍り出、流れ弾から身を挺し守った。

その姿を見るなり、鏡花は言う。

「パパ…？」

『『……えっ？！』』

突然の言葉にドゥーツは思わず声を上げてしまうが、鏡花はそんなドゥーツをよそに更に衝撃的な言葉を言う。

「来てくれたのね！！パパ！！」

『……。』

『……。』

「……。」

一瞬の沈黙。

そしてドゥーツとアカネは同時に驚く。

『『えええええ！？』』

「えっ！？パパぁ！？」

ドゥーツ達は当然混乱し始めるが…今はそんな事に驚いている場合ではない。

とりあえず知美達を近くの物陰に避難するよう促し、ドゥーツは銃弾の雨の中に飛び込んでいく。

すると、一人のカメラマンがドゥーツの姿に気付き、思わず口にす

る。

「か…仮面ライダー！？」

カメラマンはカメラをドゥーツに向けカメラを回すが…しばらく撮った所でレンズに流れ弾が当たり、後は砂嵐しか写らなくなった。

ドゥーツはとりあえず近くの物陰に隠れ、様子を伺う。

『撃ってくる場所が全く掴めない……間違いなくドーパントの仕業ですね…』

マープルの意志がドゥーツの右目を明滅させながら一に言う。

『ならば…こっちも反撃でしょう！！』

ドゥーツはそこで、藍色のバスターメモリを出そうとする…が、マープルに止められる。

『だ、ダメです！！』

『え、何でですか！？』

一の意志がドゥーツの左目を明滅させながらマープルに問う。

『正確な敵の位置を把握できないと！バスターだと、威力が大き過ぎて周りに被害が！』

マープルが制するのも無理はなかった。

バスターの威力をもってすれば、そこらへんのビル程度ならば数発で壊せる威力を持つ。

力押しの戦法が得意なバスターは精密射撃には全く向いていないメモリなのだ。

『ちっ…今は防御に専念ということですか…！！』

一は、そう言うとベルトからスピリットメモリを取り出し、ボタンを押す。

―ＳＰＩＲＩＴ！―

メモリから電子音声が発せられ、ドゥーツはポイズンメモリを抜き、それをドライバーの右スロットに装填し、ドライバーを操作する。

―ＡＳＨ！ＳＰＩＲＩＴ！―

それぞれのドライバーから電子音声が発せられ、変身メロディと共にドゥーツの右半身の色が変わる。

ドゥーツは左半身が黒から銀色に変わりアッシュスピリットとなる。

ドゥーツはスピリットバンカーを背中から取り、灰の風を孕んだ棒術で弾丸の雨を弾き返していく。

しばらく弾いた所で弾丸の雨が突然止み、辺りには静寂が訪れる。

ドゥーツはなおも警戒し、得物を下ろさずに周囲を見回す。

『止まった……？』

『…一応、調べた方がいいですよ。弾道からして、あのビルの屋上からです。』

『了解です。』

一がマープルにそう言うと、ドゥーツはビルへと走り去っていく。

「パパ～！！！待って！！鏡花はここだよ！？」

鏡花は走り去っていくドゥーツを呼び止めようとするが、ドゥーツは気にもせず走り去っていく。

ドゥーツは辺りを走りながら探すが、何一つ痕跡らしき物は見当たらない。

そして、マープルの行っていたビルの屋上を探していたが、結局何も見つからない。

ビルの屋上から見下ろした先には小さな池があったが、そこにも何も見当たらなかった。

『ダメだ……痕跡すら…』

一が呟くと、マープルが右目を明滅させながら一に言う。

『…あれ？いーちゃん、バンカーが濡れてますよ？』

『ん？…あ、本当ですね…でも、なんででしょう？』

銃弾を弾いていただけだが、どうしてかスピリットバンカーの先端からは、水がぽたぽたと落ちていた…

『…銃弾も見当たりませんし…一度、もどります。』

『分かりました。』

それを最後に、ドゥーツは変身を解除する…

―来てくれたのね！！パパ！！―

だが一の頭の中は鏡花のあの言葉が頭に引っかかっていた。

■

■

■

―その依頼は昨日、突風のように舞い込んだ……。市会議員の川井知美が自分と娘を護衛してほしいと頼んできたのだ……―

一日前　鞍坂探偵事務所

知美がアカネと一に何枚かの写真を見せる。

そこには、弾痕で《ＫＩＬＬ》と書かれていた。

一は写真を手に取り、アカネは横から覗き見る。

「一くん……やっぱりドーパントの仕業なんか？」

アカネは小声で一に問う。

「えぇ……」

一も小声でアカネの問いに答える。

「あなた方は専門家だと噂で聞きました。報酬は全て前金で振り込ませて頂きます。」

知美の言葉にアカネの表情が明るくなるが、すぐに仕事モードに戻り知美に聞く。

「成る程……知美さん、犯人に誰か心当たりは?」

知美は少し脚を組み直し、アカネの問いに答える。

「いいえ。政治家なんて人に恨まれる事の多い仕事ですから、いちいち気にしてられません。」

知美はそう言うが、一は静かに反論する。

「これでは、貴女の御令嬢まで危険です……一緒に連れて歩くのはお止めになった方が「この街の人達は政治に無関心すぎるんですッ!!…これくらいのパフォーマンスでもしないと、政策は実現できません!!」……」

その反論は知美に遮られるが、一は尚も問う。

「貴女は自分の娘が心配ではないのですか?」

だがその問いに答えたのは知美ではなく鏡花だった。

「私なら大丈夫だよ？おじさん…」

おじさんと聞くなり、一は少し声を裏返しながら鏡花に問う。

「お、おじさん！？私はまだ２１なんですが……」

だが鏡花は一の問いには答えず更に続ける。

「わたし、信じてるから……」

「え？信じてる？…何をですか？」

一は鏡花に歩み寄り訪ねるが、鏡花は笑顔を浮かべ答える。

「なーーいしょ♪」

―…私が依頼を受けたのは……彼女の消え入りそうな笑顔に…何か引っかかり感じたからからかもしれない……―

一は内心でそう考えながら歩いていると…突然アカネが現れ、おもむろにハリセンで頭を叩かれる。

「あいたっ！？」

一は同時に声を上げる。

「有り得へん！！」

アカネは一に叫ぶ様に言う。

「何がですか！？」

それを、一も叫ぶように聞き返す。

「……アンタに隠し子がおったなんてなぁ……」

アカネはまるで汚いものを見るような目で一に言う。

「違います！！！もしいるとしても、年齢が合わないでしょうが！！』

「…相手は、川井議員やないやろし…やっぱり、マープルちゃんやな！？」

「そう言うのはあと数年たってからの話だ！！」

若干素を出して一が叫ぶが…そこで、やっと冷静になったのか、一はため息をして話し始める。

「いや…どれも違います……あのお嬢ちゃんが勝手に呼んでるだけでしょう？」

「ほんとかぁ～？」

アカネはなぜかニヤニヤしながら訝しむ。

「本当ですッ！！」

「ひゃあ！！わ、分かった…ごめんって。」

アカネは引きつった笑顔で一に言う。

「あ、そういやあの親子は？」

一はアカネに訪ねる。

「ん？あぁ…マッキーたちが保護したわ。」

「ふむ…では、マープルに一応連絡もしておいて下さいね。」

「了解…って、え？」

「頼みましたよぉー！」

一はスタコラサッサと、走り去って行った…

「あ、こらぁ！！所長になんて態度やねん、おーーーい！！！」

後には、アカネの叫びだけが空しく響いていた…

■　■　■

風都　風都警察署　小会議室

一とマッキー、刃野は幸恵に今回の件についての報告のために呼び

出された。

知美は一に歩み寄るなり言う。

「左乃宮さん…あなたには落胆しました。」

「えっ！？」

突然の言葉に一は思わず声をあげてしまう。

「え…あの…いや…コレには色々と訳がありまして……」

一は歯切れ悪くしながら何とか答える。

すると、知美の隣にいた、ぼさぼさの髪と、火をつけない煙草を加えた男…忍野メメ警視長が苦笑気味に一に向かって言う。

「あはは……一くんがこんな失敗するなんて珍しいね？なにかいい事でもあったのかい？」

一は、その言葉を聞いて高畑に向かって口を尖らせながら言う。

「…忍野さんこそ、仮面ライダー達が来なかったらどうなってたことか……」

一の言葉に高畑は歯切れ悪くしながら答える。

「あ…いやぁ…ぼくはその…色々忙しい訳だし、やることだってあるから……えーとホラ、これからだって刃野警部のお葬式とかもあるし……」

「葬式ぃ!?脚撃たれただけだよね!?何で死んでんの!?」

刃野警部が高畑に言うが、メメは苦し紛れに答える。

「いやぁ…見事な殉職だったよ…」

高畑がこなたとかがみに問い詰められる中、幸恵がマッキーと刃野、そして高畑に言う。

「明日は土地売買の値段交渉です。決して今日のような事のないように。貴方方の名誉のためにもです……」

刃野は引きつった表情を抑えながら知美に言う。

「あ…分かりました…。早速、警護の人員を増やすように上に掛け合ってみましょう。」

刃野が知美にそう言ったのちに、隣にいた鏡花が口を開き、スケッチブックに描かれた絵を見せながら言う。

「だいじょうぶ。パパがまた必ず助けに来てくれるんだもん。ほら♪」

スケッチブックにはドゥーツの絵が描かれており、横には丸っこい字で『ぱぱ』と書かれていた。

刃野と一は鏡花に歩み寄り、刃野はその絵を見ながら鏡花に訪ねる。

「?パパ…って、その仮面ライダー達がかい?」

「うん♪」

鏡花は刃野の問いに屈託のない笑顔で答えた。

■　■　■

同じ頃　鞍坂探偵事務所

一においていかれ、帰ってきたアカネは一人不機嫌そうな表情で思い切り玄関のドアを開け、軽く舌打ちをし、マープルのいる地下ガレージの扉を開ける。

「マープルちゃんおるんか！？」

アカネは、キレ気味にそう聞くが…ガレージにはその姿は見えない。

「…あれ？マープルちゃーーん？」

アカネはガレージを尚も探すが、その姿は見えない。諦めてガレージから出るが…近くの一のベッドがあるところから、なにか音がする。

「…？」

不思議に思ってそこを覗くと……

「うふふふ～～～♪」

…そこには、一の布団にくるまり、ゴロゴロと幸せそうに寝転がっている、マープルがいた…

「……。」

「あ、アカネさんお帰りなさぁい♪」

「な…何やってんねん!!」

「ん～～…幸せ堪能中？」

アカネのツッコミも気にせず、マープルは、ぐにぐにと一の布団に顔をうずめながら、幸せそうにそう言う。

「だ・か・ら!!それをやめんかーいっ!!」

だがマープルはそんなアカネをよそに布団にくるまりつつも真剣な顔に戻り、ポツリと呟く。

「銃弾が無い…敵は…なにで撃ってきたんでしょう？」

■
■
■

風都某所　あるマンションの一室にある、川井知美のオフィス兼住居。

このマンションの一室で、知美は部下とＳＰを集め、明日の予定に

付いて話し合っていた。

もちろん、一や刃野警部も一緒である。

「やっとここまでこぎつけた……後はこの土地さえ手に入れば……」

「……。」

知美がそう言いかけたとたん、銃弾が窓ガラスを貫通し、それを皮切りに更に銃弾がどこから何発も撃ち出されてくる。

その流れ弾が照明に当たり、一気に辺りが暗くなる。

「こちらへ！！」

「え…ええ！」

一は知美と周りにいたＳＰ、それに刃野やマッキーを連れ、廊下へ避難する。

「ここで待っていて下さい！ＳＰさん達は、この人の警護を頼みます！」

「「はい！」」

一はパピヨンショットとギジメモリを取り出し、それを装填する。

―ＰＡＰＩＬＬＯＮ―

電子音声がパピヨンショットから発せられ、ライブモードに変形し

一の手元から外に向かって飛び立っていく。

「怪我はありませんか？川井議員…」

「ええ、大丈夫です…」

SPがきくと、知美はそう答える。怪我も無く、無事なようだ。

「……今度は多少役に立ったでしょう？」

一は一息吸い、知美に言う。

「…こ、これくらい当然です…」

知美は一に冷たく答える。

そんな中、刃野がマッキーに言う。

「マッキー、議員を頼む。俺と一が部屋を調べてくる。」

「…探偵、刃さんの邪魔すんなよ!?…川井議員、こちらです。」

マッキーは、一にそういってから、川井議員を安全な場所に連れて行く。

刃野はホルスターから拳銃を取り出し、安全装置を外しスライドを引っ張り、慣れた手つきで弾倉を装填する。

「…一度、俺が中を調べる。なにか会ったらすぐ来い。いいな？」

「分かりました。」

そして中を調べるために刃野が部屋の中に入り…しばしたった後、一を呼ぶ。

「クリア！！一、もう大丈夫だ。」

刃野の声を聞き、一は部屋に入る。

そこは、先ほどまで綺麗に片付いていたが、

「どうでした？何かありました？」

一は部屋に入るなり刃野に訊ねる。

「全然ダメ……何も見つからないぜ。」

刃野も溜め息をつきながら一の問いに答える。

「そうですか……。取りあえず私はバルコニーを調べます。」

「……ああ。…しっかし、びしょ濡れじゃねぇか…なんだこりゃ。」

刃野がそう答えると、一はバルコニーへと足を運ぶ。

バルコニーの手すりにもたれかりながら、一は以前の襲撃と今回の襲撃について思案を巡らせていた。

（それにしてもこの執拗さ……ただごとではない……なぜここまで彼女を……？）

一は内心、それを考えていた。

■　■　■

風都郊外　園咲邸　大食堂。

そこでは、琉兵衛がいらつきながらワインを注いでいる。

琉兵衛の苛立ちの原因は、テーブルに置かれた雑誌の記事の一面だった。

そこには、川井議員とともに第二風都タワー計画についてのイラストと、インタビュー記事が書かれていた。

「いかんなあ、これは……。…こんな宇宙基地みたいな物を建てられたら、街の風情も何もあったものでは無い！！」

琉兵衛は苛つきながら言う。

「お父様ったら……昨日からその話ばかりですね……」

若菜が拗ねた様子で問う。

琉兵衛は若菜の言葉に笑顔を浮かべながら答える。

「はっはっはっは……まァそう言うなよ若菜。…私はね、我が街…風都の未来を憂いているんだ……。…本当にバカな政治家が居たも

んだ…！！何が「子供達の未来の為に」だ……はっはっは、なぁ！？…お？」

すると、その声に驚いたのかミックが琉兵衛の抱いていた手から逃げ出す。

「ほらぁ…ミックを気に入らないと言ってるじゃないか……。はっはっは……。何よりもこのタワー！！建てる場所が良くない！！」

琉兵衛は再び苛つきながら言う。

若菜はテーブルの下に潜り込み、逃げ出したミックを抱き上げながら言う。

「冴子お姉様の管轄でしょ？お姉様、最近部下の方達とうまくいっていないみたいなの♪」

「全く……分かっているのかね、冴子は…。風都の未来がかかっているんだぞ！？」

琉兵衛は終始苛立ちを隠さずに言う。

すると、琉兵衛の下からミックを抱き上げた若菜が現れ、琉兵衛は若菜を抱き寄せ言う。

「はっはっは、いいや……我々の未来が、だ…。」

と、琉兵衛は若菜に抱かれたミックを撫でながら静かに笑いながらそう言った。

■　■　■

風都某所　とあるマンションの玄関。

一は早々に準備を済ませ、外の空気を吸いに出ていた。

すると、一のシケードフォンの着信音が鳴り、通話に応じる。

「もしもし…あぁ、忍野さんですか。どうしました？」

「ああ。最初の襲撃の際に狙撃現場と思われる周りのビルの屋上を調べてた際にいくつか奇妙な点が見つかったので連絡をね。」

「奇妙な点？」

「ああ。まず一つは、あのあたりのビルの屋上からは硝煙反応が検出されなかったんだ。」

「…硝煙反応が出なかった…？」

「ああ。通常、銃火器は引き金を引いて撃鉄に火花を放ち、薬夾に込められた火薬を爆発させてそこから発せられたガスを推進力に弾丸が射出される仕組みです。ここまでは一くんでも分かるね？」

「えぇ…前に聞きました。」

「だけど、その周りのビルの屋上からは硝煙反応がなかった…これは普通では有り得ない事だよ。銃弾が無いのがネックだけど、調べ

たビル以外からの位置だと、どうしても銃声はするからねぇ……」

「ふむ…。すいませんが、昔かじっただけなのですが…超電磁砲（レールガン）という物があるのです。それと同じ原理ってことは考えられないですか？」

「…ああ、一くんが言っているのは電磁加速砲のことかい？」

「電磁加速砲？」

「ん？…あいや、君の言ってる物であってるね。ぼくは昔の人だから…」

「……あ、もう一つの妙な点とは？」

「そうそう。実は、調べたビルの中の一つに合った屋上の貯水タンクが、ものの見事に空になってたんだよ。」

「…空…ですか。」

「うん。多分狙撃の時に傷つけたんだと思うけど…そしたら、跳弾って言う事になってもっと難しいからね。何なんだろうって事でマッキーくんも悩んでるよ。」

「マッキーには到底考えつかないと思いますがね。わざわざ連絡どうも。」

「いやいや。気にしないでくれ。それじゃぁ。」

メメが一方的に電話を切ると、一は次にマープルに電話をかける。

しばらくのコール音の後、マープルが通話に応じた。

「いーちゃん？どうかしました？」

「いえ…あの、パピヨンショットの送った画像は？」

「はい、見ましたが…とっても興味深いね。狙撃中に全周囲を撮影したのに、上空にも周りの建物にも敵影らしきものは何一つ写っていませんでした。」

「…まさに姿無き狙撃手…ですね。」

「…あ、それと…周りのビルの貯水タンクが空になってる事件がありましたよ。断水になってるそうです。」

「ふむ？…そういえばメメさんも同じ事を…」

「後は狙撃方法と銃弾さえ分かればメモリの生物を特定出来る…。必ず突き止めて見せますからね！」

「マープル…信用してますよ？」

「…はぁい♪……それじゃあ何か分かり次第また連絡するから、頑張ってね、いーちゃん♪」

マープルはそれだけ言うと通話を切り、後は回線の切れた音だけが聞こえるばかりだった。

■　■　■

そのころ　鞍坂探偵事務所　地下ガレージ。

「だ・か・ら！！ああいう事したらあかんのやで！？」

マープルは、先ほどやっていた事をアカネに怒られていた。

「えぇ～…。」

「エーも、ビーも無いわ！！…じゃ、これ読んで勉強しな！」

そう言うと、アカネはあるコミックスを渡す。

「これは？」

「それはな、結構な恋愛のバイブル何やで？」

「へぇ……」

マープルはそれに興味を持ち…読み始める。

そのタイトルは……「いちご１０○％」。

「……検索…「いちごパンツ」「眼鏡」「ギャップ萌え」…。」

…おかしな方向に思考が寄っているのは、気のせいではないはずだ。

■　■　■

川井議員の車中にて。

一は、今回の土地売買の値段交渉の為、知美のＳＰに混じって同乗していた。

「昨日の夜は、ママを助けてくれたんだって？」

鏡花は、一に言う。

「む？えぇ…まぁそうですよ。」

「くすっ。ありがとう。おじさん。」

「いや…だからもうおじさんは勘弁を…」

祐規は頭を抱えながら呟く。

鏡花の描いている絵を見ながら、一は鏡花に訊ねる。

そこには、ドゥーツとともに、鏡花自身と母親の知美…家族そろって描かれた絵だった。

「仮面ライダー……そんなに好きですか？」

「うん♪」

一の問いに鏡花は屈託のない笑顔を見せ答える。

「…仮面ライダーは本当に君のパパなのですか？」

その笑顔を見ながら、一は更に聞く。

「？？…何でそんな事聞くの？」

鏡花は不思議そうな表情で一に問う。

「え！？あぁいや……その……いやね、実は私は仮面ライダー達と知り合いなんですよ！」

言葉に詰まったので、ある意味正しい事を言う一だったが、逆に鏡花は明るい笑顔を見せ、問う。

「パパと知り合いなの！？」

「え！？」

一は思わず声を上げてしまい、しどろもどろに答える。

「え…あ、いや……そう言うことじゃなくて…」

鏡花は鞄から小さな人形を取り出し、一に言う。

「ねぇ、これ見て。」

「それはなんですか？」

一は質問するが、運転していたＳＰにもうじき到着すると言われた

ので、それ以上は聞けなかった。

「おじさん、後でパパのこと教えてね♪」

ほどなくして、一行を乗せた車は目的地である河原に着いた…。

■　■　■

同時刻　風都　ディガル・コーポレーション　最上階　社長室。

ここは園咲家の冴子が所有するオフィスビルで、このビル一帯が園咲家の所有する会社が入っているのだ。

「すいません！！早速別のプランを…失礼します！！」

三人の社員のリーダー格の社員が冴子に一礼し言うと、足早に社長室を去っていく。

冴子は机に歩み寄り、傍らに執事のように控えている霧彦が内線電話を起動し、受話器を冴子に渡す。

「私よ。第六開発チームを全員解散して。代わりに第七開発チームを昇格、プランを継続。いい？」

冴子は抑揚の無い声で電話越しの部下にそう言うと苛ついた様子で受話器を置く。

「電撃人事だねぇ♪」

霧彦は静かに笑みを浮かべながら冴子に言う。

「明日は我が身じゃなくて？うふふふふふ……♪」

すると、どこからか若菜の声が聞こえ、霧彦と冴子は辺りを見回す。

すると、天井にルークが逆さに立っており、冴子は苛ついた様子でルークに歩み寄り問う。

「若菜……ふざけてるのかしら？」

ルークは天井から飛び降り、冴子に言う。

「よっ、と……。忠告しに来ましたの。お父様ったらすっごく不機げーん♪」

霧彦が冴子に歩み寄り、肩を手に置きながら冴子に問う。

「あのタワーの件だろう？冴子のイライラの元は……私に任せてくれ。」

霧彦はそう冴子に告げると、足早に社長室を後にした。

■　■　■

風都某所　河川敷。

二人の男がガラクタに座りながらラジコンを操り、まるで子供のようにはしゃいでいる。

「あははは！！いや～今日楽しいなぁオイ！！」

「気ぃつけろよ！今日これ難しいぞ！！」

一は、氷の様に冷たい目で二人を見つめている。

紳士を常とする一としては、こういう子供っぽい大人は嫌悪の対象にしかならないのだ。

そんな状況にしびれを切らしたのか、知美はラジコンで遊んでいるサングラスを掛けた男と野球帽をかぶった男――白浜寛治（しらはまかんじ）と元人時刻（がんとじこく）に歩み寄り言う。

「白浜さん！！元人さんッ！！真面目に聞いてください！！」

だが白浜と願とはふざけながら知美に言う。

「えぇ？えぇ？あのね川井さん、何度来ても答えは同じなんだよぉ～！！」

「そうそう、さっさと帰んな！！」

二人はふざけながら知美にそう言うが、さすがに知美もそれだけでは引かない。いや、引けない。

「交通の便、風の流れ、面積、全てにおいてここが第二風都タワーの候補地に最適なんです！！」

「へぇ…そうなんですか。でもね、こっちだってここは必要だから

な～！」

「そうそう、下らないタワーなんかにここを使うよりラジコン場にしたほうがここだって有意義に使えるってもんだろ！？なぁ元人！？」

「あっはははは！！白浜の言うとおりだよ！！分かったなら早く帰んな！！」

元人がそういった瞬間、白浜のラジコンが元人のラジコンに当たり、二人は慌て始め各々のラジコンを拾い上げる。

「バカ！！お前何やってんだよ！！」

二人がラジコンを拾い上げ心配そうに眺めていると…元人と白浜のもとに鏡花が歩み寄り、二人に向かって頭を下げながら言う。

「お願いします！ママの言うことを聞いてあげてください！」

だが元人は少し毒づくと、鏡花に対し小馬鹿にした口調で返す。

「ちっ…ったく……君はママによく仕込まれてるねぇ～？子供はさぁ、仕事なんかしないで子供らしく遊んでろよ。」

元人が鏡花にそう言うと、いい加減我慢の限界が来た一が歩み寄り挑発的な口調で返す。

「…テメェらこそ、良い年してろくな仕事も就かないでこんな糞餓鬼みたいな事やってて恥ずかしくねぇの？馬鹿なの？死ぬの？」

その暴言で、元人はつかみかかろうとするが…それを白浜が抑え、言う。

「っつーかよぉ…大体感心しねえなぁ…こんな小さなガキなんか利用して仕事してさ。」

と、白浜は知美に向き直りなおり言った。

知美は声を荒げながら白浜の言葉に返す。

「政策実現のために、親子で力を合わせているだけですッ！！」

だが、その言葉にしらはまが嘲るように答える。

「ハッ！そんな見え透いた綺麗事ばっか言ってるから、周りからうざがられてるんじゃないのぉ？だからアンタの旦那だってあんな事にな「白浜さんッ！！」！？」

白浜がそう言ったとたん、地雷を踏んだのか知美の表情が恐ろしいものに変わり、二人は一瞬ビクッとたじろぐ。

「…ふぅん。」

一は知美のあの表情について思案を巡らせていたが、一人の若い男が現れ、一は途中で考えるのを止めた。

「……客が来たから帰ってくんねえかぁ？」

「いいえ、向こうの水辺で待たせていただきます……」

白浜は現れた若い男を見るなり知美達に帰れと言う…が、当然知美は待つと言い、一とＳＰを引き連れ、その場から去ってった。

去り際に一は霧彦とすれ違った。

霧彦と一はお互い特に気にも留めなかったが……まさかこの後何度も敵として戦うことになろうとは、互いに思いもしなかった。

■　■　■

霧彦は白浜と元人に歩み寄り、一礼しながら言う。

「園咲霧彦です。以後お見知り置きを…」

「あぁ…アンタか。こっちだ」

白浜と元人は手下を引き連れ、ガレージらしき扉へ歩み寄り、元人は扉を開けるなり霧彦に問う。

「ど～ぞ～……。アンタかぃ？セールスマンから幹部になった運のいいお坊ちゃんはよぉ。」

霧彦は軽く笑いながら白浜と元人に言う。

「ふっ…。妻があなた方の不手際に非常に迷惑していましてねぇ。」

「けっ、よく言うな。幹部だからって偉そうに威張りやがってよ…」

白浜の言葉に霧彦は冷たい表情になり、二人に言う。

「いつまで放っておくつもりですか？…あの女を始末するだけでしょう…何なら私が代わりましょうか？」

「ッ！？人の出世の邪魔すんじゃねえよ！」

元人は慌てた様に憤りながら言い、白浜と手下の一人にサインを出し、白浜と手下はそれに答え、どこかへと歩き去っていった。

「テメエの助けなんか要らねえよ！！俺一人で十分だ！」

元人は終始不機嫌そうな表情で霧彦にそう言ったが、霧彦は何も言わずただ静かな笑みを浮かべていた。

■

■

■

一は近くの河原で座り込みながらシケードフォンを取り出し、マープルに通話をかけた。

「白浜寛治、元人時刻…その二人が怪しいんですか？」

「ええ。いい大人で遊んでいるのは、たいてい犯罪をするバカ野郎です。それに、あの二人には自分の遊び場を取られうないという動機もあります。」

「論理性のかけらもないです……あ、それより、さっき検索の中で第二風都タワー計画に関する資料を得たところですよ。」

マープルがそう言ったのち、ホワイトボードに何かを書いている音が電話越しから聞こえ、しばらくたって再び通話を始める。

「川井知美の夫、川井功希は昨年、殺されてるみたいです。」

「なんですと…？」

「そもそも第二風都タワー計画を考案したのが川井功希でした。功希は娘の鏡花を連れて第二風都タワー計画の説明会を行ったんですが…その参加者の中にそれに反対する人がいたみたいで、宗一は説明会の最中に犯人に銃で心臓を撃たれて即死しました。犯人はまだ見つかっていない、と。」

「ふむ……。ありがとうございます、マープル。」

「…気にしないで。いーちゃんも気をつけてね♪」

マープルはそれだけ一に言うと通話を切り、一はシケードフォンをポケットにしまった。

一は、事情を知っている刃野警部を連れ、川井議員に訊ねる。

「川井議員…実は、死んだ旦那さんについてお話を聞きたいのですが……」

刃野が言いずらそうに知美に言う。

知美はその言葉を聞くなり表情が暗くなる。

無理もないだろう。過去の嫌な思い出を喜んで話すような者はいるわけがない。

「辛いとは思いますが……どうか話して貰えませんか？」

刃野は知美に一礼しながら伏し目がちに言う。

知美はしばらく考え込み、しばしの逡巡の後、口を開く。

「……分かりました。全てお話致します……」

そして、幸恵は続ける。

「夫は昨年、説明会の最中に凶弾に倒れました…。その犯人は未だに捕まっていません……。この第二風都タワー計画は夫の夢……。それを引き継いで完成させるのが私の夢。そのために私は議員になったんです……」

「……だから嘘を吹き込んだのですか……年端も行かない娘に、自分の仕事を手伝っていれば会えると…」

「…そうです。」

一の問いに知美は伏し目がちに答える。

「私は良くないと思いますよ。そんな嘘は…」

刃野は少し詰問するように知美に対し少し悲しげな表情で言う。

「例え嘘でも…それがなければ生きていけない子もいます……」

だが、知美は悲しげな表情でそう言った後、河原で石を投げて遊んでいる鏡花を見つめた。

■　■　■

同じ頃　鞍坂探偵事務所

マープルは弾丸の生物を特定するために宙の本棚にアクセスしていた。

「《水》と《銃弾》…」

マープルが脳内でそう言うと、該当しない本と本棚が飛ぶように減っていき、十数冊程の本が残る。

「ここまではほぼ間違いないはず。…だけど最後のキーワードがどうしても見つからない……。敵はどうやって姿を消して、どこに隠れているんでしょう…」

マープルは困った表情で首を傾げながら一人呟く。

アカネはパピヨンショットの撮影した写真を見ながらマープルに対し言う。

「う〜ん……そりゃ写真に写ってないんやから、そこ以外のところにおるんやないの？」

アカネがそう言った瞬間、マープルに天啓が下る。

「アカネちゃん…貴女天才です！」

「えぇ！？そ、それほどでも～♪」

アカネは顔を喜々としながらマープルに言う。

「写真に写らないのでなく、写していない場所から撃っているって考えれば良かったんですね。上空と周囲…つまり、空と陸上の生物を全て検索対象から外せば、自ずと答えは見えてくる…」

マープルがそう言うと、残っていた本が横一列に並び、一冊の黒い本を残して全て飛んでいく。

マープルがその本を手に取った瞬間、表紙に［ＡＲＣＨＥＲＦＩＳＨ（アーチャーフィッシュ）］の文字が浮かび上がる。

「《アーチャーフィッシュ》ですか…」

マープルはそう呟くと、本棚へのアクセスを解除する。

「分かりました。メモリのタイプは《アーチャーフィッシュ》です。」

「あーちゃーふぃっしゅ？……確か……テッポウウオの事やったか？」

アカネは口から水を出して虫を落とす魚を脳内で想像しながらマープルに問う。

「ええ…。アーチャーフィッシュ・ドーパントは、近くの貯水タンクの水を体から誘導弾のように射出していたみたいです。」

「…なぁ、それ…川井議員が水辺におったら…やばいんとちゃう？！」

「！！確かに…それだと、無限に撃てる事に…！！」

マープルは慌てた表情を見せ、シケードフォンを取り出し一に通話を始める。

「もしもし…マープル？どうかしましたか？」

「いーちゃん？敵は水中に隠れていますっ！」

「えぇ！？水中！？」

「ええ、二度の襲撃のとき、犯人はそこにいたの。水際…！川井知美を水際に近付かせないで！！」

「貴女の頭脳は２００点満点なんですが…なぜか毎回毎回妙にタイミング悪いんですよねぇ！！」

一は吐き捨てるようにマープルにそう言うと慌てて通話を切り、シケードフォンをしまう。

そして、一はダブルドライバーを取り出し、そのままポイズンメモリを取り出しスイッチを押す。

―ＰＯＩＳＯＮ！―

同時にマープルの腹部にドライバーが現れ、事務所のマープルはアッシュメモリを取り出し、スイッチを押す。

―ＡＳＨ！―

マープルはドライバーの右スロットにメモリを装填し、そのメモリは灰色の小さな光とともに一のドライバーの右スロットに転送される。

「「変身！！」」

一は走りながら叫び、ポイズンメモリを左スロットに装填する。

―ＡＳＨ！ＰＯＩＳＯＮ！―

ドライバーから電子音声が発せられ、灰色と紫の光の破片が一の体を覆い、ドゥーツへと変身した。

「おおっと！！」

事務所では、倒れるマープルを上手くアカネがキャッチし、なぜかガッツポーズをとっていた…。

■　■　■

知美が水際に来たとたん、水中から弾丸の雨が知美と鏡花に襲い掛

かる。

ＳＰ達は知美と鏡花を囲み、弾丸から身を挺して守るが、弾丸にやられ、ＳＰが一人また一人とやられていく中、知美と鏡花の前に灰色の紫の影――ドゥーツが躍り出、弾丸を弾き返す。

『早くここから逃げてください！！』

「あ……はいっ！」

ドゥーツは知美達に早く逃げるよう促し、知美達は高台の物陰に隠れる。

弾丸が飛鳥と幸恵に迫る。

『ッ！？間に合わない！！』

『大丈夫です！』

一はそう言うが、右半身のマープルが瞬時にアッシュメモリを引き抜きドリームメモリをスロットに装填する。

―ＤＲＥＡＭ！ＰＯＩＳＯＮ！―

瞬時にドリームポイズンとなり、右腕を伸ばし弾丸を払いのけると同時に知美と鏡花を自分のもとに引き寄せる。

それを見たアノマロカリスは失敗したと判断し水中へと逃げこんだ。

『子供と女性に手を出すとは…野郎ォ！！』

一の逆鱗に触れたのか、一はポイズンメモリを抜き、代わりにバスターメモリを取り出す。

―ＢＵＳＴＥＲ！―

―ＤＲＥＡＭ！ＢＵＳＴＥＲ！―

ドゥーツは水面に向かってバスターマグナムの銃口を向け、引き金を引く。

その雪崩の様な密度の攻撃で、水中の敵に命中したのか、そこから二体の異形が出てくる。

それは、片手が魚の形をした銃で、体は半漁人に鎖が巻き付いた様なのような姿をした怪人――アーチャーフィッシュ・ドーパントだった。二体はそのまま河川敷の地面に叩きつけられる。

『陸に出てきたな！！魚のバケモンが！！』

ドゥーツはアーチャーフィッシュ達に向けて言い放つ。

アーチャーフィッシュ達はなんとか立ち上がり、ドゥーツに向けて片手の銃で水弾を連続して撃ち込む。

『…効くかよ、んなもん…！！』

だがドゥーツは冷静にバスターマグナムをアーチャーフィッシュ達に向け引き金を引く。

ドゥーツの放った弾丸はアーチャーフィッシュ達の放った弾丸を全て相殺し、弾丸は全てアーチャーフィッシュ達に命中、アーチャーフィッシュ達は僅かに吹き飛ぶ。

アーチャーフィッシュ達は体を丸め、体中から白い湯気を放ち始める。

どうやら、蒸気を放ってドゥーツから逃げようとしているようだが…当然、一はそう簡単に逃がすつもりはない。

『ちっ、悪あがきを……』

ドゥーツはシケードフォンとマジシャンメモリを取り出し、メモリのスイッチを押す。

―ＭＡＧＩＣＩＡＮ！―

―ＭＡＧＩＣＩＡＮ！Ｍａｘｉｍｕｍ Ｄｒｉｖｅ！―

電子音声が鳴り、シケードフォンがライブモードに変形するなり七色の炎や氷、雷などを纏いアーチャーフィッシュ達へと飛んでいく。

「熱っつ！！熱っちちち！！」

「いだっ！あつっ、痛熱い！」

アーチャーフィッシュ達は炎を纏ったシケードフォンの攻撃に翻弄されるばかりで何も出来ない。

しばらくして蒸気も止み、一はマープルに言う。

『一気に決めるぜ！！』

『了解しました！』

ドゥーツはアッシュとポイズンのメモリを取り出し、ドライバーに装填する。

―ＡＳＨ！ＰＯＩＳＯＮ！―

右は灰色、左は紫になり、ドゥーツはアッシュポイズンに戻る。

ドゥーツはアッシュメモリをドライバーのスロットから引き抜き、ベルトの右側部にあるマキシマムスロットに装填する。

―ＡＳＨ！ＭａｘｉｍｕｍＤｒｉｖｅ！！―

電子音声が鳴り、瞬間、大量の灰が辺り一帯に吹き荒れ、ドゥーツの両拳にその灰がまとわりつき、ゆっくり巨大化する。

そして、その大きさが自身の体ほどになった時、ドゥーツはスロットをタッチする。

『アッシュ・アナイヤリーリョン！！ハアァァァァァッ！！』

ドゥーツはその巨大な拳を構えて走り出し、高くジャンプする。

そしてアーチャーフィッシュ達との距離が間近に迫ると、ドゥーツ

の体は二つに割れ、時間差で強烈なライダーパンチを喰らわせ……
…アーチャーフィッシュ達は爆発する。

「「ぎゃあああああああああああああああああああっ
！！」」

アーチャーフィッシュ達は光と共に変身が解かれ、人間の姿に戻る。

ドゥーツが倒れた二人に歩み寄り、そこで倒れている二人を見て、
一は思わず叫ぶ。

『こいつら…！！あの時の……！！』

倒れていたのは、あの河川敷で会った白浜の片割れの元人という男
だった…がもう一人は名前も知らない白浜と元人の手下だった。

だが、当の白浜の姿はどこにもない。

そして一とマープルの目に入ったのは、カバーのされていない基盤
が剥き出しになっているガイアメモリの残骸だった。

「パパ～！！」

「鏡花～！！待ちなさい！！」

…と、その時近くから鏡花の呼ぶ声が聞こえ、ドゥーツは声の方に
振り向くと…鏡花と知美がこちらに駆け寄ってきている様子が見え
た。

……するとその時、水中からもう一体のアーチャーフィッシュが

弾丸を知美と鏡花に向かって放つのが見えた。

『！危ない！！こっちに来ては駄目です！』

と、その弾丸はギリギリのところで当たりそうになる…が。

「危ないっ！！」

「キャぁっ？！」

「こンのぉッ！」

「パパー！！」

刃野警部と、マッキーがすんでのところで二人を庇い、なんとか弾丸はそれる。

『…奴はどこにっ？！』

安心して、一瞬気が抜けたドゥーツはそう口にし、逃げたアーチャーフィッシュを追うべく水際に歩み寄り躊躇なく後を追う…がすでにアーチャーフィッシュ達の姿はそこにはなかった。

『倒したアーチャーフィッシュ達は囮…！！クソッ！！本物は！？』

ドゥーツは荒々しく水を蹴り飛ばし吐き捨てるよう水を掻き分け、後を追いかけようとするが、マープルに制止される。

『いーちゃん…水中でまともに戦うのは得策じゃないです。この場は一旦退きましょう、ね？』

『ちっ……了解です。』

ドゥーツはそう言うと、水から上がり、物陰に隠れ変身を解き一に戻った。

近くには刃野達と負傷を免れたＳＰに護衛されている鏡花と知美がおり、鏡花は人形を取り出しながら幸恵に言う。

「だいじょうぶ。ほら、やっぱり守ってくれたよ。パパが♪」

知美は鏡花の頭を撫でながら少し悲しげな表情をしながら言う。

「鏡花……。そうね……」

一はその様子を見つめながらある事を考えていた。

（川井鏡花は……人形を持っている限り父親が――仮面ライダーが必ず来て助けてくれると信じている……。ちゃんとあの娘に真実を話さなければ……今に取り返しのつかないことに……）

■　■　■

二時間後　とあるマンション　川井議員の自室

「明日も土地売買の値段交渉です。…もちろん、鏡花と二人で」

知美はソファに腰掛けながら一とマッキー、刃野警部に対し言う。

「川井議員…今度こそ貴方の娘さんを連れ歩くのはやめた方がいいですよ？」

刃野が少し詰問するように知美に言う。

「はい。それならばＳＰの数と警官の数を増やして…」

「…いえ、私は鏡花と一緒に行きます。」

マッキーが分散して警護しよう…と言いかけた所で知美に遮られてしまい、一が問う。

「…知美さんだってこれまでの襲撃で貴女やお嬢ちゃんが狙われているのは分かっていますよね？それなら…何故？」

「左乃宮さん、何度も同じ事を言わせないでください。鏡花の警護は必要ないと言っているんです。それに、鏡花も夢の実現の為にと、理解してくれています。」

知美のその言葉に一の肩がピクッと反応した。

「理解？…大人の嘘を簡単に信じてしまうような子供が…？」

一がそう口にした途端、「ガァンッ！！」と音がし、一の方を刃野が見ると、一はいつも持っているステッキを床につきつけ、床には若干皹が入っているのが見えた。

一は知美に歩み寄り、思い切り胸倉を掴み上げ、叫ぶようにして言う。

「テメェ、自分の娘を何だと思ってんだ!?あの娘ははテメェの道具じゃねぇ!!親のエゴも大概にしろや!!」

マッキーと刃野は一を知美から引き離し、なだめようとする。

「ちょ!?探偵、落ちつけ!!」

「ヤベェ…チンピラ時代に戻ってやがる!おい一!!少し頭を冷やせ!!」

一はひとしきり知美に向かって罵詈雑言を叫んだ後、肩で息をしながらようやく落ち着きを取り戻した。

だが、知美は一達に向けて言い放つ。

「貴方方が何と言おうと…私達の予定は変わりません。」

そう一達に言うと、知美は部屋から歩き去り、部屋には一達だけが残された。

一は胸の中に残る苛立ちを隠さず、傍らにあったゴミ箱を荒々しく蹴り飛ばす。

気まずい雰囲気が漂う中、刃野が口を開く。

「一……とりあえず一度外の空気でも吸え。そうすりゃ多少は落ち着く。」

「…刃さんの言う通りにしとけ、探偵。」

「……分かった。」

刃野とマッキーに諭され、一はベランダへ足を運んだ。

ベランダでは、椅子に座りながら鏡花がスケッチブックにドゥーツのアッシュポイズンの絵が描かれていた。

「お？仮面ライダーですか……」

一は鏡花に歩み寄り、鏡花の描いた絵を見ながら呟く。

「あ、おじさん♪パパはいろんな色に変わったりするんだね。どうしてなの？」

と、鏡花はスケッチブックのページをめくり、ドゥーツの色違い、ドリームバスターが描かれた絵を見せながら一に問う。

「色…？」

「パパたちのお友達なんでしょ？知ってるよね？」

鏡花は屈託の無い笑顔を一に向けながら問う。

「え？あ～いや…その…」

ドゥーツに変身したはいいものの、何故色が変わるのかまでは考えたことも無かったからだ。

マープルなら、宙の本棚を使ってまで調べるかもしれないが。

「えっと……色が変わると、使える力も変わるらしいよ。この色の他にも黒や銀色があるみたいです。」

と、一はしどろもどろになりながらも、鏡花になんとか答えることが出来た。

「ほんと？」

鏡花は目をキラキラさせながら一に問う。

「そ、そうだよ！！」

一は、こんな純粋な子に対して若干嘘をついている罪悪感を感じ、歯切れ悪くしながら答える。

「そ…それより、どうして仮面ライダーが君のパパだって思ったんですか？」

一は優しく鏡花にそう訊ねる。

すると鏡花はカバンから人形を取り出し、一に見せる。

「ママがこれをくれたから♪パパからのお守りなの。…パパがいなくなって私、悲しくて怖くて…毎日ずっと泣いてたの……。だけど、そんな時ママがこれをくれたの。」

■　■　■

去年　川井議員の自宅。

鏡花は涙で枕を濡らしながら泣いていた。

そんなとき、扉が開き、知美が入ってきた。

「鏡花…パパからこれが届いたわよ。」

と、知美は鏡花に色鮮やかな騎士の人形を見せながら優しく言う。

「パパは、お顔が傷ついてしまって、仮面を被っているの。……パパは、風都の平和を守る仮面の騎士になったのよ?」

「かめんの、きし…?」

鏡花は人形と知美を見ながら問う。

「だから、これを握って祈ればきっとパパ達が必ず助けてくれるわ。」

と、知美はあやすように鏡花に言い、人形を手渡しその手に握らせた。

■　■　■

「…絶対に鏡花を守ってくれるんだって！信じてずっとママのお仕事についていったの。そしたらほんとに来てくれたの！嬉しかった♪」

「それはそれは…よかったですね！」

「うん♪」

一はそう言うが…頭の中ではしばし考え込んでいた。

（嘘と偶然がこの子の心を救った……。私が真実を言えば……この娘は……）

一は真実を鏡花に明かすか、このまま留めておくか葛藤していた。

■　■　■

一が風に当たっていると、突然シケードフォンの着信音がなり、通話に応じる。

「はい…何だ、マープルですか」

「……何だって言うことはないんじゃないですか？」

「おお、これは失礼…で、何の用でしょう？」

「あ、ちょっといーちゃんの声が聞きたくて……それより、刃野さんから聞きましたよ？」

「？何をです？」

「ふふっ…♪相変わらずの女性に甘い紳士っぷりだってね♪…まさか、川井鏡花の為に嘘に付き合う、って言うんじゃ…ないですよね？」

「…耳が痛いです。というか、どこで刃さんから話を聞いたんですか。あぁ…それより、倒したアーチャーフィッシュは白浜のダチの元人って奴と白浜の部下だったらしいです。だが奴は部下と元人のやったことは知らないとシラを切ってる上に、証拠が出ない、と。」

「ん～…刃さんとはメル友で、いろいろ話は聞いてますけど…警察の捜査力なんかその程度ですよ。…ねぇいーちゃん、今回、白浜が部下と元人に使わせたメモリ、覚えてます？」

「あぁ…なんか基盤とか剥き出しでしたね。」

「あれはガイアメモリを完成させるまでの過程で出来た試作品。売人は試作品なんか客には絶対売らない。なので…」

「白浜はガイアメモリ流通の関係者…と？」

「はい、その可能性が高いです。用心してね、いーちゃん…。きっと向こうだってなんとしても川井知美を殺そうとしてるはずですし…」

「あぁ、今度こそとっ捕まえてやりましょう。」

「いーちゃん、くれぐれも無茶だけはしないでね？…もししたら、泣きますよ？」

「…それは紳士失格なので、善処しますよ…それでは。もう遅いので寝た方がよろしいですよ？」

「…ん。分かりました…お休みなさい…」

「ええ。いい夢を。」

一はそれだけ言うと通話を切ってシケードフォンをしまい込み、マンションへと戻っていった。

■　■　■

次の日　風都某所　河川敷　地下工場。

この河川敷の地下には地元の市民や都市開発機構も知らない、ミュージアムの所有する秘密工場がある。

中では作業員が慌ただしく動き、可聴音域ギリギリの作業用重機の音が慌ただしく響き渡っている。

霧彦と冴子はその様子を一通り眺めた後、扉を閉める。

「へぇ、ここがガイアメモリを製造している工場かぁ…。初めて見たよ」

霧彦は目を輝かせながら呟く。

白浜は冴子に軽く頭を下げながら言う。

「社長、マジすんません…。次は必ず「くれぐれも忘れないことね白浜。」…はい？」

白浜がそこまで言ったところで冴子に遮られ、テーブルに置かれたメモリの一つを手に取りながら冴子は抑揚の無い声で白浜に言う。

「あなたはミュージアムから預かったメモリの最終精錬をしているだけの只の下請けだということをね。…この規模の工場なら幾らで

も代わりはあるのよ?あなたと同じようにね……」

冴子のその言葉を聞いたとたん、白浜の顔が蒼白になる。

「あの…、さ、作戦変更するッス…!!今度お前…ぁ…いえ。」

白浜が霧彦を指差しながらそこまで言ったところで霧彦に睨みつけられ一瞬恐怖に駆られ、慌てて言い直す。

「旦那さんの力を借たいんッスけど……」

「ふっ、やっと出番か…」

霧彦がそう言いながら白浜に歩み寄る。

「旦那さんには、あの仮面ライダーとかいう半分こ野郎を相手してほしいんっス。」

廣井がそう言ったとたん、霧彦の目の色が変わる。

「ふっ…いいだとう。彼には前から興味があったからね♪。」

霧彦はドライバーを取り出し、腹部に装着するとベルトの形になる。

次にメモリを取り出し、スイッチを押す。

―ＰＡＷＮ!―

白浜もポケットに入れていた水色のメモリを取り出し、スイッチを押す。

―ＡＲＣＨＥＲＦＩＳＨ！―

そして、白浜は手のひらのスロットにメモリを差し込み、霧彦はドライバーのバックルにあるスロットにそれぞれ同時に差し込む。

そして霧彦はチェック柄の様な模様が体を覆い、ポーン・ドーパントに、白浜は溢れる様な水に包まれ、アーチャーフィッシュ・ドーパントにそれぞれ変身した。

■　■　■

同時刻　風都某所　屋台街。

この屋台街の一角にある風都ラーメン…風麺・いわさきで、情報屋である、金髪で背の高い男…ファイと、同じく情報屋の女子高生…エンゲキブがラーメンを啜っていた。

「わ～…ここ、美味しいね～♪」

「でしょ？」

ファイが美味そうにラーメンを食べながら、エンゲキブと談笑している。

「…ほい、チャーシューの追加お待たせ。」

「あ、月光くんありがと～」

その時、屋台の店長……岩崎月光が、チャーシューをファイのドンブリへと入れる。

「しっかしさ…月光、アンタ親父さんから屋台だけは任されてんのに…お客が私達ぐらいしかいないって、どーゆーことよ?」

「あ、それ俺も気になる〜。」

「…うるせぇよ…俺が聞きたいぐらいだ…ご機嫌だぜ。」

二人に聞かれて、若干いらついたように笑う月光。

「んっふっふ〜…ファイさんも隅におけんねぇ?まさか女子高生とお食事デートとはなぁ?」

…と、その時背後から場違いな関西弁の女の声が聞こえ、ファイが後ろを向くと、そこにはいやらしい笑みを浮かべた長い金髪の少女――アカネがいた。

「いや〜…俺が風麺の常連で、それでよく話してるんだ〜」

「ここ、ラーメン旨そうやしな…私にもしゃっきりラーメン一杯。」

「あいよ。」

「…あ、そうそうファイさん?お願いがあるんやけど。」

「ん〜?」

アカネの顔からは先ほどのへらへらした表情は消え、真剣な面立ちに変わる。

「一くんからの頼みなんやけど、情報が欲しいって。」

「例の白浜とか言う奴の土地の件～？」

ファイの顔が真剣なものに変わり、ファイは続ける。

「白浜の持っている土地、あそこは前に市議会議員の川井功希が第二風都タワーを建設する計画が立っていたんだけど、川井議員が説明会の最中に何者か銃殺され、それにより第二風都タワー計画は中止、計画は頓挫した。ここまでは知ってる？」

アカネはうんと首を縦に振りながら答える。

「それからなんだよ…。第二風都タワーの建設予定跡地から機械の駆動音がするっていう苦情が市民から再び寄せられたのは。」

ファイの言葉にエンゲキブが何か思い出したように言う。

「あ、その話アタシも聞いたことある…。深夜や早朝になるとあの河川敷の下から低い機械の音が聞こえるって。早朝ランニングしてた陸上部の子が話してた。」

「まぁ機械の騒音自体は第二風都タワー計画が発表される前から苦情が寄せられてて、何度か市の方で調査も行ったみたい～。」

ファイは、へらへらと話し続ける。

「でも、その都度中止になったりイタズラだったとか何だのって変な理由を付けてうやむやに処理されたんだよ～。恐らく、何者かが市にこの調査を中止にするように圧力をかけた…俺はそう考えてるけどね～」

ファイの自説と情報にエンゲキブは思わず感心しながら少し考え込む。

「うーん…それが本当だとしたらとんでもないスキャンダルね。」

月光だけが話の意味が分からず頭に？マークが浮かんでいる。

「ん～…謎やな……。まさに都市伝説……。色々情報ありがとな♪よっし、お礼に今回の飯代は私が奢るで！！」

アカネは爽笑を浮かべながら二人に言う。

「え！？いや、いいよ！何か悪いし…」

と、エンゲキブが申し訳なさそうに言う。

「アカネちゃん、太っ腹～♪」

「ええってええって、気にしなさんな！！あっはっはっは！！あ、ちょっと電話するから、ラーメン置いといて。」

アカネは爽やかに笑いながら後ろを向き去っていった。

■　■　■

同時刻　鞍坂探偵事務所

「…と、ざっとまぁこんなトコ。以上、所長からの報告でした！！」

「御苦労さまです。」

マープルはアカネからの通話を切り、シケードフォンをポケットにしまい込みながら呟いた。

「う～ん……白浜の土地の地下に何か特殊な施設でもあるのかな…？だから第二風都タワーの計画が邪魔……？」

■　■　■

「ん～…謎やな～……」

アカネは、マープルへの通話を切り一人呟き、ファイ達のもとに歩み寄る。

だが、屋台のファイ達に歩み寄った瞬間、アカネは絶望し、絶叫した。

「あああああああああ！？」

アカネの目に映ったもの……それはラーメンを二杯食ってテーブルに突っ伏しているエンゲキブと、その隣で有り得ないくらいのから

のどんぶりが重ねられているほどラーメンを食っていたファイだった。

「あ、岩崎君、俺１３杯目おかわりね～♪」

「おう。…そこのあんた、ドンマイ。」

「ご…ご機嫌……やな。」

うなだれるアカネの財布は冬が来るより早く冬が訪れたのだった……。

■　■　■

同時刻　マープルの脳内　宙の本棚。

マープルが無限の書架の広がる空間を歩きながら呟く。

「あ、そうだ…。川井功希議員についても読み上げておかないと……」

マープルがそう呟いた後、両手を広げると物凄い勢いで該当しない本と本棚が飛ぶように減っていき、最終的に一冊の【Ｋａｗａｉ Ｋｏｕｋｉ】と書かれた黒い本が残った。

「……。」

マープルはその本の表紙を開き、しばらくページをめくったところ

で自分の右手を眺めた。

■　■　■

川井議員のマンション　屋上。

一は遂に決心した。

鏡花に真実を話そうと……。

鏡花を呼び出し、一は海を眺めながら鏡花を待っていた。

「おじさん？いるの？」

しばらくすると、鏡花の一を呼ぶ声が聞こえ、一は後ろに振り向く。

すると、鏡花がこちらに駆け寄り、傍らに座り込む。

「どうかしたの？」

鏡花が、一にそう訊ねる。

「大事な話があるんです。」

「パパのお話？」

「…ええ。」

鏡花の問いに一は少し悲しげな表情をしながら答える。

しばしの沈黙の後、一は口を開く。

「貴女は…本当の事を知らなきゃいけない…」

一は真剣な面立ちになりながら鏡花に言い、鏡花は何も言わずに首を縦に振る。

「実は……ほんとは君のパパは……」

飛鳥はただ純粋に一を見つめている。

しばしの沈黙の後、一は嘘を言ってしまった。

「……仮面ライダーなんです！」

その言葉を聞いた瞬間、鏡花の顔が明るくなり、一は続けて言う。

「いや～、思い出したんですよさっき！！確か、仮面ライダーは言ってました。自分には可愛い娘がいるんだと。」

「でしょ？だから言ってるじゃない♪」

鏡花は顔を明るくしながら一に言う。

「ええ、あはは、そうですね…ふふふ…」

一は困った笑みを浮かべながら後ろを向き、溜め息をつきながら呟く。

「あぁぁ……なに言ってんだ私は……」

「キャァッ!?」

…と、その時突然背後から鏡花の叫び声が聞こえ、一が振り返ると、そこにはアーチャーフィッシュ・ドーパントに羽交い締めにされている鏡花の姿があった。

「テメェ!!」

一はそう口にし、アーチャーフィッシュに向かっていくが、アーチャーフィッシュは片手から水弾を連続で撃ちだしてくる。

「おっと!?」

一は思わず怯み、仕方なく一度アーチャーフィッシュと距離を置こうと離れるがアーチャーフィッシュはなおも水弾を撃ちこみ、ついに一は吹き飛ばされ、見えなくなった。

（タダで…やられるかぁ!!）

祐規はとっさの判断でリザードショックから鏡花に向けて発信機を射出し、発信機は鏡花の服に張り付く。

「おじさぁん!!」

「ははははぁ!こいつは預かっていくぜぇぇぇ!!?」

鏡花は一を呼ぶが、一の姿は既になく、アーチャーフィッシュは

鏡花を抱きかかえると下卑た笑い声を上げながら去っていった。

「…なんのぉッ！」

一は、地面に落ちる前に、リザードショックにギジメモリを装填した。

―ＬＩＺＡＲＤ―

リザードショックから電子音声が発せられ、ライブモードに変形すると、リザードショックは尻尾型のワイヤーを伸ばしながら一の手首から離れ、ビルのパイプに向けて飛び立ち、リザードショックはパイプと一を掴み、一の体は地面から約２０センチ程の所で止まった。

「はぁ、はぁ、はぁ……」

一は荒く息をしながらリザードショックの液晶にタッチし地に降り、そのままドライバーを取り出しマープルに言う。

「マープル、敵です！」

地下ガレージで本を読んでいたマープルの腹部にドライバーが現れ、マープルは呟く。

「そろそろくる頃だと思ってました…」

と、マープルはメモリを取り出しスイッチを押す。

―ＡＳＨ！―

一もメモリを取り出しスイッチを押す。

―ＰＯＩＳＯＮ！―

二人とここにいない二人は同時にメモリを構え、同時に言う。

「変身！」

マープルはアッシュメモリをスロットに装填し、小さな光と共に消え、一のドライバーの右スロットに転送される。

一は続いて左スロットにポイズンメモリを装填し、ドライバーを操作する。

―ＡＳＨ！ＰＯＩＳＯＮ！―

電子音声と共に変身メロディが鳴り、一の体を小さな旋風とともに光の欠片が覆い、一はドゥーツに変身した。

マープルはそのまま床に倒れ込む。

『逃がすか…！！』

■

■

■

ドゥーツはアーチャーフィッシュを追うべく走っている。

すると、走っていた足元に剣の形をした光弾が突き刺さり、慌ててバックステップでかわす。

ドゥーツが撃たれた方を見上げると、そこには剣を片手に持ち、左手をドゥーツに向けていたポーン・ドーパントがいた。

「やぁ！仮面ライダー♪」

ポーンは執事のように恭しくドゥーツに向けて一礼し、ドゥーツのもとに飛び降りる。

「一目君たちを目にしたときからずっと想い続けてきたんだ……」

ポーンは静かに笑いながら言うが次の瞬間、殺気を放ちながら言い放つ。

「真っ二つに割ってみたい……とね！！」

ポーンは剣を構え、ドゥーツに準備させる隙を与える暇もなく襲い掛かる。

ドゥーツは何とか避けるが、ポーンは流麗な剣術でドゥーツを追い詰める。

『なかなかの…お手前でっ！！』

「光栄だね♪」

ドゥーツは回し蹴りで反撃するが、ポーンはまるでステップを踏むように華麗に避けきる。

「本気を出してほしいねぇ…♪」

そうポーンが言うと…左腕についていた盾から、無数のポーンのデザインをシンプルにした様な怪人…ポーン・ドーパント群生態が現れる。

「行ってくれ。」

ポーンが剣をドゥーツに向け、そう言うと…群生態達は、一斉にドゥーツに襲いかかる。

『なっ…！うじゃうじゃと景気のいい事でぇっ！！』

「褒め言葉と受け取ろうか♪」

ポーンは僅かに礼を述べるが攻撃の手を緩めない。

最初は徒手空拳で何とかなっていたが、さすがに無理になっていき…一度ドゥーツはバックステップでポーンから距離を置く。

そしてドゥーツはマジシャンとスピリットを取り出し、それぞれドライバーのスロットに装填する。

―ＭＡＧＩＣＩＡＮ！ＳＰＩＲＩＴ！―

ドライバーから電子音声と共に変身メロディが鳴り、ドゥーツはマジシャンスピリットへと変身する。

ドゥーツはハンマーで何体もなぎ倒し、マジシャンメモリの力で炎

を作りだし、何体も燃やしていくが、ポーンはそれに負けずとも劣らない体術と人海戦術でドゥーツの攻撃を受け止める。

そんな中、ドゥーツの右目を明滅させながらマープルの意志が一に言う。

『いーちゃん見て！メモリドライバーを付けてる！彼は組織の幹部です！！』

『ちっ、早くカタを付けないとあの娘が…！！』

マープルが慌てたように言い、一は毒づく。

「私の街から……消え失せたまえ！！」

ポーンが手を広げると背中にチェス盤の様な翼が現れ、ポーンはその翼を羽ばたかせながら天高く舞い上がり、剣を振りかぶる。

『チッ！マキシマムで…！！』

『ま、間に合いませんっ！！』

ほんの一瞬、慌てるドゥーツ。

だがポーンはその一瞬の隙を見逃さず、ドゥーツに向かって剣に炎を纏わせながらドゥーツに向かって振り下ろす。

『ッ！！しまった！！』

ドゥーツがポーンに気づいたころには、すでにポーンは攻撃態勢に

入っており、この距離ではドゥーツが防御することもかわすのも不可能だった。

『ダァァム……デェェェストロォォォイ！！』

ポーンが某赤ずきんよろしく叫びながら迫ってくる。

一は目を閉じ、一瞬死を覚悟したが、その瞬間天啓が下り、一はマープルに言う。

『マープル！！私に任せてくれますか！？』

マープルの意志は右目を明滅させながら一に言う。

『はい…すごく嫌な予感がするけど…仕方ない…ですよね……』

と、スピリットバンカーでギリギリポーンの剣を受け止め、鍔迫り合いに入る。

『んぎぎぎぎぎ…！！！』

「…なかなか…やるよう…だねぇ…！？」

しばらくして鍔迫り合いに勝ったのは…ドゥーツだった。

ドゥーツはポーンを払いのけ、右手の拳に電撃を纏わせ、それでポーンを殴りつける。

ポーンはたまらず怯み、さらにスピリットバンカーで動きを止められてしまう。

『好き勝手…やらせるかよ…！！』

「貴様…！！」

『風都はテメェらの街なんかじゃないッ！！」

ドゥーツはポーンに向けて言い放つと、バスターメモリを取り出し左スロットに装填した。

―ＭＡＧＩＣＩＡＮ！ＢＵＳＴＥＲ！―

電子音声と共に変身メロディが鳴り、ドゥーツは右半身黒、左半身藍色のマジシャンバスターになる。

「まさか……っ！！？」

『さて……なぁ兄ちゃん。』

―零距離射撃喰らった事はあるかぃ？―

そういうと、ドゥーツはバスターマグナムの銃口をポーンの腹部に突きつけ、躊躇なく引き金を引いた。

「がああああああああああああああああっ？！」

銃口から炎や氷を圧縮した弾丸がポーンの身体を貫通しながら連続で射出され、最後はドゥーツも巻き込んで爆発した。

……そして、爆発の中で動く影……。

生きていたのは、ドゥーツの方だった。

ドゥーツがあたりを見回すが、そこにポーンの姿はそこにはなかった。

ドゥーツもあの爆発でかなりのダメージを追ったようで、右半身が少しふらついていた。

『やっぱり…こんな事だろうと……むちゃくちゃ過ぎ…です…』

『お付き合いいただき、ありがとうございますよ……。』

マープルの意志がそう言うと精神リンクが強制解除され、ドゥーツの体はわずかな旋風と共に光の欠片となって砕け散り、一に戻った。

一は変身を解除した時に少しふらつきながらマープルにシケードフォンで通話を試みる。

「……む？」

だが、何度やってもマープルから返事が帰ってくることはなかった…

■　■　■

同時刻　鞍坂探偵事務所　地下ガレージ

マープルのシケードフォンの着信音に気付く、アカネが倒れたままのマープルに駆け寄り、ポケットからシケードフォンを取り出し通話に応じる。

「もしもし。一くん?うちやけど…マープルちゃん?…まだ気ぃ失ったままやけど?」

「はぁ、はぁ……ちょっと派手にやりすぎたからダメージあったかもしれませんね……。アカネさん、そっちは頼みます。」

「え!?ちょ、一くん待っ――」

一はそれだけ言うと通話を切り、アカネはあたふたしながらうろつくばかりだった。

■　■　■

同じ頃　川井議員のマンション　自室。

知美がSPを引き連れ、自分の部屋に置いてきた鏡花を連れるべく部屋の扉を叩く。

「鏡花、鏡花〜?出掛けるわよ?」

いくら問いかけるが返事はなく、知美も不審に思い始める。

すると、その時知美の携帯電話のメール着信音が鳴り、知美は携帯電話を開きメールを確認した。

そこには……

『娘さんと遊んでいる。一人で風谷港の第五埠頭沿いにある廃屋まで来い。警察やＳＰに話したら娘さんの命は保証しない』

そんな文面のメールがあった。

知美はそのメールを見るなり顔面を蒼白にしながら歩き去っていった。

■

■

■

一はリザードショックの液晶をタッチするとＧＰＳマップが浮かび上がり、その一点に赤いシグナルが明滅する。

一はそれを確認するとまだ旨く動かない体に鞭打ちながら、立ち上がり、走り出した。

…そして、同じ頃、霧彦は体を柱に預け、座り込んでいた。

ドゥーツの零距離銃撃の爆発に乗じて逃げたものの、彼も爆発で一と同じほどのダメージを受けていた。

霧彦はドゥーツに対し柱を殴りながら毒づく。

「あんなイカれた攻撃を…バカな!!…いや、バカなのか…?」

だが、しばしの逡巡の後、霧彦は静かに笑いながら呟く。

「ククク…バカだからこそ、か……」

霧彦はドゥーツに対し、どこか計り知れない無上の歓喜を覚えた。

■

■

■

風谷港　第三埠頭沿いにある廃屋ビル。

知美ははやる気持ちを抑え、躊躇なく扉を開き、ビルの中に入る。

「鏡花…!」

すると、突然ブザーが鳴り響き、知美の入ってきた入り口はシャッターで閉じられてしまった。

幸恵は一瞬慌てるが、それでも先に進む。

しばらく進むと、工業区画に入り、知美は鏡花の姿を探す。

「鏡花!鏡花、どこなの!?」

通風口から風がファンを回しながら不気味な音を奏でている。

知美は恐怖と孤独感に耐えながら鏡花の姿を探す。

すると、近くから何かを叩きつけるような音が聞こえた。

「……？！」

知美が音のした方向を振り向くと、そこには縛られている鏡花と地面にワイヤーの付いたボールを叩きつけて遊んでいる白浜がいた。

「きょ、鏡花！！」

知美は叫びながら縛られている鏡花に駆け寄る。

「！！ママぁ！！」

鏡花も幸恵の姿に気づき叫ぶが、白浜はボールを知美の足元にぶつけ、知美は一瞬怯み、知美は白浜に言う。

「し、白浜！！貴方が私の命を狙ってたのね！？」

知美は声を荒げ白浜を睨みながら言うが、白浜は全く臆することなく知美に言う。

「川井さん……アンタのガキ全然笑わねえな！…俺とは玩具の趣味が違うみてぇだ！！」

白浜は手首に填めていたベルトを外し、ボールと一緒に何処へと投げ捨てる。

そして白浜はポケットから水色のガイアメモリを取り出し、それを見せながら幸恵に言う。

それには、空中にいる虫めがけて、二匹の魚が水を吐きかけている《A》にも見える絵柄があった。

「けどな、コイツはきっとウケるぞ！！」

白浜が知美にそう言うと、メモリのスイッチを押す。

―ＡＲＣＨＥＲＦＩＳＨ！―

メモリから電子音声が発せられ、白浜はそれをスロットに差し込むとメモリは白浜の体の中に消えていき、白浜は青い水飛沫とともにアーチャーフィッシュ・ドーパントとなった。

「キャぁ？！」

「……ッ？！」

変貌したアーチャーフィッシュを見て鏡花と知美は僅かに声を上げた。

アーチャーフィッシュは鏡花を縛っていた縄を解くと、鏡花を羽交い締めにしながら知美に言う。

「俺の土地に手ぇ出す奴らは全員消えて貰うぜ！！」

「止めて！！狙いは私なんでしょ！？鏡花には手を出さないで！！…キャッ！！」

知美は涙ながらにアーチャーフィッシュに懇願するがアーチャーフ

ィッシュは知美を払いのける。

「ママ！！嘘だよね！？ママァーーー！！！？？」

鏡花は涙ながら知美に言った。

■　■　■

同じ頃　鞍坂探偵事務所　地下ガレージ

アカネは相変わらず気を失ったままのマープルをどう起こせばいいのか思案を巡らせていた。

「む～～……？」

アカネはなぜか置いてあったジェントルーダーに跨りながら考えをひねり出そうとするが一向に思い浮かばない。

「……あっ！！」

次の瞬間、アカネに天啓が下り、アカネはジェントルーダーから降り、階段を急ぎ足で駆け上り台所の上に置いてあった酢をコップに注ぎ、こぼさないようにマープルに早足で歩み寄る。

アカネはマープルの口を開け、その中にコップの酢を流し込ませた。

「……ぶっ！！げほ、げほっ！！」

すると、マープルが咳とともに意識を取り戻した。

「おぉー!!お酢ぱない～!!」

アカネは喜々とした表情で叫び、マープルのシケードフォンを取り出し一に通話をかけた。

……一が走っていると、突然シケードフォンの着信音が鳴り、一はシケードフォンをポケットから取り出し通話に応じた。

「どうしました!?」

「一くん、やった!!マープルちゃんの意識戻ったで!!」

「ほ、本当ですか!?」

「もちのろん!!んじゃ、今からマープルちゃんに代わるわ!」

しばしの後、マープルの声がスピーカーから流れる。

「もしもし、代わりました。もう…いーちゃんってば…無茶はしないって私と約束したじゃないですかぁ…?」

「あぁ…本当に、スイマセン…」

「…じゃ、これに免じて、今度からは気を付けること!約束ですよ?」

「はいはい、わかりましたよ…」

「ふふっ♪私はもう大丈夫だから、いつでも呼んで下さい。」

「えぇ、頼りにしてますとも。では早速行きますよマープル！！」

「はぁい！」

マープルはそう答えそのまま通話を切り、一はシケードフォンをポケットにしまいこみ、ドライバーを腹部に装着し、メモリを取り出しスイッチを押す。

―ＰＯＩＳＯＮ！―

程なくしてマープルの腹部にもドライバーが現れ、マープルはメモリを取り出しスイッチを押す。

―ＡＳＨ！―

そしてマープルは何も言わずにメモリをドライバーの右スロットに装填し、メモリは小さな光とともに消え、マープルは再びその場に倒れ伏す。

「おっと！」

それは、キチンとマープルをアカネがキャッチする。

程なくして一のドライバーの右スロットにアッシュが転送され、一はそれを押し込む。

そして一はポイズンをドライバーの左スロットに装填し、ドライバーを操作した。

―ＡＳＨ！ＰＯＩＳＯＮ！―

電子音声とともに同時に変身メロディが鳴り、一はドゥーツに変身し、回復した体に鞭打ち再び走り出した。

■　■　■

風谷港　埠頭沿いの廃屋ビル。

「ハハハハハ！！家族揃ってあの世で仲良く暮らしな！！」

アーチャーフィッシュは下卑た笑い声を上げながら右手の鎖を知美に伸ばし幸恵を葬ろうとするが、瞬間ドゥーツが現れ、知美を救い出した。

『ふぅ…何とか間に合いましたね…』

ドゥーツは少し息を尽きながら胸をなで下ろす。

「パパァ！！」

ドゥーツの姿を見るなり鏡花の顔が明るくなる。

「テメェら！！」

アーチャーフィッシュはドゥーツに向かって毒づき鎖を伸ばす。

ドゥーツは、バスターメモリを取り出しスイッチを押す。

―ＢＵＳＴＥＲ！―

ドゥーツはそのメモリをアーチャーフィッシュが鎖を伸ばすより速くドライバーに装填した。

―ＡＳＨ！ＢＵＳＴＥＲ！―

ドゥーツは、左半身が藍色のアッシュバスターへと変身し、銃…バスターマグナムを構える。

ドゥーツはバスターマグナムから灰を圧縮した弾丸を撃ち込み鎖を打ち返した。

「ま、待てぇ！！」

だがアーチャーフィッシュは鏡花を掴み上げ、ドゥーツへの盾にしながら言う。

「う、動くな！！銃を捨てろ！！」

アーチャーフィッシュの行動に思わずドゥーツの動きが止まる。

『うわ、子供を盾にしましたよあいつ。』

『汚い、さすが売人汚い。』

「う…ウルセェ～！！早く捨てろっつってンだよ！！」

アーチャーフィッシュは全く動じないドゥーツ流石に焦り始めていたが、それでも自分に主導権があると思いながら言う。

しばしの後、ドゥーツは鏡花に向けて静かに言った。

『鏡花…パパを信じなさい…！！』

しばしの後、鏡花は涙ながらに力強く頷いた。

「ぅ…うん！！」

「こ…こんのぉぉ！！」

アーチャーフィッシュは叫び鏡花を絞め殺そうと力を込める。

瞬間、ドゥーツはドリームメモリを取り出し、ドライバーの右スロットに装填した。

―ＤＲＥＡＭ！ＢＵＳＴＥＲ！―

ドゥーツの右半身が灰色からオレンジになり、ドゥーツはドリームバスターへと変身する。

ドゥーツは変身したと同時に引き金を引き、銃口からはオレンジ色の光弾が不規則に揺れながらアーチャーフィッシュへと放たれる。

「ま、マジで撃ってきたぁ！？」

アーチャーフィッシュは鏡花を盾にしながら避けようと考えたがその考えはすぐに打ち砕かれた。

アーチャーフィッシュとの相対距離が僅か１m程に差し掛かったところで突然光弾が軌道を変え、アーチャーフィッシュの背後に命中し吹き飛ばされた。

「ぐぎゃあ！！」

「キャッ！」

アーチャーフィッシュはたまらず声を上げ鏡花を放してしまう。

ドゥーツは急いで駆け寄り飛鳥を抱きかかえる。

『怪我はないですか…？』

「うん♪」

「？？！！び、ビームが曲がったぁ！？クッソ～！！」

アーチャーフィッシュはそう言うとドゥーツ達に背中を向けて逃げ出す。

『逃がすか、コラ。』

だがドゥーツは再び銃口をアーチャーフィッシュに向け光弾を放つ。

「ひィ…！ぎゃぁぁっ！！」

光弾はアーチャーフィッシュを追い掛けながら背中に命中し吹き飛ばされた。

「鏡花…鏡花…！」

知美は涙ながらに鏡花を抱きしめ何度も名を呼ぶ。

ドゥーツはアーチャーフィッシュの後を追いかける。

『ここにいてください！！』

ドゥーツはマープルの声でそう言うとすぐに走り去り…その場には鏡花と知美だけが取り残された。

「ママ見た？やっぱりパパが助けてくれたよ？」

「…えぇ…そうね……！！」

飛鳥は幸恵にそう言い、幸恵はただ頭を撫でながら飛鳥を抱き締めていた。

■　■　■

「はぁ、はぁ、はぁ…ギャアアッ！！」

アーチャーフィッシュはドゥーツから逃げるべく走っていたが遂に追い詰められてしまい、バスターマグナムからの動きの読めない光弾を何発も喰らい、遂に転んでしまう。

「……ァ…ガ…ガアアァァァ！！調子二乗ルナァァ！！」

アーチャーフィッシュはそう叫ぶと青色の光と共に巨大な魚の怪物――アーチャーフィッシュ・ドーパント暴走態に変貌した。

『うぇぇ!?ちょ、こんなのアリですか!?』

『アリ…なんでしょうねー。』

そう言った後、ドゥーツはは暴走態に対し光弾を撃ち込むが……あまり効いていない。

次の瞬間、暴走態はその巨躯からは想像も付かないような素早さでドゥーツの足に食らいつき水中へ引きずり込んだ。

『ガッ…!!ど、どうにかしないと…!!?』

暴走態に食らいつかれた一はマープルに言う。

『…あ!!マープル、ジェントスプラッシャーを!!』

『心配しないで。もう準備させてあります♪』

マープルの意思はドゥーツの右目を明滅させながら答え、何とかシケードフォンを取り出し操作する。

■　■　■

同じ頃　鞍坂探偵事務所　地下ガレージ。

既に変形を終えたリボルギャリーが発進準備を始めていた。

前方の多重シャッターが開きリボルギャリーはタイヤを勢いよく回転させガレージから猛スピードで発進した。

「私も出動するなんて……私聞いとらん！！」

巻き添えで搭載されたアカネは端っこに寄りながら言う。

すると、突然近くに合ったジェントルーダーが後退し、後部に金色の水上航行用のフロートユニットが装着され「ジェントスプラッシャー」と呼ばれる水上航行形態となった。

そして、リボルギャリーのシールドが開き、ユニットの換装を終えたジェントスプラッシャーがそこから発進した。

「行ってらっさぁぁ～～い！！」

リボルギャリーはジェントスプラッシャーが発進したと同時にシールドを閉じどこかへと走り去る。

そしてジェントスプラッシャーは水上を泳いでいる暴走態に体当たりをかます。

体当たりのショックで暴走態の口からドゥーツが離れ、そのままドゥーツはジェントスプラッシャーに飛び乗る。

『『さぁ、天罰タイムだ！！』』

そう言うと、ドゥーツはジェントスプラッシャーをジェットスキーのように操りながら前輪部分から魚雷を発射し、自身もバスターマグナムを手に取り、大出力の砲撃を撃ち込む……が一発も命中せずドゥーツと暴走態はすれ違い、暴走態は水中に潜り込みその海底にあったテトラポットをドゥーツに向けて吹き飛ばす。

だがドゥーツはあっさりと空中に逃げる。

『マープル！！そろそろ決めるぞ！！準備はいいな！？』

『当然！！』

そう二人が話した後、ドゥーツはドライバーの右スロットからメモリを引き抜き、マグナムに装填した。

―ＢＵＳＴＥＲ！Ｍａｘｉｍｕｍ Ｄｒｉｖｅ！！―

電子音声がバスターマグナムから発せられ、後にエネルギー充填開始の電子音が流れる。

そして、ドゥーツを探す様にしている暴走態に真っ双面から現れると、ドゥーツはあるセリフを言い放つ。

『『…コレで決まりだ！！』』

ドゥーツは暴走態に銃口を向け、それぞれの銃からエネルギー充填完了を告げる電子音が鳴る。

『『バスター…フル…！！』』

そうドゥーツが口にすると銃口にエネルギーが蓄積されていき、ドゥーツの周りにはいくつもの橙色の光弾が現れる。

そして、ドゥーツは大きく叫び引き金を引いた。

『『バスタァアァァァァァァァ！！』』

瞬間、バスターマグマムの銃口から大出力のホーミングレーザーが放たれ、同時にドゥーツの周りの光弾がレーザーに変わる。

そしてそれはまとめて暴走態に向けて一斉に放たれ、その全てが暴走態に命中し……暴走態は爆発と共に崩れ落ちた。

―GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA！！！！！―

『…終わりましたね。』

ドゥーツはエネルギーの過剰チャージで銃身が真っ赤に焼けた銃からメモリを引き抜き、それを海に投げ捨てた。

バスターマグナムは小さな爆発と共に砕け散り、バラバラになりながら海の底へと沈んでいった。

■　■　■

同時刻　風都某所　ディーガル・コーポレーション　社長室。

冴子は今回の川井議員暗殺が失敗したと伝えるため硫兵衛に電話をかけていた。

「……はい、お父様…。…部下が無能で申し訳ありません…。白浜の工場を破棄します。はい。」

冴子はそう言うと受話器を置き、重い溜め息の後に忌々しげに一人呟いた。

「だらしない……どいつも…こいつも……」

冴子はそう呟くとノートパソコンを立ち上げおもむろにキーボードを叩く。

そして画面には、白浜の工場の自爆シークエンスの確認画面が浮かび、冴子は躊躇わずにエンターキーを押した。

そして、白浜の工場は爆発で従業員もろとも消滅した……。

■　■　■

ドゥーツはジェントスプラッシャーから降り、白浜を陸に引き揚げていた。

「うぅ……」

白浜は苦しげに呻くとそのまま意識を手放した。

そして、白浜の手元には砕けたメモリがあった。

たとえ容疑を否認したとしてもこれが動かぬ証拠となる。白浜にはもう言い逃れする事は出来ない。

『…あとは、刃さんにでも任せますか。』

『これで昇進してくれるといいですねー。』

そう言いながら、ドゥーツはその場を立ち去ろうとするが…その時、背後から声が聞こえた。

「パパ～！！」

「鏡花！！」

『…む？』

声のした方にドゥーツが振り返ると、鏡花と知美がこちらに向かって走っていた。

「パパ～！！行かないで～！！」

知美は鏡花の足を止め、優しく言い聞かせる。

「鏡花……パパを行かせてあげて？…もうパパは、鏡花だけじゃなくて、風都のみんなを守らなくちゃならないの。ね？」

鏡花は一瞬ドゥーツを見た後、再び知美に視線を戻し答える。

「ママ……。…分かったわ…」

鏡花はそう答えると、知美は笑顔を見せた。

そして鏡花はドゥーツに歩み寄り、頭を差し出す。

『あ…え…な、何でしょう?』

ドゥーツは思わずたじろいでしまう。それに鏡花は悲しそうな顔を見せ、言う。

「パパ…忘れちゃったの?いつものごあいさつ…」

(ェ……まずい…!!ここまで来て…)

一があわあわとしているところにマープルの意志が一に助け舟を出してくれた。

(ふふ、やっぱり…つまんない嘘なんかつくからですよ♪いーちゃん…)

(んな事言われましても……)

瞬間、マープルの意志がドゥーツの右手を動かし、それを一度見つめると鏡花の頭に運び、優しく撫でやった。

『…えへへ…♪』

鏡花はドゥーツに笑顔を見せる。

『…これで、いいんですね…？』

ドゥーツはそれを見ると、岸に停めてあったジェントスプラッシャーに跨り、エンジンをスタートさせる。

「パパァ……」

鏡花がそう呟くと、ドゥーツは鏡花に手を振り、鏡花もそれを返した。

そして、ドゥーツを乗せたハードスプラッシャーは水平線の彼方へと消えていった。

―川井知美は議員を引退し、第二風都タワー計画は無期延期となった……。だが、親子は別の新しい何かを手に入れたと、俺は信じている……―

■　■　■

風都某所　鞍坂探偵事務所。

パソコンで報告書を書き終えた一は一服しながら考える。

（…マープルは父親の癖をあらかじめ検索して探し出してたんですかねぇ…？）

そう考えていると…後ろから、いきなりハリセンが襲ってくる。

―スパァン!!―

「あいたぁっ!?」

「なに辛気臭い顔しとねん!ちょっと、こっち見な!」

頭をさすりながら見ると、後ろにアカネが立っていた。一はいきなり首根っこをつかまれ、後ろを向かされる。そしてそこには……

「…どうですか?」

「…ブバッ!!」

そこには、頬を若干赤らめながら、セーラー服を着るマープルがいた…しかも、スカートは手で裾を押さえ、黒縁の眼鏡もかけている。

「な…な…な…!?」

鼻血を必死に抑えながら一が狼狽すると、アカネがなぜこんなことになったか話し始める。

「マープルちゃんに、恋愛の聖書(バイブル)貸してあげたら…コスプレにハマってもうてなぁ。」

「…似合い…ますか?」

上目遣いで、マープルは一に体をすりよせながら近づく。

「に、似合いすぎてまずいと言いますか…！？」

「……？」

きょとんと、マープルは可愛らしく首をかしげる。

―いつの日か…そう遠くない未来に、母は娘に真実を話すのだろう。
その日が来るまで、私達は彼女の夢は裏切れない……―

―仮面ライダーＤＯＴ（ドウーツ）ＷＯの使命が、また一つ増えましたね…―

…この後、コスプレの魅力にはまったマープルが、様々な服を買い占め、せっかくの川井議員からの報酬が水泡に消えたのは…余談である。

## Dを探せ／マープルはそれを我慢できない

■　■　■

マープル脳内　宙の本棚。

「……。」

マープルは無限の書架が広がる空間にただ立ち尽くし、両手を広げる。

すると本棚が飛ぶように減っていき、最終的に【”ＴＷＩＮＣＡＭ”】と表紙に書かれた黒い本が一冊だけ置いてある本棚が残り、マープルはそれに歩み寄る。

「……え？」

マープルがその本を手にした時、普通の本と違うことにすぐ気づいた。

その本の表紙にはいかにも頑丈そうな鍵穴の付いた錠前が付いており、簡単には読めないようになっている。

「えっと……んしょ…んしょ…！！」

マープルは何とか錠前を外そうとするが当然錠前は外れず、マープ

ルは思わず口にする。

「閲覧できない…！？こんなこと今までなかったのに…」

マープルは驚きながら本の錠前を外そうしたが結局外れず仕方なく諦めた。

「ツインカム……」

マープルが本のタイトルを呟き、本棚へのアクセスを解除した。

「……ふぅ……。」

マープルはおもむろに近くのホワイトボードに歩み寄り、ぶつぶつ言いながらペンを走らせ始めた。

「み…な…み…い…つ…き……１４歳…。…ストリート…ダンサー……究…極…の…技（トリック）…」

マープルはそこまで言うと再び呟き始め、ホワイトボードからだんだん外れていきながらペンを走らせていき、最後には壁にペンを走らせてしまっていた。

「鰐島…罵……アイソックス…ステップ…タッチ…ウェーブ…究極…の…技……」

だがアヤノはペンと自分がホワイトボードから外れて壁にペンを走らせていることなど気にもせず延々と壁にペンを走らせていった。

…同じ頃、上の事務所では一が報告書を書き終え、ラジオを聞きな

がら一人ダーツを投げて遊んでいた。

「ひゃぁ?!」

アカネはノートパソコンを片目に請求書の整理をしていると、突然小さく悲鳴を上げたのち、一を軽く睨む。

恐らく、その請求書には有り得ないくらいの金額が書かれていたのだろう。

「…っと。よし、真ん中。」

だが一はそんなアカネを尻目にダーツを的に投げている。

すると、午後1時の時報がなり、同時に若菜のラジオ番組がスピーカーから流れ始める。

『風都の皆さん、こんにちは!!午後一時になりました!園咲若菜のヒーリング・プリンセス!!今日も張り切ってお送りします!』

「お…始まりましたか。」

ちなみに、マープル一筋て行くと言った一だが、若菜姫の事はアイドルとしか思っていないので、セーフらしい。

『これから一時間、私と皆さんで楽しい時間を過ごしましょうね♪それでは早速、大人気のこのコーナーです!「風都・ミステリーツアー」!まず最初のお便りは、ラジオネーム、逆立ち歩きは男のロマンさんからの投稿です。若菜姫、「ドラフラー」って知っていますか?最近、風都で噂になっているのですが…』

「ドラフラー？何かどこぞの球団の応援団みたいですね…」

一はラジオに耳を傾けながら呟く。

確かにドラフラーという名前は何となく応援団のようなネーミングである。

優勝おめでとう。

『背中には風になびく茶色のヒーローマント、神出鬼没、人かトンボか、その実態は悪人共に天誅を下す闇の仕置人なのです！とのことです♪闇のお仕置きヒーローですかぁ……あの仮面ライダーさんたちのお友達かしら…？ふふっ、若菜もドラフラーさんや仮面ライダーさんたちとお友達になって、色んなお話聞きたいなぁ♪』

「…若菜姫…一緒にしないでいただきたい……」

一は少し心外そうに呟きながら机に歩み寄りカップにココアを注ぐ。

……と突然近くの流し台から石ころが窓が割りながら部屋に飛び込んでくる。

「な、なんや！？」

アカネも何事かと慌てて一のもとに歩み寄る。

「……ぐぉくぉるあぁぁぁぁ！！！どこのドイツだぁぁぁ！？」

一はジキルとハイドさながらの変貌の様に、物凄く恐ろしい形相で

流し台の割れた窓に歩み寄り、割れた窓の間から外を覗き見るが、投げたとおぼしき人物は既に逃げ去った後だった。

「チッ…！！ダボハゼがぁぁ…！！？」

「…あ、手紙ついとるで。」

一が唸りながら外を覗いてる際、アカネは石ころを手に取りそれに紐で縛り付けていた黒い便箋を取りその中身を確かめるべく便箋を開けた。

「…？なんやこれ？」

中には大学ノートを破りとった急ごしらえの手紙と一万円札二枚が入っており、アカネは手紙を手に取りそこに書かれていた文面を読み上げる。

「んーと…『今日、堀鍔学園に怪しい奴が来る。絶対に捕まえてくれ。』…これ依頼やないの？一くんどないするん？前金も入っとるし受ける？」

アカネは手紙を手渡し一に言う。

「受けるわけねぇだろ！！放り込んだヤツ見つけて突っ返してやる！！ついでに窓の修理代も回収だァ…！！」

一はアカネから渡された手紙をくしゃくしゃと丸めゴミ箱に投げ捨てると、同時に地下ガレージからドアを開けマープルが事務所に入ってきた。

なぜか堀鍔の制服を着ていたのが気になるが……。

「マープル、ちょうど良かっ…あぁぁぁ!?」

一はマープルを見るなり思わず声を上げてしまう。

マープルは事務所に入ってくるなり壁にペンを走らせはじめ、既に手がつけられないほど書き殴られていたからである。

「う〜ん…ダメ…。やっぱり私の中にない…」

マープルはそう呟くと玄関に歩み寄り頭をぶつけ倒れる。

「きゃっ!!」

「ナイスボケ…」

アカネは困った表情をしながらマープルにサムズアップして言う。

一は何か妙な様子のマープルに訪ねる。

「…どうしましたマープル?どこ行くつもりですか?…というか何で堀鍔の制服を?」

「ちょっと…知らないことが分かる場所に…です。」

マープルは微笑みを浮かべて一の問いに答え、玄関の扉を上げ外に出ようとする…が、一に止められる。

「バカ!貴女は組織に狙われているのをお忘れですか!?不用意に

出歩かないで下さい！」

「ふふっ…心配ないです、いーちゃん♪少なくとも私はいーちゃんよりは無茶しないです。では、行って来まーす♪」

マープルは一に可愛い笑顔を向けるとそのまま事務所を後にした。

「な、何なんやあれ！？あんなマープルちゃんうち聞いてへん！！」

アカネはマープルの後を追い事務所から駆け出した。

「ちょっとおおおお！！！！」

そうこうしている内に、事務所には一だけが取り残され、一の悲痛な怒鳴り声が事務所に響いた。

―やれやれ……何かにのめり込んだ時のマープルは迷惑以外の何物でもない……―

一は内心でそう呟き、事務所のドアに鍵をかけ、「只今留守にしております」という札をドアに張り事務所の外に出る。

そして近くに停めていたジェントルーダーに跨りエンジンをスタートさせると、一はジェントルーダーを駆りどこかへと走らせていった。

―私は謎の依頼者を突き止めるべく、手紙に書かれていた私の母校、堀鍔学園へと向かった―

■　■　■

風都　風花町　堀鍔学園。

一はジェントルーダーを校門の近くに停め、校門の監視カメラを見ながら内心で呟く。

…最近の学校はセキュリティが厳しく、それはこの堀鍔学園も例外ではない。

というか…ここのセキュリティに関しては万全すぎるほどの万全だ。

―…こんな所にノコノコ来る怪しい奴はよほどのバカですね…―

すると、一の目の前を黒い影が走り去り、一はそれを追うべく校門をくぐる。

「怪しい奴だ！！」

「捕まえろ！！」

「確保ーー！！」

と、そこで黒服にサングラスの警備員が口々に叫びながらこちらに向かってくる。

「はい！！今怪しい奴が――」

一がそこまで言いかけた所で警備員たちが一を取り囲み、全くの無表情で一を睨む。

「え？」

一は突然の状況の変化に思わず声を上げる。

どうやら、警備員は怪しい奴を黒い影ではなく一と勘違いしているようだった。

そして、一はしばしの後、自分の状況を把握した。

「……私が！？」

■

■

■

同時刻　風都某所　ウェザーサイドスクエア。

一を言いくるめたマープルは読めなかった本の手掛かりを探しながら歩き回っていた。

辺りを見回しながら歩みを止めないマープルにアカネが訊ねる。

「なぁ、いつも頭の中で済ませんのに何で今日は出て来たんや？」

マープルは歩みを止めずにアカネの問いに答える。

「鍵が掛かってて閲覧できなかった本があったんです！そんなの…

私には我慢出来ない…！」

―…いつもは大人しいマープルだが、暴走すると私でも手がつけられない。―

一が言っていたその言葉を思い出したアカネだった…。

と、マープルは突然フェンスに身を乗り出しそこを見回しアカネも同じように見回したが当然何もなかった。

「ここも外れかぁ……。じゃあ後は…」

マープルはそう呟くと、再び走り出し、アカネは走り出したマープルの後を追いかけた。

■

■

■

…スクエア内のスタジアムのゲートで、フェンスに体を預けながらたそがれている黒髪の少年がいた。

少年がたそがれていると、突然下の方から若い女の声が聞こえた。

「見つけました！！南樹（ミナミイツキ）、１４歳！」

「えぇ～！！南って、あの超有名なカリスマ中学生ストリートダンサーのか！？」

マープルの言葉にアカネは少し黄色い声を上げながら言う。

そして二人は階段を駆け上り南に歩み寄る。

「何だよいきなり！？」

南がマープルに問うが、マープルは気にせず手を顎に置きしばし考え込んだ後、南の鞄をあさり、ラジカセを取り出し南に言う。

「ちょっとお借りしますね？」

南はマープルに対し何か口にしようと思ったがななこに遮られてしまった。

「握手して下さい！！」

アカネはそんなマープルを尻目に松橋に握手を求め、松橋は仕方なく握手に応じた。

マープルは南のラジカセの地面に置き、スイッチを押した。

「ちょ、お前なに勝手に！？」

だがマープルはそんな南をよそにラジカセの再生ボタンを押す。

と同時にＢＧＭが流れはじめ、マープルは軽快なステップを踏みながら某電車ライダーの紫色のお子様怪人かと言わんばかりの流麗なダンスを披露した。（ちなみにＢＧＭはＤｏｕｂｌｅ－Ａｃｔｉｏｎ　ＧＵＮ　ｆｏｒｍ。）

南とアカネがマープルのダンスに見とれていると曲が終わり、マー

プルは同時にポーズを取る。

「凄いやないかマープルちゃん！！そんな事も出来るん！？」

アカネは顔を喜々とさせながらマープルに歩み寄り言う。

「ふふっ、検索しましたから、これくらいは訳ないです♪だけど…」

マープルは南に向き直ると真剣な面立ちで問う。

「《ツインカム》の本が読めなかったの」

マープルのツインカムという言葉を聞くと、南の表情が曇り、マープルはそんな南に更に訊ねる。

「あの、もし良かったらツインカムを見せて貰いたいんですけど…」

マープルの問いに南は俯きながら答える。

「あれはもう二度と出来ねえんだよ…！」

「え！？」

突然の南の返答にマープルは戸惑ってしまう。

「俺一人じゃどうにもなんねえんだよ…！！」

と、南は悲しげな表情でマープルとアカネにそう言うとラジカセを鞄にしまいこむ。

「一人じゃ出来ない…？」

マープルが訝しんでいると、アカネが南に歩み寄り問う。

「なぁ、よう分からんけど、やってみせてくれへんか？」

だが南はアカネを払いのけその場を立ち去ろうとするがアカネはなおも食い下がる。

「それ見てマープルちゃんが落ち着いてくれんとうちが困るんや！！な、頼むわ！」

「ふん、知るかよ…」

南はそれだけをマープル達に言うと、鞄を背中に担ぎ足早にその場を立ち去ろうとするが…アカネは再び食い下がる。

「鞍坂探偵事務所の死活問題なんや！！」

すると、南が足を止め、アカネの方に向き直り問う。

「鞍坂…！？」

その言葉にアカネの表情に光が戻り、南に歩み寄り言う。

「所長のうちとしても、責にきゃうっ！！」

アカネが階段の空き缶に足を滑らせ転んでしまう所だったが、慌ててマープルが駆け寄りアカネを抱き止める。

「はぁ、はぁ…責任もあったりするからなぁ？」

南はアカネに問う。

「アンタが所長…なのか？」

「もちろんや！！」

南はしばしの逡巡の後、口を開いた。

「嘘だろ…！？」

南はアカネにそう言うとそのまま一目散に走り去っていった。

「え！？ちょっと、どこ行くんですか！？」

「な、何でなん！？」

アカネとマープルは互いに戸惑いながら慌てて、南の後を追った。

だが、三人は気付かなかった。

一匹の灰色の猫がその様子を遠くから見つめていたことに……。

■　■　■

堀鍔学園　校門。

一は相変わらず警備員の敵意のこもった表情に晒されながら取り囲まれていた。

「貴女達の言ってることはよ～く分かります、ええ。だけど私はこの卒業生なんだ、決して怪しいものではありません！！」

「嘘をつくな！貴様の様な喋り方の生徒など、ここ近年いなかったぞ！」

一は誤解を解こうと必死に弁明しようとするが警備員は更に詰め寄り威嚇する。

「ぁぅ…怪しい奴は他に居るんですって！ね！？」

一は媚びを売るように一人の警備員の襟元を正しながら言う。

と、その時…

―だ、誰だお前は！？―

近くから悲鳴の混じった男の声が聞こえた。

「ほら居ましたぁ！！」

一はそう言うと一目散に駆け出す。

「あっ！！逃げたぞ！！」

「待てぇー！！」

警備員たちも口々に叫びながら一のあとを追う。

……その頃、理事長室では、怪人が理事長に向けて問うた。

「お前が鰐島か…？」

青色の体に、ギョロンとした大きな二つの複眼、そして背中からは6枚の大きな羽を生やした怪人…ドラゴンフライ・ドーパントの問いに理事長は怯えながらも壁に後ずさりしながら答える。

「そ…そうだ…」

「街の害虫は…私が駆除するのだ…！！」

ドラゴンフライがそう言ったとたん、目にも留まらぬ素早さで理事長に駆け寄り手で理事長の顔を塞ぎ、ドラゴンフライは更に続ける。

「お前は一人の男子生徒を…深く傷付けた…」

ドラゴンフライがそう言ったとたん、逆の掌から羽の形をした刃が生え…それを、理事長に突き刺す。

「んが…む～…！！」

そして、一がドアを蹴破り理事長室に入ってくるなりドラゴンフライはそれに気付き理事長から手を離す…が理事長は力無く倒れ落ちる。

「野郎ォ！！」

一はドラゴンフライに飛びかかり狭い室内で取っ組み合いの様相を呈し始める。

「オラオラオラぁ！！」

「な…グハッ！？」

一はドライバーを取り出すも隙を見つけられず上手く装着出来ない。

だが、その代わり攻撃は決まっているのだが。

「クッ…邪魔をするな！！」

ドラゴンフライはそう毒づきながら一を払いのけ、理事長室から逃げ去る。

「待てこの野郎ォ！！」

一はドライバーを装着するとドラゴンフライの後を追うべく走り出した。

そして、その様子を見ていた警備員が、一言つぶやく。

「…まさか…左乃宮一…か…？！」

■　■　■

風都某所　どこかのバス停。

「おーい！！乗りまーす！！」

南は走っているバスに手を振りながら乗ると叫び、バスはバス停に停まり南は乗車する。

「乗りますよ。」

「おう。」

マープルとアカネは姿勢を低くしながら南に気取られないようバスに乗り込む。

「お金、よろしくです。」

「えっ？ったく…」

自分の運賃を払わずに乗車したマープルはアカネは毒づきながら財布を取り出し二人分の運賃を運賃箱に入れ奥に行こうとすると…突然マープルにぶつかってしまう。

「ひゃっ！！」

「あぅ…」

マープルはアカネに向き直ると少し困った表情で頼み込む。

「アカネちゃん、とりあえず彼を見失わないでくださいね？」

「え？」

アカネがマープルに問うが…マープルは困った表情で自分の腹部に現れたドゥーツドライバーを指差す。

「えぇ！？何でこないな時に～！？」

「まぁ、仕方ないですよ…。」

アカネはそう言うが、マープルは先ほどの困った表情を消し、無言でメモリを取り出しスイッチを押す。

―ＡＳＨ！―

電子音声に気付き、乗客の視線が一斉にアカネとマープルの方に向く。

一はドラゴンフライを屋上に追い詰め、こちらもメモリを取り出しスイッチを押す。

―ＰＯＩＳＯＮ！―

そして、二人は同時にメモリを構え、同時に言う。

「「変身！！」」

マープルがアッシュをドライバーの右スロットに装填すると、同時にアッシュは小さな光とともに消え、一のドライバーの右スロットに転送される。

一はそれを押し込み、続いてポイズンを左スロットに装填し、ドライバーを操作する。

―ＡＳＨ！ＰＯＩＳＯＮ！―

電子音声と同時に変身メロディが鳴り、一の体を僅かな旋風と共に光の欠片が包んでいき、一はドゥーツに変身した。

「何…！？」

ドラゴンフライは思わず声を上げる。

『行くぜ…』

ドゥーツはドラゴンフライを指差し言う。

メモリと共に自分の意識を転送したマープルは力無く倒れ込むが、アカネがしっかりと抱き止め、近くの席に座らせる。

「ちょ、姉ちゃん～、起きてぇな～！！こんなところで居眠りはあかんで～？」

と、アカネは大根役者よりも酷い演技で姉妹だと誤魔化そうとしていた。

■　■　■

「お前が噂の仮面ライダーか…」

ドラゴンフライはドゥーツに問う。

『だったら何だ？』

ドラゴンフライの問いにドゥーツも再び問い返す。

「この風都にヒーローは二人も要らない…！」

『じゃ、お前が死ね。』

「ふん、ほざくな！！」

一がそう言うとドラゴンフライはそれに答え、同時にドゥーツとドラゴンフライはどちらともなく突っ込んでいく。

ドラゴンフライより先にドゥーツは蹴りを放つがドラゴンフライは卓越した動きで簡単に避け、ドゥーツはさらに灰を孕んだ回し蹴りを放つがやはり避けられてしまう。

『ちっ、ちょこまかしやがって…！』

ドゥーツは一瞬毒づきながら再び回し蹴りを連続して放つが…ドラゴンフライは手慣れた動きで回避し、長距離のバックステップでドゥーツと大きく距離を離す。

『速い…アッシュやマジシャンのスピードといい勝負ですね……』

マープルは右目を明滅させながらドラゴンフライの素早い動きに思わず関心し呟く。

『だったらコレでどうだ！！』

一はそう言うとバスターメモリを取り出しスイッチを押す。

―ＢＵＳＴＥＲ！―

メモリから電子音声が発せられ、ドゥーツはポイズンの代わりにバスターをドライバーの左スロットに装填し操作する。

―ＡＳＨ！ＢＵＳＴＥＲ！―

ドライバーから電子音声と共に変身メロディが鳴り、同時にドゥーツの左半身が紫から藍に変わりアッシュバスターとなる。

『喰らえや…！』

ドゥーツは左胸部にマウントされたバスターマグナムを外し、猛スピードでこちらに向かってくるドラゴンフライに銃口を向けると躊躇なく引き金を引く。

「青いな…。」

瞬間、バスターマグナムから灰を圧縮した弾丸が真っ直ぐドラゴンフライに向かって放たれるがドラゴンフライはスピードを落とさずに横にかわす。

ドゥーツもなんとかドラゴンフライの動きに追従しながらバスターマグナムの引き金を引き続けるが弾丸は全てかわされてしまい、なかなか命中しない。

「ハハハハ！！」

『チィッ……！！！』

ドラゴンフライは笑いながらなおもドゥーツを翻弄させる。

『くっ…速ぇ…！』

一はバスターマグナムを連射しながら毒づく。

『それじゃあコレです！！』

ドゥーツの右半身に宿ったマープルの意志が一に言うと、右手でドリームメモリを取り出しスイッチを押す。

―ＤＲＥＡＭ！―

メモリから電子音声が発せられ、マープルの意志はアッシュの代わりにドリームを右スロットに装填し、ドライバーを操作する。

―ＤＲＥＡＭ！ＢＵＳＴＥＲ！―

ドライバーから電子音声と共に変身メロディが鳴り、ドゥーツの右半身が灰色からオレンジ色に変わり、ドリームバスターとなる。

『行くぜ…？』

ドゥーツは再びバスターマグナムの引き金を引き、今度は藍色とオレンジの光弾が不規則に揺れながら銃口から放たれ、ドラゴンフラ

イに向かう。

ドラゴンフライは相変わらずのスピードで光弾を交わしながら言う。

「ふん、バカの一つ覚えが！！何度やっても同じだ！！」

だがドゥーツは何も言わずに引き金を引き、光弾を発射するが…ドラゴンフライは余裕で避ける。

だがしかし、ドラゴンフライがその避けた光弾を避けた瞬間、今まで放った光弾がドラゴンフライを取り囲むように動くと、それらは一斉にドラゴンフライに向かい始めた。

「何！？ぐあああっ！！」

ドラゴンフライが気付いた時には既に光弾は回避出来ない距離にあり……ドラゴンフライはその全てを喰らい吹き飛ばされてしまう。

『いーちゃん、そろそろ決めますよ？』

マープルの意志が右目を明滅させながら一に言う。

『分かってますとも…』

一はマープルに答えるとドライバーの左スロットからバスターメモリを引き抜き、それをバスターマグナムに装填する。

―ＢＵＳＴＥＲ！Ｍａｘｉｍｕｍ Ｄｒｉｖｅ！！―

バスターマグナムから電子音声が発せられ、ドゥーツはバスターマ

グナムの砲撃用の銃身を起こすと同時にエネルギーチャージ開始を告げる電子音が鳴る。

そしてその後すぐにチャージ完了を告げる電子音が鳴り、ドゥーツは銃口をドラゴンフライに向け技の名前を叫ぶ。

『『バスター・フルバースト!!』』

ドゥーツが技の名前を叫び、引き金を引こうとした瞬間、ライブモードに変形したシケードフォンが着信音を鳴らしながらドゥーツの近くで止まり、元の携帯電話の姿に戻る。

『へ?もう、なんですか、こんな時に…』

ドゥーツはドラゴンフライに銃口を向けながら右手を伸ばしシケードフォンを手に取りWの耳{?}に運び通話に応じる。

『もしもし?アカネちゃん、どうかしたの?』

『マープルちゃん、南くんがバスを降りるで!!』

『えぇ!?ど、どうしよう!?』

焦り始めたマープルを一が右手を抑えながらマープルに言う。

『ちょっと!?何やってんだ戦闘中に!!』

だがマープルの意志は一の右手の制御を奪い再び耳元に運びながらアカネに言う。

『ア、アカネちゃん！何とか彼を引き止めて！！』

『だから集中しなさい！！』

一は再び右手を抑えながらマープルの意志に言うが再びマープルの意志に右手を乗っ取られ、シケードフォンを再び耳元に運びアカネに言う。

『ぁ～、早く追い掛けて！！』

『だから戦ってんだぞ！！』

ドゥーツの妙な挙動に訝しむドラゴンフライだったが、特に害はないと感じたらしい。

「…い、いずれ倒させてもらう！！」

そう言うとその場から逃げ出してしまった。

一は何とかマープルの意志を抑え、バスターマグナムのエネルギーチャージを中止させ、逃げたドラゴンフライの後を追いかけるべく下を見下ろすが…既にドラゴンフライの姿はなかった。

『う～ん、見失っちゃった…。じゃあいーちゃん、後は頑張ってね♪』

マープルはドゥーツの右目を明滅させながらそう言うと一との精神リンクを強制的に切断する。

そして変身を強制解除させ、ドゥーツの体は僅かな旋風とともに黒

い欠片となって砕け散り、一に戻った。

「ちょっとマープル…！！あぁクソ！！」

一は苛立ちを隠さずに叫んだ。

■　■　■

とあるバス停。

南はアカネとマープルの姿を見るなり足早にバスから下車しそのまま走り去っていく。

アカネもマープルを背負いながらバスを下車するが突然マープルの意識が戻り焦りながらアカネに言う。

「急いでアカネちゃん！！彼が逃げちゃうよ！！」

「わ、悪い！！…って、アンタがうちの背中から降りんかぁ！！」

「きゃあ！！」

アカネは背負ったマープルを払いのけるとマープルは小さな悲鳴と共に地面に頭をぶつけ目をグルグルにしながら倒れた。

「きゅ～…」

「…しかも、背中の感触からして…うちより大きいやんか…年下の

くせに…。」

自分の胸を見て、その後アカネは倒れたマープルを見ると一息いれた。

■　■　■

同時刻　風都郊外　園咲邸。

若菜が琉兵衛とチェスとオセロを同時にしながら琉兵衛に訪ねる。

「ねぇお父様ぁ？」

「うん？」

「今世間を騒がせているドーパント、ご存知ですか？」

琉兵衛はチェス盤のポーンを動かし、オセロ盤の黒石を動かしながら若菜の問いに答える。

「確か、《ドラゴンフライ》のメモリだったかな？」

「ふふっ、かなり屈折している方みたいですわ♪」

若菜がチェス盤のクイーンを動かし、オセロ盤の白石を動かしながら琉兵衛の言葉に答える。

「ふふ、それもまた、なかなか面白いサンプルだねぇ…」

すると、チェス盤の駒を倒しながらミックがテーブルに上がってきた。

「んな～ぉ…」

琉兵衛はミックを抱き上げながらミックに問う。

「おぉミック…どした？あぁ、何か嗅ぎつけたのか？よしよしよし…」

琉兵衛は傍らに置いてあったミック専用の特注の小型ガイアドライバーをミックに装着させ、黄色のガイアメモリを手に取りスイッチを押す。

―ＫＮＩＧＨＴ！―

メモリから電子音声が発せられ、琉兵衛はミックに巻いたドライバーのメモリ差し込み口にメモリを差し込んだ。

すると、ミックの体が緑色の光と共に猫の姿から成人男性と同じ大きさとなり…光がやむと、そこには馬を模した兜をつけ、全身に鎖がからみついたような姿をした怪人――ナイト・ドーパントとなり、唸り声を上げる。

「グアァァウ！！」

「気をつけてな…」

琉兵衛はミックを撫でながらそう言うと、ナイトはそのまま素早く

走り去っていった。

そして、しばらくの後、琉兵衛が口を開く。

「霧彦君…」

「……ッ！！」

柱の影から様子を伺っていた霧彦が琉兵衛の声を聞き慌てて再び柱の影に身を隠すが、琉兵衛はなおも霧彦に言う。

「君も…ミックに負けないようにな……」

霧彦は足早にその部屋から去っていった。

■

■

■

堀鍔学園　中庭。

一はあれから逃げ出したドラゴンフライを探したが結局見つからず、さんざん走り回って探して疲れた体を枯れた桜の樹に預けていた。

「…さて、そろそろあのお二人の力でも借りましょうか…」

一はおもむろにジャケットのポケットからシケードフォンを取り出し、ある電話番号を呼び出すとそこに通話をかける。

しばらくのコール音の後、相手が通話に応じた。

「もしもし!?いーいーっスか!?」

「どうもウェンディ。ドクターたちは元気ですか?」

「もちろんっス!!チンク姉ぇもクア姉ぇもみんな元気いっぱいっスよ♪」

「それはよかったです…あ、実はちょっと貴女とクドさんに頼みがあるんですが少し会えませんか?」

『もちろん大丈夫っス!!いーいーの為ならいくらでも時間作るっスよ!で、どこで待ち合わせするっスか?』

「踏む?では、風吹丘のウインドクリスタルというカフェに居ますね。」

「風吹丘のウインドクリスタルっスね?了解っス!!」

ウェンディはそこまで言うと通話を切った。

■　■　■

風吹丘　ウインドクリスタル。

一は店員の持ってきたコーヒーを飲み風都タワーを臨む席に座りながらウェンディを待っていた。

「いよーっス♪い～い～♪」

しばらくすると若い女の声が聞こえ一が振り返ると、堀鍔学園の女子制服を着たそこには赤毛の短いポニーテールの少女――ウェンディがいた。

「どうも、ウェンディ。……しばらく見ないうちに大きくなりましたねぇ。」

「え？どこがっスか！？胸とか？」

「う、羨ましいです！」

ウェンディは頭を掻きながら祐規に問うがその問いに答えたのは祐規ではなく、白いベレー帽に白いマントをつけた小さな少女…能美クドリャフカだった。

「ふふん…これが、大人の女ッスよ。」

ウェンディが頬を膨らませながらノーヴェに反論する。

クドリャフカはウェンディと一に微笑みを浮かべると一の向かいの席に座り、ウェンディも一の向かいの席に座る。

「相変わらずですね…貴女達…」

一はウェンディとクドリャフカを見ながら懐かしむように言う。

「ハジメ、たまには遊びに来て下さいね？リトルバスターズも、ナンバーズの皆も待ってますよ！」

クドリャフカは一に笑顔を向けながら言う。

「ん～、まぁそれはそのうち…です。…では、本題に入るが、情報が欲しいんです。」

一の言葉にウェンディとクドリャフカの顔が真剣な面立ちになり、ウェンディは一に問う。

「どんな情報が欲しいんスか？」

「実は、「今日堀鍔学園に怪しい奴が来るから捕まえてくれ」と言う匿名の依頼があったんです。…で実際、理事長が殺された……そこで。風都の高校生の情報なら何でも知っている貴女達が頼りです。ウェンディ、クド、何か聞いてないですか？」

一がそこまで言うと、ウェンディとクドリャフカは眉をひそめ、小声でなにやらひそひそ話し始める。

「（まさか…アレでしょうか…？）」

「（みたいっスね…）」

しばしの後、クドリャフカは鞄から携帯電話を取り出し操作するとそれを一に手渡し見せる。

「ハジメ、コレ見て下さい。裏サイトですけど…」

クドリャフカの携帯電話の画面には、「あなたの人生を闇に貶めた害虫を駆除します」という紹介文とともにいかにも闇サイトと言うに相応しい暗いデザインが映っていた。

「《闇の害虫駆除》？…あのドーパントか……」

一はサイト名を読み上げながら呟く。

「ほら、ここに名前あるっスよね？《堀鍔学園の鰐島》。」

ウェンディが携帯電話の画面の一点を指で指し示し、一はカーソルをそこに合わせ決定キーを押す。

「ふむ、なになに…？〔堀鍔学園の鰐島。マジうぜぇ…俺を傷付けて人生台無しにしやがって…殺して欲しい。〕…」

一がその書き込みを読み上げると、ウェンディは溜め息混じりに一に言う。

「はぁ…マジうぜぇのはどっちだっつう話っスよ……あたしこの鰐島って娘の事知ってるんスよ。…可愛くていい娘だったのになぁ……」

「可愛いくていい娘!?あの理事長がァ!?」

一は天然に変なボケをかますが、ウェンディはそれに的確にツッコミを入れる。

「いや、理事長が可愛かったら気持ち悪いじゃないッスか!!」

「ぁ…そっか…理事長５０過ぎのおっさん…可愛かったら気持ち悪いですよね……」

一が変な所で納得し、ノーヴェに携帯電話を返すとノーヴェは更に続ける。

「鰐島と言っても理事長の方じゃないしですし。名字が一緒だからって間違えられたんですよ。」

一はクドリャフカの言葉を聞き、頭を逡巡させながら呟く。

「って事は、謎の依頼者はその可愛い鰐島さんの関係者…?分かりました、ありがとうございました。」

一はウェンディとクドリャフカに礼を述べ、ハットを被り直すとカフェを後にしようとするが…ウェンディに呼び止められる。

「いーいー、鰐島は今学校にはいないッスよ?」

「はぁ!?何でですか!?」

一が寝耳に水と言わんばかりにウェンディに問う。

「あぁ～…いーいーが知らないのも無理ないっスね……。…ん～…あたしらが二年に上がった時に水泳部が発足されたんスよ。鰐島は今水泳部に居るからそこを当たってみたらどうっスか?この時間なら多分市営プールで練習中だと思うっス」

「あぁ、分かった。んじゃな」

一はウェンディとクドリャフカにそれだけ言うと足早にカフェから去っていった。

■

■

■

堀鍔学園　正門。

南はアカネとマープルから何とか逃げ出し陵桜学園にたどり着いたが、正門は警察による封鎖が敷かれていた。

南は周りの野次馬の間を割って通り、近くで捜査に指示を出している刃野とマッキーに訊ねる。

「おい?罌に何かあったのかよ!?」

「ちょ、ちょっと君！勝手に入られちゃ困るよ！！」

「うるせえ、ザコは引っ込んでろ。」

「ざ、ザコぉ！？」

南はマッキーにそう言うとマッキーはマジでショックを受けながら地にへたり込み言う。

「ふひ～ん……こんな年下の子からもザコ扱い……」

マッキーは刃野に半泣きで言うが…刃野は持っていたツボ押し器でマッキーの手を払いのけ笑いながら言う。

「あっはっは！まァそんなに気にするなよマッキー、本当のことだから！」

刃野はさりげにマッキーに向けヒドい言葉を吐き、ツボ押し器を首に押し当てながら南に向き直りながら言う。

「いいか少年、『罵』ってのが誰かは知らないが、被害者は罵じゃない…鰐島武だ。…ん？武？武か…ん～なかなかいい名前だなぁ…」

刃野がなんかブツブツ言ってる間に南は校内に走り去り、南と入れ替わりにアカネとマープルがやって来て、いきなり刃野に問う。

「あ、刃野さんやん。こんなトコでなにやっとるん？」

「ん？」

刃野がアカネの声に気付き、南のいた所を見ると確かにアカネとマープルがいた。

「！！あれ！？さっきまで男子だったのが急に女子高生に？！男子が女子で女子が男子で！ややこしギャアア！！」

刃野がそこまで言いかけたところでアカネが鞄から取り出した携帯用ハリセンで思い切り刃野の頭は叩きながら言う。

「だぁれが美少女高校生やねん！！」

すると、地にへたり込んでいたマッキーがおもむろに立ち上がりながら言う。

「ちょ、君…刃野さんになんて事を…」

だがマープルはそんなアカネ達を尻目にさっさと歩いていってしまう。

「あっ！マープルちゃ～ん？！待ってやぁ～！！」

「…なんですか、アレ？」

「さぁ？また、ドーパントなんだろ…。」

アカネは歩き去ったマープルを追うべく走り出し、取り残されたマッキーと刃野はただ立ち尽くすばかりだった。

■　■　■

同時刻　堀鍔学園　中庭。

「罟！！罟は何処だよ！？」

南は生徒の間を割って通りながら罟を探す。

「何しに来た南！！鰐島なら今日はいないぞ！！」

通りかかった体育教師が南に言うが、南は睨みながら反論する。

「嘘つけ…！！隠そうってのかよ！？」

南はそう言うと体育教師を払いのけ、現場封鎖の黄色いテープを飛び越え、鞄からラジカセを取り出し電源を入れ曲を再生する。

（ＢＧＭはやっぱりＤｏｕｂｌｅ－Ａｃｔｉｏｎ　ＧＵＮ　ｆｏｒｍで）

「せめて顔くらい見せろよ……」

南は上着を脱ぎ捨て、すがるような気持ちでリズムを曲に合わせ、ステップを踏みながら軽快なダンスを披露する。

―おぉおおぉ！？―

―すごーーいっ！！―

そして、そこは一気に周りにいた生徒たちの歓声に包まれるが、南

はそのまま踊り続ける。

「これでも無視すんのかよ!?罟!!」

南はなおも踊り続けながら罟を呼ぶ。

「…あ、いました!」

アカネとマープルは、歓声に気付き、中庭へ走る。

二人は周りの生徒に混じる。

そして南のダンスを眺めながらアカネが小躍りしながら言う。

「おぉ〜!!さっすが天才ダンサーやな!!」

「罟…?」

と、南が言った言葉に反応して、マープルが呟く。

「…やめろ!!」

しばらくして体育教師が現れ、南のラジカセを手に持ちスイッチを切ったと同時に生徒たちからの歓声も止む。

体育教師は南に言う。

「勝手に学校辞めて…今頃なんだ!?」

「いいから…罟に会わせろよ!!」

南は体育教師に食い下がる。

「鰐島はなぁ、もうお前のパートナーじゃないんだ!!今はシンクロに打ち込んでるんだ!!もう近づくな!!」

「パートナー…？」

体育教師の言ったパートナーと言う言葉にマープルが僅かに反応する。

体育教師は南にラジカセと鞄を押し付け追い返そうとする。

「アイツ……またプールかよ…!!」

南は若干泣きそうな表情でラジカセを鞄にしまうと、そのまま走り出した。

南と体育教師が去った後、周りで見物していた生徒たちもぞろぞろと歩き去っていき、中庭には二人だけが残された。

マープルが考え込んでいると、突然ハッとしたように言う。

「なるほど……解った!」

「え!?なになに?何か分かったん?」

アカネが顔を喜々とさせながらマープルに訊ねる。

「ツインカムはコンビ技なんだよ!そのパートナーが鰐島アギトな

の。つまり、その二人が揃えば必ず見られるって事だよ！」

マープルはそう言うと再び南のあとを追うべく駆け出し、アカネも後を追った。

しばらく走っていると南は林道に入っていき、二人が南を追うべく走っていると……突然一陣の風が唸り声とともに、駆け抜け近くの植え込みに隠れた。

マープルは思わず足を止め、アカネは何事かとあたふたしている。

マープルは走り去る南を追うべく再び駆け出そうとするが、瞬間…何かが目にも止まらぬスピードで二人の周りを取り囲むように風が吹き抜ける。

「！？な、何や！？一体何がどうなってるんや！？」

「獣の臭い…！！」

アカネはパニック状態に陥りかけるが、マープルは冷静に状況を分析する。

がそうこうしている内に風が何かの姿であることに気付き、風は残像とともに物凄い風をマープル達に放ち、二人は身動きが取れなくなってしまう。

風がやみ、残像がマープルの目の前に集まるとその姿がわかった。

それは、馬を模した兜をつけ、全身に鎖がからみついたような姿のドーパントだった。

「グアァァァウ！！」

そのドーパント――ナイト・ドーパントは二人を見据え、唸り声を上げる。

「うち……聞いてへん……」

アカネは必死で自分に押し寄せる恐怖に耐えながら上擦った声で言う。

マープルはアカネを守るように立ちはだかってナイトを睨み、腰に巻いたドライバーを見据えながら問う。

「…ドライバーをしているってことは…あなた、もしかして幹部？」

「フシュァゥゥウ…！！」

だがナイトはマープルの問いには答えず唸り声を上げ腕の剣を構え臨戦態勢に入る。

マープルはナイトを睨みながら更に問う。

「私を攫いにきたんですか？」

「シュゥハァ……グァアァァァ！！！」

ナイトは返答の代わりにジャンプしながら二人に飛びかかった。

「ッ…！！危ない！」

「へ？キャぁっ！？」

マープルはとっさの判断でアカネを突き放してナイトの飛び込み攻撃をかわす。

それにナイトが一瞬戸惑っている隙にアカネの手を引っ張り逃げ出し、それに気づいたナイトも逃げ出した二人の後を追いかけた。

■　■　■

同時刻　風都某所　市営プール

一は二階の窓からプールを見下ろし罌の姿を探すがどうにも見つからない。

すると、近くからジャージの上着を羽織った黒髪の女性が歩いてくるのが見え、一はその女性に声をかけた。

「あ、ひまわり先生！！」

黒髪の女性――九軒ひまわりは一に気付き、一に駆け寄る。

「あら、一くん？久しぶりね。」

ひまわりは笑顔を見せ、一に言う。

「ひまわり先生、あの～、ちょっと立て込んでるんですけど……」

一が困った表情をしながらひまわりに言う。

「？どうかしたの？」

「あ…何でもないです。それよりひまわり先生、鰐島さんが今どこにいるか分かりますか？」

一はひまわりに訊ね、ひまわりは顎に手を置き少し考え込み口にする。

「そうね…もう上がったんじゃないかしら？今までずっと練習しっぱなしだったから…」

「ふむ…そうですか…。どうも」

「あ…ちょっと聞いてくれる？」

「？」

一はひまわりに軽く一礼しその場を去ろうとするが、ひまわりに呼び止められる。

「一くん、先生はいつでも一くんの味方ですよ？園長も、四月一日君も、百目鬼君も、黒鋼さんも、ファイさんも、小狼（シャオラン）君や、サクラちゃんだって…貴方の事を大切に想ってるよ？」

「…ありがとうございます。」

一は改めてひまわりに軽く一礼し、その場を去っていった。

すると、何か落ち着かない様子でプールを見下ろしている南の姿を見つけ、一は彼に歩み寄り訪ねる。

「お前…鰐島罌さんの知り合いか?」

松橋は祐規を警戒しながら逆に問い返す。

「お前こそ何なんだよ?何で罌を知ってんだよ…?」

一が南の問いに答えようとした瞬間悲鳴が聞こえ、南はその悲鳴が聞こえた方に走っていき、一も南の後を追いかけた。

■

■

■

「堀鍔学園の…鰐島罌だな?」

ロッカールームで、ドラゴンフライが罌に歩み寄りながら問う。

「な…何なの!?…来ないで!!」

と、罌は後ずさりしながらドラゴンフライにブラシを投げつけるが、それを気にせずドラゴンフライは更に言う。

「街の害虫は…私が駆除する…!!」

「やめて…何でこんな事を…!?」

罌はドラゴンフライに問う。

そして、軽く笑うとドラゴンフライは罌の問いに答える。

「お前の言動で、一人の男子生徒が深く傷付いた…」

「何それ…誰の事…！？」

罌は遂に壁に追い詰められてしまい、逃げ場を無くしながらもドラゴンフライに再び問う。

「南一樹…。お前の駆除はその男からの依頼だ」

ドラゴンフライから南の名を聞いたとたん、罌の顔が驚愕と絶望に包まれ呟く。

「嘘…一樹が…！？」

ドラゴンフライは腕を構え、罌に襲いかかろうとする。

「キエェェェ！！」

「きゃああ！！」

罌は襲いかかるドラゴンフライに目を閉じ、死を覚悟した。

「「やらせるかぁ！！」」

「ぐわっ！？」

だがドラゴンフライが罌に襲いかかる前に、現れた一と南が蹴りを喰らわせ、ドラゴンフライは思わず吹き飛ばされる。

南は慌てて罌に駆け寄り問う。

「罌!!大丈夫か!?」

「いやっ!!」

罌は南の手を払いのけ、怯えた様にどこかへと走り去る。

「罌!!待て!!罌!!」

南は慌てて罌のあとを追い、ロッカールームには一とドラゴンフライが取り残され、ドラゴンフライは罌を追いかけようとするが、眼前に一が立ちはだかる。

「…行かせませんよ?」

「またお前か!!」

と、ドラゴンフライは腹立たしげにロッカーを殴りながら言う。

「マープル!!」

一は離れたマープルを呼び、腹部にドゥーツドライバーを装着した。

■

■

■

同じ頃　どっかの林道。

「嫌やぁぁぁぁ！！」

アカネがマープルに手を引っ張られながらナイトから逃れるべく走る。

「…ブルォォォォォ！！！」

だが、ナイトは高くジャンプし走っている二人の目の前に回り込む。

「…っ！！」

マープルは慌てて方向変換し、アカネの手を引っ張りながら別の方向へ逃げるべく木の裏側に隠れナイトの様子を伺う。

すると、マープルの腹部にドライバーが現れ、マープルは言う。

「今！？無理です！！幹部に襲われて…！！きゃあっ！！」

ナイトが二人に気付き、マープルはアカネの手を引っ張りながら別の方向へ逃げ、植え込みを突き抜け大通りに逃げた。

■　■　■

同時刻　市営プール　駐車場。

一はドラゴンフライから逃げながらマープルに言う。

「…ぁ、畜生!!だから不用意に出歩くなって言ったんだ!!」

「ハァッ!!」

一は慌ててドラゴンフライの攻撃をよけ、一の背後にあった柱は大きく穴が開いていた。

一はドラゴンフライと距離を置くが…ドラゴンフライは攻撃を仕掛けず嘲るように一に問う。

「どうした仮面ライダー…？なぜ変身しない？」

「うっせぇ!!色々大人の事情ってモンがあるんだよ!!」

一は若干混乱して、何か変な事をドラゴンフライに向けて言い放つ。

「この俺に逆らうお前も駆除する…!!」

「黙ってろ、虫野郎…!!」

ドラゴンフライは一にそう言うと再び襲いかかる。

今の一には、マープルの側に起きているトラブルが一刻も早く解決する事を祈りながら逃げるしかできなかった。

■　■　■

同時刻　どっかの歩道橋。

マープルはアカネの手を引っ張りながら階段を二段抜かしで駆け上る。

アカネが息を切らしながら怯えた様子でマープルに問う。

「どないするの、マープルちゃん!?」

さすがのマープルにも焦りが見え始めつい声を荒げながらアカネに言う。

「うるさいッ!!今検索中だから邪魔しないで!!」

マープルは腕時計を見ながらアカネを引っ張り歩道橋の上に登りきると何かを探し始める。

「１５０４…１５２３…１５５８…１６０５!あった!!」

マープルはアカネの視線を辿ると、ゴミ袋を満載したトラックがこちらに向かって走ってくるのが見え、マープルとアカネに言う。

「アカネちゃん!ここから飛び降りるよ!!」

だがアカネは当然反対する。

「はぁ!?マープルちゃんあんた正気!?うち絶対飛び降りんからな!!」

「だったら他にいい方法あるの!?…いい?私が合図したら一気に飛んで!!」

「シュゥゥァァァウ!!」

すると、近くからナイトの唸り声が聞こえ、アカネが振り向くとナイトが猛スピードでこちらに向かってくるのが見え、アカネは更に焦り始める。

「10…9…8…7…6…」

そして、マープルもアカネの手を掴みながら既にカウントダウンを始め、アカネは遂に飛び降りると腹をくくった。

「5…4…3…2…1…せーの、飛んで!!」

「うわぁぁぁぁぁぁ!!くっそぉぉぉぉ!!」

アカネが歩道橋から飛び降りたのとナイトが飛びかかったのはほぼ同時だった……が、僅かに二人の方が早く、ナイトの鋭い剣はアカネの体を切り裂くことはなく空を切った。

「シュゥゥゥゥ…?」

数瞬遅れて二人の体はボスッと言う音とともにトラックの荷台に落ちた。

「……シュァァァァァァァ!!!!」

ナイトはアカネとマープルの消えた道路を見下ろしながら悔しそう

に唸り声を上げ、手すりを苛立たしそうに斬りつけた後、緑色の光と共に人の姿からミックに戻った。

…一方、飛び下りたアカネはゴミ袋の山の中から顔を出すなり泣き出してしまう。

「うわぁぁん!!怖がっだ〜!!」

マープルもゴミ袋の山から顔を出し、一息吸うと一に言う。

「ふぅ…待たせてごめんなさい……いーちゃん、準備はいいよね?」

マープルはそう言うとポケットからドリームメモリを取り出しスイッチを押す。

―ＤＲＥＡＭ!―

ドリームメモリから電子音声が発せられ、アヤノはドリームメモリを構える。

「…変身!!」

マープルはドリームメモリをドライバーの右スロットに装填するとオレンジ色の小さな光と共に一のドライバーの右スロットに転送された。

■　■　■

風都某所　どっかの駐車場。

壁際に追い詰められた一は万策尽きたと悟り、死を覚悟した。

既にドラゴンフライは右手を突き出し青い刃を放とうとしていた。

「終わりだ…」

と、その時ドライバーの右スロットにオレンジ色の小さな光と共にドリームメモリが転送されてきたのを見つける。

一は思わず声をあげ、そのメモリを押し込み一はポイズンメモリを左スロットに装填しドライバーを操作した。

「…助かりました！」

―ＤＲＥＡＭ！ＰＯＩＳＯＮ！―

ドライバーから電子音声が鳴ると同時にメモリの変身メロディが鳴る。

それと同時にドラゴンフライが刃の散弾を右手から発射し、一の体を僅かな旋風と共にオレンジ色と紫の光の欠片が包んでいき、一はドリームポイズンに変身した。

『しゃぁ！！』

ドゥーツは右手を伸ばした方向に体を引き寄せて散弾をかわし、ドラゴンフライにパンチを一発喰らわせる。

「ガッ…！！」

『オラオラオラぁっ！！』

ドラゴンフライはたまらず怯み、ドゥーツはさらに回し蹴りを喰らわせドラゴンフラを吹き飛ばす。

ドゥーツはポイズンメモリをスロットから引き抜き、代わりにバスターメモリを取り出してそれを右スロットに装填しドライバーを操作する。

―ＤＲＥＡＭ！ＢＵＳＴＥＲ！―

ドライバーから電子音声と共にバスターメモリの変身メロディが鳴り、同時にドゥーツの左半身が黒から藍色となり、ドリームバスターとなる。

『こうなりゃこっちのモンだ！！』

『遅れてすいません…。』

ドゥーツはそう言うと左胸部に装備されたバスターマグナムを取り出しドラゴンフライに銃口を向け引き金を引く。

『逝っとけ…！』

トリガーマグナムから金色と青の大きな光弾が放たれ、次の瞬間光弾が十数発程の小さな光弾に分裂し、それぞれ不規則に揺れながらドラゴンフライに向かいながら飛んでいく。

「ヌゥン……でやぁぁッ！！」

ドラゴンフライは両手から散弾を放ち何発かの光弾を相殺する……が、残りは全て命中しドラゴンフライは壁を壊しながら吹き飛ばされる。

ドゥーツは吹き飛ばされたドラゴンフライに今度は通常弾を当て追い討ちをかける。

『今度こそ決めますよ、マープル！！』

『はいっ！！』

一はマープルにそう言い、マープルの意志も右目を明滅させながら答える。

……と、その時、近くには南と罌の姿があった。

「罌…俺「触らないで！！」ッ！？」

南は罌に歩み寄りながら言うが罌に遮られ罌は続ける。

「私の事…殺そうとするなんて…！！」

「そ…それは…「信じらんない！！君の顔何か、二度と見たくない！！」」

南は何とか反論しようとしたが…再び罌に遮られ、罌は走り去っていってしまう。

「罌！！…罌……」

南は再び罌の後を追いかけようとしたが途中で追いかけるのをやめてしまった。

それを見て、マープルの意志が右目を明滅させながら慌て始める。

『えぇ！？二度と見たくないって…じゃあツインカムは一体どうなるんですか！？』

再びドゥーツの右半身の制御が利かなくなり、一はマープルに怒鳴る。

『おい！！！こんな時に何言ってんです！！早く撃って！！』

「…隙ありッ！！」

ドラゴンフライは、二人が揉めているのに夢中になっていると判断し、目にも留まらぬスピードでドゥーツの懐に飛び込み、ドライバーを瞬時に操作して両側のスロットからメモリを二つとも引き抜いた。

一がマープルの意志を何とか押さえ込んだ拍子にドラゴンフライに視線を戻す。

「へへっ、こいつは貰ったぜ…」

ドラゴンフライはドライバーから引き抜いた二本のメモリを両手で弄びながら嘲るように言う。

『ッ！？』

ドゥーツは慌てて視線をドライバーに戻し確認する。

すると、確かに両側のスロットに装填していたメモリが二つとも引き抜かれてしまっていた。

『何！？メモリが…！！…だから言ったのに……！！』

ドラゴンフライに二本のメモリを奪われてしまったドゥーツ。

一体どうするのか…？

■　■　■

「へっへっへっへ……」

ドラゴンフライはドゥーツから奪ったドリームメモリとバスターメモリを両手で弄びながらドゥーツを嘲るように笑う。

『このヤロォ…返しやがれ!!』

ドゥーツはキレ気味に右手を差し出しドラゴンフライに言う。

「お前バカか?返せと言って返すバカはいないんだよ!!ハァァッ!!」

ドラゴンフライはそう言うとドゥーツに猛スピードで駆け寄り、ドゥーツを翻弄しながらダメージを与えていく。

「お返しだ!!」

『ガッ…!!くそっ!!』

メモリを奪われてしまったドゥーツはマーブルとの精神リンクが不安定になり、本来の性能が出せずに一の肉体にアーマーの重量がそのままのしかかる。

一は思うように身動きが取れずただドラゴンフライに翻弄されてしまう。

「ハハハハ！！どうした！？俺はここだぞ！！」

ドラゴンフライはドゥーツを翻弄しながら嘲るよう笑いながら言い、最後に強力なパンチを食らわせドゥーツを吹き飛ばす。

『クッ…動きの速さじゃ奴に勝てねぇ…！！』

ドゥーツはそう毒づき重い足取りで立ち上がるが再びドラゴンフライの突進を受けその場に倒れ込んでしまう。

「畜生…！！だったらこれだ！！」

ドゥーツはそう言うとマジシャンメモリともう一本メモリを取り出しそれぞれ左右のスロットに装填しドラゴンフライがこちらに向かってくるのを待つ。

すると、ドラゴンフライがドゥーツにタックルを仕掛ける。

それにドゥーツは倒れ込み、ドラゴンフライはすれ違いざまにこちらに振り向き再び猛スピードで走り寄ってくる。

『今だ！！』

一はこの瞬間を待ちわび、ドライバーを操作する。

―ＭＡＧＩＣＩＡＮ！ＳＰＩＲＩＴ！―

電子音声がと共にメモリの変身メロディが鳴り、ドゥーツはマジシャンスピリットの姿となり…掌から電撃を放ち、ドラゴンフライを迎え撃つ。

「がはぁッ！！」

ドラゴンフライは大きく吹き飛ばされてしまい、僅かに腹部を抑えうずくまる。

さすがにドラゴンフライのスピードには追従出来ないが、マジシャンの全距離における多彩な技の多さならドラゴンフライのスピードにも対抗できると一は踏んだ。

「うぐぐ…！！」

『そら、続きだ！』

ドラゴンフライがうずくまっている隙にドゥーツはドラゴンフライと距離を詰め、両腕に岩石を纏わせ、ドラゴンフライに殴りかかる。

ドラゴンフライは避けようとするが先ほどのカウンター攻撃のダメージが思ったより深く、思うように動けない。

そして、ドゥーツの鋭く重いパンチを連続して食らってしまう。

「くそっ…！！」

『チッ、またか！！』

ドラゴンフライはドゥーツの攻撃をなんとか高速移動でかわし再びドゥーツを翻弄し始める。

そして、ドラゴンフライはドゥーツの背後を取ると一気に距離を詰め一気に突っ込む。

「もらった！！」

『…青いぞ、ドーパントっ！！』

ドゥーツはドラゴンフライと僅か３０センチの相対距離で素早く振り向きドラゴンフライの右手をつかむ。

「ッ！？し、しまった！！」

ドゥーツの狙いは初めからこれだったのだ。

『どるぁぁぁぁぁ！！』

ドゥーツはそう叫ぶと一本背負いでドラゴンフライを地に投げ飛ばす。

ドラゴンフライは思い切りコンクリートの地面に叩きつけられ、ドラゴンフライの倒れた地面は陥没した。

「ガハッ……！！」

ドゥーツは拳を振り被りドラゴンフライに追い討ちをかけようとするが……ドラゴンフライは素早く起き上がりながら懐に潜り込みドライバーを操作すると左右のスロットからまた二本のメモリを引き

抜く。

『だりゃあぁぁ！！』

ドゥーツはそれに気付かず自らの懐に飛び込んだドラゴンフライに重いパンチを食らわせ吹き飛ばす。

「ぐあぁぁぁッ！！」

ドラゴンフライは大きく吹き飛ばされ壁に叩きつけられた。

『どうだ…蟲野郎。』

程なくしてドラゴンフライがよろよろと立ち上がり、ドゥーツに右手を見せながら苦しげに息をしながらも笑う。

「ぐっ…はぁ、はぁ、はぁ…ハハハハ…！」

『何！？』

ドゥーツはドラゴンフライの見せた右手に握られた物体を見るなり声を上げた。

それは、先ほどまでドライバーに装填していたはずのメモリだったのだ。

『あ…無い！？』

一が慌ててドライバーの左右のスロットを確認すると、確かに左右のスロットからメモリが引き抜かれていた。

またもメモリを奪われ焦るドゥーツをよそにドラゴンフライは言う。

「依頼は必ず果たす……この四本のガイアメモリは戦利品として頂いておくぞ！ハハハハハハ！！」

ドラゴンフライは高笑いしながら猛スピードで駐車場から逃げ出していった。

『…ッ…クソッ！！』

ドゥーツは地を蹴りながら毒づき変身を解き一に戻る。

そして駐車場の外で力無く座り込んでいる南に歩み寄り、一は苛ついた様子で南の胸ぐらをつかみあげ言う。

「おい！！お前のせいでなぁ、メモリを「もう駄目だ……」ハぁ！？」

一がそこまで言ったところで南に遮られ、南は泣きそうな声でさらに続ける。

「アイツとは……完全に終わっちまったんだ……」

そして、ドライバーを通じて二人の会話を聞いていたマープルは一人焦りながら一に言った。

「えぇ！？ちょ、ちょっと待っていーちゃん！！じゃあツインカムは一体どうなっちゃうの！？」

「…知りませんよ…。」

マープルは一人不安と焦りに駆られ一に言った。

■　■　■

鞍坂探偵事務所。

一とマープル、アカネは南を事務所に連れて行き、彼から事情を説明を聞いていた。

「はい、お茶どうぞ。」

マープルはアカネと一、そして南のテーブルの前に番茶の入った湯呑みを置き、自らもお盆を片手に一の隣に座る。

「あ…すいません…」

南はマープルに礼を述べ、マープルは笑顔で返す。

そしてゆっくりとアカネが口を開き、南に手紙とそれに縛り付けていた石を見せながら南に訊ねる。

「この手紙を投げ込んだのは南くんやったんやな?」

南は何も言わずに首を縦に振る。

「だったら何で逃げんねや!?うちアンタん前でここの所長やって

言ったよな！？」

アカネはすごい剣幕で松橋に言う。

「いや、気持ちは分かります！…女子高生が所長じゃあ…そりゃあ不安にもなるでしょう……」

「ふんっ！！」

一がそう漏らした途端、アカネがハリセンを取り出して一の頭を思い切り叩き、スパーン！！という景気のいい音を立て一は体をのけぞらせてしまう。

「だあぁ！！」

「だぁれが「美少女女子高生♪」やねん！！」

「言ってねェよ！！」

一は頭をさすりながらキレ気味に言う。

「それより、どうして彼女が狙われてるって分かったんですか？」

マープルは優しく一に訊ね、南はしばしの間をおいて辛そうな表情でマープルの問いに答えた。

「…闇の害虫駆除に…依頼したの俺なんだ……」

「「はぁ！？」」

突然の南の告白に一とアカネは思わず声を上げてしまい、南はさらに続ける。

「ムシャクシャして掲示板に書き込んじまったんだよ！…つい勢いで…あんな奴死んで欲しいなんて…」

「何でそんなバカな事を……」

一は怒りを通り越して呆れながら南に問い、南はさらに続ける。

「一年前までは上手く行ってたんだよ……。アイツはいつも…二人でやるダンスの事ばかり考えてた……。俺はそんな一直線なアイツが好きだった……アイツは最高のパートナーだったんだよ…。」

南は、思い出すように話し続ける。

「…二人で世界を目指すんだって…オリジナル技のツインカムの練習も始めた。…なのに……それからすぐ、アイツはダンスの練習に来なくなったんだ…。突然水泳部に入りやがったんだ…！」

以下、南の回想。

南は罵に歩み寄り苛立ちを隠さずに問い詰める。

「何で水泳部になんか入ったんだよ！？」

「君には関係ないでしょ！？」

罵もそんな松橋が気に入らないのか、苛つきながら南の問いに答え

る。

だが、南はやはり納得がいかず、罵を壁に突き飛ばしさらに問う。

「はぁ!?ふざけンなよ!!…何か言えよ…!!」

罵は南を何も言わずに睨みつける。

「くそっ!!」

南はそう吐き捨てると苛ついた様子で扉を開けその場を去っていった。

……回想、終わり。

「俺は何でだって問い詰めた!!…だけどアイツは何も言わなかった…!!言い訳も…謝罪も!!…何も言わなかったんだ…!!そして俺は荒んだ……。」

そして南はつらそうな表情になり、続ける。

「そしてある日、俺は闇サイトを見つけて…つい書き込んじまったんだ…。マジだなんて思わねえだろ普通!?…だけど、そのサイトに名前書かれた奴がマジで殺されるって分かって……」

「それで依頼しに来たのですか……あんな幼稚なやり方で。」

一は南に向け静かに問い、南は目を閉じ首を縦に振った。

「何やそれ……自分勝手で最低や！！」

アカネは南に歩み寄り叫ぶように言う。

「……。」

事務所が一気に気まずく重い雰囲気に包まれるが、一がその静寂をやぶり言う。

「…分かりました。とにかくやることは一つ。まず…「あの娘と仲直りすれば、ツインカムを踊れるんですよね？」…はぁ。」

突然マープルに遮られ、一は呆れた様に言う。

「何を言って…！！まずあのドーパント見つけて退治です。メモリ四つも奪いやがったんですから…！！！」

「まあまあ落ち着いてよ、いーちゃん。ちょっと調べものしてくるから、後はよろしく♪」

マープルは一に穏やかな微笑みを向け、足早に地下ガレージへと消えていった。

「ちょっと！！！」

一は地下ガレージに消えたマープルに向かって言った…が。

「貴女の検索抜きでどうやってあの野郎を探すんですか！？」

だが……当選マープルから答えがが帰ってくる事はなかった。

■　■　■

「……。」

そして地下ガレージで、マープルは目を閉じ、宙の本棚へのアクセスを開始した。

瞬間、マープルの体を淡い光が包み、アヤノの脳内に白い空間と無限の書架が現れ、マープルは一人呟く。

「これより検索を開始します。検索項目は《男女の仲直りの方法》。まず一つ目のキーワードは…《男子と女子》。」

マープルが脳内でそう言うと該当しない本と本棚が飛ぶように減っていく。

「…続いて、《ケンカ》《行き違い》《仲直り》。」

マープルがそう言うとさらに該当しない本と本棚が減っていくが数十の本棚とまばらに本が残った本棚が残り、マープルはそれを見ながら困った表情で首を傾げ呟く。

「う～ん…なかなか絞り込めない……」

マープルはおもむろに一つの本棚に歩み寄り、その中から何気なく一冊の白い本を手に取りその表紙をめくる。

「……ふむふむ……。」

しばらくページをめくったところでマープルが笑顔を浮かべ一人言う。

「うん、コレがいいですね♪」

マープルはそう言うと本棚へのアクセスを解除し、おもむろに地下ガレージを後にした。

■　■　■

同時刻　風都某所　とある交差点。

―私はやむを得ず、闇の仕置人の居場所を極めてアナログな方法で探すことにした……―

一はジェントルーダーを駆り、情報提供者との待ち合わせ場所の紅葉公園へと向かっていた。

風都　紅葉公園。

一はジェントルーダーを道路脇に停め、公園に入り情報提供者の姿を探す。

「む…一か。久しぶりだな。」

背後から特徴的な声が聞こえ、一が振り向く。

…とそこには髪型はボサボサロングヘア、無表情だが綺麗な顔立ちをした女性がいた。

「あぁ、木山先生…。急に呼び出してすいません。」

一は申し訳なさげに茶色の長い髪の女性――木山春生に言う。

「気にするな。君が言っていたドラフラーの同人誌…持ってきたぞ。」

と、木山は鞄から一冊の同人誌を取り出し、それを一に手渡した。

同人誌のタイトルには「風都　仕置人疾る」と書かれており、表紙にはドラゴンフライ・ドーパントによく似た（と言っても１００％美化しているが）怪人が描かれていた。

木山は同人誌を手渡し、一はその同人誌を見ながら木山に訊ねる。

「ん？何ですかこの同人誌？」

「裏で出回ってる同人誌だ。その本に書かれている通りに事件が起こるからドラフラーが作者なんじゃないか、と言われている。」

木山は相変わらずの様子で一に言う。

「ふむ…そうなんですか。」

一は同人誌のページを捲りながら呟く。

「ですが…同人誌版の殺人予告……。自信満々ですね……捕まらないつもりでいやがる……」

木山は一の隣に歩み寄り、奥付を示しながら一に言う。

「奥付にも情報がない。それだけで特定するのは難しいぞ。」

木山は無表情のまま一に言う。

一がしばらくページをめくっていると…木山の目にあるページが映り、思わず口にする。

「…風都タワーがこの角度で見えるということは……これは楓区の風景か？」

木山の言葉に一は思わず木山の指し示したページを見ながら言う。

「あ…ホントです！！かなりリアルに描いてますね……もしこれが実際の風景を書いたものだとしたら…このアパートが野郎のアジト…！！木山先生、情報ありがとうございました！！」

「別にいい。…それにしても暑い…」

「ストップです。」

礼を言う一だったが…着ているシャツをおもむろに脱ごうとする木山を必死に止める。

「…暑いんだ…。」

「だからってここで脱がないでください…。」

疲れた様に言った後、一は木山から同人誌を受け取り、足早に公園から走り去っていった。

「…頑張れよ。」

木山は軽く手を振り、微笑みながら一を見送った。

■　■　■

同じ頃　風都　楓区　とあるアパートの一室にて。

…唐突だが、部屋の状態から人間性がわかるとはよく言ったものだ。

その部屋は、あちこちに萌え絵のポスターやフィギュアが置かれた、散らかし放題の、ゴミ部屋の主と呼ぶに相応しい澱んだ目にボサボサの髪の男――島川が霧彦に電話をかけていた。

「えっ!?仮面ライダーからガイアメモリを奪った!?本当ですか!?」

男はドゥーツから奪ったガイアメモリを見ながらスピーカー越しの霧彦に言う。

「スピリット…マジシャン…ドリーム…バスターだとさ。」

「よ、四本もですか!?」

「とりあえず一通りスロットに差し込んでみたが何も起こらん……何故だ？」

「あぁ…それはドライバーが無ければ意味がありませんからね。」

「ドライバー？」

「そうです。ヤツとその片割れが装着しているベルトの事です。…それと片割れの持つガイアメモリさえあれば、あなたはもっともっと凄い仕置人になれますよ♪」

「もっと凄い仕置人…？」

「そうです♪…奴らを倒してベルトを奪う……出来ますね？」

「ふん、簡単だ…。…いずれその片割れとやらの方のドライバーとガイアメモリも手に入れてやる。」

「あははは、大した自信ですねぇ。…ではまた後ほど…期待して待っていますよ♪」

霧彦は島川にそう言うと通話を切り、携帯電話をスーツのポケットにしまいこむ。

「嬉しそうね…」

冴子が現れ、相変わらずの抑揚のない声で霧彦に言う。

「冴子…帰ってたのか。面白いニュースがあるよ。仮面ラ「言わな

くていいわ…結果であたしを喜ばせてちょうだい」僕は君をガッカリさせるような事はしないよ。」

霧彦はそう言うが、冴子は呆れた様子で霧彦に返す。

「そうだったかしら?……期待しないで待ってるわ…」

冴子はそう言うとそのまま歩き去っていき、廊下には霧彦だけが取り残された。

■　■　■

「俺の力を見くびるな……この害虫を駆除すればきっとアイツも現れる…」

島川は同人誌の原稿を書きながら一人呟く。

そして原稿の最後の仕上げを終え、その原稿を眺めながら口にする。

「両方とも完璧にやってやる……！！」

島川はそう言うと原稿を床に置き再び別の原稿を書き始めた。

■　■　■

風都　どこかの路地裏。

「はぁ、はぁ、はぁ…」

南とドラゴンフライから逃げ出したは息を切らしながら走りつづける。

罌はさすがに疲れきり、肩で息をしながら物陰に隠れ様子を伺う。

「誰もいない…」

そして、罌の背後から誰かの手が伸び、その手は罌の肩に置かれる。

「……！！」

その謎の手が罌の肩に置いた瞬間、シズクの体は硬直し、体中から冷や汗がどっと吹き出る。

そして、罌は錆び付いた機械のようにゆっくりと背後を向く。

「きゃあっ！！」

振り向いた先にいたのはドラゴンフライ……ではなく、少し大きめの男物のコートを羽織り、その中に白色のタンクトップと長ズボン、髪には黒いダイヤ型の髪留めをつけた優しげな顔立ちをした少女――マープルだった。

「あっ、ご、ごめんなさい！！脅かすつもりはなかったんですけど…」

マープルは驚いた罌を見るなり頭を下げる。

「あ…あの…あなたは？」

罌はマープルに問う。

「あぁ…今ここで話すと長くなりますし…今は私に付いてきてください。」

「えっ…？」

罌は何故かマープルの言葉が信用でき、罌はマープルのあとをついていった。

■　■　■

同時刻　風都　楓区。

一は木山からもらった同人誌を見くらべながら辺りを見回す。

「う～む…絵の中の関係地からするとここのはずなんですが……」

と、一が辺りを見回していると、一件のアパートが目に入った。

そこは、ボロボロのアパートで、廃れている…と言うよりは、腐ってるような印象を持つ。

一は同人誌のアパートと目の前のアパートを照らし合わせ、確信を持ち一人呟く。

「間違いない…」

一はそう言うと足早に階段を上り始めた。

■　■　■

鞍坂探偵事務所。

「おい！？何なんだよいきなり！俺をどうするつもりだ！？」

南はアカネに目隠しをさせられ歩かされながらも問う。

「うちかて知らんがな！アヤノちゃんに聞いて…や！！」

と、南をリボルギャリーのプラットフォームに乗せ、南は目隠しを外した。

そこには、同じように目隠しをした罌がいた。

「罌…！？」

南の声に反応し、罌もマープルに付けられていた目隠しを外し、南に言う。

「君…！？」

「な、何でお前こんな所に…！？」

南がそう言ったとたん、リボルギャリーのシールドが閉じていき、南と罌はリボルギャリーに閉じ込められてしまう。

「!?おい!!何だよこれ!!開けろー!!」

「開けてよー!!」

南と罌が完全に閉じきったリボルギャリーのシールドを開けるよう言うがシールドは一向に開く気配を見せない。

アカネとマープルは二階に上り、金網の床に手を起きながらその様子をながめている。

「……これで、よしと♪」

アカネが何か不安そうな表情でマープルに問う。

「ちょ、どういうこっちゃ!?」

マープルは笑顔を浮かべアカネの問いに答える。

「え?仲直りする最高のシチュエーションを検索してみたらこれが出たんです。暗くて狭い所でね、二人でじっくり話し合えばいいんだって♪」

「いや、それ学園モノのラノベの話やんか!?大体上手く行くんか!?」

だが、マープルは真剣な面立ちで事の顛末を見届ける。

リボルギャリーの内部では再び南と喬の口論が始まった。

「…ボクを殺そうとした奴と同じ空気なんか吸いたくないのに…！」

「本気じゃなかったっつってンだろ!?だから探偵に何とかしてくれって依頼までしたんだよ!!」

「自分で原因作ったくせに恩着せがましく言わないでよ!!」

「恩着せがましくなんか言ってねェよ!!」

「悪いのは君でしょ!?」

「あぁ!?お前だろ!!」

「…ダメやないか!?つか余計悪くなっとるやんか!!」

アカネが金網に手を掛けながら南と喬の口論を聞きつつ、マープルに言う。

「む～……？」

マープルはただ何も言わず南と喬の口論を聞いていた。

■　■　■

風都　楓区　とあるアパート。

一は鼻を摘んで声を変えながらおもむろにアパートの一室のドアをノックしながら言う。

「島川さーん？シロネコ急便でーす。ハンコお願いしまーす。」

一が声を変えながらそう言うと、ドアを開けてそこから島川が出て来たが、島川は一の顔を見るなり慌て始める。

「あっ！お、お前は！？」

「おっと。」

島川は慌ててドアを閉めようとするが…一にステッキで止められてしまう。

そして、一は僅かに開いたドアを開けながら島川を睨みつけ言う。

「テメェが蟲の正体か…！」

一はドアを蹴破り、島川は吹き飛ばされるが何とか立ち上がり部屋の奥へ逃げようとする。

若干、口調がチンピラになっているのはご愛敬。

「ひ、ヒィィィ！？」

「お届けものは暴力……代金は、メモリ四本と四分の三殺しで勘弁してやらぁ…」

一は指をパキパキ鳴らしながらさりげに物騒な事を言い、島川を追い詰めるべく土足で部屋に入り込みながら島川を狙う。

「くっ…！！」

そして、窓辺に追い詰められた島川は一から奪ったメモリ四本の入った箱を持ち微かに笑みを浮かべながら言う。

「お前とやるのは鰐島罌を始末してからだ…！！」

島川はそう言うと青いガイアメモリを取り出し、それを左の足の甲のスロットに差し込む。

―ＤＲＡＧＯＮＦＬＹ！―

メモリから電子音声が発せられ、手塚は淡い青色の光と風と共にドラゴンフライ・ドーパントに変身し、おもむろに窓を開けそこから飛び降りるとそのまま走り去っていく。

一は窓から身を乗り出しシケードフォンを取り出し命令を言う。

「追跡開始。位置情報を逐一送りなさい。」

―Ｙｅｓ　ｓｉｒ―

シケードフォンが無機質な電子音声で一に返し、それを聞いて一はシケードフォンにギジメモリを装填した。

―ＣＩＣＡＤＡ―

シケードフォンから電子音声が発せられ、ライブモードに変形すると一の手から飛びたちドラゴンフライの追跡を始めた。

―ｐｉｐｉ…！！―

ドラゴンフライは素早くジグザグに動きながらシケードフォンを撒こうとするが…シケードフォンもその動きに合わせながらドラゴンフライを追跡し続ける。

…シケードフォンには内蔵されたレーザービーコンを標的に照射し、その標的をマークすることで自動で追跡する事ができる機能が内蔵されている。

シケードフォンはライブモードの変形を解除するか、バッテリーの続く限り目標をどこまでも追い続ける事が出来るという訳だ。

「煩いハエめ…フッ！！」

ドラゴンフライはシケードフォンに向き直ると左手を突き出し、散弾をシケードフォンに向けて撃つ。

シケードフォンは突然のドラゴンフライの行動に対処出来ずそのまま散弾を食らってしまい、ライブモードの変形が解け、内面の基盤が見えるほどにボロボロになりながら地面に落ちた。

「ククク…。」

そして、それをみてドラゴンフライは不敵な笑みを浮かべるのだった……。

■　■　■

鞍坂探偵事務所。

「なぁ…これって所謂一つの逆効果ってやつやないか？」

「えぇ…早くツインカム見たいんですが…」

アカネの言葉にマープルが残念そうに呟く。

「……あ、そうだ。」

相変わらずの口論を続けている南と罌の声を聞きながらマープルはある一つの考えが浮かんだ。

マープルはおもむろに南のカバンからラジカセを取り出し再生ボタンを押した。

…そして、リボルギャリーの内部では相変わらず南と罌が口論を続けていた。

「いい加減にしろよ！！」

南が罌の胸ぐらをつかみあげながら叫ぶように言う。

「はぁ!?君がそんな事言える立場だと思ってるの!?」

罌がそれに負けず叫ぶように南に言う。

「お前が勝手に辞めたりなんかしなきゃこんな事にはならなかったンだよ!!」

「何言ってんの!?じゃあ君はどうなの!?さっきから人の気も知らないで自分の事ばっか言って…」

「何意味の分からねェこと言ってンだよ!?ふざけんじゃねえよ!!」

―……～～♪～♪～～♪―

すると、突然外から聞き慣れた音楽が聞こえ、罌はその音楽を聞くなり突然涙ぐみ始めた。

「!?……。」

南はそんな罌に歩み寄り、罌に問う。

「お前……まさか…?」

南はようやく罌が自分から離れた理由が分かったのだ。

そして、罌は南に向き直り、涙ぐみながら口を開く。

「ボク…いつも君に引っ張って貰ってばかりだったから……互いの力ぶつけ合って、高めあえるようになりたかったの…」

南はようやく落ち着きを取り戻し、南は罟に問う。

「嘘だろ…お前…この曲でシンクロの練習してたのか？」

「…そうだよ…シンクロはバランスが崩れたら成立しない競技だから…何か掴めるかなって思ったから……」

「だ、だったら何で言ってくれなかったんだよ？」

南は罟に問い、罟はなおも続ける。

「言ったら…きっと絶対甘えてたから……」

「罟……」

南は思わず罟の名を言う。

罟の目からはすでに涙は消え、笑顔で南に言う。

「だってボクは……絶対に君と世界一になりたかったから…」

そして今度は南の目から後悔の涙が流れ始め、罟に涙ながらに言う。

「ぐすっ…ごめん…罟……俺…お前の事誤解してた…悪かった…」

だが、罟はそんな南を諭すように答える。

「…もういいよ…ほんとはボクも…寂しかった……」

そして、南は笑顔を浮かべながら雫に言う。

「……もっかいやろうぜ？二人で…」

南のその言葉に雫は笑顔で返した。

その頃、リボルギャリーのシールドの外面に耳を当てながら二人の会話を聞いていたアカネは鼻水をすすりながら涙ぐみながら言う。

「ぐすっ…ずびっ…ようやったなぁマープルぢゃ～ん！！ぐすっ…うぢ感動してもうたぁ…」

そんなアカネにマープルはハンカチを手渡し、笑顔で言う。

「はい、マープルちゃん。涙はこれで拭いてね？」

そう言うと、アカネはマープルからハンカチを受け取り、涙を拭いた後勢い良く鼻をかんだ。

「あぁぁぁぁ！？」

マープルは思わず声を上げてしまう。

そして、アカネは笑顔を浮かべながらマープルに鼻水でベタベタになったハンカチを手渡し、礼を述べる。

「マープルちゃん…おおきに！！」

「は…早く洗濯しないと…！」

マープルはがっくりとうなだれてしまう。

「マープルちゃ～ん、ハンカチなんか後で洗えばええやんかぁ！！そんな事よりあの二人にツインカムを見せて貰うんやなかったんか？」

「はっ！？そうだった！！」

アカネのその言葉にマープルの表情に光が戻り、リボルギャリーの内部の二人に向かって呼びかける。

「南く～ん！罌ちゃ～ん！！今そこ開けますからー！ツインカムお願いしますねー！」

アカネはそんなマープルを微笑ましく見つめていた。

「…あ、電話しとかないと…。」

マープルは玄関で靴を履きながらシケードフォンを取り出し一に電話をかけていたが…留守電につながってしまう。

『はい、左乃宮です。只今電話に出られないので発信音の後にメッセージをどうぞ。』

「もしもしいーちゃん、取り込み中だったらごめんなさい。こっちは解決したから、これから南くんと罌ちゃんにウェザーサイドスクエアでツインカムを踊って貰うことになったの♪祐規くんも早く来て下さいね？それじゃ、愛してますよ♪」

マープルは上機嫌でスピーカーに軽くキスをし、シケードフォンの

通話を切りポケットにしまい込む。

「おーいマープルちゃ～ん、早よ行くで～？」

「待ってて下さい！今戸締まりしてくいから！」

マープルは外にいるな三人にそう言うと玄関に鍵をかけ、事務所を後にした。

だが、マープルが一にかけた電話は一ではなく…ドラゴンフライが聞いていた。

「ウェザーサイドスクエアか……」

ドラゴンフライはそう呟くとシケードフォンを投げ捨て、猛スピードでその場から走り去った。

■　■　■

風都某所　ウェザーサイドスクエア。

南はラジカセのスイッチを入れ、音楽を流し罵と共に軽快なステップを踏みながら軽やかなダンスを踊る。

南も罵も生き生きとしたいい表情をしていた。

マープルはその様子をまるで子供のようにきらきらと目を輝かせながら二人のダンスをじっと見つめ、呟く。

「い、いよいよ…ツインカムが…やっと見られる…！！」

そんなマープルにアカネは言う。

「うち…マープルちゃんのそんな顔初めて見たで！！」

「…そう？」

アカネはマープルに笑顔を向け問う。

「あぁ！！すごく生き生きしててええ顔しとるで！！」

マープルは何も答えず喜々とした表情で二人のダンスを見つめる。

すると……突然近くのマンホールの蓋が外れ、それは円盤のように回転しながら罟の膝に命中した。

「きゃあっ！！」

「罟！！どうした！？」

罟は思わず声を上げ、南は罟に歩み寄る。

すると、マンホールからドラゴンフライが飛び出し二人に言う。

「害虫の駆除は徹底的に行う…！！」

「や…やめろ！！もう良いんだよ！！お前なんかお呼びじゃないんだよ！！はぁぁぁぁ！！」

南はドラゴンフライに蹴りかかるが逆に取り押さえられ、柱に叩きつけながらドラゴンフライは南に言う。

「依頼の撤回は許されない…」

ドラゴンフライはそう言うと南を吹き飛ばし、南は柱に叩きつけられ、ドラゴンフライは笑いながら南に歩み寄る。

「ガッ…！！」

「…ふ、ハッハハハハハハハハ！！！」

そして、マープルは罵に歩み寄るなり叫ぶように聞く。

「踊れる！？ねぇ、踊れるんですか！？」

「は…えぇ！？」

突然のマープルの言葉に罵は唖然とする。

「アンタこないな時に何言うてんねん！？」

アカネは鞄から携帯用のハリセンを取り出しマープルの頭を思い切り叩きながら言うが、マープルはそんなアカネをよそに罵に訊ねる。

「踊れるの！？ツインカムを！！」

マープルの問いに答えるべく罵は足に力を込めるが瞬間激痛が走る。

「痛ッ…！！だめ…せっかく二人の〔波〕が掴めそうだったのに…！！」

「《波》…？」

罌の口にした波という言葉にマープルはしばし考え込むと、はっとした様子で罌に言った。

「…分かった…！！それが最後のキーワードだったんですね！！」

すると、マープルの脳内にあの錠前のかかったツインカムの本が現れ、ＷＡＶＥという文字が眼前に浮かび上がると緑色の小さな光と共に小さな鍵に変わる。

それが本の錠前の鍵穴に差し込まれるとかちゃりという音と共に錠前が外れ本が開き、そこから勢い良くページが連続で飛び出していく。

ツインカムの記述とリズムの振り付けの写真がコマ送りのように再生されていくのを見ながらマープルは一人言う。

「ツインカムの鍵は二人で生み出す《波のリズム》にあったんです…！」

そう言うとマープルは速攻でアクセスを解除した。

一方、南はドラゴンフライに反撃を試みるもこれまでに食らったダメージのせいで体が思うように動かせず、最後にドラゴンフライに殴り飛ばされ、柱に叩きつけられ力なく座り込んでしまう。

ドラゴンフライはマープルたちの方に向き直るとゆっくりと歩み寄ってくる。

「フフフ…。」

「…待てやぁ！！！」

すると、バイクのエンジン音と共に一がジェントルーダーを駆り急停車させた。

「随分遅かったですね、いーちゃん。さぁ、早速いきますよ？」

「え？はぁ…」

一はメットを外しジェントルーダーから降り、マープルの隣に並び立ちドライバーを取り出し腹部に装着する。

同時にマープルの腹部にドライバーが具現化しマープルはアッシュメモリを取り出しスイッチを押す。

―ＡＳＨ！―

アッシュメモリから電子音声が発せられ、続いて一がポイズンメモリを取り出しスイッチを押す。

―ＰＯＩＳＯＮ！―

ポイズンメモリからも電子音声が発せられ、二人は同時にメモリを構え、同時に口にする。

「「変身！！」」

マープルがメモリをドライバーの右スロットに装填したのと同時に、アッシュメモリが灰色の小さな光と共にそこから消え、一のドライバーの右スロットに転送される。

一はそれを押し込み、ポイズンメモリを左スロットに装填し、ドライバーを操作する。

―ＡＳＨ！ＰＯＩＳＯＮ！―

ドライバーから電子音声が発せられ、同時にメモリの変身メロディが鳴ると一の体を僅かな旋風と共に紫と灰色の光の欠片が覆っていき、一はドゥーツに変身し、マープルは糸の切れた人形のように地に倒れ込んだ。

ドゥーツはマフラーを風にたなびかせ、ドラゴンフライに向け指を指しながらお決まりのセリフを言い放つ。

「「さぁ、天罰タイムだ！！」」

ドラゴンフライはそれに臆することなく自分の腰に付けたメモリのホルスターを指差しながら言う。

「今度こそお前のメモリの全て頂く…そのベルトも一緒にな…」

『くっ…』

一は一瞬毒づく。確かにこれ以上メモリを奪われてしまえば後がない。

『いーちゃん、今回は私に任せて下さい♪』

『えっ？』

マープルの意志がドゥーツの右目を明滅させながら一に言うが、一が答えるより早くマープルは体の制御を奪ってしまう。

ドゥーツはまるでダンスのステップを踏むかのようにドラゴンフライに向かっていき、以前のキックボクシングスタイルとは全く違い、まるでヒップホップを踊っているかのような戦術でドラゴンフライを翻弄していく。

「なっ…グハッ、ガッ！！」

『Ｙｅａｒ！！』

『…なるほど…こういうのも、悪くないですかね…。』

マープルはすでにノリノリでドラゴンフライの足下にカポエラを叩き込む。

途中から、一も合わせて踊るようにしたので、その威力にドラゴンフライは足下を掬われ転んでしまう。

一方アカネ達はドゥーツのその戦い方に見とれていた。

「凄い…あんな戦い方が出来るなんて…」

アカネは思わず呟く。

ドゥーツはジグザグに動きながらドラゴンフライになかなか隙を与えず、ドラゴンフライに蹴りを叩き込む。

そして先ほどと同じようにジグザグに動きながらドラゴンフライの首に回し蹴りを食らわせ、ドラゴンフライは体勢を崩してしまう。

『ふふふふ♪』

マープルは完全にこの戦いを楽しみ、ドラゴンフライはなんとか反撃しようとするもドゥーツのトリッキーな動きで全てかわされる。

『Ｙｅａｒ！！』

「うわぁっ！！」

ドゥーツはドラゴンフライに回転蹴りを喰らわし、ドラゴンフライは地に倒れ込んだ。

「やっべえ…！！俺たまんねぇぜ！！」

（ＢＧＭはＣｌｉｍａｘ　Ｊｕｍｐ　ＧＵＮ　ｆｏｒｍ）

南はそう言うと軽やかにステップを踏み、ドラゴンフライにパンチを叩き込み、ドゥーツはキックを叩き込む。

ドゥーツは右目を明滅させながら踊り、マープルの声色で南に言う。

『南くん！！』

南も顔を喜々としながらドゥーツに言う。

「アンタは好きに踊っててくれ!!俺が勝手に合わせるッ!!」

南はそう言うとドラゴンフライに回し蹴りを叩き込む。

一はなんとか左半身の制御を取り戻し、マープルに言う。

『ちょっと、本気ですか!?あの餓鬼、一般人ですよ?!!』

『ふふっ♪Ｙｅｓ！ｙｅａｒ!!』

マープルはそう言うと再び一から左半身の制御を奪い、ドラゴンフライにツイストキックを喰らわす。

「そらぁ！」

『えいっ！』

ドラゴンフライは二人の息の合ったコンビネーションとフェイントに翻弄されなかなか反撃できない。

「クッ…お前ら…うわぁッ!!」

ドラゴンフライは毒づくが相変わらず隙を掴めない。ドゥーツが南をつかみ、南がドラゴンフライに回転蹴りをかます。

「『Ｙｅａｒ!!』」

二人はしばし互いに踊り、南は僅かに体を仰け反らせドゥーツの両

手を掴み、ドゥーツは両足を広げ、カポエラのような姿勢を取る。

「うりゃあああ！！」

南は叫びながら同時に回転を始め、ドゥーツは左手を前に突き出し南の回転を受けながらドラゴンフライへ向かっていく。

瞬間、辺り一帯に強い風が吹き荒れ始める。

「これは……」

罌は、ドゥーツと南の動きを見ながら呟く。

瞬間、南の上のドゥーツがポイズンメモリの力を受け、毒々しく両足が光ると…南はゆっくりと倒れ込み、自らを足場とする。

「…教えてやるよ…ツインカムの本当の名前、それは…！！」

そして、南を足場としたドゥーツが、ドラゴンフライに踵で凄まじいアッパーを繰り出す。

「『Ｂａｃｋｗａｒｄ　Ｃｒｏｓｓ　Ｒｉｄｅｆａｌｌ　Ｕｐｐｅｒ　Ｆａｎｇ”ＴＷＩＮＣＡＭ”！！』」

「ガッ…！！アァアアアアアア！！！」

ドラゴンフライはその攻撃の前に何もできず、一発で体からホルスターが外れ吹き飛ばされてしまう。

その様はまさに一撃必殺の牙…ＦＡＮＧの名に相応しいものだった。

そしてドゥーツは南から降り、ドラゴンフライから外れたホルスターをキャッチした。

「すげェ…すげえよアンタ！！今のがアイツが見たがってたツインカムだ！！」

その言葉に倒れたマープルの顔が、わずかにほほ笑んだ。

『えぇ！！これが…ツインカムなんですね！！』

マープルの意志はドゥーツの右目を明滅させながら喜々とした声色で言うと、一に体の制御を戻し、一に言う。

『いーちゃん！メモリブレイク、行きますよ！！』

『はい！！』

一はマープルにそう返すとドライバーの左右のスロットからメモリを引き抜き、代わりにに右スロットにドリームメモリを、左スロットにバスターメモリを装填しドライバーを操作する。

―ＤＲＥＡＭ！ＢＵＳＴＥＲ！―

ドライバーから電子音声と共にメモリの変身メロディが鳴り、ドゥーツはアッシュポイズンからドリームバスターへ変わる。

『さて…。』

ドゥーツは左胸部にマウントされたバスターマグナムを外し構える。

「ッ！？ひぃぃぃっ！！」

ドラゴンフライは情けない声を上げながらその場から逃げ出そうとする。

『逃げても無駄ですよ…？』

だが、ドゥーツは逃がすつもりなど毛頭ない。

『まぁ…最後と言うことで…』

ドライバーの左スロットからバスターメモリを引き抜き、バスターマグナムに装填する。

―ＢＵＳＴＥＲ！Ｍａｘｉｍｕｍ Ｄｒｉｖｅ！！―

『悔い改めな…！！』

バスターマグナムから電子音声が発せられ、同時にエネルギーチャージ開始を告げる電子音が鳴り砲撃用の銃身を起こし、チャージ完了を告げる電子音が鳴り、ドゥーツは銃口をドラゴンフライに向け、叫ぶ。

『『バスター・フルバースト！！』』

ドゥーツが引き金を引くと、バスターマグナムの銃口から幾つもの光弾が凝縮された砲撃が放たれ、逃げるドラゴンフライに向け不規則な軌道を描き、全てドラゴンフライに命中した。

「うわあぁぁぁぁぁッ！！」

ドラゴンフライに光弾が全て命中し、ドラゴンフライは絶叫と共に爆発した。

『ふぅ…あとは刃さん達に任せますか…』

ドゥーツはそう呟き、バスターマグナムをくるくる回しながら一息ついた。

「ぐっ…うぅ……俺の…メモリ…！！」

島川はドラゴンフライの変身が解け、苦しげに呻きながら砕けたメモリに手を伸ばすが、僅か２０センチあまりの所まで伸ばした所でそのまま意識を手放した。

「ぁぁ……！！」

■

■

■

ウェザーサイドスクエア。

一からの通報を受けた刃野とマッキーが島川に手錠をかけ、パトカーに乗せようとするが、島川はなおも抵抗する。

「…チッ…！！」

「ほら！！さっさと歩けって！！」

「話は署についたら俺達が聞いてあげるから大人しくな…。」

マッキーは島川に向かって怒鳴りつけながら、島川をパトカーの後部座席に押し込めて、刃野はいつも通りの態度で島川に言い、二人は島川を挟み込む形でパトカーの後部座席に乗り込み、パトカーはその場から走り去った。

霧彦はその様子を遠くから見つめながら呟く。

「次こそ…待っていろ…！！」

霧彦はそう言うと足早にその場を去っていった。

■

■

■

翌日　鞍坂探偵事務所。

一は机のパソコンに面し、報告書の文面を呟きながらキーボードを叩く。

「罟さんの足は幸い軽い怪我で済んだ。いずれ一樹と二人で世界を目指すだろう……」

一はソファに腰掛けにゃんま〇のぬいぐるみを抱きながら本を読んでいるマープルに視線をやり、内心で呟きながら再び羽ペンで羊皮紙に報告書を綴る。

（それにしても……マープルだ…。…今回は怪我の功名でしたが…何かにのめり込んだマープルは迷惑以外の何物でもない…）

「…んな事ないと思うで？」

「うぉ！…なんです？」

いつの間にか後ろにいたアカネに心を読まれ、一は一瞬ビクッとするが、アカネはマープルを見ながら更に続ける。

「ストリートダンスの話しとる時のマープルちゃん…めっちゃええ顔しとったからなぁ…きっとあの情熱がマープルちゃんを変えてくれそうな気がするんや。あ、せや！」

アカネがはっとした様子で近くに置いてあった手紙を持ち出しをマープルに歩み寄り手紙を見せながら言う。

「マープルちゃん、あの二人から手紙来とったで？復帰一発目のイベントでツインカムやるつもりで練習始めたんやて♪」

マープルは手紙を手に取り軽く目を通した後アカネに言う。

「ふぅん…そうですか。だけどもう興味無くなっちゃったの。」

マープルはつまらなさそうな表情をしながら手紙を一瞥しくしゃくしゃと丸めるとそのままゴミ箱に投げ捨てた。

「えええええ！？」

驚くアカネをよそに、マープルは再び目をキラキラさせ嬉々とした

表情でアカネに言う。

「それよりね、すっごい山見つけたの！！ねえアカネちゃん、《富士山》って知ってる？」

―…前言撤回。やっぱり…何かにのめり込んだ時のマープルは…迷惑以外の何物でもないのだ……―

一はマープルを見ながら思わずこけそうになり、内心で呟きキーボードを叩く。

「標高約３７７６メートル、約一万一千年前に噴火を始めたんだって！！」

マープルは顔を嬉々としながらアカネに言い、アカネはそれから数時間…一が空腹を訴えるまで延々と富士山に関する講習を受ける羽目になった…。

# Dを探せ／ダンシングヒーロー（後書き）

～予告編～

「…お前がこの世界のライダー…仮面ライダードゥーツだな？」

「…なんです、貴方は？」

「俺の名は…」

事務所に突然現れた、謎の男。

「…な、なんですかここはぁぁ？！」

「…あの手紙開けたから…ここに来たんですか？」

異世界に飛ばされた、一とマープル。

『この世界は、われわれスターライトが支配する！！』

『俺達はレジスタンス…世界を守るため、戦ってるんだ。』

星空の力を使う、異世界の仮面ライダー達。

「そんな！？地球（ガイア）メモリの記憶が、宇宙の星座の記憶を…？！」

「…これは、ガイアメモリじゃねぇ…これは、銀河系（プラネット）メモリの記憶。全てを記憶する、最強のメモリ達だ。」

そして、現れる最凶最悪の仮面ライダー！！

『俺の名前は…仮面ライダーコンステレーション。早速だが…滅びろ。』

―SAGITTARIUS！MaximumDrive！！―

『『『『『ウワアアアアアアアアアアアアアアアアアアァァァァァァァァ！！！！？？』』』』』

そして生まれ出る、新たなるドゥーッ！！！

「…死ぬかも…しれないんですよ？」

「…貴女となら、どこへでも。」

―MAXIMUM・ASH！MAXIMUM・POISON！―

今、新たなる戦いの疾風が吹く…

【劇場版　仮面ライダーDOTWO　STAR、S　漆黒の星々】

近日、投稿。

■　■　■

鞍坂探偵事務所

「……暇ですねぇ…。」

「…はい…そうですねぇ…。」

今日の鞍坂事務所は、とても平和だった。

昨日まではペット探しが嵐の様な数であったが、なんとかすべて片付き…今日、一週間ぶりに暇な時間が出来たのである。

ついでに言うと今、アカネも買い物に出掛け、事務所に現在いるメンバーは、マープルと一の二人だけなのである。

「……なにもする事ありませんねぇ……。」

「…ねぇ…。」

一が椅子でぐっと体を伸ばし、マープルがソファでゴロゴロしていると…急に、事務所の扉が開く。

「おっと…お客ですか？」

「…ん？」

一が服を直し、立ちあがると…そのドアが開いた先には、一人の男がいた。

その男は、短く刈った茶髪で、首からはマゼンタ色のトイカメラをかけている。

服にはなにやら模様が描かれており、それはバーコードとなにかの仮面を合わせた様な絵柄だった。

「……。」

「いらっしゃいませ…どんな依頼も紳士的に解決、鞍坂探偵事務所に何のご用でしょうか？」

その男は、営業スマイルを浮かべ、紳士的に対応する一を見て、軽く一瞥し、ゆっくりと事務所の中に入っていく。

「…ちょ、ちょっと…。」

「…珍しいな…。」

男は、慌てる一も気にせず、喋り始める。

「この世界は、Wの世界の残像と、他の世界からの細かな記憶が混ざってできている…ここまで来ると、残像とはいえないな…もう、しっかりとした世界だ。」

「……なんなんですか？」

「…お前達がこの世界のライダー…仮面ライダードゥーツだな？」

「…なんです、貴方は？」

「俺の名は…」

と、男はそこで言葉を切り、懐から一つの封筒を出し、渡してくる。

「まぁ、そんなことはどうでもいい。お前らに依頼だ。ある奴等を助けろ。」

「…ある奴等？」

「ああ。詳しくは、その封筒でも見ておけ。」

そう言うと男は、もう自分の役目は終わったとばかりに後ろを向き、歩いていく。

「…貴方、名前は？」

去り際に、一はぽつりとそれを聞いた。

「…ディケイド。門矢士だ。」

そして、その男…士はそのまま歩き…ドアにたどり着く前に、現れた銀色のオーロラの中へと入り、消えていく。

「！？」

「…今…消えて行きましたね、あの人。」

驚く一と、全く動じていないマープル。対象的すぎる。

そして、マープルはその封筒をあっさりと解き、開こうとする。

「ちょ、ちょっと!?」

「…?なんですか?」

「今の男、何者か分からないのにそんな封筒見るんですか!?」

慌てる一に、マープルは落ち着いて言う。

「別に、ドーパントではないみたいですし、大丈夫だと思いますよ。」

「…まぁ、そうですが。」

ドーパントとは、怪人形態になってやっと能力を発揮するものだ。

人間形態のまま封筒を渡したのなら…心配はないはずだ。

「じゃ、開けますね。」

「…は…はい。」

ゴクリと生唾を飲み込み、緊張する一。

そしてゆっくりと封筒を、マープルが開けると……目の前に、先

ほどの男のように銀色のオーロラが現れる。

「なっ…マープル！」

「キャッ？！」

一はとっさにマープルを庇うように抱きかかえるが…しかし、それも徒労に終わり、一とマープルは二人一緒に銀色のオーロラに飲み込まれてしまう。

……そして、二人はその場から消え…ちょうどその時、大きな紙袋を抱えたアカネが帰ってくる。

「…ふぃ～…ただいま！今帰ったで！！」

…だが、その部屋に一とマープルの二人はいない。

「あれ？二人とも…どこ行ったんや？」

アカネの疑問に答える者は…いなかった。

■　■　■

銀色のオーロラによって、事務所からその姿を消してしまった一とマープル。

その二人は今…なぜか、廃墟と化したとある町の一角にいた。

「…なんですか…ここは…。」

「ほぇぇ…。」

一瞬にして、風都ですら…いや、日本かどうかも分からない土地に飛ばされたのだ。

一は愕然とし、マープルはぽかんとしている。

「…と、とりあえず…当たりを探索してみましょう。ここがどこか分かるかもしれませんし。」

「はぁい。」

一が何とか冷静になり、そう言ってマープルの手を握り、歩き出す。

そして、歩きながら周りを見てみると…改めて、どれほどこの惨状がひどいものかが分かる。

周りは、コンクリートの壁が崩れ、鉄筋がはみ出している欠片などが多いが…よくよく見てみると、そこら中には薄い赤茶色の飛沫の後の様な物がある。

空気のにおいにも、鉄臭い物と硝煙の様なにおいが混じっている。

「…なんですか…この町は…？」

「いろいろとおかしいですけど…なんで、血しぶきはあるのに死体が無いんでしょう？」

「……ええ。その通りです。」

…これまで、仮面ライダーとしても、探偵としても修羅場を何回も潜り抜けてきた一。

一は昔、探偵業として人探しをしている時、拳銃を持ったドーパントに襲われ、必死で倒した経験もあり、それから拳銃などの武器に関しての知識はなかなか博識である。

その経験を踏まえてこの町を見ると…確かに、いくつもいくつもおかしい点はある。

まずはじめに、当たりには明らかに致死量の血の跡があるのに、死体が無いこと。

そして、死体が無いうえに、さらに先ほどまで戦っていたように硝煙の臭いがすること。

「…せめて、死体があってもいいはずなのに、それが無い…なにかと戦闘していて、喰われたという可能性もありますが…。」

「後、味方が死体を持っていき、埋葬した…と言うのも無しですね…それにしては、硝煙の臭いが濃いです。」

そう二人が言いながら歩いていると…急に、近くの瓦礫が爆発する。

「「ッ!?」」

二人は、とっさにドゥーツドライバーとガイアメモリを構える。

…そして、爆煙が収まったところを見ると……そこには。

「…ドーパント…。」

体中を鮮血で染め、方には人の死体を乗せている何体もの同じ姿をしたドーパントがいた。

その姿は異様で、まず胴体が二本の輪っかの中に何か大量の糸の、不規則に脈動する球体があり、四肢はその体から数十ｃｍ離れたところで浮いている。

その四肢も奇妙であり、まず手には腕が無く、まるで隕石の様な丸い岩石から、銀色の半円が指の様に生えている。

足は、銀色の長靴の表面を岩石と砂でゴツゴツさせた様な形だ。

頭蓋にいたっては言わずもがな。単なる球体に似た石にギョロリとした一つ目が付いているだけだ。

―…◆…〒…¶…ㄖζ……？―

―…£ΦΠ……？―

そのドーパントは、なにか機械音声の様な言葉で喋り、動きは全くない。

「…マープル、行きますよ。」

「はい。」

一はドライバーを腹部に装着する。

それと同時にマープルの腹部にドライバーが具現化しマープルはアッシュメモリを取り出しスイッチを押す。

―ＡＳＨ！―

アッシュメモリから電子音声が発せられ、続いて一がポイズンメモリを取り出しスイッチを押す。

―ＰＯＩＳＯＮ！―

ポイズンメモリからも電子音声が発せられ、二人は同時にメモリを構え、同時に口にする。

「「変身！！」」

マープルがメモリをドライバーの右スロットに装填したのと同時に、アッシュメモリが灰色の小さな光と共にそこから消え、一のドライバーの右スロットに転送される。

一はそれを押し込み、ポイズンメモリを左スロットに装填し、ドライバーを操作する。

―ＡＳＨ！ＰＯＩＳＯＮ！―

ドライバーから電子音声が発せられ、同時にメモリの変身メロディが鳴ると一の体を僅かな旋風と共に紫と灰色の光の欠片が覆っていき、一はドゥーツに変身する。

そして、ごつごつとした地面に倒れそうになったマープルの身体を支え、ゆっくりと瓦礫の上に座らせる。

ドゥーツはマフラーを風にたなびかせ、ドーパント達に向け指を指しながらお決まりのセリフを言い放つ。

『『さぁ、天罰タイムだ！！』』

ドゥーツはそう言い終わると同時に、ドーパント達めがけて殴りかかっていく。

『オラオラオラァ！！』

―Ψνσ…！？―

ドゥーツは、まず近くにいたそのドーパントに殴りかかるが…そのドーパントは軽く吹っ飛んでしまい、後ろにいた他のドーパント達も巻き添えに転がっていく。

『……弱っ。』

『確かに、これなら鍛えてる人間なら十分倒せそうですね…。』

マープルの言う通り、そのドーパントは今までのドーパントとは一線をかした弱さだった。

これならば、なにかの武術をある程度学んでいるものなら倒せなくはないほどだ。

『…多分、人海戦術でも使ったんでしょうね…』

『はい。』

二人はそう会話しつつも、確実に周りにいたドーパント達の数を減らしていった。

そして、一は藍色のメモリを取り出し、ボタンを押す。

―ＢＡＳＴＥＲＤ！―

『一気に片付けましょう。』

一は、そのバスターメモリをドライバーの左スロットへ入れ、ドライバーを操作する。

―ＡＳＨ！ＢＡＴＥＲＤ！―

そのメモリの変身メロディが鳴ると、ドゥーツはアッシュバスターへと変身する。

『悔い改めな…！！』

そして、胸にマウントされたバスターマグナムを構えると、ドゥーツは次々と引き金を引き、ドーパント達を攻撃していく。

『さぁ…ジャンジャン行こうか。』

『…って言っても、もう基本いませんけどねー。』

一がカッコよくセリフを言ったが…周りには、マープルの言った通

り、もう敵のドーパントは数体しかいない。

―…Д…◆Г！―

と、その時ドーパントの一体が死体に近づき…どこからか、一本のメモリを取り出し、ボタンを押す。

―ＳＴＡＲ！！―

そして、そのメモリを死体に差し込んだかと思うと…死体はすっくと立ち上がり、まわりのドーパント達と同じ姿に変わる。

『なっ！？』

『死体を…ドーパントに！？』

―……。―

―ＳＴＡＲ！―

―ＳＴＡＲ！―

―ＳＴＡＲ！―

―ＳＴＡＲ！―

―ＳＴＡＲ！―

―ＳＴＡＲ！―

―ＳＴＡＲ！―

二人は驚くが…そんな暇もなく、他のドーパント達も自分が担いでいた死体にメモリを差し込み、ドーパントへと変える。

『くっ…！！これじゃいくら倒しても無駄…！！』

『…どうすれば…！！』

二人が、絶望していた…その時。

―…待て待て待てぇぇぇ！！！―

『え？』

どこからか、バイクのエンジン音と人の声が聞こえるのに気付いた一。そして、声のする方を振り返ると…

「ハッハッハ！！オレ、登場！！」

「お、カッコイイッスね、先輩！」

『…なんだ、あれ？』

そこには、迷彩柄の服を着た、まるでゲリラの一派の様な姿をした男二人が、バイクに跨っていた。

「俺様…蟹沢八社宮（カニサワハサミ）の目の前で、女の子は攻撃させないぜ！」

「うわ、名乗りかっこいい…俺も、なにか考えるっス。」

…その、蟹沢と名乗ったロングの茶髪の男と、もう一人のなにか三下っぽい喋り方をした坊主の黒髪の男はそう言うと、懐からドゥーツドライバーの左スロットが無い様なドライバー…ロストドライバーと、メモリを取り出す。

『『ガイアメモリ!?』』

『それに、ドライバーまで…!?』

一とマープルが驚いていると、その二人は腰にドライバーをつけ、ベルトにするとメモリのボタンをそれぞれ押す。

―ＣＡＮＣＥＲ！―

―ＰＩＳＣＥＳ！―

「変身！」

「変…身ッ！！」

二人はそう言うとドライバーにメモリを差し込み、またドライバーを操作する。

―ＣＡＮＣＥＲ！―

―ＰＩＳＣＥＳ！―

その変身メロディが鳴ると…二人は、変身していた。

蟹沢は、ライトグリーンの目を持ち、黒と赤の混じった様な色の、何かの殻の様なアーマーで全身を覆い、頭部には大きな角と、もう一本それよりは小さい角が生え、蟹のハサミを縦にしたようなデザインにも見える。

額には、上を向いた三日月の触角の様な物もあり、腕には曲線を描いた手甲の様な物が装備されている。

そして、もう一人の男は両腕にヒレの様なカッター、全身を鱗…スケイルの鎧で固めている。

頭には蟹沢と同じ三日月の意匠があり、目は深い黄色。まるで、半漁人を思わせるような姿だった。

『ハッハッハ！！仮面ライダー…キャンサー！！』

『仮面ライダーピスケス…またの名を、漁甲林映（ぎょこうりんえい）！！』

『『行くぞ！！』』

そう言って、ピスケスとキャンサーはドーパント達めがけて走り出す…！

■　■　■

『ララララァ！！』

『セイッ、セイ、セイヤァ！！』

…スター・ドーパント達に立ち向かっていったキャンサーとピスケスは、なかなかの強さを見せていた。

キャンサーは、腕に付けた手甲を開き、まさに蟹のハサミの様な武器にして、殴りかかり。

ピスケスは腕のカッターで、まるで泳ぐ魚の様に素早く動き、すれ違いざまに何回も斬りつけていた。

『…なかなか強そうですね…。』

『はい…。あ、いーちゃん、ちょっと言わなきゃいけないことがあるんですが。』

『ん？なんですか？』

不思議そうに言う位置に、マープルは言いにくそうに言う。

『…検索、出来ません。』

『…えぇ!?』

テヘッ、となぜか恥ずかしそうに言うマープルは兎も角、一は驚愕する。

『なぜか、ここだと本棚に接続できないんですよぉ!!』

『…どうするんですか、これから…。』

と、一とマープルの二人が話していると、もうドーパントは全て倒され…その場にいるのは、マープルの身体、ドゥーツ、キャンサー、ピスケス…それだけになった。

『…さて…残ったのは…。』

『こいつだけ…ッスね。』

『…こいつ……って!?』

ドゥーツがそう呟くが早く、キャンサーがこちらに向かって走り、殴りかかってくる。

『うわっと!?』

『ハハハ、スターライト、一人だけでもライダーは潰すでぇ!』

『スターライト…?なんです、それは?』

『とぼけないでほしいッス…ね！！』

『いーちゃん危ないっ！』

『えぇっ！？』

キャンサーが言った言葉に、一が不思議そうに答えると…右から、ピスケスが腕を振りかぶって襲ってくる…が、マープルの意思が慌てて叫び、バスターマグナムでピスケスを撃つ。

『助かりましたっ！』

『どうも…！！』

そして、ドゥーツはバスターマグナムを構え、マープルの身体を庇うように立つ…が、キャンサーとピスケスは唖然とした様に立ちつくしている。

『…男の声と、女の声…両方した？』

『なんだよ、こいつ…って、メモリも二本あるし！！』

『今更ですか。』

驚いている二人に、ドゥーツはツッコむ。

『と言うか…ねぇ。』

『はい。私達、二人で一人ですから。』

『…二人で一人？』

『どういうことッスか？』

あっさりと答えるドゥーツに、キャンサーとピスケスは問う。

『…そちらも変身を解除してくれるなら、いいでしょう。』

『ああ、いいけど。』

『はい。スターライトじゃないみたいッスし。』

…逆に、こちらもあっさりと答えるキャンサーとピスケス。

『…では。』

ドゥーツ、キャンサー、ピスケスは同時に変身を解き…人間に戻る。

「…どうです？これでいいですか？」

「なんだ、男じゃないッスか…女の声、どこから？」

一がそう言うと、ピスケスの変身者…漁甲は肩をすくめてそう言う。

「あ、ここからですよ。」

「おわっ！？」

瓦礫の上にいたマープルが向くりと起き上がってそう言うと、キャンサーの変身者…蟹沢は、オーバーリアクションで驚く。

「あぁ、マープルお怪我は?」

「大丈夫ですよー。」

寝ていたマープルを一が優しく抱き上げると…後ろの蟹沢と漁甲は嫌そうな顔になる。

「チッ…出来てんのかよ。」

「残念ッスねー。」

「だれにも渡す気はしませんしね…。」

そう、雑談していると…マープルが割り込んでくる。

「あの、ここってどこなんですか?」

「…あぁそう。私もそれが聞きたかったです。」

「ここがどこか?」

一もマープルも、それが一番聞きたかったことだ。だが、その質問に二人は不思議そうな顔をする。

「ここがどこかって…そんなの、日本に決まってるじゃないッスか。」

「日本って…あんなにドーパントがいて、それでいて日本?…信じられませんね…。」

一がそう言うが、蟹沢は呆れた様に言う。

「なにいってんだ？日本は今どこでもこんな感じだろうが。」

「そうそう。これも全部ガイアインパクトの所為で…。」

「…ガイアインパクト？」

「……本当、お前たちどこから来たんだ？」

そして、蟹沢達と一達は、この現状について話し始める……。

■　■　■

「…なるほど。そう言うことですか…。」

「信じられないですね…。」

「こっちだって信じられないッスよ…銀色のオーロラだとか何とか。」

「ああ。全くだ…。」

お互い、話し合った結果…驚くべきことが分かった。

まずはじめに…この世界が、一達がいた世界ではないことだ。

蟹沢達の話によると、今は西暦２０７２年。

そして…ガイアメモリを販売する親玉、園咲家がガイアインパクトという『ガイアメモリに適合する者以外をすべて殺す』計画を実行し、そのせいで人類は滅亡の危機となった。

しかし、ガイアインパクトは半分成功し、半分失敗したのだ。

地球では、今ガイアメモリを使っていない人間がいるのは、日本とアメリカ等の大国ぐらいで、それもごくわずかな数しか生きていないらしい。

それ以外のドーパントとなれる人間達は、今まで通りの生活をし…そして、園咲家を中心とした国家を作り上げ、暮らしていた。

だが、そこで一つの問題が起こった。

その国家が続いてから数十年後…地球は、滅亡の危機にさらされたのだ。

地球に、巨大な彗星が近づき、しかもそれは回避不能だというのだ。

どれだけ強大なメモリの力を使ってその隕石を破壊するかを園咲は考えたが…ドーパントには、宇宙で活動できるものは『ＲＯＣＫＥＴ』ぐらいの物で圧倒的に少ない。

例え一番現実味のある作戦でも、地球に存在するドーパント達をすべて集め、地球ギリギリに近づいたところで破壊する…というものだ。

園咲家は、その事実に気付き絶望した…だが、そこで現れた者たちがいたのだ。

その地球滅亡と言う運命を、救った者たちが。

「…それが、スターライト…ですね？」

「ああ。」

改めて一が質問すると、蟹沢は重々しく頷く。

「スターライトは…園咲家が諦めたところにいきなり現れ、【星座の記憶】を持つ特殊なメモリを使って、その彗星をどうにかしてみせる、と言ったんだ。」

その言葉に、マープルは驚いている。

「地球の記憶（ガイアメモリ）が、宇宙の星座の記憶を…？！」

そう言ったマープルに、蟹沢は自分が持っているメモリを取り出し、見せながら言う。

「…これは、ガイアメモリじゃねぇ…これは、銀河系の記憶（プラネットメモリ）。全てを記憶する、最強のメモリ達だ。」

「…プラネットメモリ…。」

そして、そのスターライト達は今、彗星を止めるためにこの世界の宝である、黄道十二宮のメモリを探しているのだという。

「黄道十二宮と言うと…獅子座とか、蟹座とかのあれですか？」

「ああ、そうだ。黄道十二宮と言うのは…」

と、一の疑問に蟹沢が答えようとすると…マープルは、ペラペラと喋り出す。

「…黄道十二宮。サイン（英語　ｓｉｇｎ）またはアストロロジカル・サイン（ＡＳＴＲＯＬＯＧＩＣＡＬ　ＳＩＧＮ）は、西洋占星術などのホロスコープを用いる占星術において、獣帯を黄経で１２等分したそれぞれの領域。獣帯（ＺＯＤＩＡＣ）とは、天球上の黄道を中心とした、惑星（太陽・月などを含む）が運行する帯状の領域である。」

「……。」

「……。」

「サインは古くは宮（きゅう）と呼ばれていた。１２のサインを合わせて十二宮や黄道十二宮と言う。なお、１２サインの基点である白羊宮の０。をどこに定めるかは、占星術の流派などによってさまざまだが、大きく分けてトロピカル方式とサイデリアル方式のふたつに「はい、ストップです。」…む。」

このままでは、ずっと喋りつづけるだろうマープルを、一は口を押さえて止める。

漁甲と蟹沢は、ポカーンと口を開いてそれを見ている。

「…貴女、検索はできないのでは？」

「今まで検索した事があるの位は、覚えてますよぅ…。」

呆れた様に言う一に対して、マープルは悪びれも無くそう言う。

「なんか…すごい人みたいッスねー。」

「あぁ…。」

まだ、蟹沢達はポカーンとしている。

「…あ、話の続きお願いします。」

「は、はいッス。」

そして、また漁甲は話し始める。

「…で、さっきのスターライトの奴等は、その十二宮のメモリのうち、9本を持っていて…。」

「9本と言うと?」

「えっと、人馬宮、天蠍宮、処女宮、宝瓶宮、白羊宮、双児宮、獅子宮、磨羯宮、操蛇宮…この9本ッスね。」

「…そう言ういいかたですと、分かりにくいですね…。」

「…で、残りの巨蟹宮、金牛宮、双魚宮、天秤宮…の四つがこちらにあるんですね?」

マープルが、目をキラキラさせながら聞くと、蟹沢は若干引きながら答える。

「ぁ…ああ。巨蟹宮はオレ。双魚宮は漁甲、金牛宮はリーダー、天秤宮が天ヶ橋ってやつがそれぞれ持っている。」

「成程…で、貴方達も地球を救うのに協力しようした…だけど。」

「はいッス。実はスターライトの連中はその彗星を利用して、地球征服だかなんだか、そういうことを考えてたそうッス。」

…スターライトのリーダー、星海銀河が所有するメモリは、ＣＯＮＳＴＥＬＬＡＴＩＯＮ。【星座の記憶】のメモリだ。

その力を利用して【星屑の記憶】のＳＴＥＲメモリを大量に生みだす。

そして星の記憶を持つメモリを結集し、彗星…いや、地球すらも全て支配下に置く、と言うのがスターライトの目的なのである。

「…しかし、大量生産できるメモリ、と言うのもいやはや…。」

「で、もともとその銀河の仲間だったうちのリーダー、牛山さんがそれを阻止するため、運良く生き残った不適合者達と、銀河に反対する適合者を集めて、ロストドライバーとメモリを盗んだんッス。」

「で、スターライトに反旗を翻す組織…【レジスタンス】を作った、と。」

「ああ。…で、お前らの話を聞いてたんだが…その封筒、まだ持っ

てんのか？」

「え？…ああ、ここにありますよ。」

蟹沢達による説明が終わると、次は逆に蟹沢達が質問を始める。

蟹沢に何気ない疑問に、一はとりあえず懐の中にしまっていた封筒を取り出す。

「さっき言ってた男は、その封筒の中に詳しい事がはいってるだか何だかいってたんだろ？」

「ええ。」

「…封筒の中、見たのか？」

「……あ、そう言えば見てませんね…。」

そこで初めて気付いたのか、一は開いていた封筒の中を今更ながら確認する。

「……何か分かりませんが…これだけが入ってましたね。」

そう言って、一は一枚の書類の様な物を取り出し、読み始める。

「えっと…【仮面ライダーコンステーションである星海銀河を止めろ】…とだけ。」

「…それだけか？」

「はい。それ以外には、その星海の顔写真とライダーのスペックぐらいしか書いてありませんね…。」

その書類には、その星海の顔写真と、まるで流星と天使をモチーフにしたかの様な、純白のライダーの絵があった。

「…パンチ力３０ｔ、キック力４５ｔ…うわぁ。」

「……ドゥーツのスペックは、アッシュポイズンでパンチ力９ｔ、キック力１２ｔ。現時点パワーだけなら最強であるマジシャンスピリットの場合でも、パンチ力１５ｔ、キック力２５ｔ…。」

「はいはい、ストップして下さい…。…では、蟹沢さん。」

「お、なんだ？」

ブツブツと何かまた止まらなくなりそうだったマープルを止め、一は一転真面目な顔で蟹沢に向かう。

「私達を、今だけでいいですから…貴方達の仲間に加えていただけませんか？」

「…ふぅん。ま、確かにお前らの事情が本当であれば…止めるのは、レジスタンスが妥当やろうしな。」

「お願い…出来ますか？」

一がそう言うと…蟹沢はニヤッと笑い、続ける。

「ええで。お前らは強そうだし…ま、事情は牛山さんには伏せとく。

適当にごまかしとくから、安心しとけ。」

「ありがとう、ございます。」

「いいッスよいいッスよ。こんな時代で、困った時はお互い様っすから。」

「……。」

一が蟹沢達と話している間、マープルは静かに封筒と書類を見つめていた……。

■

■

■

「……さて。マープル、何か気付いてますね？」

「…はい。」

一は蟹沢達と共に、レジスタンスのアジトに向かうため、ジェントルーダー（試しに呼んだら、銀色のオーロラを通って出てきた）に乗っていた。

その途中、一はジェントルーダーの後ろにタンデムしているマープルに問いかける。

「…いーちゃん、いつから気付いてました？」

「最初からです。貴女が静かなのは珍しいですからねぇ…。」

少し驚いたように言うマープルに、一はあっさりと答える。
その返答に、なぜか少し笑ったマープルはまた話しだす。
「…実は、あの封筒の中にもう一枚、紙があったんです…。」
「ほぅ?私が見たときは確かに一枚でしたが…」
「二重底みたいに、口が二つあるんですよ。いーちゃんの開け方ではあの書類が。…で、私の開け方では、もう一枚が。」
一に抱きついてタンデムしているからか、身振り手振りはできないものの、なるべくわかりやすいように説明していくマープル。
「…で?その書類には何と。」
「一つは意味が分からなかったんですが…もう一つには、ドゥーツの新しい力についてでした。」
それを聞くと、一の顔が少し固まり…また、話しだす。
「意味が分からない方と言うのは?」
「はい、それが…この世界について書かれていたみたいなんですが、一部変なところがあって…、」
「ふむ?」
「なんでも、「ＰＡＲＡＤＩＳＥ・ＬＯＳＴ」、「ＥＰＩＳＯＤＥ

ＦＩＮＡＬ」、「ＧＯＤ・ＳＰＥＥＤ・ＬＯＶＥ」、「Ｗの世界・ＩＦ」の四つの世界の残像が融合し、生れ出た世界。全て原始とは違う世界の物語で、ディケイドが復活した際に新たな世界として生まれ出た残りカスが混ざり合って生まれた…と。」

マープルが言った単語と言葉に、一は顔をしかめる。

「…パラダイスロスト、エピソードファイナル、ゴッド・スピード・ラブ、そしてＷの世界・ＩＦ…。わけが分かりませんね。」

直訳してみて意味を探ろうとしても、【失楽園】【最後の物語】【神速の愛】…訳が分からない。

「それにもう一つ…ディケイドと言う物。」

「あの依頼人…門矢士が名乗ってた物と同じなんでしょうか？」

二人の脳裏には、あのトイカメラを肩にかけた謎の男…門矢士の事が浮かぶ。

「…それは分かりませんが…。まぁ、なんとかなるでしょう。」

「楽観的ですね…はぁ。」

ため息をつくマープルを背に、一はバイクを走らせるのだった…。

■　■　■

「…さ。着いた着いた…ここが俺ら【レジスタンス】のアジトだ。」

バイクを走らせて数十分。

蟹沢達がバイクを止めたところは、まるで何かの災害にあった後の様なテント村だった。

「おぅ！！今帰ったぞー。」

「ただいまッス！！」

蟹沢達の後ろに付き、そのテント村に歩いていくとなぜか警備する者は居らず、ホームレスの様な姿の数人がこちらを値踏みするように見ていた。

そして、蟹沢達がそのまま歩いていくと、近く似た浮浪児の様な格好の子供が数人近づいてくる。

―蟹沢ー！お帰りー！―

―お土産、お土産ー！！―

「おう、ただいま！」

「大丈夫だったッスか？」

「…なんだか、思っていたのと違いますねぇ…もっと警備がきついかと思っていました。」

「はい…。」

一とマープルは、優しく子供達を放している蟹沢と漁甲をみて、なんだかほのぼのした気分になる。

「…おう。帰ったか、お前ら。」

「あ、リーダーただいまッス！」

そして、二人が子供達と戯れていると…こちらもゲリラの様な服を着た、ガタイのいい男が近づいてくる。

「おう……ところで、そこにいる二人は誰だ？」

「あぁ…これは挨拶が遅れましたね。私の名は左乃宮一（さのみやはじめ）。こっちはマープルです。」

「よろしくです。」

二人は、牛山にぺこりと一礼する。

「ふぅん…で、こいつらはドーパントか？」

「ちょ！！」

そして、真顔でそう続けた牛山を見て、さすがに突っ込む一。

「いや、その人達は仮面ライダーッスよ！」

「ライダー……まさか、【操蛇宮】のメモリの適合者か？」

「えっと…なんのメモリでしたっけ？」

「…。私は、【病毒の記憶】【神霊の記憶】【砲撃の記憶】…そして、【紳士の記憶】の適合者です。」

「私の方は、【灰燼の記憶】【夢の記憶】【奇術師の記憶】です。」

「…はぁ！？」

牛山が驚愕する。…まぁ、無理もない話であるが。

けれど、実際ドゥーツに変身するためには、メモリにそれなりの適性がなければいけない。

一の場合、適合率はポイズンが９２％、スピリットが６４％、バスターが６２％、ジェントルマンが５９％である。

対してマープルは、アッシュが９７％、ドリームが８７％、マジシャンは９０％…と、これほどの適正がない限り、ドゥーツに変身することはできないのだ。

強いて言えば、ドライバーとメモリの適性さえあれば誰でも…とは

いかないが変身することはできるということである。

「なんだそりゃ…変なドーパントか？」

「いえ、ドーパントでもありませんから。」

「私達は、仮面ライダーです。」

「それも…二人で一人の、ね。」

かっこよく一が決め台詞を言うが…牛山は、全く見ちゃいない。

「ま、美人が言うことは本当だろう。信じる。」

「……リーダー…その性格、直した方がいいッスよ？」

「そうそう…いまいち、信用できない。」

そう言う牛山に、蟹沢と漁甲はうんざりした表情で言う。

「何を言う…美人嘘つかない。」

「…リーダー…いい加減になされては？」

「っと…天ヶ橋か。」

牛山が真顔でそう言っていると…後ろから、一人の優男が出てくる。

「…その人達…いえ、男の方も、嘘は言っていないようですし…信用できますよ？」

「……お前が言うなら、確かだな。」

その短い黒髪の優男…天ヶ橋は杖を持ったまま、頷く。

「…どういうことです？」

「あぁ…天ヶ橋サンは元占い師で、【天秤宮】の適合者なんッス。で、適合したからかは知らないんッスが…なんでも、真実を見分けることができるとか。」

「へぇ…。」

「…まぁ、こちらへどうぞ。暖かい食事もありますよ？」

「ありがたい…とりあえず、マープルにあげて下さい。」

ためらわずにそう言う位置に、マープルは声をかける。

「別に、いーちゃんが食べていいですよ？」

「いえいえ。こういうときは女性に譲る物ですよ。」

「おお、紳士ッスねぇ…。」

頑なにそう言う一に、漁甲は感心したように言う。

「当然です。こういう事が男を磨く…と聞きました。」

「受け売りッスか。」

「ええ。」

そんな風に会話している漁甲と一に、天ヶ橋は微笑ましそうな笑顔を向け…テントに向かって歩いていく。

「おい、漁甲…行くぞ？」

「あ、はいッス先輩！」

蟹沢に言われ、漁甲もテントに向かっていく。

「…はぁ。なんでこんな事になったのやら…？」

「まぁ、今更ですよ？」

「…ですね。」

疲れた様にそう言う一に、マープルが笑顔でそう言い…二人も、テントに向かって歩いていく。

■　■　■

テント村　離れの広場。

「……ふぅ。」

テントで食事をこ馳走になってから数時間後。

一はテント村から離れた広場に出て、一人煙草を吸っていた。
そこはテント村の周りの様な松明も少なく、薄暗い場所となっていた。

「…禁煙で久々だが…うめぇなぁ…。」

と、一がもう一本、と煙草を取り出した時、一は後ろに人の気配を感じる。

「誰ですか？」

「…私ですよー？」

そう言って笑顔で一の後ろから出てきたのは、マープルだった。

「…マープル、もう夜も遅いですし…寝てはどうですか？」

「それ、いーちゃんが言えます？」

笑顔でそう言うマープルに、一は苦笑しながら煙草をしまう。

「痛いところを突かれましたね…。」

「でも…いーちゃんの素顔、久々に見れましたから、いいですかねー？」

「素顔って……あぁ。」

…一は、今でこそ紳士的な敬語で話しているが、昔は札付きのワル…と言うか、チンピラ紛いだった。

それを、自身が【旦那】と尊敬する男…鞍坂鍛治に一度完膚なきまでに潰され…それ以来、紳士的な男、と言う物に憧れ、この口調になったのである。

……まぁ、偶にチンピラ口調が出るのは否めないが。

「あの頃は若かったんですよ…。」

「いまもたまに出てるじゃないですか。」

「…うぅ…。」

あっさりと論破され、項垂れる一を見て、マープルは微笑ましそうな笑顔を向ける。

……と、その時。

―…あぁっと……ちょっと失礼？―

「「！！？？」」

二人は、どこからか聞こえたその声に反応し、即座にドライバーとメモリを構えるが…そこには、その声の主であろう男が立っていた。

その男は、どこか冒険者の様な雰囲気をしており、その雰囲気の通りにリュックを背負い、登山具の様な物を履いている。

……だが、その服装には違和感しかない。なぜなら、そんな旅支度の様な持ち物をしておきながら…その身を包む服は、黒いスーツとサングラスだったからだ。

「…なんです、貴方？」

―そんなに怖い顔しないでくれよ…この格好は、俺もそんなに好きじゃないんだからね…―

その男は、なんだかうっとうしそうにスーツの裾を引っ張っていたりしながら話し続ける。

なぜかその男の声は、目の前にいる男から聞こえているはずなのに、どこか遠くから響いているように聞こえた。

「…一体、何の用ですか？」

―…ったく、紅君ももうちょっといい服あったと思うんだけど…って、あぁ。実は…ちょっと、忘れてた事をしなきゃいけなくてね。―

「忘れていたこと…？」

男はそう笑うと、手をぐっと握り…その手を開き、その中から人を両脇から押さえこむ様な形の象形文字を浮かび上がらせる。

―よっと。―

「…ッ！？！？」

そして、その男はその文字を軽く指で弾く。すると、その文字はガラスが砕けるように「パキン」と音を立てて粉々になり…そして、その途端にマープルの様子がおかしくなる。。

「ァ…AAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!」

「マープル!?」

―え、こんな感じになるの!?―

マープルが、苦しそうにそう叫び声をあげ…それを見た一は血相を変え、さらにはその現象を起こしてであろう男も驚く。

そして、一は殺意すらこめた視線で男を睨み、叫ぶ。

「貴方…何をしたんですか!?」

―ちょっと…封印を解いただけなんだけど…少し、やり過ぎたかも。―

「はぁ!?」

そして、そんな風に一達が会話していると…突如、叫び声をあげていたマープルがガクンと体を震わせる。

…………更に次の瞬間、そのマープルの周りに緑色の数字やアルファベットが渦を巻いて集まり…マープルを中心として、空中へと浮かび上がっていく。

「いったい、なにが…！？」

そして、一がそう言ったのをきっかけにしたように、マープルは顔をむくりと上げ、その瞳から光を失った目で、口を開き、喋り出す。

「…本棚ノ制限ヲ全テ解除。コレヨリ、全世界ノ仮面ライダーニツイテ検索ヲ開始シマス。」

そして、その一言を言うと、マープルは一瞬黙り、間をとる。次の瞬間、マープルは息継ぎすらしない一気読みで、喋り出す…。

「カメンライダー１ゴウホンゴウタケシカメンライダー２ゴウイチモンジハヤトカメンライダー３ゴウブイスリーカザミシロウカメンライダー４ゴウライダーマンユウキジョウジカメンライダー５ゴウＸジンケイスケカメンライダー６ゴウアマゾンヤマモトダイスケカメンライダーナ７ウストロンガージョウシゲルカメンライダー８ゴウスカイライダーツクバヒロシカメンライダー９ゴウスーパーワンオキカズヤカメンライダー１０ゴウゼクロスムラサメリョウカメンライダー１１ゴウブラックカメンライダー１２ゴウブラックＲＸミナミコウタロウカメンライダー１３ゴウシンカザマツリシンカメンライダー１４ゴウＺＯアソウマサル仮面ライダー１５ゴウＪセガワコウジ…以下、ＬＥＧＥＮＤＲＩＤＥＲ、Ｓノ全テヲ閲覧終了。続イテＮＥＷＲＩＤＥＲ、Ｓの情報保存に移行します。」

「マープル…！？」

その異様な光景に、一

「…カメンライダー１７ゴウクウガゴダイユウスケ・オノデラユウスケ、カメンライダー１８ゴウアギトツガミショウイチ・アシカワショウイチ…以下Ｇ３―Ｘ・Ｇ３―マイルド・Ｇ４・アナザーアギ

ト・ギルス…カメンライダー２４ゴウ龍騎シロトシンジ・タツミシンジ…以下ナイト・シザーズ・ゾルダ・リュウガ・ファム・ライア・ベルデ・ガイ・インペラー・アビス・オーディン・オウジャ・タイガ…カメンライダー３８ゴウファイズイヌイタクミ・オガミタクミ…以下デルタ・カイザ・オーガ・サイガ…カメンライダー４３ゴウブレイトケンザキカズマ・ケンダテカズマ…以下カリス・ギャレン・レンゲル・ラルク・ランス・グレイブ…カメンライダー５０ゴウ響鬼ヒビキアスム…以下ザンキ・イブキ・トドロキ・ダンキ・サバキ・エイキ・シュキ・ゴウキ・トウキ・バンキ・カブキ・キラメキ・トウキ・ニシキ・ハバタキ・フブキ・ヤマブキ・カチドキ・ゲンキ・アカツキ・ミチビキ…カメンライダー７２ゴウカブトテンドウソウジソウジ…以下ガタック・ザビー・キックホッパー・パンチホッパー・サソード・ドレイク・コーカサス・ケタック・ケタロス…カメンライダー８２ゴウ電王ノガミリョウタロウ…以下ゼロノス・ネガ電王・牙王・幽汽・ＮＥＷ電王・Ｇ電王…カメンライダー８９ゴウキバワタルクレナイワタル…以下イクサ・サガ・アーク・レイ…カメンライダー９４ゴウディケイドカドヤツカサ…以下ディエンド・キバーラ…カメンライダー９６ゴウＷヒダリショウタロウソノザキライト…以下アクセル・スカル・エターナル・ジョーカー…カメンライダー１０１ゴウＯＯＯヒノエイジ・オトギリレイム…以上現在マデノオリジナルライダーヲ検索終了シマシタ。本棚デ保存ヲ開始シマス…。」

そういうと、マープルの体は、重力を思い出したかの様にゆっくりと地面に落ちてくる…

「おっと！！」

一は、慌ててそのマープルを抱きとめ、そして黒服の男を睨む。

―悪かったね、俺もそんな風になると思ってなかったけど……―

「お前は…いったい…！！」

―俺？俺の名前は…―

男がそう言うと、その姿が蜃気楼のように歪み、徐々に消えていく。

―…雄介。五代雄介。―

男がそう言うと、その姿は完全に消える。

「な……！？」

一は、その男がいたはずの場所を、ただ見ていることしかできなかった…。

■　■　■

男…五代雄介と会い、マープルに不思議な事がおこった後、一はマープルを抱きかかえてテントに戻った。

そして、夜が明け…次の日。

一はテント村で一番上等のベッドにマープルを寝かせ、（毛布が無いので）自分の上着を優しくかけ、その隣で少しだけうたた寝しつつも看病を続けたのであった。

「……ぅ……む。」

夢うつつになりながらも、隣にずっといた一。

テントの薄い布から漏れている朝日に目を細めながら、一はマープルの寝顔を心配そうに見つめていた。

「…ぅ…ぅん…。」

と、その時マープルがそう唸り、寝返りをうつ。

それを見た一は椅子からガタンと立ち上がり、マープルのそばに駆け寄る。

「マープル…!?大丈夫ですか!?」

一は、あくまでも優しくマープルの肩をゆすり、意識が覚醒するように促す。

「ン……ぃーちゃ…ん?…」

「マープル…!」

目をこすりつつ、一をぼぅっと見つめるマープル。

「…いーちゃぁん…。」

「ん?どうかしました?」

マープルが、まだ少し呂律が回らないまま一を手招きし、自分のそばによせる。

そして、近づいた一にマープルはするりとその白い腕を伸ばし、首に抱きつく。

「え、ちょ!?」

「ぇへへ〜〜♪」

抱きついたまま、嬉しそうにいうマープルに、一は純情な青少年の様に慌てる。

自分から離した方が紳士だとは思っているのだが、乱暴に振り払う

ことも、一度落ち着く事もテンパって出来ていない一。

もう、紳士と言うよりただの面白い人だ。

「ちょ、なにをして…！」

「ん～～♪」

そして、マープルは一をそのまま引き寄せ…唇を重ねる。

「ぅん…！！んー！んー！」

「んふ…ん～♪」

そのままマープルは、子供には見せられない様なキスを続け……数分後。

「ん…ふぅ…♪」

じゅるりと絶対キスでは起きないような音を立ててマープルは唇を放し、そのまま一を胸に抱きしめる。

「……。」

一は、顔を真っ赤にして気を失っている。

純情なのだ。

と、そこでテントの入口にかかっていた布が動き、漁甲が入ってくる。

「一さーん?もうそろそろ起きた方がいい……」

……さて。ここで少し状況を整理しよう。

一の恰好…上着を脱ぎ、今さっき着替え始めたとしてもおかしくない服装。で、さらにマープルに抱きつかれている。

マープルの恰好…上着を脱いでいて、タンクトップ一枚にズボンをはいている服装。事後に見えても……おかしくない。

「…お幸せにー。」

そういって、漁甲は巻き戻しの様にさっさとテントから出ていく。

「…えへへ…♪」

「……。」

……その状況は、後後牛山が「モテ男もげろぉおォォォォォォ!!!!!」といってテントに突貫してくるまで、続くのだった……。

■　■　■

テント村　警備のための高台。

「……私、なにか悪いことしたんでしょうか…。」

「まぁ、いいじゃないですかー♪」

「そりゃ、貴女はいいでしょうけど…」

一とマープルは、テント村を警備するための見張り台に立ち、あたりを見張っていた。

そこには、天井から金が吊り下げられ、手の届く範囲にはハンマーや双眼鏡もある、いかにも見張り台、というような場所であった。

…なぜ一とマープルがここにいるかというと、あの後突撃してきた牛山の拳骨により（一だけ殴られた）目が覚め、牛山の怒りにより、警備に回されているのであった。

「……と言うか、マープル。本棚はどうなってます？」

「え？本棚ですかぁ？」

コクンと可愛らしく首をかしげるマープルに、一は若干萌える。

が、一は赤面したその顔をすぐに元に戻し、真面目な顔になって聞く。

「昨日いろいろあったので、本棚に以上が無いか心配なのですよ。」

「…この世界に来てから、入れてないんですけど…一度、試してみます。」

一が言うと、マープルは渋々といった風に本棚に入る。

「……検索を開始します…。……って…うわぁ…！！」

そして…マープルは本棚に入っていくが、そこで驚きの声を上げる。

「…どうしました？」

「すごいです…！本棚が、大きく…と言うか、容量が増えてます！今までと比べ物にならない位！」

マープルは、自分の眼前に広がる本棚に、興奮を隠しきれなかった。

それもそのはず、マープルの前にある本棚は、今までも大量の本があったが…今は、それよりも本棚の数が多く、まさに星の数ほどの本棚が宙に浮いている。

しかも、その本棚には一つにつき数十冊…少なくとも、８０冊ほどの本が入っている。

その何十個もの本棚が合体し、少なくとも…４ケタほどの本が入っていそうな巨大本棚となってふわふわと浮き、それが幾つもあるのだ。

マープルからすれば、宝の山だろう。

「うふふ…す…すごい！！」

「……そんなにですか。」

マープルは、目の前の本たちに興奮を隠しきれずに、涎をたらしそ

うな勢いだが…位置から見れば、虚空を見つめて笑っている危ないヒトに見える。

そして、マープルは手ごろな本棚から一冊、【ＡＤＶＥＮＴＣＡＲＤ】と書かれた本を取り出し、読み始める。

「コンファイン…アタック…ストライク…フリーズ…！！すごい、すごいです！ゾクゾクします！」

「そ……それはよかった。」

一はそのテンションのマープルを始めてみたので、若干引きながらも答える。

「もっと、もっと検索しましょう！」

そう言ってマープルは、近くの本棚から【ＣＯＲＥＭＥＤＡＬ】【ＭＡＫＡＭＯＵ】【ＳＨＯＣＫＥＲ】等の本を取り出し、読み始める。

「シャチ、タコ、ゴリラ、ティラノにプテラ…！ウブメにヤマビコ、姫と童子……蜘蛛男…蝙蝠男、ゾル大佐…！！」

そうやって、その検索に没頭するマープルに、一は諦めの表情だ。

「……はぁ、見張りしますか。」

そういって、隣でマープルが「サゴーゾにタジャドル…」とか、「フランツ・フェルディナンドに田中一郎…！！」等と言っているのを一度置き、一は近くに置いてあった双眼鏡を持ち、見張りを始め

ようとする……が、その時。

―Ｂｉｂｉｂｉ！！―

「おっと…どうしました？」

そこで、先ほどから偵察に出していたパピヨンショットが戻ってきて、一の手の上でライブモードから変形し、そのまま手のひらに収まる。

そして、一はパピヨンショットのメモリーを確認し…愕然とする。

「これは…昨日のドーパント達…？！」

その写真には、昨日見たスター・ドーパントの大群と、その戦闘で一台の白と金色のバイクに乗った人物が映っていた。

一は、慌てて双眼鏡であたりを見回す。

「…いた！」

そして、一はここから二キロ弱のところにいる大軍を見つける。

写真の通り、戦闘にはバイクに乗る何者かもいる。

一は、近くに合ったハンマーを手に取り、天井から掛けてあった金にそのハンマーを叩きつけ、敵襲を知らせる。

「敵がきました！！牛山さん！」

一が、下の方にいるはずの牛山に叫ぶ。

「…なんだと!!分かった、今用意する!!」

そして、下からパジャマの恰好をした牛山が出てきて、そう言う。

「あんた何やってんだ!!寝てたのか、おい!!」

「うるせぇ!!寝てない、まぶたを閉じて意識を無くして、パジャマ着てベットに倒れていただけだ!」

「それを寝てたというんです!」

そう喋りながらも、牛山はポケットから携帯を取り出し、天ヶ橋達を呼ぶ。

一も、そんな牛山を見て検索に没頭しているマープルの肩を揺らす。

「マープル!敵です!変身しなければ!」

だが、マープルはまだブツブツと何か言っている。

「……タカ…トラ…バッタ…。」

「……愛の鞭。」

一はマープルに痺れを切らし、思い切り手加減をしてマープルの頭に向かってチョップをする。

「いたっ!?…いーちゃん、なにするんですかぁ…?」

「叩いたのは心より謝罪します…ですが今はそんな場合ではありませんよ。敵です、敵。」

そう言うと、さすがのマープルも涙目の顔を引き締め、真面目な顔になる。

「わ、分かりました！今用意します！」

そして、二人は高台から下へと降りていく…。

■　■　■

テント村　近くの広場。

そこでは、戦闘態勢に入った一、牛山、天ヶ橋、蟹沢、漁甲…男達が、立っていた。

「…さて、行くぞ？」

「ええ。」

一は、真剣な顔になり、懐からガジェット達を取り出す。

…それらは全てマープルから預かってきたものだ。

そして一は、それにギジメモリを差し込んでいく。

《ＰＡＰＩＬＬＯＮ》

【蝶の記憶】を疑似的に宿したパピヨンメモリを差し込まれたパピヨンショットは、ライブモードになって飛び立つ。

《ＳＮＡＫＥ》

【蛇の記憶】を疑似的に宿したスネークメモリを差し込まれたスネークケーブルは、ライブモードのガラガラヘビ型になって地面に落ち、這い始める。

《ＣＩＣＡＤＡ》

【蝉の記憶】を疑似的に宿したシケードフォンは、ライブモードになってパピヨンと同じように飛び上がる。

《ＬＩＺＡＲＤ》

【蜥蜴の記憶】を疑似的に宿したリザードショックはライブモードに変形して地面に降り、威嚇するように電子音声で鳴く。

《ＴＵＲＴＬＥ》

【亀の記憶】を疑似的に宿したタートルライトも同様にライブモードで地面にポトリと落ち、ノソノソと動き始める。

《ＳＷＡＬＬＯＷ》

【燕の記憶】を疑似的に宿したスワローペンシルもライブモードで飛び上がり、パピヨン達と同じように威嚇をするように電子音を発

する。

…マープルは変身する時を失うため、テント村の安全な場所に保護させておいた。

このメモリガジェット達は、戦闘能力を持つ物は皆無に等しい。けれどもあの量産されたスター・ドーパントくらいならば、足止めぐらいはできるのだ。

一は、大多数のスター・ドーパントと戦闘にいた＜スターライト＞側の仮面ライダーであろう男を倒し、もし取り逃がしてしまった場合はガジェット達で対処しようと考えたのだ。

「…女性や子供すら攻撃対象に入れるとは…全く、紳士の風上にも置けない。」

「全くだ、ああいうのはブッ潰さんとな。」

「えぇ……見た目的に、ああいうのは嫌いッスからねぇ。」

「そんなこと言っている場合ではないようですが…？」

一達がそう喋っていると、遠目にスター・ドーパント達が見えてくる。

「さて……行きましょうか。」

―ＰＯＩＳＯＮ！―

一は、【病毒の記憶】を宿したポイズンメモリを構える。

そして、牛山達もメモリを取り出し、構える。

「いくぜ、野郎ども！」

―ＴＡＵＲＵＳ！―

牛山は、【金牛宮の記憶】を宿したタウロスメモリを。

「はいッス！」

―ＰＩＳＣＥＳ！―

漁甲は、【双魚宮の記憶】の記憶を宿したピスケスメモリを。

「へいへい…行こうかね。」

―ＣＡＮＣＥＲ！―

蟹沢は、【巨蟹宮の記憶】を宿したキャンサーメモリを。

「ええ。さっさと片付けてしまいましょう。」

―ＬＩＢＲＡ！―

天ヶ橋は、【天秤宮の記憶】を宿したリブラメモリを。

それぞれが、ドライバーと共に構える。

そしてマープルも、戦場から離れたテントの一角で、メモリを構え、

アッシュをドライバーの右スロットに装填すると、同時にアッシュは小さな光とともに消え、一のドライバーの右スロットに転送される。

「来ましたか。」

一はそれを押し込み、続いてポイズンを左スロットに装填し、ドライバーを操作する。

それと時を同じくして、牛山達もメモリをドライバーに差し込み、操作する。

「「「「「変身！！」」」」」

―ＡＳＨ！ＰＯＩＳＯＮ！―

―ＴＡＵＲＵＳ！―

―ＰＩＳＣＥＳ！―

―ＣＡＮＣＥＲ！―

―ＬＩＢＲＡ！―

…そして、６人の姿は変化し、仮面ライダーとなる…。

一は、その姿を見ていたピスケスとキャンサーではない、牛山と天ヶ橋の変身した姿を見る。

牛山は、金色と白色のアーマーを身にまとい、背中には巨大な大斧、

そして頭部に牛の様な角を持つ仮面ライダー…仮面ライダータウロスに変身。

天ヶ橋は、白色のマントを身につけ、手には先端に天秤がついた錫杖を手にした純白の仮面ライダー…仮面ライダーリブラに変身する。

『さて…行くぞ。』

『えぇ…。』

牛山が背中の斧を構えると、一はステッキを、蟹沢は腕に付けているアーマーを変形させ、ハサミにし、天ヶ橋も錫杖を構え、臨戦態勢に入る。

『……あれですか…。』

そして一は、向こうからやってくるスターライト達を睨む。

……スターライト達の戦闘にいるバイクに乗った男は、一達から３０ｍほど離れたところで止まり、バイクから降りる。

「……よぉ。久しぶりだな、牛山…。」

『…ケッ、今更っつぅんだよ…星海。』

星海と呼ばれた男は、ヘルメットをとり、牛山に笑いかける。

「久しぶりで悪いな。早速だが…。」

そういうと星海は来ていたジャケットを脱ぎ、腰に付けているロス

トドライバーを見せる。

そしてそのまま、手に持った白銀のメモリを取り出し、ドライバーに挿入、ドライバーを操作する。

―ＣＯＮＳＴＥＬＬＡＴＩＯＮ！―

電子音斉が鳴ったかと思うと、次の瞬間星海の体を黒と白の靄が包みこみ…その姿を変える。

『……。』

それは、金色と銀色の、輝く流星と天使をモチーフにしたような姿をしている。

額には、太陽と月を一つにした様な紋章が付き、腕には盾、背中には美しい意匠がついたマントをつけているライダー。

『俺の名前は…仮面ライダーコンステレーション。早速だが…滅びろ。』

―ＳＡＧＩＴＴＡＲＩＵＳ！Ｍａｘｉｍｕｍ Ｄｒｉｖｅ！！―

星海…いやコンステレーションはそう言うと、一本のメモリを取り出して腕についている盾に挿入する。

その盾は瞬時に弓矢の様な形になり…コンステレーションはその弓矢を構える。

『…じゃぁな。』

そして、その弓矢から数えきれないほどの光線がドゥーツ達に襲いかかる…！！！！

果たして、ドゥーツ達はどうなるのか……！！？

## 【劇場版　仮面ライダーＤＯＴＷＯ　ＳＴＡＲ、Ｓ　漆黒の星々】　Ｂパート後

久しぶりすぎる更新ですみません…！！

受験勉強で、ベリークルシミマスな作者です…！

とりあえず、この劇場版編は、年内…は無理かもしれないので、来年まで引っ張ります。どうもすいませんでしたぁ！

■
■
■

『皆さん、伏せてっ！！！』

―LIBRA！MaximumDrive！！―

大量の矢が、眼前に迫ったその時、リブラが前に出て、錫杖にメモリを挿入、マキシマムドライブを発動させる。

『リブラジャッジメント…！！』

そう、リブラが呟くと…錫杖から光が放たれ、次の瞬間爆音が響く。

―DOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOO！！！！！―

そして、矢は半数以上が地面に落ち、重力で押しつぶされていた。

だが…………まだ、矢は残っている。

『いーちゃん！』

『了解っ！』

しかして、そこにドゥーツが前に躍り出…ポイズンメモリを引き抜

き、藍色のメモリと黒色のメモリを取り出し、ベルトに挿入、操作する。

―ＭＡＧＩＣＩＡＮ！ＢＡＳＴＡＲＤ！―

『狙い撃ちましょう…！！』

ドゥーツは、そういうと胸にマウントされたバスターマグナムを構え、正確に矢を撃ち落としていく。

『奇術師の本領発揮…ですかね？』

そういうと、ドゥーツはベルトからマジシャンメモリを引き抜き、バスターマグナムに挿入する。

―ＭＡＧＩＣＩＡＮ！Ｍａｘｉｍｕｍ Ｄｒｉｖｅ！！―

『マジシャンズパーティ…！！』

マキシマムドライブの音声が鳴ると、ドゥーツはバスターマグナムを両手で構え、狙いを定める。

『…Ｆｕｃｋ、Ｙｏｕ！！！』

そういうと、ドゥーツはバスターマグナムの引き金を引き…銃口から、飛んでくる矢と同等、いやそれ以上の量の光弾を発射する。

『おおっ！！これなら…！！』

蟹沢がそう言うのと同時に、ドゥーツの光弾は屋へ向かっていき…

一瞬で矢を飲み込み、そのままコンステレーション達に向かう。

『そのまま、潰れろッ！！』

そして矢がコンステレーション達に向かうが…コンステレーションは、全く動揺した様子はない。

『…厄介だが…。』

そういうと、コンステレーションはさらにメモリを取り出し、盾に差し込む。

―ＡＲＩＥＳ！Ｍａｘｉｍｕｍ Ｄｒｉｖｅ！！―

『最悪と言うほどでもない。』

マキシマムドライブの音声が響くと、盾を中心に、雲の様なエネルギーが現れ…弾を全て受け止め、共に消え去る。

『なっ…！？』

『んな、馬鹿な！？』

牛山達が驚くのも無理はない。先ほど、コンステレーションがサジタリウスのマキシマムドライブではなった攻撃よりも、それ以上の物量の攻撃だったのに、全て消されたのだから。

と、そこでコンステレーション…いや、銀河がため息をついて呆れた様に言う。

『……つまらん。こちらに殴りかかっても来ないのか…？』

『そんな馬鹿な真似をするとでも？』

だが、その言葉にドゥーツは真顔でサラッと返す。

『正直言うと、貴方がまだ残り何本のメモリを持っているのか分かりませんし、もしいってもいざとなればそのスター・ドーパントが自爆特攻でもしそうですしね…。』

マープルも続けてそう言う。

実際、こちらが持っている十二宮のメモリは四本。向こうは、その残りの九本を持っているのだ。

しかも、相手が使ったのは【人馬宮】と【白羊宮】の二本だけ。まだまだメモリはあるはず。

その中には近距離戦闘用のメモリもごまんとあることだろう…一達は、それを警戒しているのだ。

『……つまらない…。もういい、戦闘しに来たが、気分が乗らなくなった。』

『ハァ！？なんッスか、それ！』

銀河は、そう言うが早く変身を解いて人間の姿に戻り、バイクにまたがる。

その銀河の物言いに、漁甲が声を荒げる。

「つまらないことはしたくない…羊川、後は頼んだぞ。」

銀河のその言葉に、スター・ドーパントの大群の中から一人の女が現れ、ペコリと一礼し銀河がいいながら投げてよこしたアリエスのメモリを受け取る。

「了解です、銀河様。」

女…羊川麗華はそう言うと、腰にロストドライバーのバックルを押し付け、ベルトに変える。

『……なんだ？お前…。』

牛山がそう言うが、羊川は全く気にした風も無く、アリエスのメモリのボタンを押す。

―ＡＲＩＥＳ！―

「変身。」

―ＡＲＩＥＳ！―

羊川がドライバーを操作すると、電子音声が鳴り、羊川の体を輝く白い破片が包みこんでいく。

そしてその破片を体に纏うと…羊川は、コンステレーションにも似たライダーへと変身する。

『……。』

その姿は、コンステレーションにも似ているが、所々違いがある。
まず、頭部にはタウロスの様な角…と言っても、ねじ曲がった悪魔の様な角が付いており、背中にはモコモコとした純白のマントが付いている。そして特徴的なのはその、まるで西洋の騎士の鉄仮面の様な顔だ。

『仮面ライダーアリエス…推して参る。』

そういうと、アリエスは手からするりと槍を生み出し…構える。

『…全く…面倒くさいですねぇ。』

『そういうな…俺だって、銀河の野郎を終えなくて腹立ってんだ。』

構えたアリエスを見て、ドゥーツと牛山がそう言う。

…そして、一歩ドゥーツが前に出る。

『…私がこいつ倒しましょうか?』

『お、いいのか?なら頼むが…』

ドゥーツがそう言うと牛山はあっさりと承諾する。

『偶には、こういう真剣な戦いも…悪くない。』

『んじゃ、俺達はザコ潰すかな…?』

そして、ドゥーツはアリエスを、牛山…いやタウロス達はスター・ドーパントを相手取る。

『…では、行きましょうか？』

そういうと、一はベルトからメモリを二本とも抜き…新たに、二本挿入する。

―ＡＳＨ！ＳＰＩＲＩＴ！―

ドゥーツは、アッシュスピリットにフォームチェンジすると、そう言ってアリエスに向かって走り出す…！！

■　■　■

『オラオラオラァ！！』

『ハイッ、ハイハイハイィィイッ！！』

牛山達は、大量にいるスター・ドーパント達の駆逐に当たりながら、必死に戦っていた。

牛山は大斧を振り回しながらドーパント達を吹き飛ばし、蟹沢は腕のハサミで次々と切り裂いていく。

『…ッァァもう！！こいつらうざいっすよ、マジで！！』

『邪魔すぎるよな、マジで…！！』

漁甲は愚痴をもらしながら必死に腕のカッターでドーパントを攻撃

している。

『そう言うなっての…ほい、３０匹目。』

そんな風に愚痴を言っているのを流しながら、牛山は楽々とドーパントを吹き飛ばしていく。

『皆さん、頑張って！！』

先ほどのマキシマムドライブの影響でまだ満足に動けない天ヶ橋も、錫杖でドーパントを突き飛ばし、戦っている。

『…あぁもう、一気に片付けるッスよ！！』

漁甲は、そう言うとベルトからメモリを引き抜き、横にマキシマムスロットに挿入する。

―ＰＩＳＣＥＳ！Ｍａｘｉｍｕｍ Ｄｒｉｖｅ！！―

その音声が鳴ると、漁甲は低く腰を落とし、まるで歌舞伎か何かの様なポーズをとる。

『ピスケスダイビング…！！』

漁甲はそう呟くと、ゾブリと地面の中に沈み込み、その姿を隠す。

『……ソイヤァァ！！』

そして、音も無く地面から飛び上がり、周りにいたドーパント達を切り付け…爆散させる。

『あ、漁甲の奴…！！なら、俺もやってやるぜ！！』

それを見た蟹沢は、悔しそうな声を上げた後、自身もメモリをマキシマムスロットに挿入する。

『あ、おい！むやみに乱発するな！』

『大丈夫ッスよ、俺だって暴れたいんス！』

『…あぁもう、俺はどうなっても知らんぞ…俺もするがな！』

―ＣＡＮＣＥＲ！Ｍａｘｉｍｕｍ Ｄｒｉｖｅ！！―

―ＴＡＵＲＵＳ！Ｍａｘｉｍｕｍ Ｄｒｉｖｅ！！―

牛山もメモリをマキシマムスロットに挿入に、二人同時にマキシマムドライブを発動する。

『ハァァァァァァ……！！』

『ヌゥゥゥゥゥゥゥン…！！！』

蟹沢も牛山も、自分の武器を構え、体制をとる。

『キャンサーカッティング！！』

『タウロスハリケイン…！！』

そういうと、蟹沢は腕のハサミを振りかぶり…バヂンと音を立て、

空間ごとドーパント達を切り裂く。

『オラァァァッァァァッァァァ！！！！』

牛山は、大斧を振りかぶってそのまま回転し……轟風とともに、斬劇を無数に繰り出す。

その二人のマキシマムドライブには、数で挑んだドーパント達もなすすべなく…声もあげることなく全て、爆散する。

『……うっし、勝利！！』

『…私が、巻き込まれかけたんですが…？』

全てのドーパントを片付けた牛山は、嬉しそうにそう言うが…後ろから、黒いオーラを放ちながら天ヶ橋にビクリと背筋を震わせる。

『……ゴメンナサイ。』

『よろしい。』

ガクガクと震えながら謝る牛山に、満足そうに許す天ヶ橋……。

いまいちしまらないが、牛山達は全てのドーパントを片付けたのであった。

■　■　■

『ハッ、ハッ、ハァァッ！！』

『ふふっ…いけませんねぇ、淑女がそのように武器を振るっては…。』

ドゥーツとアリエスは、お互いの武器…スピリットバンカーと、シープランサーで打ち合っていた。

『五月蠅いっ…！！お前も戦士なら、潔く戦えっ！！』

『生憎、私は戦士ではなく、紳士でありたいので、その辺はご遠慮します。』

そう軽口を叩きながらも、ドゥーツは内心冷や冷やしながらアリエスの攻撃を受けていた。

アリエスの槍術は達人級で、ドゥーツは戦闘の経験の差と、センスだけで何とか対等に打ち合っていられるのだ。

『しかし…いい加減面倒くさいです…ねっ！！』

『ぐぁッ！？』

ドゥーツは、打ち合いを急にやめ、バンカーを持ったまま回転し、アリエスを弾き飛ばす。

そして、お互いに１０ｍほど距離をとったまま、動きを止める。

『たまにはこういうのもいいですが…まぁ、性に合いません。』

『…いーちゃん。相手に色目使ったらいやですよ？』

『当然ですとも。』

マープルの釘をさすような発言に、苦笑しつつも一はドライバーからメモリを抜き、スピリットバンカーに装填、マキシマムドライブを発動する。

―ＳＰＩＲＩＴ！Ｍａｘｉｍｕｍ Ｄｒｉｖｅ！！―

『スピリットクラッシュ……！！』

そう一が呟くと、突如アリエスの周りに灰が舞い、アリエスの周りに、まるで霧の様に漂い始める。

『ッ！？これは…？！』

『…もう、貴方は…私の掌の上です。』

同様するアリエスに、ドゥーツは断言するかの様に言う。

『何を…！ふざけるな！！』

アリエスはそう言ってドゥーツに駆け寄ろうとするが…ドゥーツは、その場から一歩も動かず、スピリットバンカーを振る。

すると……

『…ガハァッ！？』

駆け寄ろうとしたアリエスは、ドゥーツがバンカーを振ったタイミングと同時に、横へ吹き飛ぶ。

『…！？…？！』

ダメージより、困惑の方が大きいのか、アリエスは上手く立ちあがることができず、がくがくと足を震わせながら必死に立ち上がろうとしている。

『…女性に手を上げるのは趣味ではありませんが…仕方ないでしょう。』

そう呟いたが最後、ドゥーツは口をつぐみ無音でバンカーを振りつづける。

『ガッ！？グフッ…！ガァァッ！！』

ドゥーツが振り回すバンカーの動きと連動したように、アリエスは殴られ続け…そして、最後にドゥーツは大きくスピリットバンカーを構える。

『…せめて…これで、終わらせてあげましょう。』

そういうと、アリエスの周りに漂っていた灰が形を成し…スピリットバンカーと同じ形の、槌部分の形に変化する。

『…それでは…お疲れさまでした。』

その一言を最後に、ドゥーツは振りかぶったスピリットバンカーを振り落とす！！

『ッ…！！ガアアアァァァッァ！！！！！！！』

その叫び声を最後に、アリエスの意識は途絶える……！

■　■　■

『……ふぅ。』

一つ、ため息をつくとドゥーツは変身を解除し…一の姿に戻る。

「やはり……女性と戦うのは、いい気分ではありませんねぇ。」

一は、目の前にある、倒れた羊川と輝の入ったメモリを見て、ため息をつく。

先ほど行ったスピリットクラッシュは、スピリットバンカー唯一と言ってもいい遠距離専用の技だ。

相手の体の周りに灰をまとわりつかせ、その灰をスピリットバンカーの動きと連結させ、相手を攻撃する技だ。

正直、一はこの技を「紳士的でない」と嫌っているのだが…

今回の相手…アリエスは、ただのスピリットの戦い方では勝機は薄かった。

なので一は嫌々ながらも、この技を使ったのだ。

「…しっかし…恐ろしく丈夫ですね、このメモリ…」

と、一は考えるのをやめ、落ちていたアリエスのメモリを拾い上げ、そう呟く。

「…ふむ……これはこれは…。」

通常なら、メモリブレイクもたやすい筈のマキシマムドライブで、輝しか入らない…さすがに、普通の物とはケタ違いの情報量を詰めたメモリ。

しかも、その輝もジュワジュワと音を立て、治っていく。

「…この世界に必要な記憶と言うことでしょうか…？」

普通、ガイアメモリはブレイクされると、メモリに内蔵されていた記憶は地球と同化し、またメモリを生み出すことができる。

それは、どのメモリも同じであり、スターの様な量産型のメモリは、内蔵する記憶を少なくすることで、メモリを大量に生み出す。

…だが、この世界ではプラネットメモリはブレイクされても、再生するようだ。それも、限定的な十二宮のメモリだけが。

昨日のうちに、一が蟹沢と話している時も、『マキシマムドライブを喰らった事がある』と言う会話をしたので、信憑性はある。

「…これは、厄介そうですねぇ…。」

そう、再生するということは、いくら倒しても限が無いということ。

これでは、何回ライダーを倒したとしても、目がさめれば、すぐにまた戦いを挑まれるかもしれない。

「…ま、それはあとで考えましょうかね…？」

一は、倒れた羊川と、遠くから聞こえて来る牛山達の声を聞きながら、そう呟いた。

## 【劇場版　仮面ライダーＤＯＴＷＯ　ＳＴＡＲ、Ｓ　漆黒の星々】　Ｃパート前

今回は、他のある小説から、キャラを一人お借りしています。

どなたの、どの小説のキャラなのかは…見て、お楽しみ下さい。

■　■　■

…仮面ライダーコンステレーション、星海銀河と仮面ライダーアリエス、羊川麗華が襲ってきた翌日。

牛山達がいるテント村から遠く離れた荒野。そこでマープルと一はジェントルーダーに乗り、ある目的地へと向かっていた。

「…さて…もうそろそろ見えてきてもいいはずなのですが？」

「長いですねぇ。」

後ろの座席で、一にしがみつきながら、マープルはそう漏らす。

「まぁ、今はあれしか判断材料が無いのです。それに、偵察したらそれらしいバイクのタイヤ痕もあったではないですか。」

「…まぁ、そうですけど…。」

…一とマープルがなぜ、こんな荒野を走っているのか…その理由は昨日にまで遡る。

■　■　■

「……さて。貴女にはいろいろ聞きたい事がありましてね？」

一達は、初めて捕えた＜スターライト＞の一人羊川麗華から情報を聞き出すため、尋問を行おうとしていた。

ここは、＜レジスタンス＞が住んでいるテント村の一角。そこの古ぼけた掘立小屋に、一達はいた。

今、一とマープル、牛山の目の前には、手首と足首を椅子に縛り付けられた羊川がまっすぐとこちらを見つめている。

「多少、聞くために荒っぽい事をするかもしれんが…いいな？」

「…そういうの、好きではないですが…場合が場合ですからねぇ。と言うか、なぜうっすらと笑うのですが、貴方は。」

牛山はうすら笑いを浮かべつつ、羊川を見ているが…それを、一とマープルが嫌そうな目で見る。

「……拷問なら必要ないぞ、＜レジスタンス＞。」

「…あ？」

だが、羊川は突然そんな風に呟く。

「私は騎士だ。ただ、自分より強い者に従うのみ。」

「……つまり…こいつからの質問なら、聞くってことか？」

牛山が、軽くため息をつきながら一を指差す。

「あぁ。私は、お前に従おう。」

「……なんと…まぁ。」

「……ふぅぅぅぅ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ん…。」

羊川は、一を見据えてそう言うが…。

一は、後ろから感じるジト目で見つめてくるマープルの圧力に、必死で耐えていた。

「…ふん。」

「あだぁっ!?…って、なにするんですか!?」

突然後ろから殴ってきた牛山に、一は抗議する…が。

「リア充氏ね。」

「誰がですかっ?!」

……と、そんなコントをしているうちに、マープルはエガオで羊川に近づく。

「いーちゃんに手を出したら、駄目ですよ?」

「あ…あぁ。分かっている。」

妙な迫力を出しながら言うマープルに、羊川はコクコクと頷く。

…そして、そんな事を云いながら数分後。牛山はもう一度一の頭を殴ってから、小屋を出ていった。

やっと雰囲気は元に戻り、一は質問を始める。

「さて…まず、貴女達、＜スターライト＞の目的を教えて下さい。こちらも聞いてはいますが、一応真実かどうか判断材料が乏しいのです。」

そう、一が言うと羊川はコクリと頷き…語り始める。

「…私達の目的はただ一つ。この世界に彗星を呼び寄せ…その彗星に眠るという、怪人たちと戦うことだ。」

「ッ!?」

「…それは、どういう意味なんですか?」

驚く一を見つつ、マープルが更にそう聞く。

「＜スターライト＞のリーダー…銀河様はいつもよく分からない事を言っていた。【ディケイド】や、【世界の記憶】…等な。」

「…それで?」

【ディケイド】と言う単語に、眉をひそめながら、マープルは聞き続ける。

「銀河様は、《彗星に眠っている怪人と戦い、その戦いの記憶を世界に示す》…それが最大目標らしい。」

「…《世界に示す》？」

「あぁ。戦いの記憶を作り、それで物語を作る…と。」

「…また、訳の分からない…。」

そういう羊川に、一は首を垂れる。

「まぁ、なんにしても…その戦いで、民間人や戦闘能力の少ないドーパント達は大変なことになりそうですね…。」

「うむ。その戦いには【仮面ライダー】だけが選ばれ、その他のドーパント達も、彗星に眠る怪人と共に…退治するらしい。」

「ッ…！！…どうやら、相当の外道…らしいですねぇ。」

「今さらですって。」

苦虫を噛み潰したような顔で、一は言う。

「……では、最後に質問を。＜スターライト＞の本拠地の位置です。」

「…それなら、私が持っているガジェットで案内ができる。」

そういうと、羊川からコキコキと言う音がし…羊川はあっさりと椅子に縄で繋がれていた手首を外す。

「…関節、外したんですか…。」

「あぁ、慣れているからな、問題ない。」

そう言いながら、羊川は自分の胸元に手をやり…ごそごそと弄った後、一本のギジメモリとコウモリ型のガジェットを取り出す。

「…なぜ、そんなところに隠してるんですか…」

「ここだと、たいてい検査されないからな。女でよかったと思うのはそれ位だ。」

「…と、兎に角。」

呆れ顔のマープルと、真顔でそう言う羊川に、若干顔が赤くなった一が話を元に戻す。

「そのガジェットを使えばいいんですね？なら、ありがたく使わせてもらいましょう。」

「あぁ、そうしてくれ。」

そして、一は羊川からそのガジェット…バットダッシャーを託されたのだった。

■　■　■

「…で。このガジェットメモリについて行ってる訳ですが…長いですねぇ。」

「はーい…目的地って、いったい…？」

…さて。舞台は戻って荒野のド真ん中。

一とマープルはずっとバイク型ガジェット、バットダッシャーを先導に走っているのだが…まだ、何も見えてこない。

「……嘘つかれたんじゃないですかぁ？」

「……否定できませんねぇ…っと。」

一は、突然先導していたバットダッシャーが停止したのを見て、ジェントルーダーを止める。

―Ｂｉｂｉ！―

「なんですか…っておわぁっ！？」

バットダッシャーがライブモードに戻り、パタパタと飛ぶ。

…すると、地面からいきなりゴゴゴと黒い長方形の石板の様な物が現れる。

「これって…パネル？」

「…心臓に悪い…何か、操作するんでしょうか？」

冷静に、ジェントルーダーから降りて石板を観察しながら見るマープルと対象的に、胸を押さえている一…なんとも、情けない。

「えっと…何か、差し込む所ありますよ？」

「ふむ？どれどれ…」

気を取り直した一は、その石板へと近づき、表面をじっくりと見る。

言われたとおり、確かにそこにはガイアメモリのコネクタにも似た差し込み口が刻まれている。

「……これは…やっぱり、アレですかね。」

「はい。」

一瞬沈黙した位置であったが、マープルは真顔で一のポケットを弄り、そのまま羊川から没収したままのアリエスメモリを取り出す。

―ＡＲＩＥＳ！―

「よっと。」

マープルは、アリエスメモリをそのコネクタに差し込む…すると。

―ＺＵＺＵＺＵＺＵＺＵＺＵＺＵＺＵＺＵＺＵＺＵ……！！―

「おおっと…！？」

「…やっぱり、こんな感じでしたかー。」

コネクタに差し込むと、石板を中心になにか波動の様な物がドーム状に広がっていき…目の前に巨大なビルの姿が見えるようになる。

「…まさか、この石板がドーパントの様な物…ってことですかねぇ。」

「多分、そうでしょうねぇ…あ、ほら。」

マープルが指さすと、石板の裏には巨大な【M】にも見えるマークが刻まれていた。

「…【ＭＩＲＡＧＥ】か【ＭＡＧＩＣ】のメモリですかねぇ。」

「ま、どっちでもいいですって。行きましょ行きましょ。」

「えぇ。そうですね…。」

アリエスメモリを抜き、先に行こうとするマープルに返事をしながら、一はステッキとジェントルマンメモリを取り出す。

そして、流れるような動作でメモリをステッキに挿入し、マキシマムドライブを発動する。

―ＧＥＮＴＬＥＭＡＮ！Ｍａｘｉｍｕｍ Ｄｒｉｖｅ！！―

「…ザ・スラッシュ。」

一は、そう呟くと石板にそのステッキを振り下ろし…そして、その

ままマープルを追いかける。

「待って下さいよ、マープル。」

……そして、一とマープルがビルの中に入っていったとき…石板は、時間を思い出したかのように、真っ二つに斬れて爆発する。

…そして、その石板があった場所には、ただ爆発の後だけが残るのだった。

■

■

■

＜スターライト＞本部内、会議室。そこには二人の男がいた。

二人とも、羊川と同じ＜スターライト＞の戦闘服…黒いライダージャケットを着ている。

「……ねぇ…羊川の奴、遅くないですかー？」

「…ふん。確かに殲滅したにしては遅すぎるな…やられたか？」

一人の茶髪で短髪の男は、トランプタワーを作りながら楽しそうに言い、もう一人、金色のオールバックの男は厳しい表情を緩めず、そう答える。

「かもしれませんねー。羊川、やけに騎士道とかこだわるから、一対多でやられたのかもしれませんしー。そこんとこどう思います？

獅子金たいちょー。」

「…全く、そこだけは評価できんな…あいつは。」

…そう。この二人は＜スターライト＞の仮面ライダー。

トランプで遊んでいる男は第二分隊隊長・一岡天示。《双児宮の記憶》、ジェミニメモリを持つ仮面ライダーである男。

もう一人は＜スターライト＞全軍総隊長・獅子金麻色。《獅子宮の記憶》、レオメモリを持つ仮面ライダーだ。

「…じゃぁ、侵入者とかそろそろ来るんじゃないですかー？あいつ、すぐ強い奴になびく尻軽女ですしー。」

「かもしれんな…お前の隊にも色々言っておけ。」

「あいあーい。」

…と。二人がそんな事を言っていると…

―ＦＡＮＦＡＮＦＡＮＦＡＮＦＡＮ！！！！！！―

……突然、警報が鳴り響く。

「おっと…早速来ましたか？」

「…馬鹿だな。もっと忍べばいいものを…」

そういいながら、獅子金は懐からリモコンの様な物を取り出し、ボ

タンを押す。

すると、二人の目の前に巨大なＴＶ画面が現れ…そこに、＜スターライト＞内の地図が表示される。

「…侵入者は…地下１２階か。」

「…あれー？そこって、オヒュカスメモリのあるところじゃなかったですかー？」

一岡のその何気ない一言に、獅子金ははっとした表情になる。

「ッ…狙いはそれか…？」

「かもしれませんけどー。一応隊員行かせましょうかー？」

一岡は、携帯電話を取り出し、指で振りながらそう言う。

「…いや、俺達が行こう。…羊川を倒したのなら、数で倒せる相手でもないだろう。」

「イエッサー。」

獅子金がそういうと、一岡はトランプタワーを自分でクシャリと倒し…ゆっくりと立ち上がる。

「じゃ…お馬鹿な侵入者さん、捕まえますかー。」

「うむ。」

二人はそう言いながら、ゆっくりと歩いていく…。

■　■　■

＜スターライト＞本部内。そこで一とマープルはひっそりと隠れながら…立ち往生していた。

「……なんですか…今の警報は。」

「…バレましたかねぇ？」

二人は近くの壁にぴったりと張り付きつつ、こそこそと歩いているが…突然、近くから足音が聞こえてくる。

「なっ…！！マープル、ガジェット、ガジェット！」

「はいっ！」

《ＣＩＣＡＤＡ》

マープルは、懐から取り出したシケードフォンにメモリを挿入、ライブモードにして自分達とは逆方向に飛ばす。

―…◆…Д…¶…Ξζ……？―

―…Ξ Ψ…¢…ν…！―

と、すぐさま隠れシケードフォンの飛んでいった方を見ると…二体

のスター・ドーパントが頭を１８０度回転させ、シケードフォンを数秒見つめる。

そして、その二体はそのままシケードフォンを、蝶を追いかける子供の様に追いかけていく。

「さ、行きましょう！」

「ええっ！」

二人は、そそくさとスター・ドーパント達をやり過ごしながら進んでいた…と、その時。

―……ふん。そこにいたか…侵入者。―

「「ッ！？」」

一とマープルは、いきなり何処からともなく聞こえてきた声に反応し、反射的にメモリを構える…が。

攻撃はされず、一瞬不審に思う…が、隣にあったエレベーターがゆっくりと開く。

―ほら、来いよ。俺が相手になってやる…。―

「……ほぅ。」

そのどこからか聞こえてくる…星海の声に、一はにやりと笑い…エレベーターに向かう。

「…マープル。これが最後みたいですし…盛大に行きましょうか？」

「はいっ♪」

二人は、そう言うと腕を組み…ゆっくりとエレベーターに乗り込んだ。

■　■　■

＜スターライト＞地下１２階。

「…へぇ…これがこの世界のお宝か…」

巨大なガラスの箱の中に収められた、互いの尾を喰いあっている蛇の【Ｏ】にも見える一本のガイアメモリ…それを取り出しながら、一人の青年がにやりと笑っていた。

歳は二十代前半。

エメラルドグリーンのジャケットにジーンズを履き、やや横跳ねした髪型をしていた。

…と。その青年が笑っていると…後ろの扉が開く音がし、青年は振り向く。

「…お前が侵入者か…。」

「そのメモリは渡さないよー。」

扉の奥からは、獅子金と一岡が現れ、その手にはロストドライバーとそれぞれのメモリを持っていた。

「へぇ…君達が、この世界の仮面ライダーか。」

だが、青年はそのメモリを見ても、余裕な態度を変えることなく二人を見つめる。

「別にいいじゃないか。使える適合者もいないメモリだ。僕がもらって大切に保管するんだ。感謝したまえ。」

青年は、片手をピストルの形にして二人に撃つ仕草をする。

「…ふん。それでもそれは俺達の世界にとって宝ものだ…渡す訳にはいかん。」

「そーいう訳で…すいませんねー。消えて下さい。」

―ＧＥＭＩＮＩ！―

―ＬＥＯ！―

「「変身。」」

―ＧＥＭＩＮＩ！―

―ＬＥＯ！―

ガイアウィスパーからその音声が響くと、一岡は右腕と左足に強固

な重装備、左腕と右足には素早さを重視した様なアーマーが装備された白と黒の仮面ライダー…仮面ライダージェミニに。

獅子金は金色のタテガミと長い爪をもった、まさに獅子を連想させる金色と白の仮面ライダー…仮面ライダーレオに、変身する。

…それでも、青年はその余裕の態度を崩すことはない。

「へぇ、ライオンに白黒か…面白いね。」

『それだけじゃないんだよ…ねっと。』

と、ジェミニがそういうと、そのアーマーが分裂し……二人の仮面ライダーに変化する。

「…ほぅ。」

『『俺のメモリは双児宮の記憶…二人に分裂するぐらい、訳ないよ。』』

青年が感心したような声を上げると、二人…いや、黒の怪力を持ったライダー、ディオス。白の俊敏さを持ったライダー、ポリュデの二人は、ステレオの様に同じタイミングでそう言う。

『さぁ、オヒュカスメモリを返してもらおうか…?』

「残念だが、それは無理だよ。」

青年は、そう言いながらどこからともなくシアン色に彩られた銃器…いや、ディエンドライバーと一枚のカードを取り出す。

「さぁ、メモリ争奪戦の始まりだ！！」

青年…いや、海東大樹は不適に笑い、カードをディエンドライバーにポンプアクションの動きで挿入、それを頭上に掲げる。

そして、その銃にバーコードの様な紋章（クレスト）が浮かび上がり…海東は、引き金を引く。

―ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ…―

「変身！」

―ＤＩ―ＥＮＤ！！―

海東がそう宣言するように言うと、発砲音と電子音が流れ、ディエンドライバーの銃口から、数枚のプレートが空中に打ち上げられる。

海東の身体に、幾重にも重なった虚像が、強化服、ディヴァインスーツとディヴァインアーマーへ変化。

ディエンドの頭部めがけて落下してきた次元通行手形（ライドプレート）が頭部に突き刺さり、鎧の色がシアン色へと染まり、変身完了。

『なん…だと…！？』

『『メモリを使わない変身…！？』』

二人が動揺していると、ディエンドは不敵に笑い…腰のカードホルダーから、三枚のカードを取り出す。

それには、ライオンを模した飾りを顔に付けた中世的な子供、緑色と茶色の飛蝗の顔のライダーが描かれている。

『さぁ、ライオンと兄弟なんだろう？だったら、こいつらだ。』

ディエンドは、三枚のそのカードを連続でディエンドライバーにポンプアクションで挿入、引き金を引く。

その時、ディエンドライバーには三つの円が連続して書かれた紋章、連続して背中に【ＺＥＣＴ】と書かれたショウリョウバッタの様な紋章が現れる。

―ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ…ＯＯＯ！ＫＩＣＫ－ＨＯＰＰＥＲ！ＰＵＮＣＨ－ＨＯＰＰＥＲ！―

『一枚は特別品だよ…さぁ、行けっ！』

―ＬＩＯＮ！ＴＯＲＡ！ＣＨＥＥＴＡＨ！―

―ＬＴＯ・ＬＴＡ～ＬＴＯＲＡＥＥＴＡＨ！！―

―Ｃｈａｎｇｅ…ＫＩＣＫ－ＨＯＰＰＥＲ！―

―Ｃｈａｎｇｅ…ＰＡＮＣＨ－ＨＯＰＰＥＲ！―

ディエンドがトリガーを引くと、重なった七色のシルエットから、三人の戦士が姿を現す。

一人は、黒のボディ、胸部の中心にあるオーラングサークルに刻ま

れた『獅子』『虎』『豹』。

まるで『獅子』を連想させる金髪をアップにした髪型に、五本のタテガミのような飾りのライオネルフラッシャー。そして額には爪型のトパーズカラーのオークォーツに、瞳は透き通るようなスカイブルー。

上半身には黒基調の黄色いショートジャケットに、腕には鉤爪型の武器であるトラクロー。

下半身にはほぼ全体が覆われる『豹』をモチーフにした装飾、チーターフレーム。

排熱と補助的な加速を行うチーターラムジェット、足首部分を補助する強化外骨格チーターアンクルトゥ、特殊筋肉が網目状に張り巡らされたチーターアグソール、その三つを持つ、チーターレッグ。

そして全身は黒いライダースーツ、オーズアーマーで覆われている。

…それは、８００年前に欲望（グリード）の化身を封印した伝説の戦士、仮面ライダーＯＯＯ（オーズ）。

それが原点とは違う変身者により変異した特殊なオーズ。

そのオーズが更に疾風と灼熱と力を宿した存在。それがこの獅虎豹（ラトラーター）コンボなのである。

もう一人は緑色の飛蝗をモチーフとした装甲を持ち、左脚側面には、ゼクターと連動して力の解放を助長するバッタの脚の形をした特殊兵装アンカージャッキを。

更にもう一人は緑色の飛蝗と姿形はそっくりだが、茶色の飛蝗をモチーフとした銀と茶色の装甲を持ち、こちらは右腕側面ににアンカージャッキを。

そして何よりその赤と銀の目には漆黒よりも黒く、地獄よりも苦痛を表したような地獄の兄弟…キックホッパーとパンチホッパー…そして、オーズの三人の仮面ライダーが、その世界に姿を現した。

『ハッ!!』

『俺達は闇の住人だ…!!』

『最悪は、最高なんだよ…。』

『『『ッ…!!?』』』

突如現れたその三人に、ジェミニとレオは驚きを隠せない。

それもそうだ、いきなり現れた侵入者がメモリを使わずに変身し、さらには新しい仮面ライダーを三体召喚したのだ。

『行くぜ?相棒…』

『あぁ、兄貴。』

『『隊長!俺はこの二人をやるから、そっちの娘を!』』

『ああ、分かった…。』

レオは、ジェミニの声に動揺していた心を落ち着かせ、目の前のオーズを睨みつける。

『『来るならどうぞ、虫野郎。』』

『…お前は俺達を見下して…さぞいい気分なんだろうな?』

『お前も、こっちに来いよ…。』

仮面ライダージェミニ―ポリュデ&ディオス・一岡天示VS仮面ライダーキックホッパー&パンチホッパー・矢車想&影山瞬

仮面ライダーレオ・獅子金麻色VS仮面ライダーOOO(オーズ)・音霧霊夢。

戦闘開始。

■

■

■

スターライト本部内、最上階。そこは、ワンフロアの壁を全てぶち抜き、巨大な一つの部屋にした広大な一室であった。

そこで、星海銀河は革張りの黒いソファに座りながら、ゆっくりとグラスを傾けていた。

「……ふぅ。」

と、星海がそんな風に酒を飲んでいると…エレベーターの音が聞こ

え、星海はため息をつく。

―…Ｔｉｎ♪―

そんな電子音が聞こえ、エレベーターの扉がゆっくりと開く。

「…やっと来たか…お前ら。」

「……えぇ。一日ぶりですねぇ…星海銀河。」

星海はエレベーターから降りてくる二人…左乃宮一とマープルを見てニヤリと笑い、グラスを一気に飲み干す。

「…星海銀河。一つお聞きしましょう…貴方は、なぜあんなことを考えたのですか？」

「……あんなことだと？」

「えぇ。彗星をわざわざ落とし、この地球に怪人を呼び寄せる…そんなことは、正気の沙汰ではありません。」

「……お前らは、そう思うか。」

「はい。貴方は…自分で、この地球を…この世界を、破滅させる気なんですか？」

「まさか。」

マープルの問いに、星海はそう即答する。

「俺は、この世界の事を誰よりも考えて…この行動をやってるんだよ。」

「…分かりませんね。」

「別に、分かってもらおうと思ってないさ。俺は変わらない。俺は俺だ。その俺を邪魔するのなら…許すことはできん。」

―ＣＯＮＳＴＥＬＬＡＴＩＯＮ―

「ッ……行きますよ、マープル。」

―ＰＯＩＳＯＮ！―

「はい。」

―ＡＳＨ！―

マープルはアッシュメモリをスロットに装填し、小さな光と共に消え、一のドライバーの右スロットに転送される。

一は続いて左スロットにポイズンメモリを装填し、ドライバーを操作する。

そして、二人は同時に宣言する。

「「変身！」」

「変身。」

そして、星海も同じように宣言し…乱暴ともとれる粗雑な動きで、メモリをロストドライバーに挿入、操作する。

―ＡＳＨ！ＰＯＩＳＯＮ！―

―ＣＯＮＳＴＥＬＬＡＴＩＯＮ！―

電子音斉が鳴ったかと思うと、次の瞬間星海の体を黒と白の靄が包みこみ、一の体を灰色の旋風が包む。

そして次の瞬間…二人は、仮面ライダーへと変身していた。

ドゥーツは、ソウルサイドに精神が送られ、倒れるマープルの体をゆっくりと支え、床にねかせる。

そして、コンステレーションを一瞥し、指を向ける。

『『…さぁ、天罰タイムだ！！』』

『滅べ、全てな…！！』

ドゥーツとコンステレーションそう言うと、お互いにステッキと盾を構え、走り出す…！！

■■■

仮面ライダーコンステレーション・星海銀河ＶＳ仮面ライダードゥーツ・左乃宮一＆ａｍｐ；マープル。

戦いが、始まる。

## 【劇場版　仮面ライダーＤＯＴＷＯ　ＳＴＡＲ、Ｓ　漆黒の星々】　Ｃパート前

はい、と言う訳で今回登場させてもらったのは突然現れたディエンドの召喚ライダー…。

作者月詠様の小説、【とある能力の異常言語（イレギュラーコード）】から、仮面ライダーＯＯＯこと音霧霊夢を登場させていただきましたぁ！

作者月詠様、重ね重ね誠にありがとうございました。

この音霧霊夢版仮面ライダーＯＯＯは、これからもこの小説に数回出ることになります！

お楽しみに！

## 【劇場版　仮面ライダーＤＯＴＷＯ　ＳＴＡＲ、Ｓ　漆黒の星々】　Ｃパート中

はい、なるだけ急いで更新しました！！

…これから、自分は受験シーズンなので…更新頻度がガクッと落ちます。

そこらへん、ご容赦を…。

■　■　■

＜スターライト＞本部内、地下１２階。

そこでは、ディエンド・ＯＯＯ（オーズ）・ジェミニ・レオ・キックホッパー・パンチホッパーの６人のライダーによる戦いが行われていた。

その中の戦い…ＯＯＯＶＳレオは、ＯＯＯが優勢のまま進んでいた。

『ハッ、せいっ！よっと！！』

『グッ…舐めるな、小娘ぇぇぇ！！』

…レオの爪での攻撃を、徒手空拳でさばいていたＯＯＯだったが…

レオのその一言に、一瞬ピクリと動きが止まる。

『……ふ…』

『…ぼ？』

動きが止まったＯＯＯにレオは訝しむが…。

―発（ガオオオオッ）！！―

―輝（ガアアアッ）！！―

その時、胸のプレート『オーラングサークル』に映る『獅子』と『虎』が輝き、ガントレットに内蔵されている鉤爪『トラクロー』が展開。

頭部からはライオンコアの固有特殊能力、『ライオネルフラッシャー』が強化された熱光波『ライオディアス』が放たれ、レオを襲う。

『グァッ！！』

『ふざけるな…！！』

熱線と強い光で目を潰されたレオはたまらず顔を手で覆うが…一瞬でＯＯＯに距離を詰められたことを強化された聴覚で判断し、ガードしようとする。

だが、それも無意味に終わる。

『僕はなぁ…！！』

ＯＯＯはトラクローを構え、回転しながら流れるように何回も何回もその鋭い爪でレオを斬り付ける。

『グアァァァッ！？』

更にその動きのままベルトの真ん中のトラコアを外し、黄緑色のコアメダルを装填し、ベルトを斜めに傾けてオースキャナーでスキャンする。

？：認（キィン）、認（キィン）、認（キィィン）！！―

―ＬＩＯＮ！ＫＡＭＡＫＩＲＩ！ＣＨＥＥＴＡＨ！―

その音声が鳴ると、上半身の黄色のラインドライブとオーラングサークルの『虎』の紋章が変化し、鉤爪付きガントレット『トラクロー』から、逆手持ち用双剣『カマキリソード』を携えた黄緑色のガントレットへと。

胸のオーラングサークルの『虎』は『蟷螂（カマキリ）』へ変化する。

これが、ＯＯＯの亜種形態…ラキリーターコンボ。

更に、ＯＯＯはオースキャナーを構え、もう一度オーズドライバーでメダルをスキャンする。

―認（キィン）、認（キィン）、認（キィン）！！―

《Ｓｃａｎｎｉｎｇ　Ｃｈａｒｇｅ！》

その音声が鳴ると同時に、ＯＯＯは姿勢を低くし、発射される『ライオディアス』の熱戦の威力も増していく。

『ハァアァァァァァァァ…！！！』

そして、チーターレッグのチーターラムジェットから排熱しきれないほどの蒸気が漏れていき……一気にその蒸気がロケットの様に噴き出すと、一気にＯＯＯはレオに向かって駆け出す。

『ッ！！？』

『…焼け爛れるは死蟷螂の鎌ッッ！！』
（コンブスティオネ　トートゼンゼゴッテスアンベーテリン）

チーターレッグは、地上最速とも言われるチーターの速度を持ち、このチーターレッグは１００ミリ秒で最高時速、１００ｍを０、２２秒…約マッハ２０のスピードまで跳ね上がる。

そのスピードでＯＯＯはレオに接近し……そして、その瞬間、両手に装備しているカマキリソードからもライオディアスと同じ熱線が放たれ、まるで光で出来た剣の様になる。

……そして、その力にＯＯＯの変身者…音霧霊夢の超能力、『言神（ワードマスター）』の言魂の力が加わり…それは、比類なき力となる。

『ァァアアアアアアアアアッ！！！』

『蟷螂』のメダルの力と言霊で強化された灼熱のカマキリソードの刃……それを、『豹』のメダルの力で、最大限にまでスピードを速め…ＯＯＯはレオに右、左とニ連続の斬撃を加える。

『ガァァァァァアアアッ！！！！？？…クソがァッ！！』

レオはその高熱の刃に身を切られる感覚に、苦痛の悲鳴を上げる…が。音霧霊夢の怒りは、それくらいでは収まらない。

『まだ、終わらなくてぇ…！！』

更に、切り返す動きで腕を交差させ、そこで腕の力をためる様に動きを止め……次の瞬間。

『……フン。』

『…！…！？？……！！』

ＯＯＯは一瞬でレオの背後に移動する……だが、それでもレオは悲鳴すらあげることなく、その場に立ち尽くし……すぐに、レオの胸に十字型の傷跡が生まれる。

『最後に……僕は男です。文字通り、その体と魂に刻みなさい』

そうＯＯＯが呟いた時……レオは、ゆっくりと地面に倒れ伏した。

■

■

■

一方、こちらはジェミニ・ディオス＆ポリュデＶＳキックホッパー＆パンチホッパー。

ＯＯＯＶＳレオはとても一方的だったが……こちらも、負けず劣らず一方的な戦いとなっていた。

『オラ、オラ、オラァ！！』

『ハッ！！』

『『グアッ！！』』

…強固な重装備のポリュデＶＳキックホッパーと俊敏さを重視した軽い装備のディオスＶＳパンチホッパー…それは、ジェミニにとっ

ては最も相性の悪い相手だったのだろう。

『『チッ…！！面倒くさい相手だな…もう！』』

悪態をつくジェミニに、地獄兄弟はゆっくりと手を差し伸べる。

『知るかよ…お前も、俺達の兄弟になるか？』

『来いよ…地獄に。』

『『…誰がっ！！』』

そんな風に言う地獄兄弟に、ジェミニは苛立ちながらそう返し…ディオスは高速移動でパンチホッパーに、ポリュデはその足でゆっくりと歩み寄りつつ、キックホッパーに殴りかかる。

だが……それは無駄に終わる。

『フン、まだまだだな…！』

『遅いよ、お前…。』

―Ｃｌｏｃｋ・Ｕｐ―

電子音声が鳴ると、パンチホッパーの姿がブレ…次の瞬間、ディオスの体が弾き飛ばされる。

『『グッ…！！オォォオオォォォ！！！』』

ディオスが弾き飛ばされると、それと連動したようにポリュデの体

が動くが…ポリュデはそのままキックホッパーに殴りかかる…が。

『まだまだだな…お前も。』

『『クッ!?…グアッ!!』』

キックホッパーは、軽くポリュデの足元を払い、転ばせる。もちろん、転んだポリュデを足で踏みつけることも忘れない。

『『テメェ…!!』』

『……おい…。』

怒りを込めた目で見つめるジェミニだが…キックホッパーは、静かにそう呟く。

―Ｃｌｏｃｋ・Ｏｖｅｒ―

『兄貴……。』

と、そこでクロックアップ空間から出てきたパンチホッパーも現れ、ディオスの近くに立つ。

『『…なんだ…?』』

ジェミニが恐る恐る聞くと…キックホッパーは、激情したようにポリュデを踏みにじる。

『『今…弟を（兄貴を）笑ったな!?』』

『『笑ってな…ッ！…グアアアアァァッ！！？』』

二人はそう言うと、ディオスとポリュデの背中をドガドガと勢いよく踏み始める。

『『だったら俺も笑ってもらおうか…？』』

『『…ッガ…ァァァァァァアアアッ！！！』』

更に、地獄兄弟はジェミニの横腹を勢いよく蹴り…そして、距離をとる。

激痛に顔を歪ませ、耐えきれずに一人に戻るジェミニの視線の先には…同じように倒れる、レオの姿が見えたのだった。

■

■

■

ディエンドは、そのやられていく二人を見て、仮面の下でニヤリと笑う。

『そうだ、折角だし君達のメモリももらっていこうかな？』

そう言うが早く、ディエンドはカードホルダーから、ディエンドが中心、周りに三人のライダーが描かれているカードを取り出す。

『さぁ、これでラストだ！』

―ＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ…Ｃｒｏｓｓ・Ｂｒｅａｋ！！―

『ハッ！！』

―ＳＰＡＲＫ（スパーク）！ＴＨＵＮＤＥＲ（サンダー）！ＬＩＧＨＴＮＩＮＧ（ライトニング）！

―ＳＵ（ス）・ＳＡ（サ）・ＳＡＮＧ（サング）！ＳＵＳＡＮＧ（スサング）！―

ディエンドがカードポンプアクションでドライバーに装填すると、ＯＯＯがディエンドのそばに戻り…雷の力を持った特殊なコンボに変身する。

その姿は、原典のＯＯＯにも有り得ない特殊な物。黒髪は朱色に変化し、稲妻を模した髪飾りでツインテール、瞳は紫に。

オーラングサークルは小さくなり、喉元に。意匠は上から横一本線、Ｘ字交差、縦三本線の稲妻が描かれている。

通常の漆黒のライダースーツではなく、オレンジのジャケットで腰には『雷』と書かれた腰マント。

右手に朱色のハンドガン、左手には腕と一体化している黄金の逆三角砲身の巨銃を持つ。

先ほどのラトラーターコンボが灼熱と疾風の力なら、こちらは雷電と突風の力。

これが、セルメダルに超能力が混じり合って変身した、ツンｄ…電身雷光（サング）コンボである。

『行くぜ？相棒…』

『あぁ、兄貴。』

そして、キックホッパーとパンチホッパーもディエンドの元に戻り、レオとジェミニを睨みつける。

『な、にを…！？』

『うっ…！うわあぁぁぁぁぁ！！』

ガクガクと震えながら立ち上がるレオに、逃げようとするジェミニ…その行動も無駄に終わる。

その行動を見下したように見ていた地獄兄弟は、ホッパーゼクターの脚部・ゼクターレバーを付け根部分のタイフーンを基点に動かす。

―Ｒｉｄｅｒ・Ｊｕｍｐ！―

―Ｒｉｄｅｒ・Ｊｕｍｐ！―

『『ハッ！！』』

その電子音が鳴ると、ゼクター内のタキオン粒子がチャージアップされ…タキオン粒子を脚に集めて脚力を増す。

タキオン粒子による力を、本来は跳躍に使用するが…地獄兄弟は真横に駆け出し、クロックアップ程のスピードで移動する。

逃げ出そうとしたジェミニをキックホッパーが。立ち上がろうとするレオにはパンチホッパーが立ち塞がる。

『ライダーキック…！！』

―Ｒｉｄｅｒ・Ｋｉｃｋ！！―

『ライダーパンチ！』

―Ｒｉｄｅｒ・Ｐｕｎｃｈ！！―

二人がベルトのゼクターレバーを元の形に戻し…同時にレオとジェミニの懐に入る。

キックホッパーはタキオン粒子を左足に集中させ、両手を地面に付ける。

…そして、そのまま跳ね上がる様に左足を伸ばし、レオの顎先めがけてアンカージャッキとタキオン粒子の威力を込めた必殺の『Ｒｉｄｅｒ（ライダーキック）Ｋｉｃｋ』を喰らわせる。

パンチホッパーも同様にタキオン粒子をアンカージャッキのある右腕に集中させ…力を溜める様にしゃがむ。

そして、アッパーカットの動きで、ジャンプしつつアンカージャッキとタキオン粒子の威力を込めた必殺技『Ｒｉｄｅｒ（ライダーパンチ）Ｐｕｎｃｈ』をジェミニの腹に喰らわせる。

『ガァッ……！！』

『ギャアアアッ！！』

苦悶の声を上げて上空に吹き飛ぶレオとジェミニ…そして、それをディエンドとOOOが狙う。

『はい、どうぞっと。』

『ありがとう。』

OOOは右手に持っていたハンドガンをディエンドに渡し、自身は左手と一体化している巨大砲身を右手で支える。

『さて、これで終わりだよ！！』

ディエンドはそう言うと、二枚の金色のカードを取り出し、ポンプアクションの動きでディエンドライバーに挿入する。

―FINALATTACKRIDE…DI・DI・DI・DIEND！O・O・O・OOO！―

『ハァァァァァァァァ…！！』

『AIBOOoooooooooooo！！！』

その音声が響くと、OOOの腕の砲口から紫電がバチバチと迸り…ディエンドライバーからは100枚のライダーカードが円を描きつつ、空中のレオとジェミニを狙う。

『兄貴ィィィィィィィ！！』

………そのライダーカードに、地獄兄弟もエネルギーとして吸い込まれていく。

『頼むよ？ＯＯＯ君♪』

『任せて下さい…！』

そうＯＯＯが言うと、ディエンドライバーの銃口、ブッカーノズルから現れる１００枚のライダーカードが巨大化し…ＯＯＯとディエンドの前に浮かぶ。

『君のその言神（ワードマスター）の能力…存分に奮ってくれ！！』

『ハイッ！！』

ディエンドのファイナルアタックライドの力、それにＯＯＯのコアメダルと変身者が持つ『言神（ワードマスター）』の力が加わり、まさに∞を超すＯＯＯの最強の一撃となる……！！！

『『大怪盗と緋色の雷雨（ファントムラードルヤルラハロヂ＆プラーリィ）！！！！』』

そして、ディエンドが引き金を引き、ＯＯＯの砲口から迸る紫電が一際強くなった瞬間…二人の砲撃がライダーカードの中心を通り、レオとジェミニに向かう！！

『く、クソォォォォォォォォォォォ！！！！』

『ィ…イヤダァァァァァァァ！！！』

レオが後悔の声を、ジェミニが嘆きの声を上げるが…その刹那ＯＯＯとディエンドの砲撃が二人に命中し、爆散する！！！

『…さぁ、お宝お宝♪』

『え、えぇ、そうね…。』

と、その爆散した二人の事を全く気にせずスキップでレオとジェミニの爆発した下に行き、落ちている【ＬＥＯ】と【ＧＥＭＩＮＩ】のメモリを拾う。

その様子を見たＯＯＯは、若干距離をとりながらそう答える…が。

『……。』

その返事も上の空で、ＯＯＯは天井…いや、はるか上の最上階の方を見上げている。

それを見たディエンドはそのままＯＯＯを見つめ…ぽつりと、疑問を発する。

『行きたいのかい？ＯＯＯ君。』

『……えぇ。』

ＯＯＯがそういうと、ディエンドは仮面の下で笑い…後ろを向く。

『なら、行ってきたまえ。僕はもう少しお宝を探す……好きにするといいさ。』

『…別に…ありがたく、思ってないんだからね？』

そう言ったディエンドにＯＯＯはペコリと頭を下げ…メダルを三枚

すべて交換し、赤、黄色、緑のメダルをオーズドライバーに装填する。

―ＴＡＫＡ！ＴＯＲＡ！ＢＡＴＴＡ！―

―ＴＡ・ＴＯ・ＢＡ！ＴＡＴＯＢＡ・ＴＡ！ＴＯ！ＢＡ！―

ＯＯＯは、先ほどのラトラーター、スサングとも違う脚の装甲とブーツには緑のラインドライブが奔っている。

頭は『鷹』を連想させる赤色のメッシュ、髪型も赤い鷹の髪飾りで止めたポニーテールになっている。

上半身はラトラーターと同一の爪付きの黄色の手甲、トラアーム。

下半身には外側を保護する強化外骨格のバッタニーディアス、自身の放つライダーキックの衝撃から身を守るバッタアンクルトゥとバッタアグソール…それらを持つ『飛蝗』の力を持つバッタレッグ。

その三つを持つ、ＯＯＯ基本形態…それがこの鷹虎蝗（タトバ）コンボなのである。

『では…行ってきます。』

―発（ガオオオオン）！！―

―発（ザアアア）…！！―

オーラングサークルの『飛蝗』と『虎』の紋様が光り輝き、手にはトラクローが展開し、爪が現れる。

―認（キン）、認（キン）、認（キイン）！―

―Scanning Charge！！―

そして、OOOはオースキャナーでオーズドライバーをスキャンし、必殺技を発動させる。

『ハァァァァァァァァ…！！！！』

バッタレッグをその名の通り『飛蝗』の脚の様に形に変化させ…頭上に、三つのリングを出現させる。

『セイヤァァッ！！』

そして、そのまま勢いよくジャンプし…空中で回転、そのまま天井めがけて『タトバキック』を放つ。

―GAGAGAGAGAGAGAGAGAGAGAGAGAGAGAGAGA！！！！―

OOOはそのキックの威力で天井をぶち抜き、最上階を目指す！！！

『……全く、仲間って言うのは…本当に面倒なものだねぇ…？』

ディエンドはそう言うと、メモリを三本しまって更に近くにあるはずのお宝を探し始める…。

■　■　■

＜スターライト＞最上階。コンステーションと仮面ライダードゥーツとの戦いは続いていた。

二人は、武器を持たない基本形態のまま徒手空拳で戦い、その力は互角の様に見えた。

『ハッ！セイッ！ダラァッ！！』

『ふん…甘いぞ、ライダー！！』

本性をあらわにした銀河は口調も荒々しい物となり、戦闘と言うよりはまるで単なる暴力の様にドゥーツを殴り合っている。

しかし、コンステレーションは心の底は冷静なのか、一瞬の隙を見てドゥーツの放った拳をつかみ、そのまま投げ飛ばす。

『なんのッ…！！』

『次は、中距離戦で勝負です！』

マープルの意識がそう言うと、ドゥーツはアッシュとポイズンのメモリを二つとも抜き、ドリームとスピリットのメモリを取り出してドライバーに挿入、操作する。

―ＭＡＧＩＣＩＡＮ！ＳＰＩＲＩＴ！―

ドゥーツは黒と銀色のマジシャンスピリットに変身し、スピリットバンカーを手にし、そのまま殴りかかる。

『オラァァァァッ！！』

『やられるかぁ！！』

―ＣＡＰＲＩＣＯＲＮＵＳ！Ｍａｘｉｍｕｍ Ｄｒｉｖｅ！！―

コンステレーションは盾に《磨羯宮の記憶》…山羊座の記憶を持ったメモリを挿入、ねじ曲がった先端を持つ三叉槍の形にする。

その槍でスピリットバンカーを受け止め、弾き飛ばす。

『なんのっ…！！ウラララララララララァ！！』

『ハァァァァァッ！！』

一とマープルは力を合わせ、弾かれたスピリットバンカーを握りしめて更にラッシュを打ち込む。

『グッ…！グァアアア！！』

そして、それを三叉槍で防いでいたコンステレーションだが…とうとう耐えきれなくなり、自分も距離をとって体制を整える。

『お次はこいつだ！』

ドゥーツはまたマジシャンとスピリットのメモリを抜き、次はドリームとバスターのメモリを取り出す。

―ＤＲＥＡＭ！ＢＵＳＴＥＲ！―

『これでやられろ…！！』

『誰がっ！！』

ドゥーツはメモリチャンジすると胸にマウントされたバスターマグナムを手に取り、連射する。

『ハァァァッ！！』

―ＳＣＯＲＰＩＯ！Ｍａｘｉｍｕｍ Ｄｒｉｖｅ！！―

『クッ…！！オオオォォォォォ！！！』

―ＤＲＥＡＭ！Ｍａｘｉｍｕｍ Ｄｒｉｖｅ！！―

コンステレーションが盾に《天蠍宮の記憶》…蠍座の力を持つメモリを差し込み、鞭にして攻撃するが…ドゥーツはそれをバスターマグナムで弾き返し、さらにコンステレーションを狙って射撃する…だが。

『甘いぞ、ライダー！！！』

コンステレーションはその鞭の先端から紫色の煙を出し、ドゥーツに噴射する。

『うっ…！！』

『いーちゃん！？』

ドゥーツ…いや、その体の本来の持ち主である一はガクリと膝をつき、ソウルサイドのマープルは自分には分からない一の身体のダメージに戸惑う。

『フハハハハ！！甘かったな、ライダー…！！それは最悪の神経毒だ！！すぐに体に毒がまわり、お前は死ぬぞ！！』

『なんで…なんでなんですか！？』

高笑いするコンステレーションに、耐えきれなくなったマープルが叫ぶ。

『なんで貴方は…ここまでやろうとするんですか！？』

『……なん…で…だ、と？』

悲痛に叫ぶマープルに、コンステレーションは絞り出すような声を出す。

『そうです！訳の分からない理由でこの地球を滅ぼそうとして『貴様になにが分かる！！』ッ！？』

マープルの叫びを遮り、コンステレーションはまるで泣く様に叫ぶ。

『貴様等にッ…！！正しい世界にいる貴様等なんかに何が分かるッ！！！』

『正しい…世界…？』

一が、息も絶え絶えにそう言うがコンステレーションは更に慟哭の

叫びをあげ続ける。

『俺だって、気付くまではこんなことする気はなかったさ!!メモリを買って、ライダーになって、人の役に立って…俺はずっとそんな子供みたいな夢で頑張ってきたんだ!!!』

『だけど、俺は気付いてしまったんだ!!俺が…俺の世界が、偽物だという事にな!!』

泣く様に…いや、その仮面の下では泣きながら、コンステレーションは言い続ける。

『俺の生きる世界が!!俺の友人達が!!全て偽物だったという事が分かった俺の気持ちが分かるか!?』

『……分かるかよ、んなもん…!!』

そこで、ポツリと一が言葉を漏らす。

その体は、まだがくがくと足もふらついた万全ともいえない状態だが…しっかりと、一は立ち上がる。

『!?…まだ立てるか…ライダー。』

『いーちゃん?!毒が…!』

コンステレーションは一瞬動揺するが…すぐに元に戻り、ドゥーツを見据える。

マープルは一が動く事で毒がまわらないかと、心配する。

だが、一はそのままゆっくりと話し始める。

『お前がどんな思いで、どんなに苦しんできたのかとかは知らねぇ……だけどな！！』

一は、体に毒がまわるのも気にせず、声を荒げる。

『お前が…テメェが間違ってるのは分かるんだよ！！』

『なんだと！？』

一のその言葉に、コンステレーションも声を荒げて反論する。

『お前は苦しんできたんだろうな！そんな思いを持ってんだ、そりゃ不幸だっただろうな！…でも、それでどうした！！』

『いーちゃん…？』

一の言葉に、マープルが心配するような声をかける…が、一は続ける。

『不幸だからって別にいいだろ！お前みたいにグレる必要もねぇし、泣く必要もねぇし…悲しむ必要だってねぇんだ！！別にいいだろ気にすんな！お前が勝手に悲しんでグレて泣いてるだけだ！！それを他人に押し付けてまで行動するな迷惑だ！！』

『ふ…ふざけるな！！俺が、どれだけこの世界のために…！！』

『んな独りよがりのおせっかいを押し付けてさぞ嬉しかっただろう

なこの野郎！！そう言うのは一人でやってろ邪魔くさい！！…あぁもう面倒くせぇ…来るなら来やがれおせっかい野郎！！紳士的にぶちのめしてやる！！！』

そういうと、ドゥーツとコンステレーションはお互いに臨戦態勢に入る…と、そこに。

『……すごい、ですね…。』

『『『ッ！？』』』

突如、背後から聞こえてきた声に、二人は振り向く……そこには。

『でも、貴方のその考え方は嫌いじゃないですね……助太刀しますよ、仮面ライダードゥーツ。』

『……お前は…！？』

『僕の名は…仮面ライダー、ＯＯＯ（オーズ）。』

そこには、異世界のライダー…仮面ライダーＯＯＯ、音霧霊夢が、堂々と立っていた。

## 【劇場版　仮面ライダーＤＯＴＷＯ　ＳＴＡＲ、Ｓ　漆黒の星々】　Ｃパート後

はい、ようやく完成しました！！

…前回に引き続き、作者月詠様とコラボしています。

そして、キャラ紹介に手挿絵入れました。それでは、お楽しみ下さい…。

■　■　■

＜スターライト＞最上階。

そこには、ＯＯＯ、ドゥーツ、コンステレーションの三人のライダーがそろい踏みしていた…。

『初めまして、仮面ライダードゥーツさん…。』

ＯＯＯは、ペコリとドゥーツに一礼して挨拶する。

『貴女も、仮面ライダーなんですね？』

『はい。この世界に来たのはほぼ偶然ですけど…貴方達をお助けします。』

二人がそう話していると…後ろから、光弾が放たれる。

『ガラ空きだ…！！』

コンステレーションは弓に変化した盾を構え、ＯＯＯとドゥーツを狙う。

『ッ、危ない！！』

『おっと！？』

ドゥーツがそれに気付き、ＯＯＯを抱えて回転して避ける…だが。

『甘い…！！』

コンステレーションはメモリを差し込み、マキシマムドライブを発動させる。

―ＳＡＧＩＴＴＡＲＩＵＳ！Ｍａｘｉｍｕｍ Ｄｒｉｖｅ！！―

『サジタリウス・レイン！！』

サジタリウスメモリの力で、無数の矢の形をした光弾が更に二人を襲う。

『ちっ……奥の手使いますよ！！』

『なんか…お役に立ってない感じがするんで、ごめんなさい。』

ＯＯＯを抱えながら避けているドゥーツは、そう言うが…胸の中のＯＯＯは、どこか所在なさげな顔でそう謝る。

『いえいえ…今から役に立ってもらいますよ！？』

『え…それって？』

そういうと、ドゥーツは……変身を解く。

『…えぇ！？』

「じゃ、私達がいろいろやってるので…時間稼ぎ頼みます！！」

一はそう言い、ゆっくりと目を覚ましたマープルの方へ走っていく。

……自分やマープルの方に来た光弾はしっかりとステッキのリボルバーモードで撃ち落としているが。

『えっ…ちょ…！！あぁもう！！』

ＯＯＯはそう言いながらも、メダルを交換し、コンボチェンジをする。

―ＴＡＫＡ！ＧＯＲＩＬＬＡ！ＣＨＥＥＴＡＨ！―

ＯＯＯは、さらに新たなメダル…ゴリラメダルを使い、その姿を変える。

頭はそのままタカヘッド。

ゴリラアームのその両腕にはゴリラの巨腕を彷彿とさせる巨大な銀色の鉄甲、『ゴリバゴーン』が装着されている。

足はラトラーターと同様にチーターレッグ。

ＯＯＯは新たなコンボ…タカゴリーターになり、その腕を構える。

『巨腕の流星雨（グランディバヌラヲヰドラチャ）！！』

ＯＯＯは言魂の力を使い、強化したゴリバゴーンをジャブの様に何

回もパンチを出すことで飛ばし、光弾を撃ち落としていく。

『なんだと!?』

『これも、奥の手ってね…!!ハァァッ!!』

コンステレーションも、さすがにロケットパンチは予想外だったのか、驚愕の声を上げる。

…そして、一はマープルのところに戻り、アッシュメモリを渡す。

「マープル。あの書類に書かれていたドゥーツのパワーアップ…やりますよ。」

「いーちゃん…本気ですか!?」

一はそう言うと、マープルは驚愕の顔で一を見上げる。

…門矢士からもらった書類…それに書かれていたパワーアップ方法は、確かにドゥーツの力を上げる…だが、それは同時に変身者の体を蝕んでいく、両刃の刃なのである。

「…この世界がどうなってもいいんですか?」

「……それは、そうですけど…」

一がそう説得するが…マープルは、引き下がらない。

…一は、一度言葉に詰まった様になるが…マープルの肩をつかみ、目線を合わせて、言う。

「私は、私一人では何もできない……ですが、貴女となら、どんなことでも出来るんです！！」

……一がそう言うと、マープルははっと顔を上げ一の顔を見るが…すぐに顔を伏せる。

「…本当に、死ぬかも…しれないんですよ？」

「…貴女となら、地獄へでもどこへでも。」

二人はそう言うと笑い…お互いに、メモリを構える。

…そして、それは兎も角、ＯＯＯは何回もパンチを出しているが…さすがに、ＯＯＯも人間。何万かになろうという光弾を撃ち落としていると、腕の疲労もたまってくる。

『ちょ…！！早く、して下さいな！！』

ＯＯＯが悲鳴交じりにそう言うと、一は苦笑いをしてマープルと一緒に立ちあがる。

「えぇ、お待たせしましたね…行きますよ！」

―ＰＯＩＳＯＮ！―

「はいっ！！」

―ＡＳＨ！―

二人はメモリを構え……同時にマキシマムスロットへ挿入してマキシマムドライブを発動させる。

『…えっ！？』

その光景を見て、Ｗの世界の知識を持っているＯＯＯは驚愕する。

使用しているメモリの力を最大限に増幅させた物がマキシマムドライブ…それを、変身前に行うのだ。

変身していない生身の一とマープルでは、力が強すぎる。

一とマープルは二本のメモリをスロットから引き抜き、変身する様に構える…だが。

「っつ…！！」

「これくらい…！」

先ほどのＯＯＯの予想通り、二人が手に持ったメモリからは紫電が迸り、二人の手を傷つけている。

『フ…ハハハハハハ！そのメモリでどうする気だ！まさか、変身できる訳もあるまい…馬鹿が！！』

コンステレーションは嘲るように笑うが…一とマープルは笑う。

「そのまさかですよ…！！マープル！」

「はい、いーちゃん！」

二人はそう言うと、また笑い…そして、言葉を紡ぐ。

「「変身！！」」

そう言って、マープルは自分のアッシュメモリをドライバーに差し込む……すると、いつもより一際強い灰色の光が灯り…マープルごと、その光が消える。

『なっ…！？』

『え、えぇ！？』

コンステレーションとＯＯＯはそれを見て驚くが…一は、ニヤリと笑ったまま表情を崩さない。

一は自分のポイズンメモリもドライバーに差し込み…操作する。

―ＭＡＸＩＭＵＭ・ＡＳＨ！ＭＡＸＩＭＵＭ・ＰＯＩＳＯＮ！―

その電子音声が鳴ると…灰色と紫色の光が太陽の様に光り輝き…その体を包む。

『この…っ！！くたばれぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！』

―ＡＱＵＡＲＩＵＳ！Ｍａｘｉｍｕｍ Ｄｒｉｖｅ！！―

その光に何かを感じたのか、コンステレーションは大筒に変化した盾を構え、砲口から巨大な砲撃【アクアリウスバースト】をドゥーツに向かって放つ。

『なっ！！…あぁクソ！！』

―認（キィン）、認（キィン）、認（キィィン）！！―

―Ｓｃａｎｎｉｎｇ Ｃｈａｒｇｅ！！―

ＯＯＯはオースキャナーでメダルの力を開放し…体制を低くし、両腕を後ろに構える。

『神速の拳雨（ディオボータフーニョライン）！！』

そういってＯＯＯは言魂の力で超巨大化したゴリバゴーンを数発放ち、コンステレーションのマキシマムドライブと相殺させる…しかし。

『無駄ァァァァ！！！』

『なっ…！！』

コンステレーションのマキシマムドライブは、ＯＯＯの必殺技の威力をはるかに超え、ゴリバゴーンを飲み込んでドゥーツに迫る。

『ッ…！ドゥーツさん！！』

ＯＯＯはそう声をかけるが、コンステレーションの砲撃はドゥーツの光に向かう。

…と、その時。

『『……。』』

光の中に、一人の仮面ライダーの影が見え…その影が、手を構える。

すると……その仮面ライダーの足元から灰の様な物が立ち上り…壁となってその砲撃を防ぐ。

『ッ…！！ガァァァッ！！？』

コンステレーションはそれに驚いた顔になるが…その壁が煙の様に変化し、コンステレーションを襲う。

そして、その仮面ライダーはゆっくりと歩き出し…前に進む。

『……これが…ドゥーツの新たな力ですか……。』

…そして、光がゆっくりと止み…その仮面ライダーの姿が見え始める。

ドゥーツドライバーは全体に金色の装飾が付き、ソウルサイド側には緑色の風を模した装飾、ボディサイド側には紫色の装飾が付き、マキシマムスロットも二本に増えている。

色とその特徴的な姿はまさにドゥーツそのものだが…その二つに分かれた部分の装飾が異なっている。

アッシュの側の装甲には、ガラス細工の様な羽が生え、数か所に緑色の華麗な装飾がついている。腕には天使の羽根の様な手甲もつき、神々しい印象を持っている。

ポイズン側の装甲はアッシュとは対照的に毒々しい悪魔の様な羽が生え、体には黒色の装飾が。腕には棘が生え、手は鋭い鳥や獣の爪の様になっている。

天使と悪魔、その二つがまじりあった存在…それがこの仮面ライダーＤＯＴＷＯ―ＭＡＸＩＭＵＭ―なのである。

そして…緑と黒。それは奇しくも、別世界に存在するＤＯＴＷＯの元となったライダー、【仮面ライダーＷ】に酷似したものであった。

『…さぁ、仮面ライダーコンステレーション…いや…星海銀河…。』

『貴方は、やりすぎました…。』

二人はそう言うと、人差し指を立ててコンステレーションを指差す。

『貴方には、天罰さえ物足りない…。』

一がそう言うと、二人は声を合わせて言い放つ。

『『さぁ、神罰執行！！』』

『な…！な…！！』

ドゥーツがそう言い放つと…コンステレーションは怒りでプルプルと震え…すぐに拳を構える。

『舐めるな、餓鬼ィィィィィィィィ！！！！！』

コンステレーションはそう叫びながら拳を掲げて殴りかかる…しか

し。

『灰よ！！』

ドゥーツは地面に手をつき、マープルの声色で喋ったかと思うと…その地面から灰が煙の様に立ち上り、コンステレーションとの間に壁を作り上げる。

『なっ…！！』

『続けてっ！！』

そして、その壁は瞬時に煙に戻り…剣となって、ドゥーツの手の中に収まる。

『ハァァァ！！セイッ！！』

『ガッ…！！グオォォォ！！』

ドゥーツはその剣…【アッシュセイバー】を構えて何回もコンステレーションを斬り付ける。

『…なにもしないのも癪ですし、畳み掛けます！』

―ＴＡＫＡ！ＫＡＭＡＫＩＲＩ！ＣＨＥＥＴＡＨ！―

若干蚊帳の外だったＯＯＯもそこでタカキリーターにコンボチェンジし、両腕の双剣…【カマキリソード】でコンステレーションを斬り付ける。

『ガッ…！！ギャアアアアッ！！！』

そして、二人のライダーの斬撃を喰らったコンステレーションは、そのまま大きく倒れる。

『続けて…。』

ドゥーツはメモリを抜き、新たに二本のメモリを挿入する。

―ＭＡＸＩＭＵＭ・ＭＡＧＩＣＩＡＮ！ＭＡＸＩＭＵＭ・ＳＰＩＲＩＴ！―

その電子音声が鳴ると、ドゥーツの姿が変化する。

マジシャン側には黒色のマントがつき、体には赤色の装飾がつく。全体的に装甲は薄くなり、スーツの様な見た目に。

スピリット側は純白のマントが付き、体中の装甲が厚くなり、重装甲になっている。

そして、ドゥーツはその姿…ＭＸＭＳ（マキシマムジシャンスピリット）になると、中空からスピリットバンカーの強化版、スピリットブレイカーを生み出す。

ＭＸＭＳ専用の武器、スピリットブレイカーはスピリットバンカーの二倍の大きさ、そして先端には凶悪な棘付きのドリルが付いている。

『ＯＯＯ、一度離れなさいっ！！』

『え…うわわ！？』

その凶悪そうな外見を見たＯＯＯは、ドゥーツがそう言うが早く二の太刀をコンステレーションに浴びせてから飛び退く。

『ぐっ…！！ガッ！ギャァァッ！』

『ダラララララララララララ…ラァァッ！！！』

『ひっ…！？グ、アアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！』

ドゥーツはスピリットブレイカーを難なく振り回して強烈な一撃を確実に命中させていき…そして、最後にドリル部分を槍の様な扱いでコンステレーションのアーマーを抉りとっていく。

『うっわ…えげつない…』

『非常事態…と言うか、相手は悪党なのでセーフです！』

ＯＯＯは手で顔を覆って若干引き気味にそう言うが、マープルはそう言い、さらに追撃する。

『畜生…！！餓鬼が！！』

―ＳＣＯＲＰＩＯ！Ｍａｘｉｍｕｍ Ｄｒｉｖｅ！！―

コンステレーションは今の攻撃で全身がボロボロになり、二の腕や左膝など一部のアーマーは剥げているが、そんな体でもそう叫び、盾にスコルピアメモリを挿入し、猛毒の針を持った鞭を振り回す。

『甘いですよッ！！』

―ＭＡＸＩＭＵＭ・ＤＲＥＡＭ！ＭＡＸＩＭＵＭ・ＢＵＳＴＥＲ！―

ドゥーツは更にメモリチェンジをし、ドリーム側には金色の装飾と雲の様な武装、バスター側には顔には、銃撃を定めるためのスコープが付き、体には弾奏の様なベルトが巻かれている姿、ＭＸＤＢ（マキシマムドリームバスター）に変身し、手にまるでバズーカの様な形をしたバスターマグナムの強化版、バーストマグナムを構える。

『消し飛べ…！！』

そういって、ドゥーツが引き金を引くと一発で何発もの光弾が打ち出され、的確に鞭を撃ち落とす。

『なァッ…！？グアァ！！』

そして、その中の一発がコンステレーションに命中、その一撃でコンステレーションはガクリと膝をつく。

『…スーパーリンチタイム…じゃないですか？』

『うっ…否定ができない。』

ＯＯＯが引いているのを見て、ドゥーツもそう呟く。

……と、その時。

『ア…ア゛ァ…！！』

『『ッ！？』』

獣の様な唸り声が聞こえ、ＯＯＯとドゥーツはバッとコンステレーションの方を向く。

『貴様ら…！！！殺してやる…！！殺してやる…！！』

もはや、体の装甲も傷ついて生身の体が見えている…だが、コンステレーションはそんなことを苦にもせず、自分のベルトからメモリを抜き、更に持っていた四本のメモリすらベルトのマキシマムスロットに挿入する。

―ＳＣＯＲＰＩＯ！Ｍａｘｉｍｕｍ Ｄｒｉｖｅ！！―

―ＳＡＧＩＴＴＡＲＩＵＳ！Ｍａｘｉｍｕｍ Ｄｒｉｖｅ！！―

―ＡＱＵＡＲＩＵＳ！Ｍａｘｉｍｕｍ Ｄｒｉｖｅ！！―

―ＣＡＰＲＩＣＯＲＮＵＳ！Ｍａｘｉｍｕｍ Ｄｒｉｖｅ！！―

―ＣＯＮＳＴＥＬＬＡＴＩＯＮ！Ｍａｘｉｍｕｍ Ｄｒｉｖｅ！！―

『…ッァ…！！これだ…この力だ…！！！……ッ！！』

―ＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨＨＨ！！！！！！！！！！！！！！―

コンステレーションがメモリを全て挿入すると……十二宮の四本のメモリが砕け散り、マキシマムスロットから抜けて宙に浮いた『

CONSTELLATION』のメモリにその砕けた欠片が集い、幻想的な装飾がついた一本の新たなメモリに変わる。

『な……！！』

『銀河系の記憶の……上書き……！？』

『ちょっと……これってまさか……！！』

―CORE！！！―

その《星核の記憶》を持ったプラネットメモリは、そのまま空中を浮遊し……コンステレーションの額に突き刺さる。

―AA……！！AGAAAAAAAAAAAAAAAAA！！！！！―

そして、まるで化け物の様な呻き声をあげたコンステレーションはメモリが刺さった個所からじわりじわりと炎に包まれ……蹲ってしまう。

『……自滅……しましたか？』

『まさか……。』

『……ッ……。』

蹲ったまま動きを止めた火達磨のコンステレーションを見て、ドゥ

ーツとＯＯＯは緊張を高める…そして、次の瞬間。

ーＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯ！！！！！ー

蹲ったままのコンステレーションの背中から火柱が立ち上り、そのまま部屋の天井を破壊する。

その火柱で破壊された天井が、二人に降り注ぐ。

更に、その火柱から炎で出来た触手がＯＯＯに襲いかかる。

『なっ…！！』

『危ないッ！！』

ーＭＡＸＩＭＵＭ・ＡＳＨ！ＭＡＸＩＭＵＭ・ＰＯＩＳＯＮ！ー

ドゥーツはＯＯＯに落ちてくる天井の欠片を防ぐため、一度ＭＸＡ（マキシマムアッシュ）Ｐ（ポイズン）に戻り、ＯＯＯを抱きかかえながら背中の翼から羽型の光弾を撃ち出し、破壊する。

『…大丈夫ですか？』

『あ…大丈夫です。』

腕の中のＯＯＯに、ドゥーツは心配そうに声をかけるが、ＯＯＯは少し顔を背けて頬を赤らめる。

『…女の子らしいですねぇ。』

『男です！！』

『『え！？』』

…と、三人がそんな風に少し気を抜いた瞬間…火柱の触手がＯＯＯに向かい、命中する。

『ッ…！！』

『ＯＯＯ！』

『この！！』

ＯＯＯは腕のカマキリソードで振り払おうとするが、炎が燃え上がって上手くいかない。

それをドゥーツは翼で一気に消し飛ばそうとするが…その前に、触手は火柱へ戻っていく。

『ＯＯＯ、怪我は？！』

『大丈夫ですけど…っ、コアメダルを何枚か持っていかれました…！！』

ＯＯＯがゆっくりと立ち上がり、自分のベルトを見るが…そこにあったはずのカマキリメダルと、持っていたチーターとスパーク、そしてウナギのメダルが獲られていた。

『奴は…何を…？』

ＯＯＯがそう呟くが…コンステレーションから立ち上る火柱は治まる所を知らずに燃え盛り…獲ったスパーク、カマキリ、ウナギ、チーターのメダルを周りに浮かばせている。

―ＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！！！！！！―

浮いていたその四つのコアメダルはそのまま回転し…ＣＯＲＥのメモリから放たれた火の粉を浴び、その姿を変える。

『なんですか…？あれは…！？』

『なんだ…あのコア…！？』

そのコアメダルは、それぞれの絵柄を変え…黄金色に輝いている。

カマキリメダルは、蠍を刻んだメダルに。スパークメダルはヤギを刻んだメモリに。チーターメダルはウマを刻んだメダルに。ウナギメダルは水瓶を刻んだメダルに変化する。

『あれは…なんだか、ヤバイ気がしますよ…！？』

『…同感です。』

一とマープルがそう言うと…コンステレーションの周りから更に火柱が立ち上り、空に向かっていく。

『なにが…っ！？』

ドゥーツが火柱の上がった上空を見ると………巨大な、岩石の塊の様な物がこちらに迫ってくるのが見える。

途方も無く遠い距離にあるはずなのに、その岩石はとても大きく見える。

『まさか…隕石！？』

『え゛！？なんですか、それは！？』

『…そこらへんの事情、貴女知らなかったんでしたっけ…説明してる暇はないですよ！！』

その隕石を見てドゥーツとOOOは慌てるが…そこで、ビクリとコンステレーションが立ちあがり、操り人形の様に立ち上がる。

―A…GAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA！！！！―

そう叫ぶと、コンステレーションは火の玉の様に火柱を螺旋しながら登っていき、隕石へと向かう。

それに続く様に、コアメダルも火の玉についていく。

『ああっ、僕のコアメダルッ！！』

OOOがそういうが…コアメダルはそのまま空高く昇っていく。

『ッ…これは…？』

『なんだか…嫌な予感しかしません…！！』

マープルがそういうと……火柱の上空から、なにかが砕け散る様な音が聞こえ…更にそこから何か大きなものが落ちてくる音が聞こえてくる。

『なっ…！！これはまさか…！？』

『…そのまさかの様ですよ。』

ＯＯＯが愕然としたようにそう言うと、ドゥーツも疲れた様に空を見上げる。

そして……一気に上から青色の炎の塊が落ちてくる。

『下がりなさいっ！！』

ドゥーツは、その炎の塊が落ちてくる寸前に翼を広げ、ＯＯＯと自分を翼で包み、防御する。

『ッ…ＯＯＯ、無事ですか？』

『えぇ…ですけど、あれは…。』

ＯＯＯがみた先…そこには、体の大きさが数倍になり、アーマーは剥げて砕けたコンステレーションがいる。

…しかし、その巨躯は青く輝く炎に包まれ、仮面ライダーの面影も無く…すでに、怪人と呼べる姿である。

—…ａＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！！！！！！—

その怪人は、鼓膜が破れそうなほどの音量の咆哮を上げると…掌をドゥーツに向け、蒼の炎を飛ばす。

『灰燼ノ鳥籠（アッシュアベデハウラ）。』

だが、マープルの意識がそう呟くと、地面から灰が立ち上り、ドゥーツの翼と一体化、ドームの様になってその炎を防ぐ。

『…メモリに飲まれましたか、星海銀河…！』

『…検索してみましたけど、あの姿……別の世界の仮面ライダーとそっくりです。』

一がそう言うと…マープルもポツリ呟く。

そして、マープルが言ったように、コンステレーションのその姿…それは、炎の色を除けば別世界で正史のＷ（ダブル）とＯＯＯ（オーズ）と戦った巨大ライダー…コアと全く同じであった。

—ＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！！！！—

その蒼いコアはまた咆哮をあげると、空に手を掲げ、遥か彼方に見

える隕石を見上げる。

………そして、それを見たマープルは驚愕の声を上げる。

『ちょっと！？あの隕石…スピード上がってないですか！？』

『…まさか、星海銀河…メモリとあのメダルの力で、隕石を操って…！？』

そう言っている間にも、隕石は目に見えて加速し…ドゥーツ達のいる場所を狙うかのように落ちてきている。

『………これは、まずいですね…。』

『えぇ。このままでは…この世界ごと破壊されてしまいます。』

一が隕石を見上げてそう言うと、ＯＯＯも疲れたようにそう返す。

『マープル、あの隕石を破壊する方法は？』

『…今から検索しますから、時間稼ぎお願いします。』

『…はい。了解です。』

一がそう言うと、マープルは気合を入れ直したようにそう言い、ＯＯＯはそれに答える。

―ＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！！！―

コアは手を下げ…また咆哮を上げるとドゥーツ達に向き直る。

『……では、本気で行きますか…？』

『えぇ。…っと。ドゥーツさん。どうせですし…これを。』

一が、気合を入れ直したかのようにそう言うと…ＯＯＯがポンと手を叩き、セルメダルをドゥーツに投げる。

『む…？これは…。』

一がそう呟きながらその三枚のセルメダルをキャッチし、握りしめると…一瞬そのメダルが発光し、ドゥーツが握っていた拳を開くと…銀色のただのセルメダルだった三枚は、灰色の【Ａ】が刻まれたメダル、マーブル色で【Ｄ】の刻まれたメダル、紫色の【Ｐ】と刻まれたメダルに変化している。

『…まさか。』

『そのまさかですよ…。』

ドゥーツがそう言いながらメダルを投げ返すと、ＯＯＯはそのメダルを受け取り…その三枚のメダルをオーズドライバーに挿入、スキャンする。

―認（キィン）、認（キィン）、認（キィン）！！！―

―ＡＳＨ（アッシュ）！ＤＯＴＷＯ（ドゥーツ）！ＰＯＩＳＯＮ（ポイズン）！―

―A♪DO・IS♪ADO♪IS♪―

その音声が鳴ると……OOOの姿が今までとは全く違う物へと変わる。

頭部は、銀白のサラサラと輝く長髪に【A】の形の髪飾りが。

額には、金の鎖で付けられた煙水晶（スモーキークォーツ）の六角形のオークォーツが。

体には右腕に銀色の強固な装甲、左腕には藍色をしたピッチリとした特殊兵士の様な装備。

脚は紫色の強化装甲に守られ、動きやすそうな短いスカートが付いている。

胸のオーラングサークルは上部分には灰色の【A】のマーク、中心部分は二つに分かれ、右側には銀色【S】、左側には藍色の【B】が。下部分には紫の【P】が刻まれている。

『…アドゥイズコンボ…ってところですかね。』

『…何気に貴女もチートですね。』

『貴女が言うと説得力無いですって…さて。』

…OOOとドゥーツ。二人のライダーは臨戦態勢に入り、睨みつける。

―GAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA

ＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡａａａａａａａａａａａａ！！！―

コアはそれを見て一際大きく咆哮をあげると…ドゥーツ達に向かって走ってくる。

『ハァァァッ！！』

『だらぁっ！！』

そして、ＯＯＯとドゥーツもコアに向かい、駆け出す！！

『…シッ！！』

『セイヤァッ！！』

ドゥーツが翼から光弾を飛ばし、コアの顔面を狙うと、ＯＯＯは口元に手を当て…フッと吐息を吐き、灰の様な物を飛ばす。すると…

―ＧＡ…？！ＧＩＩｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉ！！！！！！―

『おっと…これはなかなか。』

『……さっき私達に鬼畜だか何だかいってましたが、貴女も十分鬼畜ですよ…？』

ＯＯＯが吐息と共に吐いた灰はコアの顔の周りに纏わりつき、ドゥーツの光弾がコアの顔面に命中すると、それに反応して誘爆を起こ

し、コアを傷つける。

『まぁ…そこは気にせず。次行きますよッ！！』

『…了解です。』

―砲(バァァァン)…ッ！！―

―MAXIMUM・ASH！MAXIMUM・BASTER！―

ドゥーツがMXAB(マキシマムアッシュバスター)にメモリチェンジし、OOOもドゥーツメダルの力を使い、オーラングサークルの【B】が刻まれた個所から左腕に藍色の光が伸び…その手に、バスターマグナムを顕現させる。

『『喰らえ…！！』』

二人は合わせた様にそう言うと、一気に引き金を引き…コアに向けて無数の光弾を打ち出す。

―AAAAAAAAAAAAAAAAA！！！―

『果てろ…！！』

『ッ…！！』

二人がまるでマシンガンの様に銃を撃ち続けるが…コアはさほどダメージを受けてはいない。

『…いーちゃん、コアについての情報、検索完了しました…で、少し悪い知らせが。』

『…何ですか？』

一がすこし顔をひきつらせてそう言うと…マープルはコアについて語り始める。

『コアは、上空にある隕石をエネルギー源としてあの力を持っています。隕石の力が大きいので、大抵の攻撃は効かず、すぐ再生されます…けど、一つ倒す方法が。』

『…悪い知らせがそれだけで済んで助かりましたけど…方法と言うのは？』

『……【一気に強いダメージを与えて破壊する】…です。』

『…了解っ！！ＯＯＯ！…最後です、一気に決めますよ！！』

『はい！！』

―ＭＡＸＩＭＵＭ・ＡＳＨ！ＭＡＸＩＭＵＭ・ＰＯＩＳＯＮ！！―

マープルからの結果を聞いた一は元のＭＸＡＰに戻り、ＯＯＯも一度手のバスターマグナムを消し、オースキャナーを手に取る。

『星海銀河…これで最後です！！』

『マキシマム、行きますよ！！』

『こちらも、全力で…！！』

ＭＸＡＰはメモリを二本とも抜き、ベルトの右部分に装着された二つのマキシマムスロットに挿入し、ＯＯＯはオースキャナーでオーズドライバーをスキャンする。

―認（キン）、認（キン）、認（キイン）！！！―

―Ｓｃａｎｎｉｎｇ・Ｃｈａｒｇｅ！！―

―ＡＳＨ！ＭＡＸＩＭＵＭ×ＭＡＸＩＭＵＭ！！―

―ＰＯＩＳＯＮ！ＭＡＸＩＭＵＭ×ＭＡＸＩＭＵＭ！！―

その音声がなると、一気にＯＯＯとドゥーツの脚に強大なエネルギーが溜まっていく。

『ここは…名前は凝らずに行きましょうか。』

『…名前地味に考えてたんですか。』

『いいじゃないですか。僕も考えてましたけど、変に凝ると駄目ですし…。』

ドゥーツとＯＯＯはそういうと深く姿勢を構え…一気にジャンプし、二人は一瞬でコアよりも高く…上空へ跳び出す。

―ＧＡａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａ！！！！―

それを見たコアはまた咆哮をあげ…腰を深く落とし、正拳突きの様な構えをとる。

『迎え撃つ気ですか…しゃらくさい！！』

ドゥーツはそう言うと…上空でヒラリと一回転し、背中の翼を一際大きく羽ばたかせる。

そして…その翼が光り輝くと、○○○の背にもその翼が生え…その翼は○○○とドゥーツ、二人を包み…まるで、彗星の様にコアに向かっていく。

『『『ライダー…ダブルメテオキック！！！』』』

そして、ドゥーツと○○○…二人のライダーがそう叫びながらキックを放つと、コアもそれに対して燃え盛る流星の様な拳…【コア・ビッグバン】を放つ。

—Aaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaa！！！—

『『『ハァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァッ！！！』』』

コア、そしてドゥーツと○○○の二人の攻撃は一瞬拮抗し、二人は弾かれるが…また一回転し、コアを狙って最後の必殺技を放つ…！！！

―Aaa…！！Gyaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaa！！！！―

コアはそう断末魔を上げると……真っ白な高温の炎をあげて爆散する！！！

『………フン。』

…キックを終えたままの体勢から立ち上がり…周りから立ち上る灰を手で振り払う。

『これで…終わり、ですね。』

『えぇ…って、ドゥーツ！！』

○○○がそう答えるが…ドゥーツはマキシマムの反動で体に激痛が走り、その○○○の声を最後に…意識を、手放す。

■ ■ ■

―…き……！！お……ろ…！！―

「……ん？」

一は、近くから何か大きな音が聞こえる様な気がし…ゆっくりと、意識を覚醒させる。

すると…

「…お起きろォォォおおおーーーーーーーー！！！！」

「ウワアアアアアアアアアアアアアアアア！？！？」

耳元で、突然大きな声が聞こえ…一は、椅子はからひっくり返って落ちてしまう。

「あだだ…！！何するんですか、アカネさん！！」

「うっさいわ！！あたしが帰ってきたら二人してグースカ寝よって…」

「…寝てた？」

ハリセン片手にそういうアカネに…一はまだ少し霞がかかった様な頭で今までの事を思い出す。

「…ッ、そうだ、コアは！？」

一は帽子を直しながら立ち上がり…あたりをキョロキョロと見渡す。

だが…そこは、何の変哲もないいつもの鞍坂探偵事務所だった。

「…ハァ？何言っとんねん…」

「……あれは、夢？」

アカネの呆れたような声を聞きながら、一は茫然としてそういい…まだソファで寝ていたマープルを見て、肩を叩く。

「…マープル、マープル？」

「……ん……いーちゃん？」

肩を叩かれ、マープルは寝ぼけ眼のまま一を見て…バッと起き上がる。

「ッ、あれ、コアは！？ＯＯＯは！？」

「…二人して、何言ってんのや？」

マープルも一と同じ反応をしたからか…アカネは更に呆れたような表情になり、ハリセンを置く。

「…二人とも同じ夢を見てたってのは…無いですよねぇ。」

「えぇ…さすがにそれは…っと？」

マープルと一がそう言っていると…一は自分のポケットの中に何か入っているのに気付く。

「…これは？」

一がそれを出すと…それは、一つの分厚い封筒と、三枚の銀色のメダルだった。

「…いーちゃん、これって…。」

「えぇ、セルメダルと…これは？」

マープルは不思議そうにセルメダルを手に取り、一が封筒を開けると…そこには、何枚もの万札と一枚の写真が入っていた。

「…写真？」

一がその写真を手に取り、見ると…そこには、あの巨大な隕石も無く、青一色に染まった空と、それを見上げるレジスタンスの人間達が映っていた。

「……そう言うことですか…。」

「……はい♪」

それを見た一とマープルは、顔を見合わせ…クスリと笑みをこぼす。

「…だからなんやねんって……なんや、そのお金！？」

「ん？あぁ、このお金は…」

後ろから覗き込んできたアカネの驚く声を聞いた一は答えようとするが…一瞬なにか考える様な仕草をし、そして話しだす。

「世界を救った、依頼金ですよ。」

「…なんやねん、それは…？」

まだ不思議そうな顔のアカネを見て、また一とマープルはクスリと笑い…ゆっくりとイスに戻る。

「いえ、何でもありません…さ、仕事仕事！！」

「はい♪じゃ、アカネちゃん、依頼何かありました？」

「ん？あぁそうやなぁ…あ、そういえば星みたいなかぶり物した人が、「一にどうにかしてほしい事がある」やらなんやらいってたで。」

「…星さんがですか…よし、了解しました、行ってきます！」

一は立ち上がって、そのまま事務所を出ていく。

「…さて。私はセルメダルの事検索しなきゃー♪」

「…だから、それはなんやねん…？」

マープルはガレージに戻り、一人検索を開始する…。

この二人の名は左乃宮一とマープル。

この風都を守る…仮面ライダーである。

## 【劇場版　仮面ライダーＤＯＴＷＯ　ＳＴＡＲ、Ｓ　漆黒の星々】　Ｃパート後

仮面ライダーコア・ウォルフライエ

仮面ライダーコアの真の姿。
赤い炎よりも熱量が高い青い炎を身に纏い、体内には四本のメモリと四枚のコアメダルを取り込み、膨大なエネルギーを有している。
この物語では、地球に接近していた隕石を操ったが、実力としてはコアの一撃で隕石を破壊できる程。
飽く迄隕石を操る力は補助としての物。
パンチ力：５９ｔ　キック力：６７ｔ
必殺技は体内のエネルギーを全て右足に集め、回転しながら相手を蹴り飛ばす【コア・ドリルライナー】。

名前：アッシュメダル・ドゥーツメダル・ポイズンメダル。

ドゥーツのメモリの力がＯＯＯのセルメダルに流し込まれたことにより産まれたメダル。
この三枚を使うことで【アドゥイズコンボ】に変身することができる。
アッシュメダルで【物体に触れると爆発を起こす灰】を作り、ドゥーツメダルは【スピリットバンカー、バスターマグナムを呼び出す】力を持ち、ポイズンメダルは【毒や薬品を作りだし、ドーピングできる】能力がある。

■　■　■

午前１１時　鞍坂探偵事務所

アカネは何故か腰にドゥーツドライバーを装着し、傍らで椅子に座りながら本を読んでいるマープルに対し静かに言う。

「行くで？…マープルちゃん。」

「…？」

マープルは、その言葉に不思議そうな顔になる。

そして、アカネの横に一も立ち…腰には、ドライバーをつけている。

「「変身！！」」

アカネと一はスリッパと百円ライターをドライバーに装填するふりをしながらマープルに向け言い放つ。

「「さぁ、天罰タイムだ！！」」

二人はそう言うと、アカネはハリセンで軽くマープルを叩き、一は領収書の束を投げ渡す。

「ふぇ…？なんですか、これ。」

「…貴女が趣味で買った物の領収書ですよ…」

一が米神を押さえながらそう言い、マープルは領収書の束を手にとった瞬間思わず口にした。

「…え！？これ必要経費で落ちないんですか！？」

と、マープルが言うが早くアカネが歩み寄り、手に持っていたハリセンでマープルの頭を叩く。

「アイたっ。」

可愛らしくそう言うマープルにアカネが歩み寄りながら　ソファの隣に合った段ボール箱の中にある服をグリグリしながらマープルに最もらしい事を突っ込む。

「コスプレ様の服なんか経費で落ちる訳ないやろ！！」

「あぁぁぁ！！ストップストップ！！」

マープルは慌ててアカネがもっていたナース服を取り上げ、抱きよせる。

「いいじゃないですか…私の数少ない趣味なんですよ？」

マープルが上目遣いでそう言うが…一は、呆れ顔でため息をつく。

「はぁ…もうちょっと、お金の残量を考えて下さい…。」

ちなみに、一も紳士的な探偵が多く出るミステリー小説を買い込んでいるが…それも、経費にはさしあたりない、自費での購入なので問題にはなっていない。

「はぁ…こういうとき、大口の仕事がドーン！とこやんかなぁ…？」

と、アカネがそう漏らした時、事務所の呼び鈴が鳴り、バッとアカネが顔を明るくしながら嬉しそうに言う。

「おぉぉ！！お客さんや～！！一くん、久しぶりの依頼やでぇ！！」

「今度こそ、趣味とかで使いきらない程度にいい料金の依頼が…！」

一はそう言いながらアカネの後を追い玄関に歩み寄る。

アカネが玄関の扉を開けると、年も服装もバラバラな数人の男女がおり、その内の女性がアカネと一に向けて言う。

「お願いします！！父を探して下さい！！」

それを皮切りに後ろにいた男女たちも口々に言いながら事務所に上がり込んできた。

「す…ストップ！！」

一は、ステッキを依頼人達の前に構え、大声でそう言う。

その声に静かになった依頼人達に、一は真剣な面立ちで訊ねる。

「あの…全員ご家族の方…なんでしょうか？」

「「「「違います！！」」」」

依頼人達は口を揃えてその言葉を否定し、　次にアカネが訊ねる。

「…ちゅうことは、全員一緒の人がいなくなられたんですか…？」

アカネの問いに依頼人達は全員首を縦に振り答え、今度はマープルが訊ねる。

「え…じゃなんで一緒に来たんでしょうか？」

マープルは依頼者たちに訊ね、一の問いに淡い緑色のコートを羽織った若い女性と初老の女性が答えた。

「失踪したのは全員同じ職種の人間なんです…」

「警察じゃまともに相手にしてくれないんです！！」

若い女性と初老の女性の言葉にマープルは更に訊ねる。

「あの…つかぬことをお伺いしますが、そのお仕事というのは？」

そして、その問いに再び依頼人達が同時に口を開き一達に言う。

「「「「シェフです！！」」」」

■　■　■

同じ頃　？？？？

全くと言っていいほど光のない地下室のような部屋で一人の男が力無く階段を這い登っていた。

すると、眼前の壁に《ニガサナイ》という文字が浮かび上がり、それが溶け出すと不透明の粘液のような粘液が男に迫り来る。

―イタ…ダ、キ…マス…！！―

「うわあぁぁぁぁぁぁ！！」

その亡霊の様な声が聞こえると、誰もいない地下室で男の断末魔の悲鳴が聞こえ、後には静寂が支配するばかりだった。

■　■　■

１０分後　風都　とあるフランス料理店。

一はアカネを引き連れ、依頼者の一人である赤磐ゆかりとの待ち合わせ場所である料理店を訪れていた。

ちなみにマープルは例のごとく事務所で電話番と言う名のお留守番中である。

―やれやれ…今回の依頼は何とも不可解だ…。

街中の名料理人の連続失踪事件だ…。…全く…紳士な私にはこたえる仕事デス…私もこういう旨い料理は好きですが、やはりマープルの手料理の方が…。―

「何を惚気言うとんじゃい！！」

一はチーズとソーセージのオードブルを頬張りながら内心でそんな事を考えていると、突然アカネにスリッパで頭を叩かれる。

「痛って！！」

一はアカネに叩かれた頭を痛そうにさすり、アカネは更に一に言う。

「久しぶりの依頼なんやから…もっと真剣にやりや！！」

そう言うとアカネは先程の領収書の束を見ながらため息をつき、一もため息をつく。

「分かりました分かりました…さ、貴女も事務所にお帰りなさい。」

一のその言葉にアカネは少し苛立ちながら問う。

「何で一くんはうちを煙たがるんや！？」

「危険でしょう！ドーパント関連かもしれませんし…。」

「だけどやなぁ！」

二人がそう言っていると、入り口のドアが開き、中から依頼者の一人である若い女性――赤磐ゆかりが現れ、アカネに大きめの茶封筒を手渡す。

「これが父の…赤磐荘司に関する資料の全てです」

アカネはゆかりから茶封筒を受け取り茶封筒を開け、その中から一冊の料理専門雑誌を取り出しページを開くと、あるページでゆかりの父親の赤磐荘司の特集を見ながら呟く。

「ほぉ…風都ナンバーワンのフランス料理人なんやなぁ。」

「えぇ、私も何度かＴＶで見たことが…そうだ、一度刃さんにも話を聞いてきましょう。貴女も危険でない程度に調べ回ってもらえますか？」

「おう！所長の力、見せたるで！」

「心強いですね…それでは。」

一はアカネにそう言うと足早に店から出て行った。

残ったアカネが雑誌に読みふけっていると、突然ゆかりが伏し目がちに口を開いた。

「多分原因は…あのお屋敷だわ……」

「…あのお屋敷って？」

アカネは首を傾げながらゆかりに問う。

「園咲って言う家なんですけど…父は一度そこに招待されたことがあるんです。そしてそこから二度と戻ってこなかったんです……」

「…ふぅん…？」

ゆかりは伏し目がちに言い、アカネは顎に手を置きながらしばし考え込んだ。

■　■　■

同じ頃　店の外。

一は今回の料理人連続失踪事件について警察はどうしているのか刃野に訊ねるため、上着のポケットからシケードフォンを取り出し刃野の電話番号を呼び出し通話を始める。

五回ほどコール音が鳴ると…疲れた様な声の刃野が電話に出る。

「…おう、一か…どうした？」

「…刃さん、いろいろ聞きたい事があって電話したんですが…大丈夫ですか？」

「あぁ、いろいろあってな…で、どうせ連続失踪事件の事だろ？」

「その通りですが…時間はありますか？」

「ん……俺もちょうど昼休みになりそうだしな…30分後ぐらいに、風麺で。」

「了解しました。」

一はそう言うと通話を切り、シケードフォンをポケットにしまうとジェントルーダーに跨り、エンジンをスタートさせそのまま刃野との待ち合わせ場所…風麺へ向かった。

■　■　■

30分後　風都　屋台街。

一と刃野、それに忍野とマッキーは屋台の据え付けの椅子に座りながらラーメンを食べていた。

「ったく…警察舐めんな!!」

マッキーはメンマをかじりながら終始不機嫌そうな表情で一に言う。

「それって行方不明者が見つかったときのセリフじゃないか?真倉君。」

アロハ服の鑑識、忍野はラーメンを啜りながらマッキーに言い、刃野は少しバツの悪い表情をしながら言う。

「…まぁ、街中捜しても手掛かり一つ掴めなかったんだけどな…全く、どんなドーパントだよ。」

すると、マッキーが箸を止め、思い返すように言う。

「…そう言えば、まだ一箇所だけ調べてないところがあったなぁ…。被害者の一人だった赤磐荘司さんが消えたっていう現場……。…あの有名な園咲家。」

「園咲…？」

「あぁ、一応忍野と俺、マッキーとで一応行ったんだかな…さらっと追い返されちまったよ、」

一はその行動が腑に落ちないのか、三人に問う。

「いや、チャラい忍野さんとマッキーは分かりますが…なんで刃さんまで？」

そんな一の問いに、マッキーが顔面を蒼白にしながら怯えた様子で答えた。

「なに言ってんだよお前！？あそこの屋敷の旦那がさぁ、またすんげえおっかねぇ人なんだよなぁメメさん！？」

「うん…あの人すごく怖そうな人だったよねぇ…。…『捜査なら自費でやるので警察は立ち入らないで頂きたい』って言われたんだ…すごく怖かったよ。」

忍野は全く怖がっていない風にその言葉に答え、　琉兵衛の声を真似ながら言い笑っていた。

「そうですか…どうも、お二方ありがとうございました。それでは。」

「…おい、一。」

「…はい？」

一が自分の分の代金を置き、立ち去ろうとすると…刃野が声をかける。

「…戦ってるのはお前だけじゃない。無理はするなよ？」

刃野は、懐からＵＳＢメモリ（・・・・・・）の様な物をちらりと見せ…笑う。

「…それは…分かっていますとも。」

一もそう言って笑うと、その場を後にした…。

■　■　■

２０分後　鞍坂探偵事務所

マープルは地球の本棚にアクセスし、シェフについての資料を検索していた。

マープルが両手を広げると該当しない本棚と本が一気に飛ぶように減っていき、最終的に二つの本棚が残り、さらにその二つの本棚が

飛んでいき、数冊の本が一冊の白い本を残し全て飛んでいく。

すると、その白い本の表紙に〝ＣＨＥＦ〟という文字が浮かび上がり、マープルはその本を手に取りページをめくる。

そこにはページを埋め尽くさんばかりにシェフや料理に関する様々な記述が書かれていた。

マープルはその記述を読みながら柔らかな笑みを浮かべ、アクセスを解除し一に訊ねる。

「…四人の被害者に共通するのは全員その屋敷にゲストとして招待されたことがある…って事ですよね？」

「えぇ、園咲家では美食家な当主のために、週替わりで一流シェフを呼んでディナータイムをとるのが習慣らしいです。どうやらそこが怪しいですね……」

一が手帳を見ながらマープルの言葉に答える。

「園咲…か…。何だろう……すごく懐かしい気が…」

マープルはポツリと一に聞こえない声の大きさで呟いた。

「にしても……アカネさんはまだ帰ってこないのですか？いったい何をしているのやら…？」

一はいまだに戻ってこないアカネを心配して一人呟く。

マープルはそんな一へ微笑みかけながら言う。

「ふふっ…いーちゃんも何だかんだ言ってもやっぱりアカネちゃんのことが心配なんですねー？そんなに心配なら会いに行ったらいいじゃないですか♪」

マープルの言葉に一は思わず向き直り、マープルに問う。

「え？会いに行くって言っても…どちらに？」

「どこにって…それはもちろん……」

■　■　■

同じ頃　風都郊外　園咲邸

ここの大食堂で、琉兵衛が遅めの昼食を食べていた。

だがその料理は、ハンバーグに布海苔の味噌汁、小松菜の胡麻和えに大きめの茶碗にあふれんばかりのご飯という、何とも庶民じみたものだった。

「ふむ…これは美味いな…。…この料理は誰が作ったのかね？」

だが、琉兵衛は満足そうな顔で味噌汁の椀を置き、傍らに控えている四十代くらいのメイド長――小神野に訊ねるが、小神野は困った表情をしながら琉兵衛に答える。

「実は…新しいメイドが入りまして…その者たちが……」

「ふむ…成る程…」

琉兵衛はハンバーグを口に運びながら呟いた。

■　■　■

同じ頃　園咲邸　中庭にて

仕事から帰って来た若菜が中庭を歩いていると…一人のメイドが塀の上を走りながら何かから逃げているのが見えた。

「ちょ、待てぇぇぇー！！」

何故かメイド服を着込んだアカネがモップを構え横幅の狭い塀の上を走りながら何かから一氏に逃げてきた。

しばらく進んだ所でアカネが突然足を止め、いやらしい笑みを浮かべながら言う。

「…しゃぁないなぁ…さぁ、喰えや！！」

アカネはそう言うと塀から勢いよく塀から飛び降りる。

「しゃぁないしゃぁない…うちの作ったネコメシを残さず喰え！！」

アカネはどこからか餌の入った容器を取り出し、その中には鰹節と醤油、たくさんの白米に生卵が一個入っている。

それを見た灰色の猫…ミックは喜んでその餌に飛びつき、ガツガツと食べ始める。

「全く…いつもあんな高カロリーの脂っこい魚とか肉ばっかじゃ、体壊すで？」

アカネは柔らかい声色でミックを撫でながら言う。

「ちょっと、あなた…誰？」

若菜が苛ついた様子でアカネに歩み寄り問う。

アカネが声のした方に振り向くと、そこには苛ついた表情の若菜がおり、アカネは若菜を見るなり嬉々とした表情で歩み寄りながら若菜に言う。

「おぉ～！！園咲若菜や！！すげぇー！！本物やー！！」

なのはは若菜にそう言うとハンカチを取り出そうとするが、若菜はそんななことなのはが気に入らないのか、忌々しげに舌打ちしななことなのはを払いのけるなり苛ついた様子でななこたちに問う。

「質問してるのは私よ！！あなた達誰！？」

そこでアカネはようやく自分が失礼極まりない行動をしていることに気付き、慌てて後ずさり一礼する。

「も、申し訳ありません！！」

そして、アカネは微笑みながらしゃらららら～んという効果音付きでスカートを翻しながら華麗な仕草で一回転し、若菜に恭しく一礼しながら言う。

「初めまして！！新人メイドの鞍坂アカネ言います！！よろしゅうに♪」

アカネは手でハートマークを作りながら若菜に笑顔を向けながら言う。

「ラブ☆ラブ！！うふふふふ♪」

若菜はかなり引き気味にアカネを見つめていた。

■

■

■

同じ頃　鞍坂探偵事務所　地下ガレージ

「どこにって？それはもちろん園咲家に…ですよ。」

「……どういうことですか？」

マープルの言葉の意味がよく分からず、一はもう一度問い返す。

「ん？アカネちゃんね、今園咲家に潜入調査してるんです♪」

一は初めはマープルの言葉の意味が分からなかったが、頭の中で何

回か反芻し…思わず大声でマープルに問う。

「…はぁぁ!?アカネさんが潜入調査ァ!?」

「ええ、赤磐ゆかりさん自身も父親の弟子のパティシエなんです。今週は彼女が屋敷に招かれた……。で、アカネちゃんはそれについていって一緒に紹介してもらったそうですよ?ふふっ、相変わらずの常識外れな行動力の持ち主ですねー♪」

「ッて感心してる場合ですか!?あぁもう!!」

一は頭を抱えながら思わず倒れ込みそうになりながらマープルに言い、足早に地下ガレージから歩き去っていった。

■　■　■

また同じ頃　園咲邸　使用人控え室。

「コンの戯け者が!!若菜お嬢様に何たるご無礼を!!」

「ひゃあ!!」

アカネは控え室に入るなりメイド長の小神野に怒鳴りつけられた。

アカネは小神野の剣幕に押され何も言い出せず、小神野は更に可聴音域ギリギリの声でアカネに怒鳴るように言う。

その後ろに控えていた眼鏡をかけたメイド――佐東が隣にいる小太

りのメイド――永藤に小声で話しかける。

「恐ろしい破壊力の新人が現れましたね……」

「でも、あの金髪の子のご飯食べたミック様、やたらと元気になったらしいわよ？」

「全くあなたという人は…信じられないわ！！」

「は、はいっ！！」

アカネは小神野にそう言われ、一礼すると控え室から足早に去っていった。

「全く…。佐東さん、永藤さん！！この方達に教えてあげなさい！！基礎の基礎から！！」

小神野は佐東と永藤にそう言うと苛ついた様子で踵を返し控え室を後にし、佐東と永藤は一礼し小神野を見送った。

小神野が控え室を後にした後、永藤がアカネに歩み寄り、ポテチを食べながら意地の悪い笑みを浮かべてアカネの肩をつつきながら言う。

「やっちゃったね～アンタ…。メイド長の小神野さんはハートマ●並の鬼軍曹だからこれから大変だよぉ～？」

そう言われ、アカネは口を尖らせながら永藤に言う。

「ンな事言われても……右も左も分かんないんやもん…しょうがな

いやないですか…」

アカネがそこまで言った所で今度は佐東が歩み寄り人差し指を立てながら言う。

「ここは普通のお屋敷と違って飛び抜けて厳格なんです。…まず園咲家では、見ざる、言わざる、聞かざるが鉄則です。」

「な…何ですかそれ?変な会談でもやってるんですか?」

「ご家族の方とお仕事の時以外は会ってはならない、話してはならない、みなさまの事を聞いてはいけないという事です。この家の絶対訓です!」

佐東はアカネにそこまで言うと椅子に座り、テーブルを拭き始めた。

アカネはモップの柄に顎を起き、だらけきった様子で言う。

「うち…性格上それは出来そうにないですよぉ…」

「じゃあさっさと辞めちゃいなよ。」

永藤が相変わらずポテチを食べながら（二袋目）そう言い、後ろを振り向くが、さっきまで居たはずのアカネは既にそこにはなく…代わりにアカネの持っていたモップだけが立て掛けられていた。

「……あれ?」

永藤はアカネのモップを見ながら思わず呟き、佐東も永藤と同じように後ろを振り向くが、やはりそこにはアカネの姿はなかった。

「「……？？？」」

二人はただアカネのモップを見ながら首を傾げるばかりだった。

■　■　■

■　■　■

同じ頃　園咲邸　正門前

一はマープルに言われアカネに会いに園咲邸を訪れたが…門は固く閉ざされており、一はそこで立ち往生してしまっていた。

「…これはこれは……。」

そして、一が何気なく門越しに屋敷に視線を移す。

「……ッ！？」

…すると、屋敷からどす黒い闇の波動がまるで巨大な津波のように押し寄せてくるのが目に映り、一は思わず目をつむった。

「……ん？」

しばしの後、一が目を開けると、そこには何もない屋敷があった。

一は体を触ってみるが特に怪我はなく、痛みも感じなかったが…体中に嫌な冷や汗が吹き出、衣服にまとわりついていた。

一は何故かは分からなかったが、何故かあの屋敷から想像もつかない何かが一を威圧させていたようだった。

「…何でしょうね、これは……。」

■

■

■

5分後　園咲邸　調理場

赤磐ゆかりは、琉兵衛に出すための料理を他のシェフに混じって作っていた。

アボカドを上手に切り、そして海老の背わたを取り、香味野菜を入れたお湯でボイルして氷水に取る。

そして皮を剥いてから頭をおとし半分にスライスする。

…と、そこを通りかかった堂々たる体格にいかつい顔立ちをしたスキンヘッドの男――嘉藤がゆかりの作っている料理を見ながら言う。

「まぁまぁの出来だな……。…親父さん程じゃないがな…」

嘉藤はゆかりに無愛想な口調で言い、嘉藤はその場を去っていく。

ゆかりは嘉藤に一礼すると、再び料理の仕込みを始める。

すると、背後からアカネがひょこっと現れ、嘉藤を指差して言う。

「怪しい！！」

「アカネさん！？」

アカネの突然の登場にゆかりは一瞬驚くが、アカネはそんなゆかりをよそに手帳に何かを書き始める。

「う～ん…料理長の嘉藤さん…。感じ…悪そう…と」

アカネが手帳の文面を呟きながら紙面にシャープペンを走らせる。

「嘉藤さんがああおっしゃるのは当然です。園咲のご主人に選ばれるという事は料理人にとって大変な名誉なんですから…」

アカネはゆかりの言葉に取りあえず頷くが…あまりよく分かっていないようだった。

「ふ～ん…けど誰も彼も怪しすぎるでこの屋敷！？まず美人なお嬢様に小うるさいメイド長、ほんで噂好きのメイドたちに無愛想な料理長！絵に描いたような人達が目白押しやもん！！火サスか木スペやで！」

ゆかりはそんなアカネに伏し目がちに訊ねる。

「あの…父については何か分かりましたか？私…父が居ないと……父はこの業界の宝なんです。」

ゆかりの言葉にアカネは薄く微笑みを浮かべゆかりに言う。

「大丈夫や！！そないな心配はいらんで！うちかて兄貴譲りの名探偵やから！！」

その言葉にゆかりは薄く笑みを浮かべて返す。

すると、背後の窓から何かが叩く音が聞こえ、アカネが振り向くと、そこにはライブモードに変形したシケードフォンが羽で窓をたたいていた。

「…ちょい失礼するな？」

アカネはそう言うと、足早に調理場を後にした。

ゆかりはそれを見送ると、再び料理の仕込みを始めた。

だが、ゆかりは気付かなかった。

壁の奥から自分を覗く一人の視線に……。

■　■　■

同じ頃　園咲邸　裏口

一は裏口に回り、アカネが来るのを待っていた。

「おぉ～！一くん遅かったなぁ？」

「遅れた…じゃないですよ、全く。」

近くからアカネの声が聞こえ、一が振り向くと、アカネが手を振りながらこちらに駆け寄ってきていた。

同時にシケードフォンも一の手元に収まり、一はシケードフォンからギジメモリを引き抜きライブモードの変形を解除させポケットに仕舞い込むなり…疲れた様にアカネに言う。

「…貴女この屋敷がヤバそうな所だって知らねえのかよ…危険ですよ、いつ何時ドーパントが貴女を狙っているかも分からないのに…。」

一は、若干怒りで敬語が崩れかけているが、アカネは気にせずその問いに答える。

「一くんじゃ中に入れないやろ!?…ここは名探偵鞍坂アカネ様の出番やでぇ!!」

アカネが何故か笑顔で誇らしげに一に言う。

「……あぁもう分かりました…何を言っても無駄そうですね。」

「おお!所長様にまっかせなさい!」

一が呆れた様な、疲れた様な声でそう言うと…アカネは調子に乗り、胸を張る。

「…一応、これを持っていて下さい。」

そう言うと、一は門の向こう側からひょいっといくつかのメモリガジェットを投げる。

「よっと。…なんやこれ？」

アカネは器用にそれを受け取るが…見たことのないガジェットを不思議そうにツンツン触る。

「強烈な光を出すタートルタイト、飛行して相手を斬り付けるスワローペンシル、連絡様兼鞭にもなるリザードショック…護身には持ってこいでしょう。」

「おぉ！ありがとな！」

「くれぐれも無理はなさらない様に…あ、リザードショックのそこのボタン押したら、私達のシケードフォンに連絡がきますので、覚えておいて下さい。」

「ＯＫＯＫ！やってやるでぇ！は～～っはっはっはぁ～！！」

と、アカネは某アクションな仮面の戦士のごとき高笑いしながら踵を返し、屋敷へと消えていった。

「…ご武運を。…一応監視しておきますけど…。」

一はそう行って去っていくアカネを見送り、裏口の脇に止めていたジェントルーダーに跨り、エンジンをスタートさせ事務所へと走らせていった。

## Sな戦慄／言えない真実（前書き）

はい、次話投稿完了です…

さて…では作者月詠様とのコラボ書いてきます。

あ、ちゃんとSな戦慄終わってからなんで！

■　■　■

鞍坂探偵事務所。

一はジェントルーダーを事務所に入れ、メットを外し玄関の棚に置くと、マープルが出迎えてくれた。

「お帰りいーちゃん。疲れたでしょ？今お茶入れますねー。」

「あぁ…わざわざどうも。」

マープルは一に柔らかな微笑みを浮かべながら台所に消え、一は机に歩み寄り疲れきった様子で椅子に腰掛け、一息吐き出しほんの少し目を瞑る。

程なくして、マープルが台所から紅茶の入った湯呑みを二つ持って現れ、湯呑みを一つ一の手元に置きながら言う。

「はい、どうぞ。」

「あぁ、どうも。」

一はマープルに礼を述べ、紅茶を口に含み、それを飲む。

しばらくたって、マープルが真剣な面立ちで一に言う。

「…いーちゃん、ちょっと言いたい事があるんですけど…いいですか？」

「…何です、そんなに改まって？」

一はマープルに問うが、マープルは更に一に言う。

「そろそろアカネちゃんに…本当の事を話さないんですか？」

「……。」

一はその事をマープルの口からを聞くなり飽く迄表には出さずに驚くが…マープルは真剣な面立ちでなおも続ける。

「如何にして私たちがＤＯＴＷＯになり、なぜ誕生したのかを……あの日……《ビギンズ・ナイト》の事を。」

その言葉に、一の脳内に再びあの光景が蘇り、その表情が冷や汗と共に曇り始める。

…ビギンズ・ナイト。

一と鍛治、そしてマープルが初めて出会った夜。

そして、仮面ライダーＤＯＴＷＯの始まりとなった日。

一にとっては忘却の彼方へと捨ててしまいたいほど忌まわしい記憶。

だが、マープルは心配そうな表情をしながら伏し目がちに言う。

「…辛いのは分かります…分かりますけど…このままずっと黙っているわけにも「…どう言えというのです。」…。」

マープルがそう言いかけた所で一にそう遮られ、マープルはその声を聞くなり黙ってしまう。

その時の一の顔は、まるで死人のような形相をしていたに違いない。だが、一はすぐに平静を取り戻し、再び辛そうな笑顔を浮かべながら言う。

「…私が…いや、俺が…旦那を殺したなんて事……間違っても言える訳……」

一はそこまで言った後、ガレージのドアに掛けられている形見の白いハットを見た後、再び目を閉じた。

…程なくして事務所は重い空気に包まれ、マープルは何か口にしようかと思ったが…そのまま何も話さない事にした。

■　■　■

同時刻　園咲邸　大食堂

園咲邸の大食堂では、琉兵衛と冴子、若菜が遅めのティータイムを楽しんでいたところだった。

そのメニューは山のように積み上げた、プチシュークリームにイチゴと紅茶のソースをたっぷりかけた、ストロベリープロフィット。

それと生クリームとジャムをたっぷりつけたマフィンだった。

アカネは柱の陰に隠れ、その様子を影から伺っていた。

「いやぁ～…渋みがすごいなぁ～……」

すると、琉兵衛がフォークを置き、おもむろに口にする。

「ふむ…良い出来だねぇ……。このところでは当たりだな…。…今日は何というシェフが作ったのかな？ん～…赤…赤…何だったかな？」

「…あ。ゆかりさん、ちょっと！」

「え…え、えぇ！？」

琉兵衛がそう悩んでいると…アカネは何か思いついた様に赤磐ゆかりを連れてきて…そっと、「今来ましたが何か？」と言う顔で少し困惑したような表情のゆかりと一緒に現れる。

「御主人様。今日の料理を作られたのはこの赤磐ゆかり様です。」

「む？…そうかい、前のシェフの…娘さんかね。」

「は…はい。」

琉兵衛がゆかりの方を向いてそう言うと…ゆかりは、緊張のためか硬直しながら返す。

「ふむふむ…君は将来有望の様だ。これからも頑張ってくれ。」

「は…はい！」

ゆかりは嬉しそうにそう答え、それを見たアカネもうんうんと笑うのであった。

■

■

■

園咲家・庭。

「鞍坂さん！あんな勝手な事をするものではありません！いいですか？！メイドとは影の様に静かにしておくもので…」

「はいはい…。」

…と、ぐちぐちと小神野からの説教を聞いていると…アカネは遠くに嘉藤が歩き去っていくのが見えた。

「あ！！…これは怪しい…！！」

アカネはそういうと、こっそりと小神野に気付かれないよう忍び足

で離れ…そしてダッシュする。

「いいですか！……あら？」

小神野は、いつの間にかいなくなったアカネを探すのであった…。

同じ頃、一は再び正門前に来たものの相変わらず落ち着かない様子で門の前をうろうろするばかりだったが、瞬間シケードフォンの着信音が鳴り、すぐに通話に応じる。

「もしもし。どうしまた？」

「いーちゃん大変！！次に狙われるのは赤磐ゆかりです！！」

「何！？どういうことだ！？」

「雑誌記事には風都料理人の一位から五位までしか載っていなかったんですけど、ついさっき検索したところ、六位は彼女でした。…上位五人が上から順に消えてるから次は恐らく彼女の番！！」

「了解、マープルすぐ準備を！！」

「はい、分かりました！！」

一はマープルにそう言うと通話を切り、シケードフォンをしまい込み門を乗り越えようと歩み寄るが…瞬間、霧彦に後ろ襟をつかまれ、門にたたきつけられ首を窒息しない程度に締め付ける。

「ッ…なんですか、いきなり！」

一は霧彦にキレ気味に問うが、霧彦は相変わらず一の首を窒息しない程度に締め付け、問う。

「当てようか？君は若菜ちゃんのストーカーだな？」

霧彦の突然の言葉に一は面食らいながらも霧彦に反論する。

「…はぁ！？違えよ！！というか俺には彼女いんだよ！何が悲しくてストーカーなんぞしなきゃいけねぇ！」

だが霧彦はそんな一に嘆息混じりに言う。

「ふん、見え透いた低次元な言い訳…彼女がいると見栄を張り…これがこの街の若者たちの実態か…。聞きたまえ。…私はね、この風都をこよなく愛してるんだ。」

「ンだよいきなり！？…あ、お前よく見たらどっかで見むぐっ！？」

一がそこまで言いかけた所で霧彦に唇を摘まれ、霧彦はそんな一をよそに更に続ける。

「いいから！黙って聞きたまえ！…私が如何にして成功し、この街の名士と成り得たのかを…。私はね、北海道のある小さな町で生まれ育ったんだ…。父も母も普通の人間だった…。家庭も決して裕福とは言えなかったが、それでも毎日が楽しかった…。」

「だがそんなある日、私が学校から帰ってくると…両親は強盗に殺された後だった…。それから天涯孤独の身となった私は親戚に引き取られたが、どの親戚にも忌み嫌われ私はたらい回しにされ、挙げ句の果てに施設に入所させられた…。だがそれで私の不幸の連鎖が

止むことはなかった…。施設に入った私を待っていたのは壮絶ないじめと虐待だった…。」

「私はそのいじめに耐えかね、何度も脱走を試みたがその都度失敗し、そんな私を待っていたのは指導とは名ばかりの恐ろしい体罰だった…。自殺を考えたことも少なくなかった…。そして私は必死で働き、その十年後に北海道を後にし、この風都にやってきたんだ…」

「∞＄¥§@％£¢！！」

一は口を摘まれながらも何か言おうとしたが霧彦は暗い表情でなおも続けた。

■

■

■

同時刻　園咲邸　裏庭

アカネはモップを構えながら嘉藤の後を尾け…こっそりと後ろから声をかける。

「こんな所で何してはるんですか！？嘉藤さん！！」

「……。」

嘉藤はその声に気付き、ゆっくりと振り向き、静かな口調で言う。

「見たな……？」

「ひっ…！」

アカネはその嘉藤に怖じ気づき思わずたじろぐが、嘉藤はすぐ表情を崩し、持っていたゴルフクラブを見せ悪戯っぽく笑いながら言う。

「練習してたの、旦那には黙っててくれよ？俺、ヘタクソでさぁ！！」

嘉藤はそう言うと、再びゴルフクラブを持ち、素振りを始めた。

「だ、大丈夫ですよ！！うちはそんな密告するような趣味は有りませんから！！」

「そうかい？ハハハ、すまないな…そうだ、あとでお茶でも入れるかい？」

「あ、お構いなく…。」

アカネは苦笑いしながらそう嘉藤に言い内心で呟く。

（うわぁ～…見当はずれだったぁ～…しかも…すごく良い人だったぁ～……）

嘉藤に申し訳ないという気持ちを持ちながら、アカネは自分の持ち場へと戻っていった。

■　■　■

２０分後　園咲邸　調理場

ゆかりは嬉しそうな表情をしながら独り言を漏らす。

「やった！！ご主人に気に入っていただけた…父さんみたいに！！」

すると、ゆかりしかいないはずの調理場にもう一人、中性的な笑い声が背後から響いた。

『お前は私の胃袋に収まる資格を得た…。ははははは！！』

ゆかりが声のしたほうに振り向くと、「オメデトウ」という文字が壁に浮かび上がり、それが崩れ出すとまるで油のような粘液が触手のように伸び、ゆかりの足元に絡みついた。

「ヒッ…きゃあっ！！」

ゆかりは思わず悲鳴を上げテーブルにつかまり引きずられまいと抵抗するが、粘液はさらに力を強くし、ゆかりを壁の中に引きずり込もうとする。

「きゃあああっ！！助けてぇぇ！！」

ゆかりは誰かが助けに来ることを祈りながら悲鳴を上げた。

■　■　■

園咲家　玄関前

霧彦はあれからちょうど２０分間ぶっ続けで自分の武勇伝を一に話していた。

先程のネガティブな生い立ちの話はすでに終わり、霧彦はなおも嬉々としながら言う。

「…その時だったんだ！！私が運命の女性と出会ったのは！！それは偶然じゃない！！」

霧彦がそう言った瞬間、屋敷から悲鳴が聞こえ…一は素早く霧彦の手を払いのけると、一は腕力だけであっさり門を乗り越え、屋敷へと走り去っていった。

「お、おい！！ストーカー君！？待ちたまえ！！」

だが霧彦がそう言った時にはすでにその姿はすでになく、霧彦は慌てて三角跳びで門を乗り越え、一の後を追った。

しばらく進んで、一はドゥーツドライバーを取り出し、装着しながらマープルに言う。

「マープル！！準備は！？」

「オッケーです！！」

マープルはそう返すとアッシュメモリを取り出しスイッチを押す。

－ＡＳＨ！－

そして一は上着のポケットからポイズンメモリを取り出しスイッチを押す。

―ＰＯＩＳＯＮ！―

そして、二人はメモリを構えながら同時に言う。

「「変身！！」」

マープルがメモリをドライバーの右スロットに装填し、灰色の小さな光と共に消え、一のドライバーの右スロットに転送される。

一はそれを確認するとメモリを右スロットに装填し、次にポイズンメモリを左スロットに装填し、ドライバーを操作する。

―ＡＳＨ！ＰＯＩＳＯＮ！―

ドライバーから電子音声が発せられると同時にメモリの変身メロディが鳴り、一の体を僅かな灰の混じった風とともに紫の光の欠片が包んでいき…一はドゥーツに変身し走り出した。

■　■　■

ドゥーツが悲鳴の聞こえたところに駆けつけると、そこには粘液の様な物で引きずり込まれそうになっているゆかりの姿があった。

ドゥーツは粘液に引きずり込まれているゆかりの両手を掴みながら引っ張る。

『踏ん張って下さい！！今助けます！！』

ドゥーツは一の声でそう言いながらゆかりの手を引っ張る。

「た、助け…！！」

すでにゆかりの体は下半身が飲み込まれ、かなりまずい状態だった。

『ッ…！！おらあああああああああッ！！』

ドゥーツが叫ぶと…一瞬、その体が光り、すると一気にゆかりの体はずるりと音を立てながら抜けだし、粘液は一つの塊となり、飛び跳ねながら逃げていく。

『ここにいて下さい！！』

マープルの意思がドゥーツの右目を明滅させながらゆかりに言い、ドゥーツは粘液の塊を追うべく走り出した。

『待てや、ゴラッ…！』

飛び跳ねながら逃げる粘液の塊は意外にポヨンポヨンとスーパーボールの様に跳ね、屋根の上にジャンプしたりしてドゥーツから逃れようとするが…ドゥーツはその塊の後を追うように高くジャンプしながら追いかける。

…すると、一の姿を探して歩いていた霧彦が粘液の塊とそれを追いかけるドゥーツの姿を見るなり半ば驚きながら言う。

「?!仮面ライダー!?」

霧彦はポケットからガイアドライバーとメモリを取り出し、ドライバーを腹部に装着し、メモリのスイッチを押す。

―ＰＡＷＮ!―

メモリから電子音声が発せられ、霧彦はドライバーのスロットにメモリを差し込み、黒いチェック模様とともにポーン・ドーパントに変身し、ドゥーツの後を追うべく走り出した。

ドゥーツがしばらく追いかけた所で粘液の塊が突然動きを止め、次第に人の姿に変わり始め…粘液の塊が完全に人の姿に変わり終える。

そこには体中が気味の悪いピンク色をしており、腹には大きな口の様な物が開いている怪人――ストマック・ドーパントとなった。

『何ですこいつ…臓器のバケモノ?』

マープルの意志がドゥーツの右目を明滅させながら思わず口にする。

そしてストマックはその言葉に何故か少しキレ気味に反論する。

『バケモノとは無礼な!!私は味覚の化身なのだよ!!』

『いや、バケモノだろッ!!』

ドゥーツはそう言うと一気にストマックと距離を詰め、蹴りを中心とした戦闘スタイルでストマックを押していく。

『オラッ、オラッ…オラァァ！！！』

最後に強力な蹴りを食らわせ、ストマックは大きく吹き飛ばされる。

「ぐあっ！！」

その蹴りを受けたストマックは若干思い足取りで立ち上がり、口から粘液を溢れさせる。

だがドゥーツはそれを意に介さずなおも回し蹴りを連発し、ストマックを押していく。

そして、最後に強力な回し蹴りを叩き込み、ストマックはさらに大きく吹き飛ばされた。

『次行くぜ…ッ！？』

ドゥーツは更に追い討ちをかけるべく走りだそうとするが…次の瞬間その異変に気づいた。

足が、動かないのだ。

ドゥーツがいくら足を動かそうとしても、まるで足元をコンクリートで固められたように動かない。

ドゥーツが慌てて足元を確認すると、ストマックの吐き出した粘液が足にまとわりつき、セメントのように固まっていたからだ。

『…ッ！？しまった！！』

ドゥーツが毒づきながら足を動かそうとするがやはり動かない。

「ハハハハハ！！ふんッ！！」

ストマックが下卑た笑い声を上げながら右手を突き出し、粘液の塊をドゥーツに向けて撃ち出す。

『くっ…！！』

ドゥーツはそれを左腕でガードするが、ガードした左腕も足と同じ様に固まりはじめ、動かなくなってしまった。

「クッ…！！左腕が……！！」

『い、いーちゃん…！？』

焦るドゥーツをよそにストマックは下卑た笑い声を上げながら嘲るように言う。

「いいぞ…恐怖しろ！！…恐怖もまた、胃袋の中を満たす大切な調味料なのだよ！！ハハハハハハ！！」

『グッ…！』

一は思わず何もできない自分たちとストマックに向けて小さく毒づく。

『こうなったら…これです！！』

マープルの意志が右目を明滅させながらそう言うと、黒色のガイア

メモリを取り出し、スイッチを押す。

―ＭＡＧＩＣＩＡＮ！―

メモリから電子音声が発せられ、ドゥーツはポイズンメモリを右スロットから引き抜き、マジシャンメモリを右スロットに装填し、ドライバーを操作する。

―ＭＡＧＩＣＩＡＮ！ＰＯＩＳＯＮ！―

ドライバーから電子音声と共にそのメモリの変身メロディが鳴り、ドゥーツを光が包んでいく。

光がやむと、その姿は黒と紫のドゥーツ…ドゥーツマジシャンポイズンへと変わった。

「ふん、こけおどしが！！フッ！！」

ストマックはドゥーツの姿が変わったのに一瞬驚くが…右手を伸ばし冷静に粘液弾を撃ち込む。

『効くか。』

ドゥーツは火炎で粘液弾を払い、程なくしてライブモードに変形したパピヨンショットが現れた。

『…さて、これで…。』

瞬間、パピヨンショットから超高周波の超震動波が発せられ…ドゥーツの足と左腕をがっちり固めていた粘液の塊が粉々に砕け散り、

体は自由を取り戻す。

『よっし…では、行きますか！』

ドゥーツはスピリットバンカーを構え、ストマックへと突っ込んでいく。

「なっ…この、これでも喰らえ！」

ストマックは突っ込んでくるドゥーツに粘液弾を撃ち込むが、ドゥーツはスピリットバ・jカーを巧みに操り、それをすべて弾き返しながら距離を詰め、ストマックに打撃を叩き込む。

「カフッ…！ガァァッ！！」

一撃一撃が重いその打撃にストマックは上手く避けられず…次第にダメージが蓄積していく。

『さぁ、攫った人を返してもらおうか…？』

ドゥーツは一の声で言いながらまた強烈な一撃を叩き込み、ストマックは大きく吹き飛ばされる。

「ぐあぁっ！！」

ストマックは叫びながら吹き飛ばされ…重い足取りで立ち上がり言う。

「ありふれた平凡な食事を喰らうと、私はそれだけで戻してしまう…。…極上の食事が無いと、私は生きていけないのだよ！！ヒャハ

ハハハハハ！！」

ストマックは下卑た笑い声を上げながら言い、ドゥーツは義憤に駆られ…一の声でストマックに言う。

『お前…そんな勝手な理屈で……ッ！？』

ドゥーツがそう言いかけた…が、そこで何者かに背中を斬りつけられ、ドゥーツは慌てて後ろを振り向く。

そこには、黒い光沢の身体を持った怪人――ポーン・ドーパントがすでにもう一撃入れるべく剣を振りかぶっていた。

それを見たドゥーツは慌ててスピリットバンカーの柄でナスカの剣を受け止める。

『ッ！？新手か…！』

ドゥーツがスピリットバンカーでポーンの剣を受け止めながら毒づく。

「面白い所で会ったねぇ…仮面ライダー君！！」

ポーンはドゥーツに蹴りを入れ、体勢を崩すとそこから連続して斬撃を加えていきながらなおも続ける。

「今日こそ君を倒しッ！！その秘密を暴く！！」

ポーンが身を屈め、ドゥーツの足を払うとドゥーツはその場に転んでしまい、ポーンは追い討ちをかけるべく倒れたドゥーツに対し剣

を振りかぶる。

『喰らうかっ！！』

ドゥーツはゴロリと一回転し、その斬撃を避け…近くにいたストマックの体をつかみ、勢い良く引っ張る。

「うぉッ！！？」

『ドラァッ！！』

そして、その勢いのままストマックを転ばせ、自分は立ち上がってストマックもろとも攻撃するようにスピリットバンカーを振り回す。

そして、近くを通りかかった冴子は茂みの奥からその三者三様の戦いを眺めながら呟いた。

「ドゥーツ……」

■　■　■

同時刻　園咲邸　中央一階廊下

「おっかしいなぁ…あのおっさん…うちの中の怪しそうな奴ランキングでぶっちぎりの一位やったんやけどなぁ……」

アカネは手帳を片手に困った表情をしながら呟く。

すると…その近くを琉兵衛が通りかかり、階段ホールへと続く扉へと消えていった。

「ッ……！！」

アカネは息を飲み、琉兵衛に気取られぬように忍び足で琉兵衛の後を尾け…階段ホールの扉を覗き込んだ。

が、琉兵衛の姿は既にそこにはなかった。

「…ご主人…様…？」

アカネは誰もいない階段ホールで一人呟いた。

■

■

■

同時刻　園咲邸　エントランスホール

琉兵衛はおもむろに階段を下りながらガイアドライバーを腹部に装着すると、誰もいないエントランスホールで一人呟く。

「随分屋敷が騒がしいな…」

琉兵衛はそう呟いた後、ポケットから黄色のガイアメモリを取り出し、スイッチを押す。

―ＫＩＮＧ！―

メモリから電子音声が発せられると同時にメモリが柔らかな光を放ち、琉兵衛がメモリから手放すと、メモリはドライバーのスロットに吸い込まれるように消えていき、同時にスロットの差し込み口に円形のシールドが展開された。

「うおぉあぁぁあぁぁあ…！！」

琉兵衛が両手を広げながら叫ぶと、体がゆっくりと宙に浮き始め、そこから中心にエントランスホールを闇の波動が満たしていき、その体を金色と黒色の靄が包むと…次の瞬間、そこには身の丈ほどある獅子の装飾を持った剣と、青黒い黒と鈍い白色でチェス盤の様に彩られた鎧を持ち、頭には獅子や龍の装飾がされた王冠をかぶったドーパント…キング・ドーパントとその姿を変える。

「はっはっはっは…ハハハハハハ…！！」

キング・ドーパントは一人高笑いし、闇の波動に満たされたエントランスホールには彼の高笑いが不気味に響き渡っていた……。

## Sな戦慄／博物館の記憶（前書き）

地震、みなさん大丈夫でしたか？

自分は特に問題ありませんでしたが、大変な方もいると思います。

皆さん…色々余震もあるかもしれませんので、お気を付け下さい。

■　■　■

園咲邸・庭。

ドゥーツは卓越した技術でスピリットバンカーをポーンに叩き込むが、ポーンはドゥーツに出来た一瞬の隙を突き、斬撃を加え大きく吹き飛ばす。

『グッ…！！』

「もらった！！」

ポーンはこれを好機と踏み、首に巻いた二本のマフラーを触手のように伸ばしてドゥーツに絡みつかせ、ドゥーツを吊し上げる。

『チッ…！！』

ドゥーツは吊し上げられながら一の声で毒づきながら思わず声を上げる。

『は、離しなさい！！』

ドゥーツはマープルの声で吊し上げられながらポーンに戒めを解く

よう言うが…ポーンは静かに笑いながら言う。

「クク、さぁ…どうしてくれよう「どけや！！」ぐあっ！！」

『えっ…あだっ！！』

ポーンがそう言いかけた所で、ストマックがポーンを背中から殴りつけ、同時にドゥーツを拘束していたマフラーが解け、ドゥーツは地に叩きつけられる。

ドゥーツは立ち上がろうとするが、同時にストマックがポーンとドゥーツに駆け寄り追い討ちをかける。

「オラオラオラっ！！」

『チッ…！！』

ドゥーツはストマックの追い討ちのせいでなかなか思うように体勢が取れず、得物でストマックの追い討ちを防ぐ。

「市販品如きが…！！このポーンの邪魔をするなァァ！！」

ポーンはストマックに邪魔された事に逆上し、キレ気味に叫ぶとストマックに駆け寄り剣でストマックの背中を斬りつけ、ストマックもろともドゥーツに斬撃を仕掛ける。

だが、ドゥーツはポーンがストマックに攻撃しているうちに体勢を立て直し、ドゥーツは二人に向かい、大きくスピリットバンカーを振り回し、乱戦の様相を呈し始めた。

茂みの影からその戦いの様子を見つめていた冴子はドライバーとメモリを取り出し、腹部に装着しメモリのスイッチを押す。

―ＢＩＳＨＯＰ！―

メモリから電子音声が発せられ、冴子はそれを差し込もうとするが…瞬間何かに気付き、何故か変身を躊躇ってしまった。

『い…いーちゃん！！いーちゃん！！』

『…マープル！！どうしました！？』

ドゥーツがストマックの攻撃を払いのけると、突然マープルがドゥーツの右目を明滅させて焦りを含んだ声色で言い、一は問う。

『感じる…とてつもない悪意を…！！ここから逃げて！！早く！』

マープルがそう言った瞬間、強い風が辺り一帯に吹き荒れ、同時にどす黒く重苦しい闇の波動がドゥーツ達を包み込んでいく。

『ッ…！？』

「な、なんだこれは！？」

ドゥーツは何事が分からずただ辺りを見回し、ストマックとポーンも突然の状況の変化が理解できずにいた。

すると、周りから真っ黒い液状の何かが周りの地形を飲み込み始め、瞬間何者かの高笑いする声が辺り一帯に響き渡り始める。

―ハッハッハ…！！ハッハハハハハハハハハ！！！！！！！！―

ドゥーツは笑い声の聞こえる方向に目をやると、どす黒い闇の波動の中に、黒い身体に大きな冠を被った怪人――キング・ドーパントの姿が見えた。

「な、何だ！？この言い知れぬおぞましさは…！？」

ポーンも何事か分からず、言い知れぬ恐怖に駆られ思わず口にする。

そうこうしてる間にも黒い液体はだんだんと三人を飲み込まんと近寄ってくる。

『いや…理屈抜きでやべえ…！！ちょっとでも触れたら即刻アウトだ！！全員退避！！』

ドゥーツが二人にそう言ったとたん、黒い液体は三人の足元のすぐ近くまで寄ってきていた。

ドゥーツだけでなくストマックやポーンもやばいと判断し、三人はそれぞれの方向に高くジャンプしその場から逃れ、先程まで三人がいた場所は液体に飲み込まれてしまった。

「ハッハッハハハハハハ…ハッハッハッハッハハハ！！」

誰も居なくなった中庭にキングの笑い声が一人響き渡り…程なくしてキングも闇の波動に身を包み、その場から姿を消した。

―ＤＲＥＡＭ！ＳＰＩＲＩＴ！―

ドゥーツはドリームスピリットに変身し、スピリットバンカーの柄の部分の先端を鞭のように伸ばして地上に降り、伸びたスピリットバンカーは自分でもとの長さに戻る。

そして、ドゥーツの姿は僅かな旋風と共に砕け散り、一の姿に戻った。

「…っ…キツイな…！」

一はその場で膝をつき、全身にべっとりと冷や汗をかいていた。

と、その時マープルがドライバーを通じて一に念話で話しかける。

「…私達は見たのかも……」

「…何をです。」

「…敵の…《根源》を……」

「敵の《根源》…マズイ、アカネさんをあんなとこに置いとく訳には…！！」

■　■　■

同時刻　園咲邸　一階西側廊下

アカネが仕事を終えぶらぶら歩いていると…持っていたシケードフォンに電話がかかる。

「おっと?…え~、もしもし?」

アカネが電話に出ると、一の声が聞こえた。

「アカネさん、ご無事ですか?」

「無事やけど…なんかあったんか?」

「ええ。ゆかりさんがドーパントに襲われました。一応対処はしましたが…この屋敷にはまだドーパントがいるかもしれません。」

「ま…マジか?」

「ええ。なにか粘液に取り込まれて連れて行かれそうになっていました…使用人控室に行ったはずです。様子を見てもらえませんか?」

「そか!了解やで!」

アカネはそう言うと一目散にその場から走り去っていった。

2分後　使用人控え室。

そこでゆかりは疲れきった表情で力なく椅子に座っていた。

すると、近くの扉が開き、そこから出てきたアカネが慌てた表情で

ゆかりに駆け寄り訊ねる。

「大丈夫やったか！？ゆかりさん！！」

「ぁ…大丈夫です……。」

ゆかりはアカネに静かな笑みを浮かべ言い、アカネの表情も和らぐ。

…そして、ゆかりはアカネを見上げて言う。

「アカネさん…。私…平気よ。…もしあの怪人の正体が分かれば、それで父さんに近づけるかもしれないし、他の方たちも見つかるかもしれないんでしょ？…だったら私…逃げたくありません…！」

ゆかりは強い意志の宿った表情を見せ、アカネにそう言った。

「そう…やよな…。」

アカネはその言葉に小さく頷き、内心で呟いた。

―ゆかりさんまで狙われたっちゅう事は…やっぱ間違いなく犯人はこの屋敷の中におる…。

誰かがそうなんやな…誰かが……―

■　■　■

同時刻　園咲邸　リビング

「…どうやら、使用人たちの中に一般のドーパントが紛れ込んでいるようだねぇ……」

琉兵衛は窓からの風景を見ながら霧彦たちに言う。

「あら、じゃあ始末しないといけな「まぁ放っておけ…。組織の秘密を知る屋敷の人間はほんの一握りしかいない…わざわざ事を荒立てる必要もなかろう…」……」

若菜がそう言いかけた所で琉兵衛に遮られ、琉兵衛はそう言うとリビングから歩き去っていき、霧彦は薄く笑みを浮かべながら一礼し琉兵衛を見送ったが…琉兵衛がリビングから去った後、霧彦は不機嫌な表情で忌々しげに呟く。

「なぜ…お義父さんは僕の戦いの邪魔を…」

霧彦が忌々しげに呟いた後、冴子が霧彦に歩み寄りながら霧彦に言う。

「次にこの屋敷に何かあったら…今度は二人で始末しましょ？…あなたの名誉挽回の為にも、ね？」

「あぁ…分かった」

霧彦は冴子にそれだけ言うと足早にリビングから歩き去っていき、冴子は霧彦を一瞥した後、冴子は頭の中で先程の戦いで現れたドゥーツに対し思案を巡らせていた。

―仮面ライダーＤＯＴＷＯ…恐らくあのドーパントを追ってまた現れるハズ…。

お父様の興味が薄い内に確実に捕らえなければ……―

冴子は内心でそう呟くと、足早にリビングから去っていき、リビングには若菜だけが一人取り残された。

■　■　■

同時刻　園咲邸　中央庭園

「これで分かったでしょう?ドーパントが居るのにも気付かないで何が潜入捜査ですか…!?これは子供の遊びじゃないんです。旦那だってなぁ、依頼人を危険にさらすような事は絶対に許しませんでしたよ」

一はピクピクと米神を引き攣らせながらそう言うと、それにアカネはしゅんとした表情を見せ、頭を下げた。

「……すまん……」

「…珍しく素直ですね?」

一はやけに素直に謝るアカネに若干引っかかりを感じつつもアカネ

に問い、アカネは伏し目がちに語り始めた。

「うち…羨ましかったのかも知れへん…。一くんがマープルちゃんやファイさんと楽しそうにしてるんが…。うち…父ちゃんの事はおぼろげにしか覚えてないんや…。一番長く居られたとき…うちまだガキんちょやったから……。」

アカネはポツポツと話し続ける。

「おかんも病で逝ってもうて…うちは親戚のとこ行ってたけど、父ちゃんは帰ってこんかった…。はは、すまんな一くん…ムキになってもうて…」

アカネは一に無理に作った笑顔を浮かべるが…どこか悲しげな雰囲気を漂わせていた。

しばしの沈黙の後、一が遠くを見つめながら言う。

「……私も同じですよ…」

「え？」

アカネは僅かに訝しみ、今度は一が伏し目がちに語り始めた。

「…私も昔はよく旦那に怒鳴られてました…。…今の貴女と同じです…。…俺が功を焦って、依頼者の親子に酷いケガ負わせた事もありました……」

「あン時の旦那は鬼よりも怖かった…。《依頼者を危険に晒す野郎は探偵以前に人間としてクズだ。自分を頼ってくれた人達なんだぞ

≫…と。」

「…怖かったけど、格好良かった……。…頼みます。…これ以上無茶はしないで下さい…。…貴女が危ない目にあうのはもう見てられないのです…。　…実はな…実は…旦那は…旦那は私が……」

一がそう言いながらアカネの方を振り向くが…既にアカネの姿はそこにはなく、一は思わず叫んでしまう。

「ッてどこ行ったァァァ!?俺超大事な話してたのに!!してたのに!何これ俺一人で自分の過去呟いてる痛い奴じゃん!!」

誰もいない庭園で、一の声だけが空しくこだました……。

「ゆかりさんはうちを頼ってきたんやもん!!ここでうちが頑張らんと、父ちゃんの名が廃ってまう!!」

アカネは一人気を吐きながらそう言うと慌ただしくその場を後にした。

■　■　■

３０分後　風都某所　風都博物館。

一はあの後屋敷を探し…使用人の一人からアカネが博物館に行った事を聞き、ここに来ていた。

「失礼します。」

誰に言う訳でも無くそう言うと、一は入り口をくぐってアカネの姿を探す。

同じ頃、アカネもここへ足を運んでいた。

アカネは誰かを探しているのか、辺りを見回しながら歩いていると…赤い詰め襟の服を着た初老の男――琉兵衛に歩み寄りながら言う。

「あ、ご主人様！」

「む…？」

琉兵衛が声に気付き、後ろを振り向くと、そこにはアカネがいた。

「お仕事の場所まで来てしまって申し訳ありません…」

アカネは頭を下げながら琉兵衛にそう言うが、琉兵衛はさほど気にも留めずに問う。

「何かな？折り入って私に頼み事というのは？」

琉兵衛はアカネに訊ね、アカネは琉兵衛に言う。

「実はその…お願いがありまして…。…明日のランチタイムにはお屋敷の使用人全員を参加させてほしいんです！とびっきりのサプライズも用意しとりますので！！」

「ほぉ…サプライズねぇ…わかった。」

琉兵衛は顎に手を置きながらしばし考え込むと……アカネの提案を飲んだ。

「では、よろしくお願いします！！」

アカネは琉兵衛に一礼すると、笑顔でその場から去っていった。

…それを知らない一はアカネの姿を探しながらしばらく歩いている。

…と、その時一の目にある展示物が目に入った。

それは、数万年前に冷えて固まった岩漿…いわゆるマグマだった。

「…マグマ、ですか。」

そして一は展示物を一瞥し再びアカネの姿を探す。

「…あ、いましたか…。」

しばらく歩いていると…詰め襟の服を着た初老の男と何かを話しているアカネの姿を見つけ、程なくしてアカネは男に一礼すると歩き去っていった。

「なんです…何企んだんですか…！？すげぇヤな予感が…」

その様子を眺めた後、一は頭を抱えながら言う。

一は何気なく近くの展示物の解説プレートに目をやると、そこには

ティラノサウルスレックスに関する解説が書かれており、一は目を見開き半ば驚いた表情でその骨格を見上げる。

―素敵ないっちゃん…愛してる。だから…食べてあ・げ・る♪―

一の脳裏にティーレックス・ドーパントと戦った時の記憶とその言葉が蘇り、一はあることに気づいた。

一がここで見た展示物たちは、以前ドーパントとしてドゥーツの前に現れたものだったからだ。

巨大トンボ、メガネウラの化石。

―町の害虫は…私が駆除する…！！―

ドラゴンフライ・ドーパントに変身した島川。

巨大な古代人の壁画が描かれた岩盤。

―飽きたのよ…。もういいでしょう？―

ピクチャー・ドーパントに変身した田島。

「見事だろう？」

「ッ！？」

一が思案を巡らせていると、不意に背後から声をかけられ、一は驚

いた表情で声のした方を振り向く。

と、そこには赤い詰め襟の服を着た初老の男が立っていた。

「…当博物館館長の園咲琉兵衛です…。」

男――琉兵衛は驚く一をよそに一に頭を軽く一礼し、言う。

「ぁ…どうも…。私は左乃宮一と申します。」

「左乃宮?…ほう、あの左乃宮かね。これはこれは…。」

祐規は琉兵衛の静かな口調に若干気圧されながらも軽く一礼し琉兵衛に言い、琉兵衛は展示物を見ながら口を開く。

「素晴らしいよねぇ…地球に刻まれた《記憶》というものは…」

琉兵衛は一に向き直ると、軽く笑みを浮かべて言う。

「では…失礼するよ…。…明日が楽しみだな……」

琉兵衛はそう言いながら歩き去っていき、その場には一だけが取り残された。

だが、一は琉兵衛と話していた際にあることに気づいた。

同じなのだ。

最初に一が屋敷の目の前で闇の波動に飲まれそうになったとき、そして中庭でポーン、ストマックと戦っていた時に襲われた闇の波動

と全く同じだったのだ。

「…帰りますか。」

一はもうここに居ても何もないと判断し、誰も居なくなった展示フロアから足早に歩き去っていった。

■　■　■

同時刻　鞍坂探偵事務所　地下ガレージ

そこでマープルはノートパソコンを操作し、ドライバーの記憶媒体にアクセスし、そこに記録されたストマック・ドーパントとの戦闘データを見ていた。

「……ふぅん。」

マープルはひとしきり戦闘データを見た後、ノートパソコンの電源を切り、ホワイトボードに何かを書き殴った後一人言う。

「うん、メモリのタイプはストマックに間違いない…。さぁ、検索を始めます。」

誰もいない地下ガレージでマープルは一人そう言い右手を広げ目を閉じ、本棚へのアクセスを開始した。

瞬間、マープルの脳内に真っ白い空間と無限の書架が現れ、マープ

ルは一人呟く。

「これより検索を開始します。検索項目は《パティシエ連続失踪事件の真犯人》。まず第一のキーワードは《料理人》」

マープルがそう言うと、キーワードに該当しない本と本棚が飛ぶように減っていき、マープルはそれを見ながらさらに言う。

「続いて《赤磐荘司》《赤磐ゆかり》。」

マープルがそう言うと、さらに該当しない本と本棚が飛ぶように減っていくが、マープルの目の前にはまだ数え切れない程の本棚が幾つもあり、マープルはそれを見ながら困った表情をしながら呟く。

「う～ん…キーワードが近すぎて本が減らないですね…」

だがマープルがそう言った瞬間、マープルはピンと閃く。

―恐怖もまた、胃袋の中を満たす大切な調味料なのだよ！！―

マープルは何か思い付いた様子で一人笑顔を浮かべ言う。

「…追加キーワード《恐怖》《調味料》。」

マープルがそう言いながら両手を広げると、先ほどとは比べ物にならないスピードで本と本棚が飛ぶように減っていく。

そして…最終的に一冊の白い本が残り、同時に《ＢＲＯＧＥＲ》という文字が表紙に浮かび上がり、マープルは柔らかな笑みを浮かべ本を手に取りながら言う。

「ふふっ…見ぃつけた♪」

■　■　■

園咲邸　大食堂

琉兵衛は使用人たちを集め、この場にいる人達に言う。

「さぁみんな、今日は特別の趣向だ。自由に食べたまえ。家族、使用人全員でこの究極の味を楽しもうじゃないか！」

その言葉で使用人たちは一斉に席につき、テーブルに置かれた料理を食べ始める。

「それでシェフやメイド達まで？」

「何か、面白いことが起こるらしいからね。」

冴子は若干不機嫌そうな表情で琉兵衛に問うが、琉兵衛はカルパッチョを食べながら冴子の問いに答える。

一はパピヨンショットを片手に一番奥の窓からその様子を見ていた。

…と、そこにゆっくりとアカネが奥から現れる。

「おや…では、メイド君。サプライズとは…何なのかね？」

「はい、ご主人様。実はですね…この中に、最近起こっている連続料理人失踪事件の犯人がいるのです。」

アカネがそういうと、一瞬ざわつきが起こる。

「…改めて自己紹介させてもらいましょう。私は、鞍坂探偵事務所所長…鞍坂アカネです。」

アカネはそこまで言うと、琉兵衛にぺこりと頭を下げる。

「私の推理では、犯人は異常なまでに美食好き……そいつをあぶり出すために、ご主人様に皆様をここに集めていただいたんです。」

アカネの言葉を聞いたとたん、琉兵衛が残念そうに言う。

「成る程…サプライズ…そう言うことか…。…料理のことじゃなかったのかぁ～…」

「あ、ちゃんとそのスープ、私が作って隠し味をいれておきました！」

「ふむ…？…いいだろう、当てて見せよう…。」

「…で、犯人がこの中にいるというけど…誰なんだい？」

と、そこで嬉しそうになった琉兵衛を見て、霧彦が言う。

「それは…ほら、あの人ですよ。」

アカネは霧彦の疑問に答えにこたえるため、使用人達の方に指を指す。

すると…そこには、スープを口に入れた態勢で固まっている、小神野の姿があった。

「…小神野さん？そのスープ…お味はどうですか？」

楽しそうにアカネは言うが…窓の外で見ている一と、中にいる一同も何が何だか分からず小神野を見ている。

「……ふむ……どういうことでしょ？」

程なくして、シケードフォンの着信音が鳴り、一は懐からシケードフォンを取り出しスピーカーモードで通話に応じる。

「はい、左乃宮ですが…どうしました？」

「もしもしいーちゃん？…なんでお返事くれないんですか？」

一が電話に出ると、マープルが出たので、一は普通に返す。

「返事とは？」

「…今回の事件の犯人。アカネちゃんにいーちゃんに伝えて、返事お願いしますって言っておきましたよ？」

「…ちょっと待って下さい。もう犯人分かってたんですか？」

マープルが少しむくれたようにそう言うが、一は困惑した様子で聞き返す。

「ええ。いーちゃん、赤磐ゆかりさんからお父さんの資料としてもらった雑誌、覚えてます？…あの雑誌のランキングをつけたその本人が料理人達を連続で誘拐していたドーパント。」

「犯人は食べ歩きで有名ブロガーで《～～は胃袋を満たす大切な調味料》がお得意のフレーズでした。…そしてそのライターの名前は…小神野花柄です。」

「…小神野さんが、ですか…。」

一が相槌を打つと、マープルは話し続ける。

「小神野花柄は今から二年前にある出版社に入り、そこで料理関連の雑誌の執筆に携わってたんです。だけどその一年後に突然出版社を辞めて風都の一番街に料理店を開店したんです。」

「…ふむ、それで？」

「でもその店は全く客が入らずに開店してから僅か半年で潰れ、小神野には多大な借金が残され、園咲邸にメイドとして入った…それから時を同じくして風都の有名な料理人達が次々と失踪するようになった…と言うことでした。」

マープルが説明を終えると、一はため息をつく。

「…なるほど、マープル。それはアカネがそこでその情報を止めました…はぁ、それだったら私は分かりませんよ…全く。」

「…そういうことでしたかー。」

一が疲れたようにそう言うと、マープルは呆れたように言う。

「一応、準備は出来てますから、そっちでいつでもどうぞ。」

「あぁ、お願いします。」

一はそれだけ言うと通話を切り、再び窓に目をやり様子を伺う。

「小神野さん…貴女が…！？」

ゆかりが小神野に問うが、小神野はアカネの方に向き直ると、恐ろしい形相で睨み付けながら言う。

「喰わせたの…！？アタシの黄金の舌先に…アンタ達なんかのクソ料理を喰わせたって言うの！？…許せない…！！」

小神野はまるで呪詛を吐くように言い、ゆかりが小神野に歩み寄り言う。

「あなたが父さんを…！？「やァかましいッ！！」ッ！？」

ゆかりがそこまで言いかけた所で小神野に遮られ、小神野はピンク色のガイアメモリを取り出しスイッチを押す。

―ＳＴＯＭＡＣＨ！―

メモリから電子音声が発せられ、小神野はそれを首筋のスロットに

差し込むと、小神野の肉体がグブグブと溶けていき、半透明の粘液とともに毒々しいピンク色の身体を持った怪人――ストマック・ドーパントに変身した。

「「「「「キャアアアアアアアアッ！！！」」」」」

小神野がストマックに変貌したのを機に、使用人達はパニックに陥り一斉にその場から逃げ出すが、琉兵衛たちは怯える素振りも見せずに黙々とスープを飲んでいる。

「フッ！！」

ストマックが左手を突き出すと、右手から生えた触手が伸び、ゆかりの右手に絡みついて凄まじい力で引きずり込もうとする。

「！？ゆ、ゆかりさん！！」

アカネは慌ててゆかりを助けるべくゆかりの左手を引っ張る。が…

「お前等も来い！！」

ストマックがそう言うと、腹の口から出てきた粘液がアカネと、触手で引きこまれたゆかりを飲み込み、身動きの取れなくなった二人を飲み込もうとする。

「あぁぁぁ～！！料理に喰われる～！！」

だがその悲鳴も空しく、粘液に取り込まれた二人を完全に飲み込むと、ストマックはそれを飲み込んだ。

「じゃァな！！」

二人を飲み込んだ事で腹が醜く膨れ上がったストマックはその体躯からは想像もつかない素早さでその場から走り去っていき、同時に霧彦と冴子も慌てて大食堂を後にした。

一もその様子を見た後、慌ててその場を後にし、逃げたストマックを追う。

「ふむ……分かった、シュールストレミングだ！！」

…琉兵衛は一人スープの隠し味を当てようとしていたが。（シュールストレミングで正解していた）

■

■

■

園咲邸・庭。

ストマックはすぐに見つかったが、素早い動きで逃げていき、一はドライバーを取り出しマープルに言う。

「行きますよ、マープル。」

「了解しましたっ！」

一はドゥーツドライバーを装着すると同時に走り出す。

そして、ストマックを追ってきた霧彦と冴子が偶然一の姿を見つけ、半ば驚きながら言う。

「あのドライバー…まさか…まさかアイツが！？」

だが一は霧彦に気づかす走りながらドライバーを腹部に装着し、さらにポケットからメモリを取り出しスイッチを押す。

－ＰＯＩＳＯＮ！－

そして、マープルは腹部にドライバーが現れたのを確認すると、ポケットから自分もメモリを取り出しスイッチを押す。

－ＭＡＧＩＣＩＡＮ！－

そして、二人はメモリを構え、同時に口にする

「「変身！！」」

一はマープルのマジシャンメモリが右スロットに来るのを確認すると、ポイズンメモリを左スロットに装填し、ドライバーを操作する。

－ＭＡＧＩＣＩＡＮ！ＰＯＩＳＯＮ！－

電子音声とともにメモリの変身メロディが鳴り、一の体を僅かな黒の風とともに紫の光の欠片が包み込んでいき、一はドゥーツに変身した。

一がドゥーツに変身したのを見たのを機に、霧彦の疑問は確信となり、嬉々とした表情で言う。

「そうか…！！やはりアイツらが…！！」

「倒すわよ…あなた……」

冴子が抑揚のない声で霧彦に言い、二人はドライバーを腹部に装着し、それぞれメモリを取り出しスイッチを押す。

―ＰＯＷＮ！―

―ＢＩＳＨＯＰ！―

メモリからそれぞれ電子音声が発せられ、二人は同時にメモリをドライバーのスロットに差し込む。

瞬間、霧彦が白黒のチェックの模様に包まれ、ポーン・ドーパントに変身し、冴子はに包まれビショップ白と黒の蛇が体全体を包み…ビショップ・ドーパントに変身した。

ビショップはゆっくり宙に浮き複数の光弾を作り出し、ビショップが右手を突き出すとそれらは一斉にドゥーツに向かっていく。

『…っ！？』

だが、ドゥーツは悪寒を感じ、その場から高く跳び…次の瞬間、一のいた場所が爆発する。

『…はっ！！』

ドゥーツ襲撃した奴らの方に視線を移し思わず言う。

『お前はあの時の…！？』

ドゥーツはビショップを見るなり驚きながら言うが…ビショップは薄く笑いながら問う。

「ふふ、久しぶり…。まさか忘れたわけじゃないわよねぇ？私の怖さを…ハァッ！！」

ビショップがそこまで言った所で、再び右手を突き出しドゥーツに光弾を撃ちだし、一は慌てて回避しながらマープルに言う。

『《ビギンズ・ナイト》の時のアイツだ…！！マープル！！』

マープルの意志はドゥーツの右目を明滅させ突然の襲撃に慌てながら一に問う。

『な、何でこんなに幹部クラスの人達が！？』

だがマープルが慌てながらいると、今度はポーンが襲いかかり、ドゥーツはポーンの剣を避けながら言う。

「早く何とかしないと…！！アカネさんが…ぐあっ！！」

ドゥーツは何とか体勢を立て直そうとするが、ポーンの斬撃にビショップの支援攻撃が加わり思うように体勢が立て直せず、ただただダメージが蓄積していった…。

■　■　■

同時刻　どこかの廃墟。

ストマックは口を開け、飲み込んだゆかり達を吐き出し、二人は悲鳴とともにねっとねとの粘液まみれになりながら床に叩きつけられた。

「いたた…ここは!?」

アカネが辺りを見回しながら思わず口にする。

そこには料理の写真やら食品サンプルやらが無造作に置かれており、料理に関する異常な執着が垣間見えた。

「…ゆかり…!!」

近くから苦しげにゆかりを呼ぶ声が聞こえそこに目をやると…そこには父の荘司と、他にも失踪した料理人達が四肢を触手で拘束されていた。

「ッ!?と…父さん!!」

ゆかりは這いずりながら父に近寄ろうとするが…瞬間、誰かに肩を掴まれ動けなくなってしまう。

ゆかりが視線をそちらに戻すと、そこには狂気を含んだ笑みを浮かべた小神野がおり、小神野は言う。

「さァ…父親と一緒にここでアタシに永遠に仕えなさい…」

そんな小神野にアカネは問う。

「小神野さん…何でこんな馬鹿な事…！？」

小神野はゆかりを地に叩きつけアカネの問いに答えるべく語り始める。

「…アタシは評論家じゃなくて作る側になりたかった……。だけど風都の一番街に出した店は半年もしないで潰れた…。その時アタシは知ったわ…。食べて批評するのと作るのは全く違う、ってね…。」

小神野は狂気を含んだ笑みを浮かべてそう言う。

「でも、コレさえあれば最高の味をアタシ１人が独占出来る…！！うふふ…あっっはははははは！！」

小神野は狂ったように笑いながらメモリを取り出しスイッチを押す。

―ＳＴＯＭＡＣＨ！―

メモリから電子音声が発せられ、菊池はおもむろに首筋のスロットにメモリを差し込んだ。

そして小神野の体が先ほどと同じように変化していき、再びストマック・ドーパントに変貌し、舌なめずりをしながら小神野と男の声が混じった声でゆかりに歩み寄りながら言う。

「さァ、アタシだけの永遠のスイーツタイムを……。でも…その前に…」

スイーツはそこまで言いかけた所でおもむろにアカネの方に向き直る。

「えっ！？」」

アカネは思わず声を上げ驚く。

「アタシの舌先を汚したコイツを切り刻むッ！！」

ストマックはそう言うと、ジャキンと音を立てて右手が鋭い刀に変える。

…それを見たアカネの顔が蒼白となり、引きつった笑みを浮かべながら言う。

「あはは…小神野さん…冗談はよして下さいよ…？」

だがストマックはアカネの言葉に耳を貸さずにゆっくりとアカネに近づいていき、その顔には既に引きつった笑みは消え、恐怖に染まった表情が浮かんでいた。

■　■　■

園咲家・庭。

『ぐあああっ！！』

ドゥーツはビショップの支援攻撃とポーンの卓越した剣術で思うように反撃できず…ついには大きく吹き飛ばされてしまう。

「さぁ…トドメと行こうか？」

ポーンがそういうと、ポーンの構えた剣が大きくなり…その剣にビショップは持っていた杖から、なにか光を放つ。

「「毒蛇の剣（シャーペン）…！！」」

ビショップが放った光により、ポーンの剣は黒と白の蛇がまきついた様な形の、毒々しい瘴気を放つ剣になる。

「さよなら…仮面ライ…グアァッ！？？」

と、ポーンがそこまで言いかけたところでドゥーツの目の前を黒い鉄の塊――リボルギャリーが躍り出、猛スピードでポーンとビショップに突っ込み二体を大きく跳ね飛ばし、地を削りながら急停車する。

『ふぅ…間一髪でした…』

『ええ…コイツ等と遊んでる暇はない…！！』

ドゥーツはそういうとリボルギャリーへと駆け寄る。

リボルギャリーは赤色灯を回転させながらシールドを開き、タラップを下ろし簡易型のプラットフォームを展開する。

ドゥーツはジェントルーダーの前部ユニットに跨ると、背部のリボルバーハンガーが回転し、前部ユニットが後退する。

そして普段使っているボイルダーユニットの背部に六連装の大出力ブースターユニットが装着された後部ユニットが装着され…ジェントルーダー・スタートダッシュフォルムとなった。

タイヤが勢い良く回転し、同時に後部のブースターユニットが火を噴き、ジェントルーダーが物凄いスピードでプラットフォームから飛び出す。

同時にリボルギャリーはタラップとシールドを戻し元の形態に戻ると、ステルス迷彩を起動し周りの風景にとけ込むとそのままどこかへと走り去っていく。

「グッ…なんだあれは…！？」

ポーンとビショップはリボルギャリーに跳ね飛ばされた際のダメージが残りながら、力無く立ち上がる。

いかにドーパントとなって常人離れした身体能力を手にしたとしても、全体重量が軽く５００ｔを超えるリボルギャリーに猛スピードで体当たりされたならばそのダメージは計り知れない。

「くっ…追って！！」

ビショップはポーンにそう言い、ポーンは軽く毒づきながら駆け出す。

「待て…！！」

ポーンは猛スピードで逃げるジェントルーダーに追従しながら走り、右手に光を集め突き出し光弾を撃ち込む。

ジェントルーダーの周囲に光弾が命中し姿勢が崩れそうになるが…ジェントルーダー自身がそれをサポートし、姿勢を崩させない。

『さっきのお返しだ！』

ドゥーツはジェントルーダーを横に滑らせながらポーンの方に機首を向け、前輪部分のバルカン砲を撃ち込む。

「ッ！？うわっ！！」

ダメージこそ無いに等しいが、想定外の攻撃にポーンは思わずひるんでしまう。

「この街のゴミどもめ！！貴様らなんかが！！」

ポーンはキレ気味にドゥーツに向けて言い放つ。

『お前らがゴミだろ。自分で夢の島まで行くぐらいはしろよ？』

だがドゥーツは辛辣な口調で言い、ハードボイルダーの機首を戻し命令を下す。

『ジェントルーダー、ブースターユニット強制排除。』

すると、ブースターユニットが音を立てながらボイルダーユニットから外れ、その一つ一つが大きな質量弾となってポーンに襲いかか

る。

「何!?うわぁぁっ!!」

ポーンがそれに気付いたころには既に回避出来ない距離にあり…ポーンはその全てをくらいそのまま吹き飛ばされ、ジェントルーダーはそれを尻目にステルス迷彩を起動する。

そして機体を周りの風景に溶け込みそのまま消えていった。

「グッ…!!畜生…!」

ポーンはダメージの残る体に鞭打ち起き上がると、既にジェントルーダーはその場には居なくなっており、ポーンは忌々しげに地を殴りつける。

すると、ポーンは近くに来たビショップに気付き、そちらに視線を向ける。

「貴方…それでもポーンメモリの資格者なの!?…コンの役立たずがッ!!」

ビショップは肩をわなわなと震わせながらそう言うと、右手に光を集め光弾を作り出しそれをポーンに撃ち込んだ。

「?!があァッ!!」

ポーンは突然味方だったはずのビショップに攻撃されたことに戸惑う暇もなく、ビショップの攻撃を食らい吹き飛ばされ…苦しげに呻きながらその場に蹲るのだった。

■
■
■

同時刻　廃墟。

アカネは、必死にストマックから逃げようとしていた。

「う…うちなんか食べてもお腹壊すだけですよ！？だから食べないで！！」

だが、ストマックは静かな口調でアカネに言う。

「知ってるわ…。刻まれて…壁の塗料にでもおなりッ！！」

と、ストマックは刀化した右手を振り被り、アカネを斬りつけようとする。

「ひぃやあぁぁぁぁぁ！！」

アカネは悲鳴を上げながら近くにあったフライパンと鍋でガードし…ストマックは躊躇なく右手を横一文字に振りかぶる。

―ＧＹＡＮ！―

スパッと切れた。

チタン製の合金でできたフライパンと鍋がぱっくりと真っ二つに割

れていた。

頼みの綱が切れた事により…アカネはそれまで必死で耐えてきた恐怖が一気に押し寄せたのか、遂に泣き出してしまった。

「うわぁぁぁん!!うち…こんなの聞いてへ～ん!!うぇぇぇん!!」

だがストマックはその命乞いに耳を貸さず、再び右手を構え、アカネを葬ろうと右手を振りかぶる。

しかしその瞬間、近くのドアが吹き飛び、ストマックはその音に一瞬驚きそちらに視線をやる。

「な…なんだ、お前は!?」

ストマックはドアから入ってきた者を見ながら問う。

「仮面ライダー…ドゥーツ…」

入ったきた者…ドゥーツは静かにそう言うが、アカネは相変わらず泣きながら言う。

「遅いっちゅうねん!!ぐすっ、ぐすっ…。けど何でここが分かったん?!」

『それは簡単。貴女が持っているガジェットは、自律行動くらいできるのですよ。』

ドゥーツはそういうと、自分の指にのった水色のガジェット…スワ

ローペンシルを撫でる。

―ＰＩＰＩ！ＰＩ―！―

『ま、この子が案内してくれたって…そういうこと。フッ！！』

ドゥーツはそう言うと、ストマックに駆け寄りパンチを食らわせ、そこから互いの応酬が始まるが…ドゥーツは強力な蹴りを放ち、ストマックは吹き飛ばされる。

「くっ…おのれぇぇぇ…！！」

ストマックは忌々しげにそう言うとアカネとゆかりに向き直り襲いかかる。

「ゆかりィ！！」

壁に貼り付けられたままの赤磐荘司はそう叫ぶが…ストマックは、ゆかりに刀を振り下ろそうとする。

「させるかぁぁぁぁ！！」

だが、そこでアカネが叫びながら立ち上がり、タートルライトをストマックの目の前で付け、強力な光を放つ。

「ギャァッ！…目が…！目がぁ！！」

ストマックが、某ラピュタの王の様な叫び声をあげていると、アカネ近くにあった椅子を持ち上げるとそれをストマックに叩きつけた。

「ぐあああああッ！！」

ストマックは思わぬ攻撃にその場に倒れこんでしまい、アカネは逆光に照らされ荒い息をしながらストマックに向けて叫ぶように言い放つ。

「…うちの依頼人に……指一本触れんなや！！！」

その姿を見た位置の目には…ほんの一瞬だけだがアカネの姿に鍛治の姿が重なり、互いに口にする。

「…旦那…？」

一は思わず呆けていたが慌てて我に返り、右手に炎を纏わせ、倒れたストマックに駆け寄りつかみかかる。

『助かりました、流石所長！！あとはこちらで任せて下さい！！』

「あぁ！！任せとき！！」

アカネはドゥーツの言葉に力強く頷き、ドゥーツは壁を破りながらストマックを外に連れ出す。

ドゥーツはストマックにつかみかかりながら投げ飛ばすと、普段とは違うセリフを静かな口調で言い放つ。

『…紳士的に、ぶちのめす。』

「ひ…ッ…！！…こンのぉ！！」

ストマックはその静かな口調に恐怖を感じ、威圧されながらもドゥーツに襲いかかる。

ドゥーツは息をもつかせぬ連続攻撃でストマックの攻撃を対処するが、ストマックも卓越した動作でその攻撃を対処し、自らに有利なペースを保つ。

『…甘いっ！！』

だがドゥーツはストマックに出来た一瞬の隙をつき、ストマックのペースを崩し、振りかぶって右手に炎を纏わせ、勢いよくパンチを食らわせストマックを吹き飛ばす。

「グガッ…！！逃げるが勝ちだ！」

ストマックは力無く立ち上がると、体を粘液化しその場に溶け込んだ。

『消えやがった…と言うと思ったか？』

ドゥーツがそう呟いた瞬間、パピヨンショットが現れその右手に収まる。

ドゥーツはパピヨンショットからギジメモリを引き抜き、代わりにドリームメモリを取り出しスイッチを押す。

―ＤＲＥＡＭ！―

そして、ドゥーツはパピヨンショットにメモリを装填する。

―ＤＲＥＡＭ！Ｍａｘｉｍｕｍ Ｄｒｉｖｅ！！―

パピヨンショットから電子音声が発せられ、ドゥーツの右手から飛び立つ。

頭部から高熱を孕んだ眩い閃光を連続で放ち、更には羽の部分から起爆性の鱗粉が巻かれ…爆発の熱により、ストマックの擬態が溶け始める。

そして、最終的に高熱と閃光に耐えきれず擬態が溶け…倒れ込み、パピヨンショットは目を明滅させる。

『終わりだ…！！』

一がドライバーの左スロットからメモリを引き抜き、それをベルト右側部にあるマキシマムスロットに装填しタッチすると電子音声が発せられる。

―ＰＯＩＳＯＮ！Ｍａｘｉｍｕｍ Ｄｒｉｖｅ！！―

ツインは両手を広げ、右手に炎を、左手に紫色の光を纏わせながら高くジャンプしながら宙返りし、最高点まで達した所で、技の名を叫ぶ。

『『はぁぁぁぁぁッ！！ポイズン・グレネイド！！！』』

瞬間、ドゥーツの体が左右半分に別れ、それぞれストマックへと突っ込んでいき、まず炎の拳を持った左半身がストマックを殴りつけ、次に紫の光を纏った拳の右半身が殴りつけ、最後に再びもとの形のもどると、強力なパンチを食らわせる。

「ガァァッ…！！うわぁぁぁぁぁッ！！」

ストマックは悲鳴とともに爆発し小神野に戻り、同時にメモリが飛び出ると砕け散り、小神野はその場に倒れ込んだ。

『……ふん。』

一は、そんな小神野を一瞥すると、ドゥーツの姿のまま廃墟へと戻っていく。

廃墟では、すでにアカネが捕らわれていた料理人達を助け出した後で、ドアから捕らわれていた料理人達がよろよろと力無い足取りで出てきたが、特に怪我もなにもないようだった。

「あ……イェイ♪」

アカネはドゥーツの姿を見るなり嬉々とした表情で手を振りながらサムズアップした。

■　■　■

午後6時　園咲邸　リビング

「ふふっ、あの探偵の子、面白かったわね♪仮面ライダーさんもなかなかみたいね？…意外と我が家の婿さんの役に立ったりして♪」

若菜は窓から見える風景を見ながらどこか嬉しそうな表情で冴子に

言うが、冴子はそんな若菜が気に入らないのか、忌々しげに若菜に言う。

「…若菜、挑発は相手を見てからしなさい…」

若菜は冴子の言葉に一瞬不機嫌な表情をするが、とりあえず申し訳なさげな表情をしながら冴子に言う。

「ごめんなさいお姉様…お気になさっていたのね…」

だが冴子は妖しい笑みを浮かべながら若菜に言う。

「お仕置きならちゃんとしておいたわ…。夫は教育が肝心、だからね……」

同じ頃、霧彦はバスルームで濡れた体にバスローブを纏っていた。

だが、その体のあちこちには何かに打たれたような傷跡と、脇腹にはひときわ大きな痣があった……。

「ドゥーツ…次は、必ず！！」

■　■　■

次の日・鞍坂探偵事務所。

一は机のレポート用紙に面し、羽ペンで今回の事件の報告書の文面

を内心で呟きながら書いていた。

（おかしな屋敷に、敵幹部の総攻撃……まったく慌ただしい事件でしたた…。まぁ依頼者たちの笑顔が取り戻せたのが何よりです……）

そんな中、アカネが台所から現れ、マープルに自らの作った料理をすすめていた。

「いよっしゃ！！出来たでぇ！！さぁマープルちゃん！うちの作った最新料理や！！頭脳労働には旨いモンが最適やで♪」

その料理は見た目は普通で美味そうだったが…マープルはなぜか顔面を蒼白にしながら抵抗する。

「…アカネちゃん、、あんな目にあったのによくそんなの作れますね…！？」

「御託はええねんボケ！さぁ、つべこべ言わんととっとと食え！！」

アカネは嫌がるマープルをよそにマープルの口に無理やりケーキをねじ込む。

「む……！！」

瞬間、マープルが苦悶に満ちた表情を浮かべ、口にする。

「ごめん…言葉では表現できないほどマズいです…」

「はぁ！？マープルちゃんこの崇高な味が分からへんのか！？」

「崇高と言うか…何であの食材からこんな物が…！？」

アカネは半ばキレ気味に言うと、自らの作った料理を美味しそうな表情で頬張る。

一はそんな二人を見ながら内心で呟く。

（アカネは相変わらず事務所の親分気取り…。だがそれでも良い。彼女の中にいる旦那に出会えたような気がしたから……。…私がいらぬ心配をせずとも…彼女には彼女の強さがあるんだ。だから、強くならなきゃいけないのは…私のほうなのかもしれない。）

「…なぁ、あんたも食べい！」

「ア～イイ天気デスネェ、今日ハー。」

すると、アカネがそんな一に気づき、自らのケーキをすすめるが…一は棒読みでそう言い、慌てて視線を逸らす。

今日も、鞍坂探偵事務所は平和である。

## Sな戦慄／名探偵の娘（後書き）

…はい、Sな戦慄は終わりましたー

これより、作者月詠様とのコラボ、

仮面ライダー×仮面ライダー　コラボ大戦EX（イクス）【再開のD／二色と三色と騎士と…？】

に入っていくので、お楽しみに！

作者月詠様の『とある能力の異常言語（イレギュラーコード）』はこちら！

↓ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ６５９７ｎ／

## 暇もて余すＭ／妄想＆新ライダー紹介（前書き）

はいどうも。

…今回は、タイトルの通り、暇を持て余したＭ《緑紫》が前々からなぜか考えてたＤＯＴＷＯの今後出るライダーのアンケート。

そして、『なんだよこれ、見る気しねぇよ！』というような無駄なアイデアなど、お送りします。

暇つぶしにでも、どうぞ。

注：いろいろとひどかったので、修正して投降し直しました。

## 暇もて余すM／妄想&新ライダー紹介

もし、仮面ライダーＤＯＴＷＯが英霊になったら。

■　■　■

真名　：左乃宮一＆マープル

クラス　：マスクドライダー

属性：秩序・善

能力パラメータ

一　：筋力：Ｂ　耐久：Ｂ　魔力：Ｃ　俊敏：Ａ

マープル　：筋力：Ｅ　耐久：Ｅ＋　魔力：ＥＸ　俊敏：Ｃ＋

変身時　：筋力：Ａ＋（ＳＰＩＲＩＴの場合はＡ＋＋）　耐久：Ａ＋（ＳＰＩＲＩＴ・ＰＯＩＳＯＮの場合Ａ＋＋）　魔力：Ａ＋（ＤＲＥＡＭ・ＭＡＧＩＣＩＡＮの場合Ａ＋＋）　俊敏：Ａ＋（ＢＡＳＴＥＲ・ＡＳＨの場合はＡ＋＋）

固有スキル

人望　Ｃ：周りの人物に慕われる才能。このランクだと、初対面の人間でも友好的に接してくれる。

宙の本棚　Ａ＋：マープルと変身時の固有スキル。太古から現在までの地球に宿った知識を閲覧することができる。なお、地球の知識であればよいので、並行世界の知識も閲覧可能。

騎乗　Ａ：騎乗の才能。現代のバイクや車などの操作ならば、手足の様に操ることができる。

紳士的　Ｃ：一の固有スキル。女子供に話しかけると、あまり警戒されない。

変身　Ａ＋：ガイアメモリを使い変身する。

～宝具～

『地球の記憶（ガイアメモリ）』

対人宝具　ランク：Ｓ　レンジ：－　最大補足：－

一とマープルが持つ地球の記憶を封じ込めた宝具。ＡＳＨ、ＭＡＧＩＣＩＡＮ、ＳＰＩＲＩＴ、ＤＲＥＡＭ、ＢＡＳＴＥＲ、ＰＯＩＳＯＮの６種類。

『二色の戦士の象徴（ドゥーツドライバー）』

対人宝具　ランク：Ａ　レンジ：１　最大補足：－

ガイアメモリを二本使い事で、一とマープルを【仮面ライダーＤＯＴＷＯ】に変身させることができる。

一とマープルの意思でどこからともなく取り出すことができる。

『神霊の大槌（スピリットバンカー）』

対人宝具　ランク：Ａ　レンジ：１～５　最大補足：１５

ＤＯＴＷＯが『ＳＰＩＲＩＴ』のガイアメモリを使い変身すると真名解放、召喚が可能になる武具。

『破壊』と『不壊』の概念が込められ、攻撃した物を破壊するが、この宝具は決して壊れることはない。

『砲撃の魔銃（バスターマグナム）』

対人宝具　ランク：Ａ　レンジ：１～１０００　最大補足：２０

ＤＯＴＷＯが『ＢＡＳＴＥＲ』のガイアメモリを使い変身すると真名解放、召喚が可能になる武具。

『命中』と『必殺』の概念が込められ、この銃からの銃弾を受けた者の魔力がＢ以下の場合、簡易式の呪いをかけ、ダメージを与え続ける。

『二色の鋼鉄騎馬（ジェントルーダー）』

対人宝具　ランク：Ａ　レンジ：１　最大補足：５

ＤＯＴＷＯが乗るバイク。真名解放することで、最大速度の上昇、武装の追加、バイクの後方部分の換装等を行う事が出来る。

■

■

■

■

今後、仮面ライダーＤＯＴＷＯに登場予定ライダー。（あとがきでアンケートとります）

ライダー名：仮面ライダーイゴーズ。

変身者：坂本美緒（作品名：ストライクウィッチーズ）

使用メモリ：ＥＡＧＬＥＳ（イゴーズ）。《荒鷲の記憶》を持つガイアメモリ。絵柄は翼を広げて滑空している荒鷲の《Ｅ》。

■

■

■

ライダー名：仮面ライダーデザイア

変身者：横島忠夫（作品名：ＧＳ美神極楽大作戦）

使用メモリ：ＤＥＳＩＲＥ（デザイア）。《欲望の記憶》を持つガイアメモリ。絵柄はニタリと笑った人の口の《Ｄ》。

■

■

■

ライダー名：仮面ライダーソードマン。

変身者：坂田銀時（作品名：銀魂）

使用メモリ：ＳＷＯＲＤＭＡＮ（ソードマン）。《剣豪の記憶》を持つガイアメモリ。絵柄は二本の鍔迫り合いをしている《Ｓ》。

■

■

■

ライダー名：仮面ライダークリムゾン

変身者：哀川潤（作品名：戯言シリーズ）

使用メモリ：ＣＲＩＭＳＯＮ（クリムゾン）。《真紅の記憶》を持ったガイアメモリ。絵柄は炎で出来た《Ｃ》。

■

■

■

ライダー名：仮面ライダージャベリン。

変身者：槍桜ヒメ（作品名：夜桜四重奏）

使用メモリ：ＪＡＶＥＬＩＮ（ジャベリン）。《薙刀の記憶》を持つガイアメモリ。絵柄は一本の巨大な薙刀と、短槍で作られた《Ｊ》。

■

■

■

ライダー名：仮面ライダーディーバ。

変身者：初音ミク（作品名：ＶＯＣＡＬＯＹＤ）

使用メモリ：ＤＩＶＡ（ディーバ）。《歌姫の記憶》を持つガイアメモリ。絵柄は二つの音符で出来た《Ｄ》。

■

■

■

## 暇もて余すM／妄想&新ライダー紹介（後書き）

…と言う訳で、予定ライダー6人紹介しました。

さて、ここでアンケートをとります！

このライダー6人の中で、本編に採用するのは実際2人だけです。

なのでアンケートで、この6人の中から二人選んで下さい！

持ち票は一人二つ。

『～と～がいいです！』や『～と～なら面白いと思います！』等、理由は基本何でもいいので、感想の方にお願いします！

アンケートで票の多かったキャラは採用。それ以外で、一票でも入っていたキャラはサンタちゃんやウォッチマンみたいな立場か、『食べるぅ？』の人みたいな感じで結局登場させます。

締め切りは5月1日まで。

0票のキャラは言わずもがな。

それでは、お待ちしてます！

## ～小ネタ集～（前書き）

どうも皆様、お久しぶりです。

コラボ編も上手く進まず、気付けば二ヵ月も更新停止状態に…。

なので、暇を見つけてちょこちょこ書いていたドゥーツの小ネタ集を投稿します！

## ～小ネタ集～

小ネタ「左乃宮一の家族関係」

ある日・鞍坂探偵事務所。

今日は仕事も無く、ゆっくりとした時間を過ごしている三人。

「……ふむ、この事件はこうで…。」

「…ぁ、アメボウス紫でなんとかできるんや…。」

一は今まで書いた報告書をまとめ、アカネは某引っこ抜かれて戦って食べられるゲームをしている。

そしてマープルはというと、珍しく検索などをしないで、部屋の掃除をしている。

「～♪～～♪」

ポフポフとハタキで本棚のホコリを落としていくと、不意にヒラリと一枚の写真が落ちる。

「ん？」

マープルはその写真を手に取り、なんとなく見つめる。

それは中心に一が立ち、さらにその周りに数人の男女のいる写真だ

った。

背景はどこか外国の富豪の家の様な大きな庭園と、月の様な鮮やかな色で装飾された豪邸が。

右側には天然パーマで腰に木刀を刺した男、短い金髪で全身筋肉隆々のいかつい男が立ち、左には茶髪でサイドテールの女性、ハンチング帽と眼鏡の男性、大人しそうな長い黒髪の女性。

そして中心で一を肩を組みながら楽しそうにVサインをしている、美しい金髪の女性が映っていた。

マープルはそれを見つめた後、一の方へと歩く。

「ね、いーちゃん…この人達、誰ですか?」

「ふむ?」

一はその写真を見ると、少し驚いた様な顔になる。

「おや…懐かしいですね。これ、どこにありました?」

「棚からヒラって落ちてきましたよ?」

「…なんや、なんかおもろいもんでもあったんか?」

一がその写真を手に取り、軽く微笑んでいると、面白そうなものの気配を感じたのか、アカネもゲームを中断して寄ってくる。

「うわ、なんやこのベッピンさん…元カノ?」

「いえ、そうしたら周りのは誰なんですか…」

アカネが見当外れの事を言うが、マープルはさっと突っ込む。

「そうではなくて…これ、私の家族ですよ。」

一がそう言うと、事務所の時が止まった。

「……。」

「……。」

「……ん？」

返事どころか、何も言ってこないので、一が二人を見ると…二人は、硬直していた。

「…え、嘘やろ！？」

「ま、待って下さい！？お養父さんはこの帽子の人だとして…お養母さんは誰なんですか！？」

そして、一拍置いてやっと自体が飲みこめたのか、二人は一気に一に詰め寄る。

「え、だから母さんは……この人ですよ。」

一はそう言って……美しい金髪の女性を指差す。

「「……え？」」

金髪の女性は外見年齢は、よくて２０代後半。

そして、目の前の一は２１歳。

そして、写真の４０代程度に見える男性。

二人は、その事実をゆっくりと反芻し…一に向き直る。

「…いーちゃんのお父さん、ロリコンだったんですか？」

「どうしてそうなった。」

呆然としたように言うマープルに、一は即座に突っ込みをいれる。

だが、アカネはぐいっと一に詰め寄り、大声をあげて問う。

「でも、どう見てもこの人若いやろ！？よくて２０代後半や！なのに、一君２１歳やし、このおっさんは４０代くらいに見えんで！？なんや、小学生で結婚したんか？！」

「…ンな訳ねぇだろッ！」

「あぎゃっ！！」

アカネのその叫びに、一は額に軽く青筋を浮かべながらデコピンをする。

「……一応、私の母…左乃宮アルクェイドですが、列記とした４

0代です。父の虎徹も同じくそのくらいの年齢だそうで。」

一はため息をつきながらそう言うが、マープルは食い下がる。

「え、でもどう見ても若いですよ!?」

「そこらへんは知りませんよ。私の生まれた時の写真でも、同じような容姿でしたしね…。」

左乃宮家七不思議ですよ。そう言って一は締めくくる。

「……そのお養母さん、本当に人間ですか?」

「いえ、多分人外ですよ。父親との馴れ初めが、【殺された責任とってもらった】って言ってますし。」

一がため息をつきながらそう言うと、アカネが今度は男性の方を指差して言う。

「なら、こっちのお父さんの方は普通なんか?」

「む?えぇ、特におかしいところも無い、普通の子煩悩な父親ですよ。改名はしてるらしいですけどね。」

「その名前って?」

「今の名前は左乃宮・T・S・虎徹です。ま、母さんの趣味なのでとやかく言いませんがね。元の名前は【シキ】とか言うらしいですが。」

「…なんか、大変な両親ですね、いーちゃん…。」

「いえ、兄弟の方もさんざんなので、そこまで気にしてませんがね…。」

マープルが同情するように言うと、一はため息をついて頭を押さえる。

同じ頃・左乃宮本家。

とても日本にあるとは思えない様な豪邸。その豪邸にある一室で、一人の美しい女性がソファにぐたっと倒れていた。

「……う～。最近、志貴も連絡くれないし、子供達もなんのも連絡ないし…」

―ひ～～ま～～な～の～！！―

その美しい女性…左乃宮アルクェイドはそう言いながらソファの上で手足をじたばたとさせて唸る。

そしてそれを見かねたのか、そのソファの隣の天蓋付きのベッドで眠っていた一人の黒髪の女性はアルクェイドに向かって話しかける。

「……お母様、ずっとそう言ってるだけなら、なにかやることでも探したらどうですか？」

「えー。だって、ポケモ○は全部レベル１００にしたし、デビサマ

も全部最強にしたし…」

「ゲーム以外で何かしたらどうです？」

「ん～……あ、一の昔の写真愛でるとか？」

「お手伝いしましょう。」

……左乃宮アルクェイド。夫である左乃宮・Ｔ・Ｓ・虎徹と同じく、重度の子煩悩である。

※アルクェイドが偶然養子にはいった左乃宮家に、【シキ】が婿入りしている。

■

■

■

小ネタ「左乃宮一の姉弟関係。」

「兄弟ってのは…残りの四人の事か？」

アカネが写真の二人の女性を指差して言うと、一は頷く。

「えぇ。私の姉で長女の左乃宮なのはと次女の左乃宮七実です。」

一が言うと、アカネは首をかしげて言う。

「…なんや、写真では特に問題とかあらんみたいやけど？」

「……いえ、性格面に問題があるのですよ。」

一はため息をつきながらそう言う。

「えっと…どんな感じなん？」

「……なのは姉さんは基本的には優しいんですが…どうにも、暴走しやすいところがありまして…。」

「…例えば、どんな？」

マープルがそう問うと、一は疲れた様な眼で遠くを見る。

「…私がいじめられてた時、なぜか銃火器を持ち出したりしまして…。」

「……いーちゃんの家族、何で人間やめてる様な人しかいないんですか？」

マープルがそう言うと、一は軽く涙を流してその時のことを思い出す。

『一君を苛める子は絶対許さないの！』

『待ってなの姉ちゃん、なんでバズーカもってるのおぉぉ！？』

『ウワアアアアアアアアアアアア！！？？』↓いじめっ子達

『スターライトォ……ブレイカー！！！！（バズーカ発射）』

『逃げてぇ、いじめっ子超逃げてぇぇぇ！！！！』

「……本気で姉さんがグレネード打とうとした時は驚きましたよ。」

「……なんか…思い出させて…すまんな。」

一が泣きながら言うと、アカネは心底すまなそうな顔で肩に手をポンと置く。

「…じゃ、こっちの人は大丈夫なんですか？」

マープルが、もう一人の女性を指差すと、一は少し柔らかな笑顔になる。

「えぇ、七実姉さんは普通の人ですよ。少し病弱ですけど、いい人で…。」

「へぇ…唯一まともな人なんですね。」

何気に写真の残りメンバーを見て、唯一と言えるだけマープルも手厳しい。

「えぇ。常識人で、優しくて…よくなついてましたよ。」

「なんや、すごいいい人っぽいやん。」

「はい。とてもいい人でしたよ。」

そう言って、一は優しく笑った。

同じ頃・左乃宮本家。

アルクェイドが七実の隣でゴロゴロと一のアルバムを読んでいると…部屋の扉がガチャリと開き、サイドテールの女性…なのはが入ってくる。

「…あれ、二人だけなの？」

「えぇ。姉さん、どうかしましたか？」

なのはが首をかしげて言うと、七実がそれに問う。

「さっき、ラー君みかけて、ちょっとお手伝いしてもらおうと思ったの。」

「ん～？手伝いって？」

アルクェイドが一のアルバム（４冊目）を読み終え、なのはに向き直ると、なのははまた話し始める。

「大したことでもないけど、さっきタンスの後ろにディスク落としちゃって…」

「ディスクって？」

「ゴ○ラＶＳビオ○ンテのＤＶＤと私の武器のリスト入りフロッピー。」

なのはがそう言うと、七実はベッドから起き上がり、なのはに話しかける。

「だったら、私が手伝いましょうか？」

「あ、だったらお願いするの♪」

なのはがそう言うと、七実はベッドから降り、テトテトと歩き始める。

「あんまり無理しないようにねー。」

「はい。分かってますよ。」

七実はそう言うと、一瞬その姿がブレ、長身の男の姿になり、その部屋を出ていった。

「…便利ねー。あのメモリ…のくせに一の前では使わないしさー…なんでぶりっこしてるんだろ？」

……左乃宮七実。過度のブラコンであるが、とても病弱な人間である。

しかし、とあるメモリの適合者であり……どんな人間にも変身でき、

家族内では、兄と父を抜いて最強の一人（もう一人は母）である。

■
■
■

小ネタ「左乃宮一の兄弟関係。」

「…じゃ、こっちの二人はどうなんですか？」

一が七実の事を思い出し、多少なごんでいると、次はマープルが二人の男を指差す。

「あぁ、二人は……なんて言ったらいいんでしょうか。」

一は遠くを見て、どこかせつなそうな目になる。

「えっと…またひどい人なんですか？」

「いえ、その金髪の方…ラオウ兄さんは優しいし、料理上手だし、腕っ節強いですし。」

「…じゃ、そっちの天パーの方が？」

「…はい。」

アカネがそういうと、一は頷く。

「性格面と言うより……色々とまるで駄目なおっさんなので。」

「略してマダオか…。」

「えぇ。甘党で、自堕落で、ジャン○好きで…。」

一がそう言うと、マープルは心底疲れたようにため息をつく。

「…一番ダメそうですね、この人。」

「えぇ。そのくせメモリ持って風都に住んでて…。」

「……え？」

一のその言葉に、アカネが反応する。

「……そう言えば、前にこんなおっさん見た気が…具体的には路地裏で。」

「…パチンコでまた負けて、酒飲んで吐いてたんでしょうね…。」

一はため息をつき、頭をかく。

「本家にいると基本姉さん達の遊び道具にされるって言うから風都にいるんですがね…。」

「じゃ、ラオウって人はちゃんと仕事持ってたりまともな人なんか？」

「えぇ。警備会社の社長やってますよ。だいぶまともな人間ですし。」

一がそう言うと、マープルは感心したように言う。

「こんな世紀末みたいなのに、いい人なんですねぇ…。」

「えぇ…。」

「……。」

―よく、こんな家族の中で一君はまともに育ったなぁ…―

アカネはそう思いながら、どこか遠い目で一と一の持った写真を見ていた…。

同じ頃　左乃宮本家。

「…母上、ここにおられるか？」

アルクェイドが、なのはも七実も出て行ってしまったので、つまらなそうに一のアルバム（１２冊目）を読んでいると、ドアが開いて筋骨隆々の大男…左乃宮ラオウが入ってくる。

「あら、ラー君、どうしたの？」

「…なんですか、その呼び方は…」

「さっき、なのちゃんが呼んでたから真似したの～…で、なにか用？」

アルクェイドが聞くと、ラオウは首をかしげて言う。

「うむ、姉上が「唐突に杏仁豆腐が食べたくなったの！ラー君、作って！」と言われましてな…作ったのですが、量を間違ってだいぶ作ってしまったのです。よければ食べませんか？」

「あ、もらうもらう！いや～料理上手な息子がいて、母さん得してるわ～♪」

アルクェイドが喜んで立ち上がり、ラオウの肩に飛び乗ると、ラオウもドアを開けて外に出る。

「まぁ、デザートでは一の方が上手ですがな…。」

「でも、ラオウもたっくさん料理作れるし、どっちもいいところあるわよ？」

「……なら、よいですかな…。」

ラオウはそういうと、アルクェイドを肩にのせたまま、歩き始めた…。

…同じころ、風都パチンコ店。そこで…

「……スッちまった…。」

「お客さん…いい加減ギャンブルはやめたらどうだい？」

「いや、まだだ！安西先生も言ってたよ、諦めたらそこで試合終了なんだよ！」

一人の天然パーマの男が、パチンコで所持金を全てスッていたのは……余談である。

## ～小ネタ集～（後書き）

…だいぶ短いですが、小ネタですからご勘弁を！

また思いつけば、小ネタ集を投稿しますので、お楽しみに！

次回の小ネタの予定は、

『一とマープルの初対面。』
『一とマープルの友人関係。』
『風都とドーパントの協力関係。』

です。

不定期更新ですが、お楽しみに～。

# 復讐のＩ／復讐車（前書き）

はい、だいぶ久々ですが…本編、再開します。

# 復讐のⅠ／復讐車

■　■　■

二ヶ月前　午後１０時　風都某所　とある交差点。

降りしきる雨の中、一人の女性が傘を差しながらとぼとぼ歩いていた。

瞬間、自動車のヘッドライトの明かりが彼女を照らし、女性は突然の事態にどうすることも出来ず、車にはねられてしまった。

そして、偶然そこを通りかかった一人の青年が倒れた女性を見かけ、慌てて駆け寄る。

「！！ね…姉さん！！」

だが女性は倒れたままで事切れ、青年の問いに答える事はなかった。

「うわぁ～やっべぇ！！やっちまったよ…」

すると、女性を轢いた車の運転手らしき男が窓を開け、青年の方を見ながら思わず声を上げる。

「ど、どうするんすか桑而（クワシカ）さん！？」

運転手の男――桑而の言葉に、後部席に座っていた部下らしき男達が運転手の男に慌てながら問う。

「ま、どうとでもなっか♪ははっ、行こうぜ！！」

「そ、そっすね！！あははははは！！」

桑而は部下にそう言い、部下たちも一安心したようで…男達は笑いながら車のエンジンをスタートさせ、その場から走り去っていった。

「ッ…！！っ……！！！！」

青年は走り去っていく車を憎悪に溢れた目で見つめたのち、動かなくなった自分の姉を抱きしめながら憎しみを孕んだ悲痛な声で叫んだ。

「姉さぁぁぁぁぁぁん！！うわぁぁぁぁぁぁぁッ！！」

目の前で姉を奪われた青年は、その場で泣きながら叫んだ。

だが、青年は気付かなかった。

動かなくなったはずの姉の目が妖しく光ったことに……。

■　■　■

現在　鞍坂探偵事務所。

「ふぁ…ふぁ…あぁぁっくしょい！！」

夕食を終えた事務所に響いたのは、アカネの威勢のいいくしゃみだった。

「あれアカネちゃん、風邪引いたの？」

先程から鼻をかんでは勢いよくくしゃみしまくっているアカネに、きりっとした雰囲気の三つ編みに眼鏡の女性――羽川翼が心配そうな表情でななこに問う。

「あ～…ぞうみだいでず…」

アカネは濁った声で羽川の問いに答え、一の隣で報告書を纏める作業を手伝っていた、黒髪で背の低い男性――阿良々木暦がアカネに言う。

「鞍坂、そういうのはさっさと治した方がいいぞ。左乃宮みたいな職業だと、いろいろ都合が悪いこともあるだろ？」

一もその言葉に相槌を打つようにアカネに言う。

「暦の言うとおりですよアカネさん…。これ以上何の用事も無いなら早く寝てなさいな。」

「ふむ、ならネギを首に巻くのがいいな。まぁ、挿すのもいいと聞くが…」

「どこに挿すのかは聞きませんよ。」

黒の結べそうな位の髪に、ミニスカートの下にスパッツをはいた女性――神原駿河が一と暦に相槌を打つように言う。

実はこの三人、一の中学校時代の友人である。

今日は、偶然街中で遭遇したので、一緒に事務所で食事をしていたのだ。

「あぁ…ぞうひゃひぇでもらうわ…」

アカネは相変わらずの濁った声で言い自分の部屋に戻ろうとするが、アカネは再び鼻をすんすんし始める。

「ふぁ…ふぁ…あぁっくしょい！！あぁっくしょい！！」

アカネは再び勢いよくくしゃみをし始め、何故か一達に向けてくしゃみを連発し始める。

アカネにくしゃみされ、一と暦は思わずたじろぎ、神原は露骨に喜ぶ。

「若い少女の唾…駄目だ、興奮してしまう！」

「お前はもう後戻りができないところに来ているな、神原！」

神原のその発言に暦はつっこみ、アカネは相変わらずの濁った声で一達に言う。

「あ〝ぁごべん…でも、大丈夫やろ…バカは風邪引かない言うんやし…神原さんは体強いし…」

アカネは別段反省していない様にそう言い、それにマープルがピクッと反応する。

「…いや、貴女風邪ひいてること自覚してます？」

「なんやとぉ！？」

だが、アカネの一言に一が呆れたように言うと…アカネはヒートアップしたのか、掴みかかる。

「…いや、別段怒ることですか？神原なら逆に喜びますよ？」

「いや、あの人はドえ「成る程、興味深いですね…」…ん？」

だが、その状態を止めたのは、台所で羽川と一緒に食器を洗っていたマープルの声だった。

「何故バカは風邪を引かないのかしら…？早速検索！」

マープルは一人そう言いながら地下ガレージの扉を開け、地下ガレージへと消えていった。

「…一応、諸説ありますが…馬鹿が風邪を引かないのではなく、馬鹿は風邪を引いていることにも気づかない、と言う説が多いですね。」

「後は、馬鹿な子供は毎日毎日勉強もせずによく遊び、よく食べて

健康的な生活を送っているから、病気知らず…ってのが聞いた事あるな。」

その様子を見つめていたアカネは何故か急に熱が冷めていくような感覚に襲われ、興冷めしてしまった。

その横では、一と暦がなぜか《バカは風邪をひかない》で話していたが。

すると、その時、電話の呼び出し音が鳴り、アカネが机の電話機の受話器を取る前に羽川は勝手に台所の壁に据え付けてある子機を手に取り、通話に応じる。

「はい、鞍坂探偵事務所でございます。本日はどのようなご用件でしょうか?…はい、はい…分かりました。只今代わりますので少々お待ちください。」

羽川は子機の保留ボタンを押し、子機を片手に台所を後にし一達のもとに歩み寄る。

「左乃宮君、依頼の電話きたわよ?何か凄く慌ててるみたいだけど…」

「慌てて…?あ、どうも。」

一は少し訝しみながら羽川から子機を受け取り、通話を再開する。

「はい、お電話代わりました。左乃宮です。本日はどのようなご依頼でしょうか?何でもすぐさま解け『ダチから聞いたんだ!!警察じゃ相手にしてくれない事件を専門に扱ってるって!!なぁ、そう

なんだろ！？』あ、あのもう少し落ち着いて『落ち着いてられっか！！こっちは命を狙われてンだぞ！！風谷港の第七埠頭にいるから早く助けに来てくれ！！』あ、あの！！もしもし！？…切れた…」

依頼者は言うだけ言って電話を切り…一は子機を机に置くとジャケットを羽織り、慌ただしく玄関へと走るが、暦に呼び止められる。

「待てよ左乃宮、どこへ行くつもりだ？」

「依頼者から助けてくれって電話があったんです。マープル、羽川さん、私が戻るまで留守番お願いします！」

一はそう言い玄関の扉を開けるが、暦は上着を羽織り、僅かな微笑を浮かべ一に言う。

「…またどうせ荒事だろうし…少しは手伝うぞ？」

一は何も言わずに歩きだし、羽川とマープルが手を振るのを背に二人は事務所を後にした。

■　■　■

１０分後　風谷港　第七埠頭。

一はジェントルーダーを、暦は黒を基調とし、金色の蝙蝠の羽の様な装飾がついたバイク、ハートアンダーを停め、依頼者との待ち合わせ場所の第七埠頭に来ていた。

流石にこの時間ともなると作業員たちの姿も無く、辺りに立ち込める深い霧が人気のない埠頭に不気味を漂わせていた。

「左乃宮、本当にここに違いないのか？」

メットを外しながら暦はハートアンダーのエンジンを切り、怪訝そうに一に問う。

「ええ、依頼者からの電話ではここの筈なんですけど…誰もいないですね。」

一は辺りを見回しながら暦の問いに答える。

「誰かいませんかー？鞍坂探偵事務所から来「遅えよ！！」？」

一が呼び掛けていると、それに答えるかのようにガラの悪そうな男が怯えた表情で現れ、二人に歩み寄りながら言う。

「どこほっつき歩いてたんだよ！！早く助けてくれよ！！」

「お、おい！一体どうしたんだよ！？」

暦が男に訊ねたと同時にヘビーメタル調の音楽と車のエンジン音が聞こえる。

それに二人が振り向くと、青いヘッドランプを光らせながら黒いＳＵＶがタイヤを勢い良く回転させ、遠くから三人目掛けて猛スピードで突っ込んで来るのが見えた。

「き、来たぁ！！うわぁぁぁ！！」

男はその黒の車を見るなり情けない声を上げながら逃げ出す。

「ッ…危なッ！！」

「おっと。」

暦と一は慌てて横に跳び車の軌道から外れる。

だが、黒の車は二人には目もくれず、真っ直ぐ逃げる男に突っ込んでいく。

—AAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA…！！！—

瞬間、黒の車の前部に毒々しい緑色の光を放つ半透明でドロドロに溶けた人とも虫とも区別のつかない生物の上半身が現れ、その怪人と同じように車体が半透明になりそのまま猛スピードで男に突っ込むと、車は男をはね飛ばさずそのまま男を通り抜け、しばらく進んで急停車した。

車が人を通り抜ける。

それは普通では有り得ない現象だった。

目の前でそれを見た二人は一瞬呆然としてしまうがすぐに我に返り、慌てて男の元に駆け寄り訊ねる。

「ッ！？ちょっと！！大丈夫ですか！？」

だが…一が男の肩に手を置いた瞬間、男に異変が訪れた。

「あぁぁッ!!がっ…!!ぎゃあああああああ!!」

男は目を見開きながら苦悶の表情を浮かべ、体が一瞬毒々しい紫色に染まると、男は糸の切れた人形のようにその場に倒れ込んだ。

「え、おい、どうしたんだ!?しっかりしろ!!おい!!」

暦が倒れた男を揺さぶりながら呼び掛けるが、男はすでに冷たくなっており、物言わぬ死体となった後だった。

「……っ。」

暦は男に呼び掛けるのをやめ、二人は男を殺した車に視線を戻す。

だが、黒の車は一には目もくれず、向きを反転させその場から走り去り、夜の帳に溶け込みその場から消えていった。

一と暦はしばらく呆然としながら走り去っていく車を見つめ…おもむろに暦が口を開き、一に訊ねる。

「…左乃宮、これからどうするんだ?」

「…とりあえず警察に連絡します。後の事はそれから考えましょう…」

「そうか…わかった。」

一は暦にそう返し、ジャケットのポケットからシケードフォンを取

り出し、刃野の電話番号を呼び出し通話を始め、しばらくのコール音の後に刃野が通話に応じた。

「…はい、こちら刃野。」

「すいません、刃さん。左乃宮ですが…今からこちらに来てもらえませんか？」

「いいが…なんだ、またドーパントか？」

刃野はすこし眠たそうに聞き返す。

「今私の目の前で殺しがあったんです。なんというか…バカみたいって笑われるかもしれませんが、車が人をすり抜けて、そして車にすり抜けられた人が苦しんで死んだ…ってな感じですね。」

「……俺、まだ眠ってんのか？」

「いや、だから車が人をすり抜けて、そんでもって車にすり抜けられた人が死んだんですよ。」

「…まぁたドーパントか？」

「ええ。一応死因も気になるので、メメさんもお願いします。」

『ういうい…現場保存は任せたぞ？』

「はいはい、了解ですよ。」

一は刃野にそれだけ言うと通話を切り、近くの材木に腰掛けて刃野

が到着するのを待った。

■　■　■

翌日午前7時　風都警察署　第三取調室。

あれから一と暦は刃野達に今回の事件の重要参考人として風都警察署に連行され、別々に取り調べを受けていた。

マッキーは苛ついた様子で机を叩きつけながら一に問う。

「コンのヘタレ左乃宮!!何であの男を殺したんだ!?素直に吐きやがれ!!」

「だ～か～らぁ、私達は交通事故を目撃しただけだって何度言えばわかんだよ…」

一は半ばうんざりした様子でマッキーの問いに答えるが、マッキーはそんな態度が気に入らないのか、なおも声を荒げながら言う。

「あぁそうかい!!けどなぁ、ガイシャの体には車に轢かれた跡なんかこれっぽっちも付いちゃいねェんだよ!!それはどう説明すンだよ!?」

「超知るか。」

すると、近くの扉が開きいつも通りの刃野が入ってきた。

「おぉ～、やってるねぇ～♪」

刃野がニヤニヤとしながら二人に歩み寄りながらマッキーに言う。

「まぁ一…せっかく取調室に来たんだからさぁ、カツ丼でも食べてくか？」

その言葉を聞いたとたん、机に突っ伏した頭をコンマ一秒より早くあげ、嬉々とした表情で一は言う。

「特盛りでよろしくお願いします。」

「だってさ、マッキー？」

一の言葉に刃野は何故かマッキーに言い…マッキーがたじろぎ始めながら刃野に問う。

「え…えぇ！？冗談ですよね刃さん！？左乃宮！？」

だが二人はマッキーに構わず話を進め、刃野は一に訊ねる。

「カツ丼食べたら洗いざらい話すんだな？」

一はいやらしい笑みを浮かべマッキーに顔面を近付けながらその問いに答える。

「もちろんですよ♪」

一がそう言ったのと同時に刃野はマッキーに早く買いにいくように

促し、一もそれに便乗し始める。

「ほらほらマッキー、そんなとこで座ってないで早く行く!!あ、ついでに俺は珈琲無糖な。」

「ほら、ダッシュダッシュ!!」

「くっそ～…!探偵に刃さん…!!覚えてろよ…!!」

マッキーは二人を睨みつけながら吐き捨てるように言いながらドアを開け、取調室を後にした。

「いやぁ～助かりました!!それにカツ丼のおまけつきとは…。ま、ないでしょうが。」

「まぁな。ああいうのは「物で買収する行為に値する」でアウトなんだよ。」

「…やぁ、二人とも…時間あるかい?」

と、二人が話していると、鑑識班の白衣（下にアロハ）をきた忍野がドアを開けながら取調室に入ってくるなり二人に訊ねる。

「一君、社交辞令として聞くけど、大丈夫だったかい?」

「別にどうとも。」

忍野は一の言葉を聞いてもニヤニヤとした表情を崩さず、二人のもとに歩み寄る。

「お、忍野司法解剖どうだった？」

「ん、僕もちょうどそれを伝えに来たんだ。」

忍野は手に持っていた書類の束を一に手渡し二人に言う。

「司法解剖の結果、被害者の数納さんはウイルスに感染して亡くなられたみたいだ。」

「「ウイルス…？」」

一と刃野は忍野の言ったウイルスという言葉に思わず反応するが、さらに淡々と二人に言う。

「あぁ。あと、昨日解剖を行った際に被害者の血液と皮膚のサンプルを採取して検査にかけたんだけど…このウイルスに関しても奇妙な点が幾つも発見されたよ。」

「奇妙な点？…俺は学ないから、もっと分かりやすく教えてくれるか？」

二人はあまりよく分かっていないようで、再び忍野に問い返す。

「ん。被害者さんを死に至らしめたウイルスだけど、かなり特殊なものだ。空気感染や経口感染で体内に入り込み、瞬時に体組織に入り込み壊死させて、僅か数秒でそれらが心臓や脳などに転移し死に至らしめる…怖いもんだよ。」

忍野はそこでため息をついて、また言い始める。

「そして第二に、このウイルスはもともと自然界の物でも突然変異型でもない事が分かった。んで最後に…これが何なのかって考えると、このウイルスは地球上に太古の昔から現在までに存在する全てのウイルスの特性を人為的に集約、調整し人間に対する致死性と毒性を高めたもの、という風な仮説がたった。一君、刃野。こんな事が出来るのは…」

「…ドーパント…か…」

忍野はひとしきり話した後に一に問い、一は静かにその問いに答えた。

「うん、まさかとは思ってはいたけどやっぱりか…。…ところで一。お前…ポイズンのメモリでこれと同じこと出来るか？」

刃野は顎に手を起きながら考え込むように一人言い、一は普通に返す。

「出来なくはないですが、変身した場合では不可能です。やるにしてもドーパント化しないといけませんし、純正化された私のメモリでは不可能です。」

「そっか…なら、これはポイズンに似た種類のメモリの犯行ってことだな。」

刃野はそういうと、ゆっくりと立ち上がって体を飲ます。

その後三人は暫く他愛のない話をし、しばらくしてやって来たマッキーから釈放を言い渡され（いやいやだったが）、二人は取調室を後にした。

■　■　■

取り調べから３０分後　風都警察署　入口ホール。

一と暦が歩いていると、近くの待合い席でだるそうにしているちゃんちゃんこにマスクをつけたアカネと対照的に半袖半ズボンの軽快そうな服装の神原が二人を待っていた。

ちなみに羽川はマープルと一緒に勉強中でこられていない。

「あれ…二人とも何やってんですか…？」

一は思わずアカネと神原に問う。

「なに、阿良々木先輩と左乃宮先輩が夜に大変な事があったというのでな。面白そうだから来てみたのだ！」

「夜に大変、と言うところを強調するな！」

「んで…ほんまに大変やったなぁ。なんかされた？」

一はだるそうにしながらその問いに答える。

「はぁ…ただの参考人として呼ばれただけです。」

そう一が答えると、アカネはどうでもよさそうに相槌を打ち…一行

は警察署を後にした。

だが、アカネは相変わらず鼻づまりの濁った声で二人に問う。

「けど…昨日電話してきた依頼人、死んでもうたんやろ？」

「「あぁ。」」

二人はアカネの問いに素っ気なく返す。

「じゃあもうこの件からは手を引くしかないな。特に興味も無いのだろう？」

いつもの調子で神原は二人に言うが、一は強い意志の宿った瞳を向けながらその問いに答える。

「いえ…私はやりますよ。」

「ふむ？だが…」

神原とアカネはその返答に唖然としてしまうが、一はそんな二人をよそに更に続ける。

「目の前で依頼人が殺られてるのです。黙って見てられませんよ…。それに……」

「それに…なんや？」

一はそこまで言いかけた所で突如口を閉じ、一拍置いてアカネの問いに答えた。

「あの車から何か変な感情の様なものを感じまして…なんでしょ、悲しみとか、そう言うのが。」

「…あぁ。一の言うとおりだ…。…あのとき、車から何か…狂気じみた哀しみのようなものを感じた。」

一と暦は昨日の夜のあの黒いＳＵＶの事を思い返しながら神原とアカネに言うが、二人はよく意味が分かっていないようだった。

「…なんやそれ？カ○ズみたいなもんか？」

「ふむ、私はニモが好きだな。あれを見た後、刺身が二、三日食べられなくなってしまったぞ。」

一は、そんなことを言っている二人を無視し、暦と一緒に歩きだす。

「では、ちょっと調べてきます。マープルにも連絡頼みましたよー？」

「うむ、まかせてくれ！」

一と暦は、神原のその言葉を背に、警察署を後にするのだった。

■　■　■

同じ頃　鞍坂探偵事務所　地下ガレージ。

羽川は鼻歌を歌いながらのんびり事務所を掃除していたが、マープルは地下ガレージに閉じこもりうろうろしながら何やら考え込んでいた。

「う～ん…何故バカは風邪を引かないのか…？…コレは予想以上に手強い難問…です。」

マープルは一人そう呟き、再びホワイトボードにペンを走らせ始めた。

■　■　■

風都某所　ウインドクリスタル。

「…はい！！と言うことで、今日はフレッシュなアカネちゃんと神原ちゃんで～す！！」

ファイは楽しそうな表情で言いながら二人を両端に寄せながら携帯電話のカメラを自らに向けシャッターを切ろうとするが…瞬間、後ろから現れた黒鋼が携帯をさっと没収し、パシャリと撮影する。

「あ～。黒様なにするの～。」

ファイは残念そうな表情で携帯をとり返して言うが、すぐにまた笑顔に戻る。

「…あ、でもコレはコレで案外いいかもね～。黒様が撮ったって言えばこれでアクセス数上がっちゃったりし「おい……そんな下らねえことどうでも良いから例の情報はどうした?」ぶ～黒様、ひど～い。ま、バッチリ掴んでおいたけどね。」

黒鋼はファイの言葉に割り込んでそういうが、全く意に介さないファイにため息をつく。

ファイはサムズアップしながら一に笑顔を向けながら言うが、瞬間真剣な表情に変えながら一に言う。

「一君…君を怖がらすつもりはないけど、今回のヤマはかなりヤバいよ?」

だが、一は怯える素振りも見せず、逆にクールな笑みを浮かべ財布から千円札を一枚取り出しカッコつけながらファイに言い放つ。

「…《危険とは常に隣合わせ》。それが…紳士の性(さが)です…」

「くぉるあぁぁあ!!依頼人を居らんのに経費使うなや!!」

その時、傍らに座っていたアカネは叫ぶように言いながら一の手元から千円札を取り上げ、一は取られた千円札を取り返すべく取っ組み合い始める。

「返せこの野郎!!つうかそれは俺の自腹だっつうの!!」

「へっへへ、嫌や～♪うぇっっくし!!」

アカネは意地の悪い笑みを浮かべながらわざとくしゃみし、一と傍

らに座って珈琲を飲んでいた暦は同時にたじろぐ。

「おわっ!?」

「だあぁ!!汚ったね…お前なぁ…!!」

黒鋼は二人が言い争っているのををうんざりした様子でしばらく見つめた後、抹茶ケーキを口に入れ飲み込んだ後、話を聞かせるため、口調を荒げながら言う。

「殺されたその数納って奴だけどよ!!《トゥルース》っていう風都でも有名なストリートギャングのメンバーの一人だ。特に、ギャング共の元締めの桑而って野郎…親父が政財界の大物と裏で繋がってるとかで、そっち系の組織に銃火器の横流ししたり麻薬の密売とかもやってるって噂だ。」

「成る程…。どうもありがとうございました。」

一はそれだけを言うと立ち去ろうとするが、妙に慌てた様子のアカネに呼び止められる。

「ちょ、一君!?まさか行くつもりじゃ!?」

「いや、行かなきゃ何も分からないじゃないですか。」

一は半ばうんざりした様子で返し、更にアカネは一に問う。

「うちは絶ッッ対に反対や!!阿良々木さんからも何か言ってやってや!!」

アカネは一の傍らにいる暦に向き直り言う。

「いや、僕は行くよ。こういうのは人手が必要だろ？」

暦は一に柔らかな笑みを浮かべて言い、その言葉を聞いたとたん、アカネは何も言い返せなくなり、なし崩し的に一達の捜査に同行した。

…ちなみに、それを見た神原が「阿良々木先輩もやっとＢＬに目覚めたか！」と喜んでいたのは余談である。

■　■　■

午後２時　風都某所　トゥルースの経営しているバー。

一達一行が黒鋼達と別れたのち、嫌がるアカネをよそにリーダーの桑而に話を聞くべくここを訪れていた。

「…で、探偵さんがうちに一体何の用だ？」

白い革製のジャケットを着た如何にもガラの悪そうな男ー桑而はダーツを投げながら祐規たちに問う。

「い、いえ！！特に何でもないですわ！な、一君！？」

アカネは引きつった笑みを浮かべながら一と暦に同意を求めようとするが、神原は暦の後ろで侍女のように控え、一と暦はそんな二人

をよそに桑而に歩み寄り訊ねる。

「では、単刀直入に。…貴方方の仲間を殺った黒いＳＵＶについて、知ってることを教えてくれませんか？」

一がそこまで言った所で、入り口に控えていたヒョウ柄のジャケットを着た小柄な男――押本が何か思い立った様子で桑而に歩み寄り問う。

「黒い…ＳＵＶ？そいつが数納を…桑而さん、まさかあの雨のがはぁっ！？」

押本がそこまで言いかけた所で桑而が一瞬ビクリと動揺したかと思うと、突然立ち上がり勢いよく押本を殴り飛ばし、さらに腹を蹴り声を荒げながら押本に言う。

「その事は二度と口にすんなっつッたろうが！！」

「す…すいません…！！」

桑而に腹を蹴られた押本は苦しげに息をしながら桑而に誤り、それを聞いた暦は桑而に問う。

「さっきの反応…何か知っているようだけど？」

「……。」

それを聞いた桑而はおもむろに二人に向き直り、上着から拳銃を取り出しスライドを引っ張り、銃口を二人に突きつける。

「「おっと。」」

「話は終わりだ…！！風穴開けられたくなかったらとっとと俺の目の前から消え失せろ！！」

暦と一は銃口を突きつけられても臆する様子も見せず黙って両手を上げるが、桑而はそんな二人が気に入らないのか、更に脅すように言う。

「ひぃやぁぁぁぁ！！お邪魔しましたぁぁぁ！！」

アカネは悲鳴混じりに叫びながら三人に慌てて駆け寄るとその手を引っ張り一目散にその場から走り去っていった。

「…いきなり何するんですか、貴女は…」

「ちゃんと調べてんのに、邪魔するなよ…。」

二人は突然店に連れ出されたことに不思議そうにしてアカネに問うが、アカネは相変わらず怯えながら二人に反論する。

「アンタ等バカか！？あたしが居なかったらアンタ等今頃体中ハチの巣にされて海に棄てられてたかもしれないやん！？」

「…鞭でやってもらえれば私は喜ぶがな！」

と、二人がそんなことを言っていると…一は入り口から誰かが近付いて来るのに気づき、神原とアカネの口を塞ぎながら暦とともに近くの物陰に隠れ息を潜める。

「あ〜…車確認して来いったってよ…」

黒いパーカーにスキンヘッドの男――沖山が不満そうに漏らすが、沖山のその不満に押本が若干不満そうな表情で武田に返す。

「けど桑而さんには逆らえないっすよ……」

二人は桑而に対する不満をタラタラ言いながら歩き去っていき、しばらく立って四人は物陰から姿を現す。

「…行ったか。神原、僕は左乃宮とあの二人を尾行する。お前達はここで桑而が現れるのを待っててくれ」

「うむ、まかせてくれ！」

「…ってちょっと！？」

神原がいい返事をすると、アカネは思わず声を上げてしまうが、そうこうしてる間に二人はさっさと二人を追うべく歩き去っていき、手を振る神原と呆然とするアカネだけがその場に取り残された。

そして…尾行開始から4分後　近くの立体駐車場。

二人は近くの柱の影に隠れ、先を進む押本と沖山の様子をうかがう。

「その辺の車盗んでいきゃあ、廃車置き場なんてすぐ着くさ。」

「そ、そっすね！！」

二人がそう不謹慎な雑談をしていると…向こうから車のエンジン音とヘビーメタルが聞こえ、坂の向こうから黒いＳＵＶが姿を現し、猛スピードでその二人に向かって突っ込んできた。

「「！！で、出たぁ！！うわぁぁぁぁ！！」」

二人は同時に叫びながら慌てて逃げ出し、沖山は何とか横に逃げるが、黒いＳＵＶから毒々しい緑色の光が放つとボンネットからあのドロドロと溶けた昆虫とも人間ともつかない半透明の異形が現れ、逃げ遅れた押本をすり抜けドリフトしながら急停車した。

「がっ！？…うあぁぁぁぁぁ！！」

黒いＳＵＶにすり抜けられた押本は苦悶に満ちた表情で悲鳴を上げると同時に体が毒々しい紫色に染まり、押本はそのまま地に倒れ伏し物言わぬ死体となった。

「やはりドーパントの仕業…！！行くぞマープル！！暦、準備は出来てますよね！？」

「あぁ！！行くぞ左乃宮！」

そう言うと、一はドゥーツドライバーを、暦はロストドライバーを腹部に装着した瞬間、マープルの声が一の脳内に響き渡る。

「あ！いーちゃん、ようやく謎が解明できましたよ！」

「…はい？」

「何やってんだ？！」

突然のその言葉に一が思わず声を上げてしまうが、黒いＳＵＶは再びアクセルをふかし猛スピードで今度は一に向け突っ込み、暦は横跳びでかわすが、一は黒いＳＵＶに追われる形となった。

「しまった!!おい、左乃宮っ!!」

暦は思わず叫びながらＳＵＶの後を追うが、そんな二人をよそにマープルは嬉しそうな声色で一に語りかける。

「バカが風邪を引かないのは、色々思い悩まない結果ストレスが溜まらず、風邪に対する免疫が上がるからって。ほかにも色々検索してみたんだけど、これが最も現実的で説得力があるんです♪」

「ンな事今どうだって良いんですよー!!うおわっ!?」

一は壁際に追い詰められながらマープルに言うが、身を投げ出しボンネットに乗り上げルーフによじ登り荷台を掴み体を固定する。

ＳＵＶはバックし再び沖山を追いかけはじめ、暦は全力疾走でＳＵＶの後を追いかける。

だがマープルは相変わらずのんびりした様子で話を続ける。

「でもですね?ここでまた新たな謎が出てきました。バカは何故高いところが好きな「お、落ちる!!落ちるーー!!」え?落ちる?いーちゃん、まさかバカなの?」

「高いところにいるかどうかを先に聞きなさい!」

と、一がそう言いながらルーフから身を乗り出し運転席を覗き込むと…そこには、一人の少年がいた。

「！！」

だが、次の瞬間その少年がこちらに気づいたかと思うと、すぐに鈍い黒色の【C】のメモリを取り出す。

しかし少年はメモリを挿す前に、ハンドルを荒々しく操作しながら車を蛇行運転させ、一を振り落とそうとする。

「うわああっ！！」

そして、車が柱に突っ込みそれを破壊した衝撃で一は荷台から手を滑らせてしまい地面に叩きつけられてしまった。

数瞬遅れて暦が駆け寄り慌てた表情で一を抱き起こす。

「左乃宮、大丈夫か！？」

「痛ッ…！！はい、大丈夫です…」

一はそう返すと、上着からパピヨンショットとギジメモリを取り出し、ギジメモリをパピヨンショットを装填し、電子音声とともにライブモードに変形させる。

－ＰＡＰＩＬＬＯＮ－

「行け！！」

―Ａｌｌ　ｌｉｇｈｔ！！―

一が右手を突き出しパピヨンショットにそう言うとパピヨンショットは電子音声で返し、手元から飛び立っていく。

パピヨンショットは車に並行しながら飛び、フラッシュを焚きながらドーパントの写真を数枚撮影し、再び手元に戻る。

一はパピヨンショットを上着のポケットにしまい込み、苛ついた様子でマープルと暦に言う。

「その話は帰ってからゆっくり聞きますので！暦、行くぞ！」

「あぁ！！」

暦はそう返すと、上着のポケットから一本の赤黒いメモリを取り出し、一はポイズンメモリを取り出し同時にスイッチを押す。

―ＩＭＭＯＲＴＡＬ！―

―ＰＯＩＳＯＮ！―

「…ふぅ、仕方ないですねー。」

ため息をついてそう言うと、マープルはアッシュメモリを取り出し、スイッチを押す。

―ＡＳＨ！―

そして、離れた場所で三人は同時にメモリを構え、同時に言う。

「「「変身！！」」」

マープルがメモリをドライバーの右スロットに装填し、メモリは小さな光とともに消え、一のドライバーの右スロットに転送される。

一はそれを押し込み、ドライバーの左スロットに自分の持っていたメモリを装填し操作する。

暦は自分のロストドライバーにメモリを挿入し、そのまま操作する。

―ＡＳＨ！ＰＯＩＳＯＮ！―

―ＩＭＭＯＲＴＡＬ！―

一のドライバーから電子音声がとともに専用の変身メロディが鳴り、一はドゥーツに変身し、暦も変身する。

暦のドライバーからは無数の蝙蝠の羽ばたきの様なメロディが聞こえ、その姿は一瞬で変わる。

それは黒と金色で彩られたコウモリの様。両腕、両足には悪魔の翼の様な装飾が付き、手には一本の逆十字を模したコウモリの装飾付きのステッキ…イモータルスタッフが。

その仮面部分には逆十字型の金色の眼がついており、そこから一瞬金と朱が混じった光が溢れ…すぐに元に戻る。

これが、《不死の記憶》を持つイモータルメモリを使い、阿良々木暦が変身した姿…仮面ライダーイモータルである。

二人は変身完了すると、すぐさま車へと走り出した…！

## 復讐のⅠ／襲撃車

■　■　■

沖山は悲鳴を上げる自らの体に鞭打ちながら車から逃げていたが、ついに体が疲労に耐えきれなくなり、さらにそこは行き止まりだった。

「ッ……！？」

そこに車が現れ、沖山を脅すようにエンジンをふかす。

怯える沖山をよそに車のドーパントは歪んだ笑みを浮かべると、アクセルを踏み込み車を走らせるが…

その瞬間吸血鬼の様な鎧を着た戦士――イモータルと灰色と紫の身体を持った戦士――ドゥーツが現れ、車を押しとどめた。

『大丈夫か！？ここから早く逃げろ！！』

イモータルが高橋に向き直りそう言った瞬間…黒い身体を持った怪人――ポーン・ドーパントが躍り出、ドゥーツ達を車から引き離す。

『なんだ…お前っ！？』

イモータルはポーンに問うが、ポーンは有無を言わさずに二人に襲いかかり、ドゥーツとイモータルは高くジャンプし屋上に逃げ、ポーンも高くジャンプし二人の後を追う。

「今のうちだ…っ！！」

沖山は車がドゥーツ達に気にとられている隙に近くの非常用階段の扉を開け、そこに逃げ込む。

「……」

だが、黒いＳＵＶに乗っていた少年はそれを見て、一人自分の首筋にメモリを差し込む。

すると、少年の体は黒い排気ガスの様な物に包まれ…次の瞬間黒いシンプルな機械鎧を着、体の至る所にタイヤや車の装飾がついたドーパントと化し、また追いかけ始めた。

『またテメェか！！何度も何度も邪魔しやがって！！』

「邪魔をしているのは君らの方だろう？あのドーパントは私にとって貴重なサンプルでね…。邪魔しないでもらおうかっ！！」

ドゥーツは忌々ししげにポーンに言うが、ポーンは剣の刃を軽く撫でながらドゥーツ達に言うと、剣を構え再び襲いかかってくる。

ドゥーツも慌てて戦闘態勢に入り、イモータルもステッキを抜いて戦闘態勢に入る。

『サンプル！？何を言ってんだ！！お前こそ僕達の邪魔をするな！！』

イモータルは苛ついた声でポーンに言い、ドゥーツとともに連携の取れた動きでナスカに攻撃を仕掛ける。

『ッ…！』

「ふふん…！」

…しかし、ポーンはまるでダンスのステップを踏むかのような動きで簡単によけきると自分に有利なペースを保ち始め、ドゥーツは再び押され始める。

そのころ、沖山は息を切らしながら何とか非常階段を降りきり息を整えるが…車はフェンスを破りながら宙に躍り出着地すると、再び緑色の光を放ち、半透明の異形がボンネットに現れ、沖山をすり抜ける。

「ぐッ！？うぁぁ…！！」

車にすり抜けられた沖山が苦悶の表情を浮かべると、体が一瞬紫色に変色し、うめき声を上げるとそのまま倒れ込んだ。

そしてドゥーツ達はポーンの攻撃に防戦一方になるが、ポーンの斬撃をバックステップでかわす。

『今日こそ決着つけてやる…！！行くぞ、暦！！』

『あぁ！さっさとケリをつけるぞ！！』

二人はそう言いながらそれぞれのドライバーの左スロットからメモリを引き抜き、代わりにベルト右側部のマキシマムスロットに装填する。

―ＰＯＩＳＯＮ！Ｍａｘｉｍｕｍ Ｄｒｉｖｅ！！―

―ＩＭＭＯＲＴＡＬ！Ｍａｘｉｍｕｍ Ｄｒｉｖｅ！！―

同時にマキシマムスロットから電子音声が発せられ、ドゥーツは灰を孕んだ風とゆっくりと宙に浮き始め、イモータルはステッキを逆手に持ち、低く構える。

そして、ドゥーツが最高点に達すると、一とマープルは同時に技の名前を叫ぶ。

『『ポイズン・エクストリーム！！』』

それを同時に、イモータルもステッキを回転させ、技の名前を叫ぶ。

『スネークバインディング！！』

ドゥーツは体を左右半分に分かちポーンに突っ込み、イモータルはステッキを細かく振り、そこから蛇の様な鞭の一撃を叩きこもうとする…が、ポーンは慌てた素振りも見せず首に巻いた二本のマフラーの一本を触手のように操り、技が迫るより早くステッキを拘束し、数瞬遅れて残りの一本がドゥーツの体を無理やりくっつけ、空中で拘束する。

『ッ…！？離しやがれ！！』

『くそっ…！！』

だが当然、ポーンはその言葉に耳を貸さず、マフラーはドゥーツとイモータルをお互いにぶつけさせ、地面に投げ捨てる。

『がっ…！！』

『ぐッ！？』

そしてポーンは剣を構え、足元からチェス盤の様な魔法人を生み出して、そこから白と黒の自分の分身体を無数に呼び出す。

『チッ、またこいつらか…！？』

『くそっ…とりあえず、こいつらを片付けるぞ！』

ドゥーツとイモータルがそう言うのを聞きながら、ポーンは一人呟く。

「ガイアメモリの想定外の特性……これは間違いなく私にとってのチャンスだ…。ククク…」

ポーンはそういうと、その場を分身体達に任せ、一人その姿を消した…。

■　■　■

２０分後　鞍坂探偵事務所　地下ガレージ

一達が戦った２０分後。一達は難なく分身態を倒したが、その直後にマープルに呼び出され、一度事務所に戻っていた。

「さっきパピヨンショットが撮影したこの人物の特定が完了しました。名前は桂参治、１８歳。…で、彼について、とても気になる情報が見つかりました。」

「…どういうことだ？」

「ふむ…詳しい説明をお願いします。」

暦と一は怪訝そうな表情でマープルに問い、マープルはそれに頷き、さらに続ける。

「二か月前、お姉さんの桂言葉さんが轢き逃げ事故に遭っているんです。」

「何だって…！？」

「ということは…まさかその轢き逃げした犯人というのが…」

マープルのその言葉に二人は驚いた表情を見せ、マープルはその言葉に答え、さらに続ける。

「はい…恐らくですけど、あの四人組の仕業でしょう…。…桂参治は、現場から逃げ去る黒いＳＵＶと彼らの顔を覚えていた……でも、警察は証拠不十分で起訴に踏み切れず逮捕できなかったんです。」

「成る程……それで桂くんは自分でドーパントになってあいつらに復讐してるっていう訳か…。…向こうと同じ黒い車を使って……」

暦は顎に手を起きながらしばし考え込みながら呟く。

「…彼のお姉さんは今も意識不明の状態が続いているみたいです。」

「成る程…早速当たってみます。」

マープルがそう言った所で一がそう言うと、一は暦を連れ地下ガレージを後にした。

「…じゃ、今のうちにメモリの特定しますかね。」

マープルがそう言うと、奥からひょこっと羽川が現れる。

「あ、マープルさん。頼まれてた桂言葉さんの情報、出来るだけ調べましたよ？」

「あ、わざわざどうもありがとうございます♪」

マープルは、羽川からスクラップブックを受け取り、パラパラ読み始める。

…だが、その表情はすぐに暗い物に代わる。

「…？どうしました？」

「いえ…あの、これって…。」

羽川が不思議そうにマープルに駆け寄ると、マープルはスクラップブックのあるページの一部を指差す…。

■　■　■

午後４時　風都某所　どこかの交差点

人気のない交差点で、一の母校の堀鍔学園の男子制服を着た青年がガードレールに座り込み一人呟く。

「姉さん…あと一人だ…」

青年――桂参治がそう呟いた途端、バイクのエンジン音とともに二台のバイクが彼の近くに停まり、その主――一と暦はメットを外し、参治に訊ねる。

「桂参治ですね？私は左乃宮一。私立探偵をやっております。」

「僕は阿良々木暦。ただの専門家だ。僕たちは、君を止めに来た。」

「ッ！？俺を…止める！？」

暦のその言葉を聞いたとたん、桂の表情が驚きの物に変わり、そんな参治をよそに一は参治に訊ねる。

「黒い車…君がドーパントなんでしょう？…復讐なんかもう止しなさい。…。…君のお姉さんだってそんなこと望んでいないはずでしょう。」

「…アンタらなんかに…何が分かるって言うんだよ……！！」

参治は二人に憎悪に溢れた表情で言うと、視線をどこか一点に向け、

二ヶ月前のあの事故の事を思い返す。

「…奴らだけは許さない…！！どんな事があろうとも…！！」

参治がそう言った途端、突然走り始め二人から逃げ出そうとする。

「ッ！？おい待て！！」

二人は慌てて参治を追いかけようとするが、近くからバスがクラクションを鳴らしながら近づいてくるのが見え、一と暦は僅かに足止めされてしまう。

その隙に、参治は二人から逃れるべくバスに乗り込もうとするが、バスから降りてきた若い男にぶつかってしまう。

「うぉぉ！？…って参治くん！！」

「あ…伊藤さん！！あいつ等に追いかけ回されてるんです！！助けてください！！」

参治は伊藤と呼ばれた男に二人を止めるように頼むと一目散にバスに乗り込み、伊藤は慌てて一と暦につかみかかり足止めする。

そうこうしている間にバスの扉は閉じ、走り去っていった。

そして、伊藤は思い立ったように二人に問う。

「そうか…！さてはお前ら、あの轢き逃げ犯の仲間だな！？」

「「はぁ！？」」

二人はその問いに思わず素っ頓狂な声を上げてしまい……その誤解を解いたのはそれから２０分後の事だった。

「伊藤誠さん…ですか。お仕事は画家をされてるんですね。」

あれから誤解を解いた後、一達と伊藤は互いに名刺を交換し、一は伊藤に問い、伊藤は少し申し訳なさげに笑いながら答える。

「えぇ、売れない貧乏画家です。仕事といっても、たまに女子校や大学で美術を教えてる程度で…。…言葉とは…彼女が働いている学生食堂で知り合いました…」

「…それで婚約をされたんですか？」

暦が伊藤に訊ねると、伊藤は少し辛そうな表情を浮かべながら続ける。

「えぇ…。…三ヶ月後に式を挙げる予定でした…。彼女と二人で選んだ教会で…。参治くんもその日をとても楽しみにしてくれた……それなのに……」

「…彼は犯人たちを心の底から憎んでいたんですね……」

一は一人呟き、伊藤は相変わらずの辛そうな表情でそれに返す。

「当たり前です。…幼い頃に両親を病で亡くした参治くんにとって、言葉はたった一人の肉親でしたから…。…あ、もうこんな時間か…。では、そろそろ失礼します。」

伊藤は何気なく腕時計の時間を見ると、二人に一礼しながら歩き去っていき、一と暦も軽く一礼しながら伊藤を見送った。

すると、一のジャケットのポケットに入れていたシケードフォンの着信音が鳴り、一はシケードフォンを取り出し通話に応じる。

「もしもし?」

「うえっくし!!!」

「だああ!!…何だ、アカネさんですか。」

「おい!!何だって言うこたぁないやろ?」

「はいはいすいませんでした。それで?どうかしたんですか?」

「何や、随分ご挨拶なやっちゃなぁ…アイツを見張ってろ言うからあの店からずっと神原さんと二人で尾行してたんよ…。そしたらなぁ…何やもの凄くヤバい感じになっとるんや…」

アカネはそこまで言い、二人は窓から顔を出し、桑而のいる倉庫を覗き込む。

「来るなら来いやこのクソガキがァァ!!…返り討ちにしてやんよ……」

桑而は傍らから軍用の重機関銃を取り出し、安全装置を外し機関銃を構え叫ぶように言い放つ。

『うわぁ…ヤバいやん…』

アカネはその様子を見ながら思わず呟く。

すると、どこからかヘビーメタル調の音楽が聞こえ、近くの壁を破りながらあの黒いＳＵＶが現れ、桑而と向き合うようにドリフトしながら急停車する。

その全部ウィンドウからは、中にいる黒い姿のドーパントも見える。

「来やがったなこの野郎…！！うぉおぉおお！！」

桑而は叫びながら重機関銃の引き金を引くと、銃口から威勢のいいマズルフラッシュと銃声を放ちながら毎分６５００発の特殊徹甲弾の嵐が黒いＳＵＶに向け放たれる。

そして、その流れ弾がアカネと神原の頬を掠め、二人は悲鳴を上げながら慌てて頭を引っ込める。

「うわぁぁぁぁ！！うちこんなん聞いてへんでぇぇ！」

「はっはっは、まずい、本格的に死にそうだな！」

「ッ！？待ってろ、すぐ行きます！！」

一はシケードフォンの通話を切りポケットにしまい込み、近くでその会話を聞いていた暦は一の後を追い、二人はそれぞれのバイクに跨りエンジンをスタートさせ、二人の元へと走らせた。

■　■　■

その頃　廃工場にて。

不意に銃撃が止み、アカネと神原は恐る恐る顔を上げ、再び窓から桑而とＳＵＶを覗き込む。

どうやら三原は無事なようで、一方のＳＵＶには車体のいたる所におびただしい数の弾痕が開けられ、前部ウインドウにいたってはほぼガラスが割れ無くなっており、ボンネットからは白い煙が吹き出ていた。

桑而はようやく息の根を止めたと思い込み安堵しながらＳＵＶに向け言い放つ。

「けっ…ざまぁ見やがれこの野郎……」

「…うぉおぁあぁあぁぁ…！！」

だが、運転席に座っていた黒いドーパントは叫び声を上げると再びヘビーメタルが鳴り響き、エンジンをふかしながら再び猛スピードで桑而に突っ込んできた。

「くっ！！この死にぞこないがぁぁ！！」

桑而はそう叫びながら慌てて重機関銃を構え再び引き金を引き、特殊徹甲弾の嵐をＳＵＶに向け叩き込むが、ＳＵＶはそれに意を解することなく桑而の乗っていた荷台に突っ込み、桑而を転倒させる。

「ひっ…！ヒィィィィィィィィ！」

桑而は機関銃を捨て、慌ててその場から逃げ出すが、ＳＵＶは逃がすつもりなど毛頭なく、再び追いかけ始めた。

■　■　■

同時刻　交差点

一と暦は片手でそれぞれのドライバーを腹部に装着し、一はマープルに言うが、瞬間マープルの声が脳内に響き、二人は念話を始める。

「マープル！」

「…ねぇ、いーちゃん。一つ…聞いてもいいですか？」

「…どうしました？」

「桑而って男は…私達が助ける価値のある人なんでしょうか…？」

「…どういう意味です？」

「…なんだ、どうした？」

マープルは一に問い、それを聞いた一と暦はマープルの言葉の意味が分からず問い返し、しばしの間を置いてマープルはその問いに答えた。

「だって…その男はこの街にとって有害以外の何者でもない存在で、いーちゃんがよく言う《悪いヤツ》なんですよ？それならあの子の事情を察して、このまま復讐を遂げさせるっていう選択肢もいいんじゃないんですか…？」

「…ふん。それもいいかもしれませんね。」

「でしょ？」

「…おい、左乃宮？」

一がそう言うと、暦は不思議そうな顔で一を見る。

「ですが、反対です。どんな人間であろうと、この町の人間は殺させません。」

「…そうですかぁ？」

一の返答を聞いた暦は声無く安堵するが、マープルだけは若干不機嫌そうだった。

そんなマープルに、暦はその言葉に相槌を打つように言う。

「どんな理由や事情があっても人が人を殺して良いと言うことはないよ。それに…仮にあいつが復讐を成し遂げたとしても…それだと後悔しか残らない。」

「…本当に甘いですねぇ…ま、いいですよ。いーちゃんと一緒ならどこまでも墜ちていくって決めましたから…」

そして、マープルはアッシュメモリを取り出し、スイッチを押す。

―ＡＳＨ！―

程なくして、一のドライバーの右スロットにアッシュメモリが小さな光と共に転送され、一はそれを押し込み、片手でポケットからメモリを取り出し、ドライバーの左スロットに装填し操作する。

―ＡＳＨ！ＰＯＩＳＯＮ！―

一のドライバーから電子音声とともにメモリの変身メロディが鳴り、一の体を僅かな灰を孕んだ風とともに紫の光の欠片が包み込んでいき、一はドゥーツに変身した。

「…見せつけるなよな…全く。…変身。」

―ＩＭＭＯＲＴＡＬ！―

暦も、ロストドライバーにメモリを挿入、操作すると、電子音斉と共にメモリの変身メロディが鳴り、暦の体は赤黒い光と満月の様な黄金色の光に包まれ、次の瞬間、仮面ライダーイモータルに変身する。

二人は変身すると、すぐさま自身のマシン、ジェントルーダーとハートアンダーに乗り込み、廃工場へと急ぐ…。

１０分後　廃工場

黒いＳＵＶは桑而の周りをぐるぐると回りながら脅し、桑而は怯えながら弁明する。

「なぁ聞いてくれ！！悪いのはあの女の方だ！！ボーっと突っ立ってたからあんな事になったんだよ！！俺は悪くないッ！！」

桑而は必死に弁明するも、参治は聞き耳を持たず、ＳＵＶをバックさせ参治と距離を取る。

「や…止めろ…止めろ！！やめてくれぇぇぇぇ！！」

桑而はついに恐怖に耐えかね涙ながらに叫びながら命乞いをするが、参治は歪んだ笑みを浮かべるとアクセルを思い切り踏み込みＳＵＶを思い切り走らせる。

すると、車のボンネットが緑色の光を放ち、再び半透明の異形が姿を現して車はなおも参治に向け突っ込む。

と、刹那ドゥーツとイモータルがバイクを駆り高く空を飛びながら現れ、ＳＵＶに着地すると異形は水しぶきのように飛び散り、二人はバイクをドリフトさせながら急停車し、ドゥーツは言う。

『…どうも。お待たせしましたね。』

「おおお！！真打登場ｋｔｋｒ！！」

アカネはその姿を見るなり嬉々とした表情で声を上げる。

「……どうして…どうして俺の邪魔をするんだ！！」

参治はドゥーツに視線を戻し叫ぶように問い、その問いにイモータルが答える。

『大切な人を失った……その気持ちは僕みたいなのにはまだ分からない。けど…それが、やらせちゃいけないことだってくらいは分かるんだ。』

「ならお前等から始末してやる！！」

参治は叫ぶように言うと、再びアクセルを踏み込み、車を走らせる。

イモータルはイモータラーのアクセルをふかしながら、ドゥーツに言う。

『…合わせていくぞ。』

『了解です。』

ドゥーツが返事をするが早く、イモータルはＳＵＶへと向かう。

真っ直ぐ直線にＳＵＶへとハートアンダーで駆けるその姿に、参治は一瞬驚くが…すぐにＳＵＶもアクセルを吹かす。

二台のマシンが激突しそうになる…が、イモータルはベルトからメモリを抜き、バイクに差し込む。

―ＩＭＭＯＲＴＡＬ！―

『…ルーザースネイル。』

すると、一瞬いもーたるの姿がバイクごとぶれた様に見えると…次の瞬間、まるで煙の様に姿を消す。

「ッ…！？」

それをみた参治は動揺し、中途半端にブレーキを踏む…だが。

―ＡＳＨ！ＳＰＩＲＩＴ！―

『…いらっしゃい。』

その先には、ジェントルーダーに乗り、手にはスピリットバンカーを構えたドゥーツがいた。

ＳＵＶは、慌てて泊まろうとするが…もちろん、間に合うはずもない。

『オラァァッ！！！』

ドゥーツは、スピリットバンカーを思い切り振りかぶり…一気にＳＵＶに叩きつける。

その衝撃にＳＵＶはバランスを崩し、何度か横転した後に真横に倒れ…そのまま動かなくなった。

『うっし、大成功。』

イモータルは、それを見て一にサムズアップをし、ドゥーツもそれを返す。

桑而はそれを見ると慌てて立ち上がり、一目散に倉庫の外へ逃げ出す。

「ぐっ…うぅ…」

参治は車が横転した際に何度も体を叩きつけられ体中に打撲を負っていたが命に別状はない様子だ。

すると、その目に怯えながら逃げ出す桑而の姿が目に入った。

「ウガアァアァァ！！逃ガスモノカァァァ！！」

参治が叫びながら目から緑色の妖しい光を放つと、ボンネットに緑色の光とともに異形が現れ、車体をある程度まで持ち上げるとその姿を消す。

だが、次の瞬間ＳＵＶ全体が緑色に光り、まるで生き物の様に動き出す。

そして参治はアクセルを踏み込み、再び桑而を追うべく走り出した。

『ッ…まだやる気か、アイツ！』

イモータルは思わず声をあげ、ドゥーツに向かって言う。

『左乃宮、どうする？！』

『心配は要りませんよ。』

一はそう返すとシケードフォンを取り出し、リボルギャリーの出撃コードを入力した。

■　■　■

廃工場　外。

何とか倉庫の外に逃げ延びた桑而だったが、モンスターマシンと化したＳＵＶが現れ、桑而を追いかけようとする。

だが次の瞬間リボルギャリーが現れ、ＳＵＶはリボルギャリーに弾き飛ばされ倉庫の壁に激突してしまう。

「な、なんだぁ！？」

桑而が間抜けにもそんな声をあげていると、リボルギャリーはＳＵＶを弾き飛ばした後、ドリフトしながら急停車すると、リボルギャリーは赤色灯を回転させながらシールドを開き、タラップを下ろし簡易型のプラットフォームを展開する。

ドゥーツはジェントルーダーを操ってタラップを登り、後部ユニットを後ろにつけると、ジェントルーダーが後退しルーダーユニットが取り外され、後部のリボルバーハンガーが回転しルーダーユニットの代わりにタービュラーユニットが装着され、ウイングを展開してジェントタービュラーとなった。

参治は体に襲いかかる痛みに耐えながら再びアクセルを踏み込み、緑色の光とともにボンネットに異形を現しながらリボルギャリーへ

と向かう。

ドゥーツとイモータルはボンネットの異形を見ながら不安そうに呟く。

『あの状態になったとき…アイツはすり抜けた相手をウイルスに感染させる…。このまま突っ込めば僕たちもあれの餌食に……』

『大丈夫、なんとかなりますって。』

ドゥーツの右目を明滅させながら一はイモータルに諭すように言うが、イモータルは自信たっぷりに言う一に若干引っかかりを覚えながら問う。

『左乃宮、何故そう言い切れる?』

その問いに、一は当然だというように答える。

『マープルが大丈夫、と言いましたからね…私はそれを信じますよ。』

『……そうか。なら、僕はそれを信じたお前を信じよう。』

ドゥーツはその言葉を聞くと、ジェントタービュラーのアクセルを思い切りふかし上昇させる。

そしてジェントタービュラーの高度が最高点に達すると、ドゥーツはマジシャンメモリを取り出しスイッチを押す。

―ＭＡＧＩＣＩＡＮ！―

メモリから電子音声が発せられ、ドゥーツはドライバーの右スロットからメモリを引き抜き、代わりにマジシャンを装填し操作する。

―ＭＡＧＩＣＩＡＮ！ＳＰＩＲＩＴ！―

ドライバーから電子音声とともにマジシャンメモリの変身メロディが鳴るとドゥーツの右半身が鈍い黒色に変わり、マジシャンスピリットとなった。

「うおぉおぉおぉ！！」

参治は叫びながらアクセルを踏み込みさらにスピードを上げながらリボルギャリーへ突っ込もうとする。

だが、それよりも早くドゥーツはメモリをバンカーへ挿入する。

―ＭＡＧＩＣＩＡＮ！Ｍａｘｉｍｕｍ Ｄｒｉｖｅ！！―

そして、ドゥーツのマキシマムドライブを見ると、イモータルも自身のメモリをマキシマムスロットに挿入する。

スピリットバンカーから電子音声が発せられ、槌部分の両端とジェントタービュラーが炎を纏い、ドゥーツはジェントタービュラーをＳＵＶ目掛けて突っ込ませながら技の名を叫ぶ。

『『マジシャンズプロージョン…！！』』

ドゥーツはすれ違いざまにスピリットバンカーをＳＵＶに叩きつけると、車は炎上爆発し、参治はその衝撃で外に投げ出されたが、目

立った外傷はなかった。
更にその爆発炎上した車めがけて、イモータルは跳ぶ。
―ＩＭＭＯＲＴＡＬ！Ｍａｘｉｍｕｍ Ｄｒｉｖｅ！！―
『グラビティシザース…！！』
イモータルの右腕の装甲が開き、鉤爪の様になると、車を中心にして一瞬空間がひずむ様な音が響き…次の瞬間、ボンという音を立てて車は燃えたまま一枚の鉄板と化す。
ドゥーツはジェントタージュラーから飛び降り、マープルの意志がドゥーツの右目を明滅させながら言う。
『ドーパントを形成しているのがウィルスなら高熱や低温に弱い…その可能性に賭けてみました♪』
『あぁ、それでマジシャンですか…。助かりました。』
『え！？そ、それほどでもないです…。私はただ教えただけで…』
『…リア充破裂しろ。…一緒に圧死させたもは僕なのにな…』
暦が心底憎らしそうに言うと、近くに隠れていた宮透が現れ、倒れた斗宮を見ながら言う。
「はっはは、ざまぁ見ろこの死にぞこないが！！ようやくくたばったか！！」

桑而は倒れた参治を一瞥するとドゥーツに向き直り、爽笑を浮かべながらドゥーツに礼を述べる。

「おかげで助かったぜ！！ありがとな！！誰だか知んねえけどさ…」

すると、近くからアカネと神原が現れ、アカネが携帯用ハリセンで桑而の頭を思い切り叩き、神原はうずくまった宮透に軽く蹴りを入れ、二人は一瞬桑而を睨みつけた後二人のもとに歩み寄る。

「はぁ…結局、何だかんだ言って助けるのだな。」

『…しょうがないでしょう。こういう性分なんです。』

神原は溜め息混じりにドゥーツに言い、ドゥーツはその言葉に短く答え、一同は倒れた参治のそばに歩み寄るが、そこでマープルがドゥーツの右目を明滅させながら思わず口にする。

『あれ？ガイアメモリが……？』

『え？』

暦はマープルの気付いた疑問に対し問う。

暦がマープルが見た方を見ると、一つの黒いひび割れたメモリが落ちていた。…だが。

―ｃＡｒ…！―

メモリからひどく濁った音声が流れると、メモリはパキンと破裂する。

『このメモリ、ウィルスなんて操れない……』

「えぇ！？って事は！？」

アカネもあるはずのない事態に思わず声を上げてしまう。

『…ウィルスで殺すドーパントに変身していたのは参治くんじゃなかった……？』

『じゃ、誰が犯人だよ？』

ドゥーツの右目を明滅させながらマープルが呟き、イモータルは顎に手を置き首をかしげて呟く。

―Ｓｉｉｉｉｉｉｉ…！！―

瞬間、どこからか甲高く不気味な鳴き声が聞こえ、ドゥーツは辺りを見回す。

『お…おい！あそこ！！』

暦が、焦る様な声で指を指した場所を見ると、そこにドロドロと体中が腐り、まるで人間と害虫が混じった様な姿をしたを持った怪人――インセクション・ドーパントが逆さまにぶら下がりながらこちらを見ていた。

「ど…どど、ドーパントぉぉ！！」

アカネはインセクション・ドーパントを見るなり悲鳴混じりに言い、

慌ててドゥーツの後ろに隠れた。

―Ｐｉｇｙａａａａａａａａａａａａａａａ！！！―

インセクション・ドーパントはただ不気味に甲高い鳴き声を上げながらこちらを見つめていた……。

■　■　■

インセクション・ドーパントは口を触手のように突然伸ばし、桑而に絡みつき吊し上げる。

『ッ！？しまった！！』

イモータルが声を上げるがすでに遅く、インセクションの体が一瞬緑色に変わると、桑而が目を見開き苦悶の表情を浮かべる。

「か…は…っ…！！」

桑而は苦しげに呻くとそのまま動かなくなり、インセクションは動かなくなった桑而を投げ捨てると二人に向き直る。

『チッ…！あのヤロ…！』

『逃がすか！！』

ドゥーツは一の声で小さく毒づいてドリームメモリを取り出し、スイッチを押す。

―ＤＲＥＡＭ！―

メモリから電子音声が発せられ、ドゥーツはドライバーの左スロットからメモリを引き抜き、代わりにドリームメモリを装填してドラ

イバーを操作する。

―ＤＲＥＡＭ！ＳＰＩＲＩＴ！―

ドライバーから電子音声と共に専用の変身メロディが鳴り、ドゥーツはドリームスピリットに変身し、追う。

『このやろ……っ！！』

『……！』

ドゥーツとイモータルはインセクションに攻撃を仕掛けようとするが、一瞬躊躇し動きを止めてしまう。

インセクションはその僅かな隙を見逃さず、肩にある二本の触手を伸ばして二人に攻撃を仕掛ける。

『まずっ…！！がっ！！』

ドゥーツは一瞬躊躇したせいで対応に遅れ、その攻撃を上手く捌ききれず、吹き飛ばされてしまう。

インセクションはドゥーツとイモータルを吹き飛ばすと、緑色の光を放つと体を液状化させ、その場から飛び去っていった。

「もぉ～！！逃げられてもうたやないかぁ～！！」

アカネは地団太を踏みながら悔しそうな表情で言い、二人はダメージの残る体に鞭打ちながら立ち上がるが…既にインセクションはその場から逃げ去った後だった。

そんな中、マープルがドゥーツの右目を明滅させながら怪訝そうに二人に訊ねる。

『いーちゃん、暦さん…動きが鈍かったけど…一体どうしちゃったんですか？』

二人はドライバーを操作すると僅かな旋風と共に砕け散り元の姿に戻った後、一はしばしの間を置いてその問いに答えた。

「…またあの哀しみを感じました…。あのドーパントから……」

「…僕には、まだあのドーパントが泣いているとしか思えないんだ…」

そして、それに相槌を打つように暦はマープルの問いに答えたが、マープルはただ黙りこくったままだった。

■　■　■

翌日　午前９時　鞍坂探偵事務所

一たちは早々に朝食を済ませ、テーブルに集まりながら今回の事件の考察を整理していた。

「さーて、ほんならメシも食い終わったことやし、もういっぺん事

件の要点を整理してみるで?…全ての発端は二ヶ月前の交通事故。桑而達４人の乗った車に轢き逃げされ、桂言葉さんは今もなお昏睡状態で入院中…。警察は証拠不十分で桑而を逮捕する事ができひんかった…」

アカネは一たちに言い、一は考え込みながら呟く。

「言葉さんの弟である参治は桑而達を激しく憎み、４人は次々とお化け車の餌食となった…」

「けど、参治くんは直接殺してはいなくてただ車を操っていたカー・ドーパント。今は言葉さんと同じ病院で入院している…」

マープルは一の言葉に相槌を打つように言い、六人はしばし考え込み…しばしの間を置いて神原が呟く。

「インセクションのメモリを使い、猛毒のウイルスで桑而達を手に掛けた奴は一体誰なのか…」

そして、神原が呟いた後、今度は羽川が口を開き呟く。

「現時点で最も怪しいのは…参治くんの他に復讐の動機がある人…ってことよね?」

一三か月後に式を挙げる予定でした…。彼女と選んだ教会で……ー

羽川がそう呟いた途端、一と暦の脳裏に伊藤との会話の一節が蘇り、同時に口にする。

「「桂言葉の婚約者の…伊藤誠！？」」

一と暦はそこまで口にした途端に慌てた表情で玄関へ向かい、そのまま事務所を後にした。

■　■　■

１０分後　風都某所　伊藤の自宅。

伊藤は生徒たちを集め、写生の講習を行っていた。

「伊藤先生、こんな感じですか？」

一人の生徒が伊藤を呼び、自分の描いた絵を伊藤に見てもらう。

「お、なかなか良いんじゃないか？あとはこの辺の書き込みで厚みを出したらもっと良くなるよ。」

「はい、ありがとうございます♪」

伊藤は生徒の描いた絵の一点を指しながら言った時、呼び鈴が鳴った。

「…？お客さんかしら？」

「ちょっと見てくるよ。」

伊藤は軽く生徒に返し、玄関に行こうとするが、生徒が窓の向こうに何かがいることに気づき声を上げる。

「ひ…ッ！！」

伊藤が生徒の方を振り返ると、そこには昆虫とも人間とも区別の付かない異形――インセクション・ドーパントが唸りながら甲高く不気味な鳴き声を上げながらバルコニーをよじ登って来るのが見える。

インセクションは両肩の触手を伸ばし、生徒を払いのけて画板や家具を倒しながら伊藤に襲いかかる。

―キャアアアアアアアアッ！！―

それをみた生徒たちは悲鳴を上げながら我先にと逃げ出し、そこは恐怖に包まれた。

インセクションはおもむろに伊藤に向き直ると、伊藤に向かってふらふらした足取りで近寄り始める。

「ひっ！！く、来るなぁ！！」

伊藤は必死に自分に押し寄せる恐怖と戦いながら言うが、インセクションはそんな言葉など聞きもせず、相変わらずのふらふらした歩調で伊藤に近付き、伊藤は一目散に家から逃げ出した。

「なんだ…っ！？」

そのころ、伊藤を訪ねに来た一と暦はその悲鳴に気付き、ドアを蹴

破り中に入る。

と、そこには悲鳴を上げながら逃げる伊藤と、ふらふらした歩調でそれを追い掛けるインセクションがいた。

一と暦は、自分の目の前で起こっている現実が理解出来なかった。

犯人と思っていた男が逆に狙われる立場に変わってしまえば誰だって混乱に陥るのは当然だ。

「伊藤とドーパント…!?」

「訳が分からん…左乃宮!まずはあのドーパントを倒すぞ!!」

一は若干混乱しながら声を上げるが、暦は一に促しながら自らの腹部にロストドライバーを装着し、一もドライバーを腹部に装着する。

同じ頃、マープルの腹部にドライバーが具現化し、マープルは持っていた本を机に置き、少し面食らった表情を見せながら呟く。

「…予想外です…まさか伊藤が襲われるなんて…」

「えぇっ!?本当!?」

「えぇ!?マジか!?」

アカネと羽川はその言葉を聞くなり思わず声を上げる。

「でも今はドーパントを止める事が先決ですかね…」

マープルはアッシュメモリを取り出しスイッチを押す。

―ＡＳＨ！―

「どうしてですか…さっぱり訳がわからん…」

一は少し毒づきながらメモリを取り出し、スイッチを押す。

―ＰＯＩＳＯＮ！―

―ＩＭＭＯＲＴＡＬ！―

そして、離れた場所で2人はメモリを構え、同時に口にする。

「「変身！！」」

「変身。」

マープルがメモリをドライバーの右スロットに装填するとメモリは小さな灰色の光とともに消え、一のドライバーの右スロットに転送され、マープルは倒れる。

「おっとぉ！」

が、ちゃんと地面に倒れる前にアカネがその体を支える。

一はそれを確認するとポイズンメモリを左スロットに装填し、それをみた暦も自身のドライバーにメモリを差し込み、二人は同時にドライバーを操作する。

―ＡＳＨ！ＰＯＩＳＯＮ！―

―ＩＭＭＯＲＴＡＬ！―

ドライバーから電子音声とともにメモリの変身メロディが鳴り、一を僅かな旋風とともに紫の光の欠片が包み、一はドゥーツへと、暦の体は赤黒い光に包まれ、暦はイモータルへと変身する。

伊藤はインセクションから逃げようとするが恐怖で足が竦んで思うように動けず遂に転んでしまう。

インセクションは伊藤に出来たその一瞬の隙を見逃さず、左肩の赤い触手を伸ばし伊藤を吊し上げる。

「だ…誰か！助けてくれぇぇ！！」

伊藤はインセクションに吊し上げられながらも助けを求め、二人はその声に気付き、バルコニーから身を乗り出し下を覗き込むと、そこにはインセクションに吊し上げられた伊藤がいた。

ドゥーツとイモータルはバルコニーから飛び降り、イモータルがステッキでインセクションの触手を叩き切ると、伊藤は触手の拘束が解けるなり一目散にその場から逃げ出した。

「…マ…テ……！！」

インセクションは逃げ出した伊藤に気付き、ふらふらした歩調で伊藤を追いかけようとするが、ドゥーツとイモータルがインセクションを止めるべくつかみかかる。

『おい待て！！お前は一体誰だ！？』

ドゥーツはイモータルとともにインセクションにつかみかかりながら問うが、次の瞬間インセクションは緑色の光を放ち始め、みるみるうちに液状化し始めた。

『ッ！？左乃宮！！今すぐそいつから離れろ！！』

イモータルがその異変に気付き、イモータルは慌ててインセクションから離れる。

インセクションは緑色の障気を放ち体を液状化させると、不気味な鳴き声を上げそのままどこかへと飛び去っていった。

二人は追いかけようとするも、すでにインセクションは何処に行ったかも分からず、ドゥーツは小さく毒づく。

『くっ…逃がしたか…。伊藤さーん？伊と……？』

ドゥーツ達は後ろを振り返り伊藤の姿を探すが、伊藤は既に逃げ去った後だった。

そんな中、マープルの意志がドゥーツの右目を明滅させながら少し残念そうな声色で一に言う。

『いーちゃん…また振り出しに戻っちゃいましたね……』

『…伊藤がインセクション・ドーパントどころか…逆に狙われる立場だったって事か……』

ドゥーツはマープルにそう返しながらドライバーを操作し、ツイモータルもドライバーを操作し一と暦の姿に戻った。

「…左乃宮、これからどうするんだ？」

「…とりあえず情報屋にでも桂の交友関係や罪歴を聞いて犯人らしき奴を一人ずつ洗い出していくしかありませんね…」

一は暦にそう返し、シケードフォンを取り、とある携帯番号を呼び出し、通話を始めた。

しばしのコール音の後、相手が通話に応じスピーカーから重く静かな声が響く。

「はい、もしもし？」

「お久しぶりです、右京さん。少しお伺いしたい事があるのですが。」

一はその電話の相手…杉下右京に恭しく話し続ける。

「おや、君が私にと言うことは…また、ドーパント関連ですか？」

「えぇ。いつもすみませんね…で。ある男の犯罪歴を調べてもらい

たくて。」

一が申し訳なさそうに言うと、右京さんは笑う様に言う。

「いえいえ、別にかまいませんよ。…で、誰を調べるのですか？」

「はい、名前は桂参治、１８歳。彼は最初に数納を殺した犯人で、二ヵ月前に轢き逃げにあった桂言葉の弟です。」

「……ふむ。」

「ですが、参治はドーパントでしたが、『ＣＡＲ』のメモリで毒殺出来る様な物ではありませんでした。ですが、一応念の為と言うことで。」

一が言うと、右京さんはしばし沈黙し…また話し始める。

「成る程……分かりました。こちらで出来るだけ調べておきましょう。刃野君も快く手伝ってくれるでしょうしねぇ。」

「えぇ、頼みました。」

一はそう言うと通話を切り、次に黒鋼の携帯番号を呼び出し、通話を始めた。

「どうも、黒鋼さん。」

「ん？どうした、いきなり。」

「いえ、少し情報をいただきたくてですね。」

「別にいいが…なにかあったのか？」

「えぇ。実を言うと桂姉弟についての情報が欲しいんです。」

「あ～…今ちょっとあの白饅頭が家出しやがって、探してんだよ。見つかったら俺から連絡する、それでいいか？」

「…モコナ、自由ですねぇ…分かりました。それで。」

「そっちで見つかったら連絡くれよ。んじゃな。」

黒鋼はそう言うと通話を切り、一はシケードフォンをしまい込んだ。

■

■

■

同時刻　園咲邸　二階階段ホール

「冴子？冴子ー？」

霧彦は家中を歩き回りながら冴子を探していたが、どういう事か全く見つからず、ただでさえだだっ広い家中を探し回った事で霧彦自身も少し疲れていた。

そんな中、霧彦が息を切らしながら歩いていると掃除をしている一人のメイドが目に入り、霧彦は彼女に歩み寄り訊ねる。

「なぁ、冴子を見なかったかい？」

「い、いえ…申し訳ありません…」

メイドは申し訳なさげに言いながら霧彦に頭を下げる。

「そうか…済まなかったな。」

霧彦はメイドにそう言うと再び歩き出し冴子の姿を探すが、瞬間向こうから若菜の声が聞こえ、若菜が現れた。

「お姉様ならいませんよ？…お父様と一緒にオペラ鑑賞に出掛けたから♪」

「オペラぁ？」

霧彦は若菜の言葉の意味が分からずもう一度問い返すが、若菜は憐れみに満ちた表情で霧彦を嘲るように霧彦の問いに答える。

「あら…？聞いてなかったのかしら？…ご自慢の婿殿としては最近少し株が下がってるんじゃなくて？」

「ッ！？そんな事はないッ！！…いや、例えそうだとしても…すぐに挽回してみせるさ。」

霧彦は若菜の言葉に僅かな怒りを覚えながら声を荒げながら若菜に返すが、コンマ一秒より早く表情筋を動かし、作り笑いを浮かべながら若菜に言う。

「ふふ、何か秘策でもあるのかしら？」

若菜は相変わらず嘲るような笑みを浮かべながら霧彦に問う。

「《ガイアメモリの驚くべき可能性》…とでも言っておこうかな。」

霧彦は自信に溢れた笑みを浮かべながら手すりに腰掛けながら若菜の問いに答えるが、霧彦の言葉を聞いたとたん、若菜の顔からは先程の嘲るような表情が消え、霧彦に問う。

「ッ！？何なんですのそれは！？」

「残念だけど…若菜ちゃん、君にはそれしか言えないな♪」

霧彦は嬉々とした表情で若菜にそこまで言うと踵を返し、階段ホールを後にしていった。

若菜は忌々しげに舌打ちをし、歩き去っていく霧彦を見送ることしかできなかった。

■　■　■

数分後　伊藤の自宅外。

あれからしばらくたって、一のシケードフォンに右京さんと黒鋼からのメールが届き、一はシケードフォンを開きメールを確認する。

後ろから暦もそのメールを覗き込み、読み始める。

一はしばらく二人のメールを読んだ後、事務所に通話を始める。

「一君、どないやった？」

「えぇ…黒鋼さんからの情報によると、桂姉弟の両親は二人が小学生の頃に病で亡くなってます。面倒を見てくれた親戚もいなかった。」

一はつづけて言う。

「それに、右京さんに奴と奴の周りにいる人間の犯罪歴も調べて貰ったんですが、これといって目立った犯罪歴はありませんでした。…友人や会社の同僚にしたって、連続殺人までするとは思えませんし…」

「って事は…容疑者は誰も居らんって事やないか！？」

「けど必ずいるはずです！！…インセクションのメモリを買った人物が一番復讐したいのは誰か…」

マープルが呟くと、アカネは電話をとって一に言う。

「そ、それじゃやっぱ轢き逃げされた本人やないの！？」

「何言ってるんですかアカネさん…。言葉さんは今も昏睡状態でずっと眠り続けたままなんですよ？」

「……成る程…その発想はなかったです…」

「え？」

電話の向こうで、マープルの感心した様な声と、不思議そうに言うアカネの声が聞こえる。

「アカネちゃん…さすがです。」

「そ、そうか？」

電話の向こうで何かアカネが照れている様だが、一は疑問の声を出す。

「…どういうことですか？」

「私に付いてくれれば分かりますよ。…いーちゃん、暦さん。私達はこれから言葉さんがいる、風岡総合病院に行きますから、二人もそっちに向かって下さいね？」

「ふむ？まぁ分かりました。それでは。」

一はそれだけ言うと通話を切りシケードフォンをポケットにしまいこみ、暦とともにその場を後にした。

■　■　■

１０分後　風都　風岡総合病院　桂言葉の病室。

二人はマープルに呼び出され、言葉が入院している桜坂総合病院にやってきた。

「お邪魔しま～す…きゃっ!?」

アカネは声を潜めながらドアを開け、病室に入り込もうとするが、マープルに払いのける。

そして一と暦、アカネも上がり込み、それをしり目にマープルは言葉の眠るベッドに歩み寄り、毛布をはぎとって体中を弄り始める。

「ちょ、マープルちゃん!?勝手にやっちゃダメやろ!?もうちょい優しくやったり!!」

アカネは焦りながらマープルに言うが、マープルはそんなアカネをよそに言葉を弄り、服の右袖を捲ったところに四角く黒い入れ墨のようなもの――ガイアメモリの差し込み口である生体コネクタを見つけた。

「…やっぱり。生体コネクタの状況から見て、ガイアメモリは今も体内に残ってるみたいですね…。…やはりインセクション・ドーパントの正体は彼女です。」

マープルは言葉の腕から視線を三人に戻しながら言うが、暦はその言葉の意味が分からず問い返す。

「どういうことだ?その人は轢き逃げに遭ってからずっと眠り続けたまま。自分でガイアメモリを差す事なんかできるはずが…」

「…恐らくですけど…それは…」

マープルはその問いに伏し目がちに答え、語り始めた。

■　■　■

同時刻　園咲邸　リビング

「…怒りや憎悪と言った強烈な負の感情が、肉体や精神そのものをドーパントに変異させたんだ。…これは極めて稀なケースだ…！超・大発見だ！！」

霧彦は帰ってきた冴子に嬉々とした表情で言うが、冴子はそんな霧彦に構わず、脱いだコートをメイドに渡し霧彦を無視しながら笑顔を浮かべ言う。

「今日のオペラ、なかなか良かったわ。」

「ふふ、それはよろしゅうございましたね。」

メイドも冴子に笑顔で返しながら言い、無視された霧彦は若干怒りを覚えながらも冴子に言う。

「ちょ、冴子！私の話を聞きたまえ！」

冴子はメイドに下がるように言い、メイドは冴子に何かの資料らしき紙束を渡して去っていった。

冴子は資料を読みながら椅子に腰掛け、霧彦に問う。

「どうしてそんな妙な事が起こったのかしら?」

霧彦は冴子の問いに再び嬉々とした表情を浮かべ、椅子に腰掛け語り始めた。

「それについては、メモリを売ったというセールスマンから聞いている。…そのメモリを買った女性は事故に遭う直前、メモリを使用したんだ。弟の方はその後の用だがね。」

霧彦はそう言うと、まだ語りつづける。

「そして女性の精神エネルギーと同化したインセクション・ドーパントは昏睡状態に陥った肉体から抜け出し、弟の怒りと憎悪を吸収し、その力で弟を操り、復讐を始めた。」

霧彦はさらに続けて言う。

「…凄いと思わないか!?これまでのガイアメモリの常識を覆すドーパントの誕生だ…!!…このデータを集め、さらに研究を続けていけば「…私達夫婦の強力な武器となる?」そうだ!!…そうすれば、君を失望させた私の失態も全てチャラになる!!…名誉挽回だ…!!」

霧彦は一人薄く笑みを浮かべながら一人呟いた。

■　■　■

「あの時…泣いていたのはその心だったのか…」

一と暦はマープルの言葉を聞くなり、桑而達の殺されたときの光景が蘇り、暦は一人呟く。

「けど、言葉さんは何故伊藤を狙うんやろ？」

アカネは顎に手を置き考え込みながら一と暦に問う。

「…さぁねぇ…」

一はそれだけを言い、足早に病室を去ろうとするが…マープルに呼び止められる。

「どこ行くんですか、いーちゃん？」

「…伊藤さんを探しに行きます。私はもう…言葉さんに泣いてもらいたくない。」

一はそう返し、再び病室から後にしようとするが…

「待て左乃宮…僕も一緒に行くよ。」

「えぇ、お願いします。」

と、一が暦を連れて病室を後にしようとした瞬間、マープルが口を開いた。

「じゃあ、私も彼女を説得してみます。」

「説得って言うても…マープルちゃん、どないするんや！？」

その言葉にアカネは思わず驚いて問い、マープルは言葉の横たわるベッドに歩み寄りながらアカネの問いに答える。

「彼女の精神に直接コンタクトを取ってみます。…ガイアメモリの影響で特殊な状況下に置かれている彼女の精神を、私の脳内にある宙の本棚に呼び出します。」

そして、今度は暦がマープルに問う。

「そんな事出来るのか？」

「…やってみないと分かりません。」

その問いにマープルは僅かに不安そうな表情をアカネ達に向けながら答える。

「…分かった。マープル、そっちは任せました。暦、行きますよ。」

「あぁ。」

一はそうマープルに返し、マープルはそれに力強く頷き、それを見ると一は暦を連れて足早に病室を後にした。

「よし…じゃあ、始めます。」

「お…おぉ。」

マープルは言葉の横たわるベッドに歩み寄りながら言い、アカネは真剣な面持ちでマープルを見守る。

マープルの指が言葉の右腕のスロットに触れると、スロットが光を放つ。

同時にマープルは目を閉じ、二人を柔らかな光が包み込み…本棚へのアクセスを開始した。

…そして、マープルが目を開けると、そこにはいつもと変わらぬ何もない真っ白な空間にただ無限の書架の立ち並ぶ光景があった。

「そこにいるんですよね？大丈夫です、何もしませんから…」

マープルは優しげな口調で空間のどこかに隠れている誰かに呼び掛ける。

すると、その呼びかけに答えるように近くの本棚の陰から女の声が聞こえた。

「あなたは誰…？」

女の声はマープルに問い、程なくして近くの本棚の陰から恐ろしい形相をし、目は死んでいる死人のような女性――言葉が現れ、マープルに再び問う。

「…どうして私を呼び出したんですか？」

言葉はアヤノに問い、マープルは半拍置いて紗耶香の問いに答えた。

「言葉さん…。…あなたの事を本気で救おうとしている人達がいます。私はその人達の代理で会いに来ました。だから教えてくれませんか？…あなたは何故…伊藤を殺そうとしたんですか？」

そして、言葉はしばしの間を置いてその問いに答えるべく語り始めた。

■　■　■

数分後　ウインドクリスタル。

あれから一は暦と別行動をとり、更にウェンディとクドリャフカと会う約束を取り付け、待ち合わせ場所のウインドクリスタルで紅茶をすすりながら二人を待っていた。

「やっほーい、ハジメー！！」

程なくして、近くから見慣れた赤毛の少女ウェンディと、青い髪をした少女が現れた。

「どうも、ずいぶん遅かったですが……で、スバル。クドはどうしました？」

一は青い髪の少女…スバルに向け問う。

「あ～…クドはなんか野球があるとか言って…で、しょうがないからあたしが来ました！」

「ふぅん…で、本音は？」

「ここのアイスパフェがすっごいおいしいの♪」

いい笑顔でサムズアップをしながら言うスバルに、一はため息をつく。

「……早速本題に入りますが、情報が欲しいのです。」

「はいはい、情報なら私たちにお任せあれ♪で、今回はどんな情報が欲しいの？」

スバルは可愛らしい笑みを浮かべながら一に問う。

「えぇ、ちょっと、伊藤誠って男についての情報を知りたいんですが。」

一はそう問うが、スバルから帰ってきた返答は意外なものだった。

「伊藤…？あぁ…あの女ったらしの事？」

「えぇ？」

突然のスバルの返答に一は思わず驚くが、スバルはさらに続ける。

「絵のモデルやらないかって言っては女引っ掛けちゃ食い物にしてる最ッ低の男。」

そして、ウェンディはそれに相槌を打つように言う。

「そうそう、ハンパない鬼畜男っスよ。」

すると、スバルが突然ウェンディに向き直り、ウェンディに問う。

「そーいやウェンディ、この前絵のモデルやったとか自慢してなかったっけ？」

「え。…えぇ？」

スバルのその言葉を聞いたとたんウェンディの表情が凍りつき、スバルはさらにいやらしい笑みを浮かべながらウェンディに問う。

「あれ、もしかして佐藤の事だったりしちゃうの？」

「じょ、冗談きついっスよ！！マジしてないっスよ！！」

「ならそこまで否定しなくても。」

スバルがそこまで問い詰めると、ウェンディは慌てた表情で言いながらその場から逃げ出そうとする…と、一人の女性とぶつかった。

「あらぁ？ウェンディちゃ～ん、何をそんなに慌ててるのかしらぁ？」

ウェンディとぶつかった、黒い髪に赤い口紅をしたオカマ――ボン・クレーはウェンディに問う。

ウェンディはボン・クレーが現れるなり嬉々とした表情で言う。

「おおぉ！！ボンちゃん、助かったっス！！」

だがクアットロは笑顔で持っていた大きな袋から何かを取り出しながら三人に言う。

「はぁい、じゃあ可愛い子達に…じゃじゃ～ん！！クリスマスプレゼントよぉ！！」

そう言いながらボン・クレーは持っていた大きな袋から何かを取り出し、それをテーブルに置いた。

それは、大量の市販の風邪薬やマスクのパック、栄養ドリンク、他ｅｔｃ…風邪の薬だった。

ボン・クレーはそれらをテーブルの上に置いた後、人差し指を立てながら三人に対し笑みを浮かべながら言う。

「風邪にはぁ、予防がぁ、だだだ大事なぁのよぉー♪」

「ボンちゃん、ありがとっス～！」

ウェンディはボン・クレーに抱きつきながら嬉しそうに言う。

「んがっはっは！気にしないで頂戴、あんた達が風邪ひいたら、大変だからよぉ！！」

ウェンディとクアットロが楽しそうに話していた所で一が苛つきながら口を開く。

「ぁああー！！邪魔すんなよボンちゃん！！俺は風邪なんか引かね

ぇよ！！」

「「「なんで？」」」

三人に同時に聞かれると、一は答えられず、しどろもどろになる。

「あ、えっと、それはですね……」

一がそう戸惑っていると、いい加減脱線しすぎだと思ったのかスバルはおもむろに口を開いた。

「それで話戻すけど、伊藤は今じゃ結婚詐欺までやってるらしいよ？」

「結婚詐欺ィ？…ウェンディ、伊藤が今どこにいるか見当は？」

一はスバルの言葉に再び驚き、ウェンディはしばし考え込みながらその問いに答えた。

「そうッスねぇ…。最近新しいカモを捕まえたとか…。そんでこれがさぁ、西園寺グループっていう風都じゃそこそこ名の売れた企業のご令嬢らしくて、伊藤はそいつの財産目当てにその女に近付いたッス。その女の住んでるマンションは吹谷区にあるからそこを当たってみたらどうッスか？」

「…分かりました。わざわざどうも。」

一はそう礼を述べると早々にその場から去っていった。

■　■　■

同時刻　マープル脳内　地球の本棚

言葉はしばしの間を置き、マープルの問いに答えるべく、語り始めた。

「私は誠くんを愛していた…でも、偶然見てしまった…。彼の…本当の姿を…」

そういうと、言葉はある日の事を思い出す。

言葉がホテルに入り、伊藤の姿を探していると、その目に信じられないものが目に映った。

それは、伊藤が自分の知らない女性と楽しそうにしているという光景だった。

それをみた言葉は一気に絶望の淵に叩き落とされ、伊藤への憎悪がこみ上げながらその様子をただただ黙って見ていることしかできなかった。

「悪い夢を見ているようだった…。そんな時…」

―初めまして。桂言葉さん…ですよね？―

言葉が立ち尽くしていると、女性の声が聞こえ、声の方に振り向くとそこには、女物のスーツを着込み、黒いアタッシュケースを持った長い黒髪の若い女性がいた。

女性――朝倉はにこやかに笑いながらさらに続ける。

「私は朝倉といいます。あの、もしこの後お暇でしたら、少し私とお話しませんか？」

「え…ええ…」

言葉は突然現れた朝倉に不審感を抱きながらも、不思議と彼女の言葉に心が軽くなるような感覚に見舞われ、紗耶香は朝倉の後をついていった。

今思えば、ここで朝倉が言葉に声をかけるのをやめ、言葉も朝倉からガイアメモリを買わなければ、言葉や一達の運命も違ったものになっていたかもしれない。

言葉は悲しげな表情をしながら、なおも語り続ける。

「…ほんの少し誠くんを懲らしめられれば……そう思ってつい買ってしまった…もしかしたら、参治もなにかに使えるかと思って…けど私は迷った…。こんな事をしても意味なんかない…。…全て忘れて弟ともう一度やり直そう…。そう決心した矢先……私の心は…怪物になった…」

すると、言葉は先ほどの表情を消し、狂気と憎悪に満ちた表情でさらに続ける。

「まず…私を轢き逃げしたヤツらに復讐した…！！…あとは…私の誠くんを騙した女と…誠くんが一緒に死んでくれれば…それでいいの。」

マープルはひとしきりに言葉の独白を聞き、それに対し真剣な表情で口を開く。

「言葉さん…あなたはガイアメモリの力に支配されています…。自分を見失っちゃダメです…！！」

■

■

■

一はジェントルーダーを走らせ、信号で一度止まるとシケードフォンを取り出し暦に通話をかける。

しばしのコール音の後、暦が通話に応じる。

「暦、次に狙われるのは伊藤です！！」

「…どういうことだ？」

「伊藤の正体は結婚詐欺師です。奴は今吹谷区にあるマンションで西園寺という愛人と一緒にいます。このままじゃ伊藤だけでなく愛人にも危害が加わってしまいます！！出来るだけ急いでください！！」

「あぁ、分かった！！」

一は通話を切りシケードフォンを上着のポケットにしまい祈るように内心で呟く。

（頼む…間に合え…！！）

■　■　■

同時刻　風都　吹谷区　とあるマンションの一室。

伊藤の愛人の一人――西園寺は笑顔を浮かべ伊藤を招き入れながら問う。

「どうぞ♪けど急にどうしたの？」

「ん？まぁ…ちょっとな。しばらく置いてくんないか？」

伊藤がそう言ったとたん、西園寺は嬉しそうに言い、伊藤に抱きつく。

「ほんとに？」

「ああ」

二人はソファに腰掛け、しばらく他愛のない話をしていると、どこ

かから妙な物音が聞こえ、二人は辺りを見回す。

「…？何の音だ？」

「…？…キャァッ！？」

伊藤がそう言い、西園寺がふと窓に視線をやると、突然悲鳴を上げた。

そこには、人とも昆虫とも区別のつかないドロドロと溶けた体の異形――インセクション・ドーパントがいた。

―…Ｐｉｇｙａａａａａａ…！！！―

西園寺が悲鳴をあげたと同時にインセクションは窓をたたき割り、ずるずると部屋に入り込み、ふらふらした歩調で伊藤と西園寺に襲いかかり始め、二人は一目散に逃げ出した。

その頃、数瞬遅れて一と暦はマンションに着き、入り口のドアを開き、慌てて階段を駆け上る。

「…やばい、もういるかもしれません！」

息も絶え絶えな二人は何とか西園寺の部屋の前にたどり着き、暦がドアを開けようとするが突然ドアが開くとそこから伊藤が現れ、伊藤は暦を突き飛ばすとそのまま逃げ去っていく。

「おい！！待て伊藤！！」

一が叫ぶが、その姿は既に見えなくなっていた。

「やばそうですね…！」

「…おい、もう一人は？！」

暦がそう言うと、二人は部屋に視線を戻す。そこには片手を真っ赤に濡らしたインセクションとその足下に倒れた西園寺の姿があった。

インセクションは二人の姿を見るなり相変わらずのふらふらした歩調で部屋から逃げ出した。

一は西園寺に歩み寄るが、西園寺は腹を切り裂かれ、さらにそこから細菌を送られたのかその体はすでに冷たくなっており、物言わぬ死体となっていた。

「左乃宮、伊藤は僕が追いかける！！お前はドーパントの方を！！」

「分かりました！！ほら、電話！」

一はその言葉に応え、上着からシケードフォンとそのギジメモリを投げ渡し、暦はそれを受け取る。

「ヤバかったら連絡する！じゃ！」

暦はそれだけ返すと伊藤を追いかけ、一は逃げたインセクションを追うべくそれぞれ走り出した。

…伊藤はインセクションから逃れることのみを考え続けながら走りつづけ、気がつけばどこかのボイラー施設のような場所にいた。

「はぁ、はぁ、はぁ……ここに、隠れていれば…」

伊藤は壁にもたれかかり息を整えながら呟く。

―…Ｐｉｇｙａａａａ…！―

瞬間、伊藤の近くを何かが不気味な鳴き声を上げながら通りかかり、伊藤は怯えながら慌ててその場から離れる。

「ヒッ…！？」

だが、再び甲高い鳴き声が背後から聞こえ、伊藤は小さく悲鳴を上げながらその場から離れ、近くのパイプに背中を預けながら辺りを見回し、怯えた表情で呟く。

「何だ…！？何処にいるんだよ…！？」

―Ｓｉｉｉｉｉｉ…！！―

伊藤がそう呟いたとたん、近くの隙間からうなり声が聞こえ、そちらに視線をやると、そこにはインセクションがうなり声を上げながら這いよってくるのが見え、伊藤は悲鳴を上げてしまう。

「うわぁぁ！！」

すると、伊藤の足下に這いよってきたはずのインセクションが伊藤の背後に逆さまにぶら下がりながら現れ、その首を締め上げる。

「…ここかっ！？」

数瞬遅れ、暦が伊藤の後を追いかけていると、インセクションに首を締めあげられている伊藤が目に入った。

「…！！しまった！！」

暦は毒づきながら一から受け取ったシケードフォンとギジメモリを取り出し、メモリをシケードフォンに装填する。

―ＣＩＣＡＤＡ―

シケードフォンから電子音声が発せられると同時にシケードフォンはライブモードに変形し、暦の手からバンセクションに向け真っ直ぐ飛び立っていく。

暦の手から飛び立ったスタッグフォンはすれ違いざまにインセクションに数撃叩き込むと、インセクションは態勢を崩し床に落ちた。

「よせ！！…復讐なんか…もうやめろ！」

暦は伊藤を守るようにインセクションの前に立ちはだかりながら言う。

だが、インセクションは忌々しげに鳴き声を上げると、両肩の触手を二人に伸ばし、暦は慌てて伊藤の手を引っ張りその場から逃げ出し、触手に切り裂かれたパイプから勢い良くスチームが噴き出す。

もし暦の反応が僅かでも遅れれば、その体は二人ともに真っ二つに

されていただろう。

「うわぁぁぁぁ！！」

伊藤は悲鳴を上げながらその場から逃げ出そうとするが、暦はそんな伊藤の手をつかみ、厳しい表情で言い放つ。

「待て！！…早く、桂さんに謝れ！！」

「な、何…！？」

伊藤はその言葉の意味が分からずに再び問い、暦は伊藤の問いに答える。

「お前が桂さんをあんな醜い姿に変えてしまったんだぞ！？」

「ッ！？言葉…！？」

伊藤はインセクションに視線をやりながら思わず口にする。

「…まだ間に合う…。早く桂さんに謝れ！！」

暦は伊藤に向き直り口を開くが、伊藤はさらに怯えた表情で反論する。

「ふ、ふざけるな！！俺には関係ないだろ！？」

―…！！Ｐｉｇｙａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａ！！！―

その言葉を聞いたとたん、インセクションは怒ったようにうなり声

を上げながら再び触手を伸ばし攻撃を仕掛け、暦はうまくかわしきれずに伊藤とともに吹き飛ばされてしまう。

「う…うわぁぁぁぁ！！」

伊藤はついに耐えていた恐怖に負けてしまい、悲鳴を上げながらその場から逃げ出してしまった。

「待て！！」

暦がそう叫ぶも、伊藤は暦を置いて逃げ出し、逃げた伊藤に気づいたインセクションはふらふらした歩調で伊藤の後を追いかけようとするが、暦はインセクションにつかみかかり何とか思いとどまらせるべく声を大にしながら説得を試みる。

「ッ！！止めろ！！」

―Ｐｉｇｙａａａａａａａａａ！！！―

だが、インセクションはその拘束に必死で抵抗するが、暦も同時に行かせまいと必死でインセクションの動きを止める。

■　■　■

同時刻　マープル脳内　地球の本棚。

「どうして私の邪魔をするの！？」

言葉はマープルに問うが、マープルは真剣な面立ちで言葉の説得するべく声を大にしながら口を開く。

「その人たちは…あなたにこれ以上誰も殺させたくないんです…！！」

「…ありがとう…けど…もう手遅れよ…！！」

言葉がそう口にした途端、その目が妖しく光り、体中に緑色の障気を纏いはじめ、再び口を開く。

「もう私にも止められない…！！私の心には…もう憎しみしか…！！アァアァアァアァアァ！！」

言葉が悲鳴混じりの叫び声を上げると同時に、言葉が纏っていた緑色の障気が強大な衝撃波となり、大量の本棚を吹き飛ばしながらマープルに迫り来る。

「…！！マズッ…！！きゃああっ！！」

マープルが焦った表情で言いかけた途端、衝撃波はマープルを吹き飛ばしその影響で本棚へのアクセスが強制解除され、その意識は現実へと引き戻される。

瞬間、暦がつかみかかっていたインセクションが緑色の光を放つと、凄まじい衝撃とともにシグナムの体は壁に強く叩きつけられた。

「がっ…！！…畜生…」

暦は壁に叩きつけられた際のショックでだんだんと意識が遠退いていき、その意識はそのまま闇へと落ちていった。

「きゃああっ！！」

一瞬言葉の体が強く発光したかと思うと、マープルが小さく悲鳴をあげながら吹き飛ばされ、マープルは尻餅をついてしまう。

アカネと神原が心配そうな表情で尻餅をついたマープルに慌てて駆け寄り、羽川も慌てた表情でマープルに訊ねる。

「マープルちゃん、大丈夫?!」

「ちょ、大丈夫なん!?」

「予想以上に怨念が激しい…！！このままでは…飲み込まれちゃいます！！」

その頃、一は暦と伊藤の姿を探しながらボイラー施設へと歩みを進めていると、近くから声が聞こえる。

「…おい、探偵小僧！こっちじゃ！」

「…ッどうも！」

一はその少女の声を聞き、その声の場所へと走る。

そしてこの声の場所には、一人の金髪の少女と、倒れた暦がいた。

「…！！暦！！大丈夫ですか！？」

一は慌てて倒れた暦に駆け寄り呼び掛ける。

「…ん……左乃宮…か…？」

すると、暦はすぐに意識を取り戻し、まだぼんやりした頭で一に問う。

「そうです！！先生、佐藤はどうしました！？」

「…すまん、逃げられた…あぁ、悪い。」

暦がそう言うと、金髪の少女は手を貸し、暦を立ち上がらせる。

それを見ると、一は腰にドゥーツドライバーをつけ、それにならって暦もロストドライバーをつける。

それと同時に、離れた病室でマープルの腹部にドライバーが具現化し、マープルは二人に向き直り言う。

「出番ですか…後、お願いします。」

マープルはアッシュメモリを取り出しスイッチを押す。

―ＡＳＨ！―

一と暦はそれぞれイモータルメモリとポイズンメモリを取り出し、同時にスイッチを押す。

―ＰＯＩＳＯＮ！―

―ＩＭＭＯＲＴＡＬ！―

そして、三人は離れた場所で同時にメモリを構え、同時に口にする。

「「「変身！！」」」

マープルがアッシュメモリをドライバーの右スロットに装填すると、小さな灰色の光とともに消え、一のドライバーの右スロットに転送される。

一はポイズンメモリを、暦はイモータルメモリ左スロットに装填し、ドライバーを操作する。

―ＡＳＨ！ＰＯＩＳＯＮ！―

―ＩＭＭＯＲＴＡＬ！―

それぞれのドライバーから電子音声とともにメモリの変身メロディが発せられ、一と暦は次の瞬間、イモータルとドゥーツに変身し、イモータルは隣の少女から大ぶりの日本刀を渡される。

『サンキュ！』

イモータルがそういうと、その少女はイモータルの影に沈んでいく。

それを確認する間もなく、二人はインセクションの後を追うべく走り出した。

一と暦が変身した後、マープルは倒れるが、神原とアカネがマープルを抱き止める。

「はいな！！」

「うむ…なんと柔らかい体だ！」

神原がマープルの体を支え、それで喜んだのは余談である。

■

■

■

同時刻　園咲邸　リビング

「…残念だけど、今回の件であなたの名誉は回復されないわ。」

冴子が霧彦に向けて放った言葉は、霧彦の想像していたものとは１８０度違ったものだった。

「ど、どうして…？」

霧彦はその言葉の意味がわからずに冴子に問うが、冴子はしばしの間を置き、相変わらずの抑揚のない声で霧彦の問いに答えた。

「…精神エネルギーが生み出したドーパントは、肉体が変身したものに比べ、能力や特性が著しく劣化する…。つまり《紛い物》なのよ」

「まさか!?私は確かにこの目で見たんだ!!インセクション・ドーパントが人間をウイルスで殺す瞬間をだ!!」

霧彦は思わず立ち上がり、声を大にしながら言うが、冴子は椅子から立ち上がりリビングを去りながら言う。

「それでもせいぜい一人か二人ずつが精一杯…。インセクションが本来の力を発揮したなら街一つ軽く感染死させられる程の力を秘めたガイアメモリなの。…そんな研究はとっくの昔に済んでいるのよ。」

「まだ、ポイズンのメモリなら劣化しても風都くらいなら壊滅させられたでしょうけどね。」

霧彦は冴子のその言葉を聞くなり力無くその場に座り込んでしまう。

「ただ…《怨念》って言うのも…時としてとても恐ろしいものだけど…ね……」

冴子は霧彦に追い討ちをかけるようにそう口にしたが、今の霧彦には冴子の言葉は耳にしてはいなかった。

■　■　■

5分後　教会

伊藤は、走りつづけていた。

気がつくと、どこかの教会にたどり着き、いは教会を見上げながら呟く。

「ここは……」

そこは、かつて言葉とともに結婚するはずだった教会だった。

伊藤が頭を振ってその記憶を消し去ろうと、その場を立ち去ろうとするが…その瞬間教会のドアが音を立てて開き、そこから純白のウェディングドレスを着た言葉が現れ、伊藤は思わず口にする。

「こ…言葉……」

だが、言葉はそのドレスに似つかわしくない恐ろしい形相で伊藤を見据えると、彼女の体を緑色の障気が包み込み、純白のドレスから血まみれの姿に変わり、言葉は伊藤に問う。

「…どうして私を騙したの…？…愛してイタノニ…」

「ひっ…！？」

「愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛

してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ愛してイタノニ…」

言葉がそう言うと、緑色の障気がいっそう濃くなっていき…その姿がだんだんと異形の姿に変わっていき、インセクション・ドーパントに変貌した。

「う、うわぁぁ！！」

言葉がインセクションに変貌したのと同時に伊藤は悲鳴を上げるが、インセクション配当を葬るべく両肩の触手を伸ばす。

しかしその時、インセクションの触手が長い何かに切り裂かれ、インセクションはバランスを崩す。

インセクションがよろけていると、そこに現れたのは二人の仮面の戦士…ドゥーツとイモータルだった。

『やめなさい…！！こんな事をして貴女の為には…！！』

イモータルは大ぶりの日本刀…心渡(ココロワタリ)を構え、ドゥーツはインセクションに必死で呼び掛ける。

—Pigyaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaa!!!!!—

しかし、インセクションがそう叫んだ途端、インセクションは自らの体を液状化させて二人に向け突っ込み二人は対処が遅れ、液状化したインセクションの体当たりを食らい吹き飛ばされてしまう。

インセクションは元の姿に戻るなり、ドゥーツとイモータルに向け襲いかかり、二人は出鼻を挫かれたせいで防戦一方となってしまう。

『やめなさい！聞こえていますか、言葉さん！！』

ドゥーツはイモータルとともに攻撃をさばきながら説得しようとす

るが…インセクションは二人に対する攻撃の手を緩めない。

『ガイアメモリの力が増幅して…もう、言葉さんの意思ではどうにも…！！』

『チッ……なにか手はないのか？』

マープルの意思がドゥーツの片目を点滅させて一と暦に言い、イモータルはマープルに問う。

『…残念ながら…』

マープルの意志は申し訳なさそうな、悔しそうな声色で答え、ドゥーツとイモータルはインセクションを吹き飛ばし、ドゥーツは一人呟く。

『…なら、やることは一つです。』

ドゥーツがそう呟いた途端、インセクションは叫び声を上げ、体に瘴気を纏わせ始める。

ドゥーツとイモータルはインセクションの攻撃の予兆に気づき、ドゥーツはバスターメモリを取り出し、イモータルはステッキと心渡の二刀流で迎撃態勢をとる。

―ＡＳＨ！ＢＡＳＴＥＲ！―

ドライバーからバスターメモリの電子音声が鳴ると、ドゥーツはアッシュバスターへと変身し、バスターマグナムにポイズンメモリを挿入する。

―ＰＯＩＳＯＮ！―

そして、そのバスターマグナムでインセクションを狙い撃つと、その攻撃を受けたインセクションは液状化が解けてしまい、その場に倒れ込んでしまう。

『どうか…安らかに。』

一はそう呟くとにドゥーツはバスターマグナムを操作し、マキシマムドライブを発動させ、それと同時にイモータルもマキシマムスロットにメモリを装填した。

―ＰＯＩＳＯＮ！Ｍａｘｉｍｕｍ Ｄｒｉｖｅ！！―

―ＩＭＭＯＲＴＡＬ！Ｍａｘｉｍｕｍ Ｄｒｉｖｅ！！―

ドゥーツはバスターマグナムをインセクションへ向け、イモータルは心渡とステッキをゆっくりと構え、二人は静かに技の名前を口にする。

『『ポイズンディトックス……』』

『イモータル…ザンパー。』

暦は呟くと同時に一瞬でインセクションの目の前に躍り出、ステッキと心渡で二つに立ち切り、さらにそれを断ち切り、四つの肉塊にする。

更に、ドゥーツがバスターマグナムを向けると、銃口から優しい紫

の光があふれ…インセクションの体を包み込む。

―S.i.i.i.i.i.i.i.i.i.i…!!―

インセクションがその光を浴びると、どこか大人しい…優しい声をあげ…程なくしてインセクションの姿は跡形もなく消え去った。

そして、ドゥーツとイモータルがインセクションを倒したと同時に、言葉の右腕のスロットが光を放ち…そこから深緑色のメモリが飛び出、そのまま音を立てて砕け散った。

「メモリが壊れた…どうやら先輩達が勝ったようだな。」

「…そやな…」

神原はコネクタから飛び出たガイアメモリの残骸を手に取って安堵の表情をしながら呟き、アカネは言葉を見つめながら神原に相槌を打つように呟いた。

その後、アカネは言葉の横たわるベッドに歩み寄り、はだけた毛布を優しくかけ…目を覚ましたマープルを引き連れ、静かに病室を後にした。

「やった…やったぞ…!!あんたらすげぇな…!!ハハ、助かった…!!ハハハ…跡形もなく消えちまいやがった…。バケモンめ、ざまぁ見ろ!!ハハハ…」

伊藤は安堵した様子でドゥーツとイモータルに言うが…二人は何も言わずにその場を立ち去っていき、伊藤は跡形もなく消え去ったインセクションを蔑むように笑い続けていた。

だが、そんな伊藤の背後から聞き覚えのある二人の男の声が聞こえた。

「「さぁ、天罰タイムだ。」」

伊藤がその声に気づき背後を振り返ると、そこには帽子にコートの端正な顔立ちをした若い男――一と、小柄で、黒髪の青年――暦だった。

「？探偵…何でこんなとがあぁぁっ！！」

本来ここにいるはずのない二人に伊藤は問うが…話し始める前に、伊藤は二人に思い切り殴り飛ばされた。

「痛ッう…いきなり何しやがる！？」

伊藤は突然殴られた事に腹を立てながら二人に叫ぶ。

だが、一と暦は恐ろしい形相で伊藤を睨み、伊藤８はその迫力に押される。

「黙れ。……テメェを殴ったのは俺達の拳じゃない…。…言葉さんの、心だ。」

「……ふん。」

一はそう言うと踵を返し、暦と共にその場から立ち去った。

伊藤は、歩き去っていく二人のその背中をただ見つめることしか出

来なかった。

■　■　■

それから数日後。

――事件は終わった。

言葉さんは今もなお、病室で眠り続けている…。

けれど私は信じます。いつの日か彼女が目覚める時が来ると。

その時…そこにはきっと彼女を待っていてくれた…優しい笑顔が見えるに違いないから……――

そこまで書くと、一は報告書をファイルにまとめ、近くでゲームをしているアカネとマープルに視線を戻す。

「ぎゃぁ！！や、ヤバイ…！！マープルちゃん、フレンドケアル！！」

アカネがゲーム機の液晶を見ながらマープルに言う。

「そんなことよりメガフレア～♪」

だが、マープルはアカネの言ったことなど気にせず、一気に敵キャラを殲滅する。

「いや、先に回復…おォ?!ギリ生き残った!!」

「ふふ…良かったですね♪」

アカネがマープルに嬉しそうに言い、それにマープルは柔らかく微笑みながらアカネに返す。

一はその様子を柔らかな笑みを浮かべながらしばしの間見つめ、椅子から立ち上がり、開け放たれた窓に歩み寄り窓からの風景を眺めていたが…突然近くにいたマープルは鼻をすんすんし始めた。

「……へくちっ!」

そこから響いたのは、何とも可愛らしいくしゃみだった。

アカネと一はくしゃみをしたマープルの方を向き、アカネは疲れたように言う。

「あらら…マープルちゃん風邪引いてもうた?」

だが、アカネの言葉を聞いた一はマープルを見ながら驚いた表情を見せる。

「えぇ!?全くもう…最近お腹出して寝たんですか?」

だが、そんな二人のやりとりを聞いたマープルは、一に言う。

「いえ、最近はそこまで…一回ガレージのアルファルトの上で寝ちゃいましたけど…へくちっ、へくちっ！」

だが、そこまで言いかけた所でマープルは口を手で押さえて連続でくしゃみし始める。

「あぁもう…ほら、病院行きますから、アカネさん、留守番お願いできます？」

「分かったわ…てか、本当に頭いい子は風邪引くんやな…」

二人は口々に言いながら病院の用意をし、マープルはくしゃみを連発し続けるのであった…。

余談であるが、マープルはこの後咳やくしゃみが止まらず、行った病院で風邪と言われたが…一の手厚い看病で一週間で完治し、なぜかその間とても嬉しそうだったのは……また別のお話に。

## ～小ネタ集　2～（前書き）

久々の投稿です！

本編の次話も明日の朝６時に投稿しますので！

## ～小ネタ集　2～

■　■　■

小ネタ「一とマープルの初対面。」

…一とマープルがアカネと出会い、仮面ライダーと呼ばれる一年前…。

二人はビギンズナイト（・・・・・・）を終え、鞍坂探偵事務所に住むことになったのである。

そして、二人はと言うと……。

「……。」

「……。」

…ただ黙りこくり、マープルは中を見たまま動かず、一もなにか話した方がいいのだろうが、同年代の女の子が喜ぶような話も思いつかず、沈黙が続いている。

「……あの、なにか話したりすることはないんですか？」

だが、その沈黙に耐えきれずに一は取り留めも無くそう話しかける。

「……ふむ……そういえば。」

「なんです？」

マープルが一に向き直って言うと、一も問い返す。

「左乃宮（イチ）一、私は漫画と言う物を読んでみたいんですが。」

「……。」

その言葉に、一は一瞬停止し……そして、ため息をついて言う。

「それは構いませんが…一つ言わせて下さい。」

「…？」

マープルが無表情のまま首をかしげると、一は絞り出すように言う。

「…私の名前は、左乃宮（ハジメ）一です。イチじゃありません。」

「……？」

「あぁ、よく理解していないっぽい！！」

またマープルが首をかしげると、一は頭を抱える。

一の名前は、確かにイチとも読める。作者ですらイチで変換している。

だが…本人にとって、名前を間違えられるのは嫌なのである。

「…それより、漫画を…。」

「……はいはい、分かりましたよ。ちょっと待ってて下さい…。」

一はそう言うと、ため息をつきながら古本屋で適当な漫画を買うために出かけていった…。

「……ふむ。」

そして、マープルは一人取り残され、特に何も考えず、ぼーっとその場に座ったままだ。

…と、そんな時。いきなり事務所の扉が勢いよく開き、真っ赤な（・・・）誰かが入ってくる。

「おーい、はーたーん？借りてたリボルギャリー返しに…って。いねーのかよ。」

「…誰ですか？」

「ん？なんだお前？」

マープルがその真っ赤な人に声をかけると、その真っ赤な人は首をかしげてマープルに言う。

「私はマープル。鞍坂鍛治と左乃宮一（イチ）にここに連れてこられました。」

「ふぅん？…で、はーたんは兎も角…鍛治は？」

「死んでしまいました。」

「……そうか。」

真っ赤な人はマープルの答えに、少し間を開けたが…ため息をついて、返事を返す。

「そうかぁ……でマープルちゃん。お前は何してんだ?」

「左乃宮一が漫画を持ってくるのを待っています。」

「……は?」

「私は文字だけの本しか見たことがないので頼みました。」

「…あぁそうかい…。」

真っ赤な人はそう言うと、頭をポリポリとかき、不意ににやりと笑う。

「あぁそうだ……漫画なら、そこのベッドの下にでもあると思うぞ?」

「…?普通は本棚にあるのではないのですか?」

マープルが首をかしげると、真っ赤な人はニヤニヤ笑ったまま言う。

「いやいや、意外とそう言うところにも漫画はあるもんなんだよ…」

「なるほど……なら早速。」

マープルはそういうと、ベッドの下に手を伸ばし、ガサゴソと探り始める。

「頑張れよ～」

真っ赤な人はそれだけ言うと、そのまま去っていった…。

……そして、それから約十分後。

「戻りましたよー。」

一は片手に大きな漫画の詰まった紙袋を携え戻ってきた。

だが、マープルの姿は見えない。

「……？マープル、どうしま……ッ！？」

「…？あぁ、おかえりなさい。」

一が事務所に入っていくと…そこには、一がベッドの下に隠していた【自主規制】な本の数々を読んでいた、マープルの姿があった。

「な…！！な、何読んでるんですか！！？」

「これですか？真っ赤な人が来て、「ここにも漫画はある」と。」

「……潤さんあの野郎…！！」

一はマープルが読んでいた【自主規制】を奪い取り、頭をかかえる。

「何をそんなに悩んでいるんですか、いーちゃん（・・・・・）？」

「いえ、貴女がこれを読んだことが……いーちゃん？」

そんな一の様子を変に思ったのか、マープルは一に問いかけるが…

一は、そのなれない呼び名に首をかしげる。

「…なんです、それ？」

「真っ赤な人が、私の名前に【ちゃん】とつけてよんでいました。

なので、貴方にも。」

「いえ、同じあだ名が友人に一人いるんですが……」

一は、同級生であった戯言遣いを思い出して言う。

「…いやですか？」

だが、マープルは少し上目遣いで一に聞いてくる。

「いえ…まぁ…いいですかね。」

それに負け、一は頬をかきながらそう答える。

「後…もう一つ。」

「…なんですか？」

「この漫画の行為をやってみたいのですが…」

マープルが服をはだけさせながら言うと、一は必死にその服を押さえ、目線を合わせない様にして言う。

「駄目です。そういうのはもうちょっと親しい相手とやるべきです。後、そう言う事を人前で言ってはいけません。」

「…そうですか。」

一が必死に自分の煩悩を押さえて言うと、マープルはしぶしぶと服を着直す。

「…漫画持ってきましたから、それ呼んでなさい…。」

「ありがとうございます。」

マープルは表情を変えずに、漫画を手に取り、読み始める。

「…隠し場所変えるか…捨てましょうかねぇ。」

一はそう呟き、深い深いため息をつくのだった…。

～現在～

「いーちゃん、スラムダ○クが読みたいです！」

「…また貴女は古い物を…はいはい、潤さんにでも頼みますよ。」

※まだまだ漫画は大好きなマープルです。

■　■　■

小ネタ「一とマープルの友人関係。」

ある日・鞍坂探偵事務所。

「…では、私は出掛けますから、二人とも留守番まかせましたよ？」

「は～い。」

「まかしといてや～。」

一が扉を開けながらそう言うと、アカネとマープルは仲よさそうにそう言う。

今日、一は風都にいた時の学校の同窓会をするために、四月一日のミセへと行くのだ。

「んじゃ、任せましたからねー？」

一は念押しするかのようにそう言い、事務所から出ていった。

アカネはそれを手を振って見送ると……くるりと振り返り、笑顔で

言う。

「……さてっと！一君いないから遊ぶで！」

「イエーイ♪」

アカネがマープルにそういうと、マープルは楽しそうにゲームのコントローラーを掲げる。

～数十分後～

「……全敗って……」

「わーい♪」

アカネは【ＯＴＺ】の体勢でへこんでいる隣で、マープルは楽しそうに笑っている。

「なんでや…なんで、リカちゃんが最強やねん…！！」

「桃太郎は別に強いってわけでもないんですから、もうちょっと頑張りましょ♪」

某スマブラを模した様なゲームの事で楽しそうに喋っていると…マープルが何か思いついたように手を叩く。

「あ、折角ですし…もうちょっと誰か呼びましょうか？」

「?誰かって…マープルちゃん、友達いるんか?」

「…多分、最近この町に来たアカネちゃんよりはいっぱいいますよ?」

マープルがボソッというと、アカネはガクッと倒れる。

「…それはそうやけど……」

「ま、私だっていーちゃんの友達が私の友達になった感じですけどね…。」

マープルはそう呟いてシケードフォンを取り出す。

「えっと…美心ちゃんとか、江迎ちゃんとか、志布志ちゃんとか…まぁまぁいますよ?」

「なら、呼ぼ呼ぼ!」

「はーい。」

マープルはそういって電話をかけ始める…。

その頃　四月一日のミセ。

今日は一の同級生達…四月一日達が集まり、同窓会をしているのだ。

そして、そのミセの縁側。そこでは、ドロドロに煮詰めた墨の様な

眼をした青年…戯言遣いと、どこか過負荷（マイナス）な雰囲気をした青年…球磨川禊がなぜか螺子を片手に討論していた。

「……だからだね、裸エプロンよりももっと忠誠心とか、そういう精神的なところがすばらしいのはメイドであってだね…」

「『分かってないなぁ戯言遣い』『裸エプロンには様々な要素が詰まってるんだ』『メイドなんか』『裸エプロンの前では意味がない』」

「お前らこんな所でどんな会話してんだァァァァァァ！！！」

だが、色々と危ない会話をしている二人に、青年の眼鏡…いや、眼鏡の青年、新八が思いっきり突っ込みをいれる。

「青年の眼鏡って…それもう人間じゃねェだろォォォォォォォォ！！」

「ぱっつぁん、なににツッコンでいるんだい？」

「『それを聞くのは野暮だよ』『戯言遣い』『ぱっつぁんはああいうツッコミをしないと』『存在価値が無くなるのさ』」

そんな風に話している三人を見ながら…台所から酒の追加を持ってきた一はため息をついて近くにあったカップ酒を飲む。

「…ぱっつぁん、ひどい扱いだなぁ。」

「これがぱっつぁんの華だよ、一君。」

「まぁ…それはそうだが。」

一がついでに持ってきた酒の肴のたこわさをつまみながら言うと、そのたこわさにつられた顎と鼻が尖った男…カイジが寄ってくる。

「しかし…さすがに可哀想になってくるな。」

「ま、別にいいでしょう…元はと言えば戯言遣いと球磨川が性癖ばらしあってたのが原因ですし。」

「おいおい、メイドについてなにか文句があるなら僕が聞くけど?」

「『裸エプロンについて文句があるなら』『僕はその幻想を』『なかったことにする』」

一の発言を聞き、戯言遣いと球磨川がこちらににじりよってくる。

「いえ、別に文句は…それを言うなら妹・幼女・筆ペン・目を舐めるの暦の方が…」

「やめろ、筆ペンの話はするな。」

その話をしていると、暦は必死の形相で止めにはいる。

「うん…なんというかお前らは完全に上級者なんだよ。」

「あぁ、それは確かに。」

カイジが焼き鳥を食べながら言うと、一もそれに同意する。

「てか…お前らの場合、全部混ぜて【年上ロリッ娘のメイドが裸エプロン】で満足できるってことか？」

「「「その発想はなかった。」」」

暦、戯言遣い、球磨川が声を合わせて言う。

というか、球磨川は括弧つけてもいない。

「…こいつら、本当に自由だな…」

「全くだ。…ちなみにカイジ、お前は？」

カイジがため息をついて言うと、一は同意しつつカイジにも問う。

「ん？そうだな……顔とかはともかく、優しい人がいいな。」

「……ちょうど坂崎だろ？」

一はカイジの彼女である坂崎美心を思い出しながら言う。

「まぁ…そうなんだがよ。」

「…お熱い事で…。」

カイジがデレデレしていうと、一は酒をグビリと煽る。

「…基本的に男組は女いるからなぁ。阿良々木は羽川、戯言遣いは玖渚、球磨川は安心院だっけか？」

「後は…月見原（ツクミハラ）が二股してたっけか？」

一はそういってミセの庭にある、大きな木の下にいる三人の男女を見やる。

「…のぅ奏者よ！折角の祝いの席だ、そんなＩＮ－ＲＡＮ狐は放っておいて、余といちゃいちゃしようではないか？」

「誰がＩＮ－ＲＡＮですか！！ご主人様にそんなにくっついて…今すぐ離れなさい！！」

「ふん、それは奏者が決めることだ…のぅ？」

「ハハハ……誰か助けて。」

…真っ赤なドレスを着た金髪の女性…ネロ・セイバーと、桃色の髪に藍色の着物を着た女性…狐狸（こり）玉藻（たまも）が茶髪のどこか無個性な青年を挟み、なにやら言い争いをしている。

その青年…月見原（おもひと）主人は必死に助けを求める様な視線でこちらを見ているが…一も阿良々木達も笑顔で無視している。

「はっはっは……とりあえずもげろ。」

「…お前だって女と同棲してんだろ？」

一が笑顔で言うと、カイジは呆れ顔でそう言う。

「いや…俺はもうちょっとプラスチックな関係というか…」

「プラトニックだな、それは。」

カイジは笑ってそう言い、一は照れた様に顔を伏せ、後ろから聞こえるバカ三人組の話を聞きながら酒をあおるのだった。

…尚、この後に酔った一が帰宅し、更に友達と飲んでいたマープルが「もうお前ら付き合っちまえよ」とマープルの友人達が思う程度にはイチャイチャしていたのは…余談である。

補足：このメンバー以外の一の同級生
・弱音ハク　・横島忠夫
・玖渚友　・赤木しげる
・ラニ＝？　・岡部倫太郎

■
■
■

小ネタ「風都とドーパントの協力関係。」

風都　鞍坂探偵事務所。

「…いい天気ですねぇ……」

「そうですねぇ……」

今日も…というか小ネタの日はたいてい暇な一とマープル。

二人は気持ちよさそうに日向ぼっこをしながら、うとうとと居眠りをし始めていた…が。

「……たぁぁぁぁいへぇぇぇぇんやぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

「「ウウオアアアアアァァァ！？」」

いきなり、大声をあげて扉を勢いよく開いたアカネに、一とマープルは驚いて声をあげる。

「な、なんなんですかいきなり！」

「あぁう……」

いきなりの大声に一は抗議する。マープルに至っては頭に響いたのか、頭を押さえている。

「そんなことはええねん！あんな、さっきドーパントがいたんや！」

「…それはどこですか？」

アカネが多少テンパりながらそう言うのを聞き、一はドライバーを手に取り、まじめな顔になる。

「いや、それがな！それが別のドーパントに倒されたんや！」

「…別のドーパント？」

アカネのその言葉に、一は小首をかしげる。

「あぁ！という訳で今から回想行くで！ホワンホワンホワ～ン…」

「小ネタだからってメタるのはやめなさい！」

～数十分前　風都・大通り～

「俺はメト○ン星人じゃねぇぇぇぇ！！！」

「ギャー！ドーパントやー！！」

…小ネタのために細かい説明は割愛させていただくが、アカネは色々な事があり、偶然スイーツ・ドーパントと遭遇し、言ってはいけないことを言い、追いかけられているのだ。

「悪かったー！メトロ○言って悪かったー！」

「てか、メ○ロンだと『狙われない町』的な意味で駄目だろがー！」

二人がメタりながら追いかけっこをしていると…いきなり、スイーツ・ドーパントの足元に釘が刺さる。

「おわっ！？」

スイーツが辺りを見回すと…そこには真っ黒の服に身を包んだ、一人の青年がいた。

「『おいおい』『女の子をそんな風に追いかけまわすなんて』『君

は変態か何かかい？』」

「な…なんだお前は！」

「『分かりやすい噛ませ犬のセリフだなぁ』『この僕でも簡単に倒せそうだ』」

「え、ちょ、あんた誰や？！」

アカネがその青年に話しかけると、青年はこちらを見てにっこりと笑う。

「『やぁ初めまして！』『僕は球磨川禊』『君のところの一ちゃんの友達さ』」

「そ、そうなんか？…って、そうやない！あんた、ドーパント倒せんのか？！無理なら囮頼むわ！」

「『うわぁお』『吃驚するくらいはっきりと押し付ける気満々なんだね！』」

「……む、無視するなぁぁアアアア！！！」

アカネと球磨川がそう話していると、いい加減限界だったのか、スイーツは襲いかかってくる。

「『おっと』」

「おわぁっ！？」

球磨川とアカネはスイーツの突進をひょいっと避ける。

「『危ないなぁ』『そんな君はさっさと』『ブレイクしちゃおうかな？』」

球磨川はそう言うと、何処からか一本のメモリを取り出す。

「あ……ガイアメモリ！？」

「『うんそうだよ』『説明は一ちゃんにでもしてもらってくれ』」

球磨川はそう言い、その透明な螺子で作られた【Ｎ】のマークがついたメモリを持ち直し、手の平の生体コネクタにメモリを差し込む。

―ＮＯＴ！―

その音声と共に球磨川の体は一と＋の模様に覆われ……体中に螺子が刺さった壊れかけた西洋鎧の騎士の様な姿に変わる。

「なっ…！？お前もドーパントか？！」

「『まぁそうだよ』『でも君とは違う』『合法ドーパントって奴さ』」

球磨川…いや、ノット・ドーパントはそういうと腕に刺さった螺子を二本抜き、両手に構える。

「『残念だけど』『戦闘シーンなんて本編で十分だ』『ここは少し汚い手を使わせてもらうよ』」

ノットはそういうと一気にスイーツに近づき、手に持った螺子を突き刺す。

「がぶっ！？」

「うぉ、エグいな…」

スイーツがうめき、アカネが顔をしかめてそう言うと、ノットは片手をあげ、ニヤリと笑う。

「『君がドーパントになったことを』『なかったことにする』」

ノットがそう言って指を鳴らすと……スイーツの姿がいきなり人間に戻る。

「…は？」

「……え……？」

アカネが呆然として声を出し、スイーツになっていた男も何が何だか分からない、と言った顔をし…バタリと倒れる。

「『あっちゃー』『メモリブレイクと同じ感じになったから』『気絶しちゃったよ』」

「え、ちょ、おま……今、なにしたんや？」

ノットはその言葉を無視しながら球磨川の姿に戻り、無傷のまま落ちていたスイーツのメモリを拾い上げる。

「『スイーツ（笑）メモリかぁ』『とりあえず右京さんにでも渡しておけばいいかな』」

「おい、ちょ、話聞けや！」

「『じゃぁね一ちゃんの所の子』『とりあえず詳しいことは一ちゃんに聞いてくれ』『じゃあね♪』」

アカネの叫びを完全に無視し、球磨川は言うだけ言うとメモリをもってその場から去っていった……。

～回想終了～

「…ってことや！」

「……球磨川あの野郎…」

アカネが説明を終えると、一は頭を押さえてため息をつく。

「えっとですね……つまりどこを説明してもらいたいんですか？」

「2つや！1！合法ドーパントってなんや！2！球磨川ってのは何したんや！」

「……二つ目からお答えしましょう。」

一は疲れた様にそう言いながら、またため息をつく。

「まず、球磨川は【ＮＯＴ】、無の記憶を持つメモリの適合者なの

です。そのメモリの能力の一つが、物事をなかったことにする力です。」

「…それで、メモリを使った事をなかったことにした、ってことか？」

「恐らくは。まぁ、メモリブレイクと同じようにメモリ使用者が疲弊するのが難点ですが。」

一がそこまで説明すると、アカネはふぅんと考えるように顎に手を当て、もう一つの疑問を口にする。

「…じゃ、合法ドーパントってなんや？」

「それは私が説明しますねー。」

アカネのその言葉にこたえる様に、なぜか眼鏡をかけたマープルが横からひょこっと一冊のファイルを持って出てくる。

「合法ドーパントって言うのは、ちゃんと政府に認められてガイアメモリを所持している人のことです。」

「…政府？」

「はい。ガイアメモリは今のところ主な被害は風都くらいですが、世界でもたまに被害は確認されてますからね。」

マープルはファイルをアカネに渡して、なぜか眼鏡のまま説明を続ける。

「そのために、ドーパントを倒すためにはドーパント、もしくはライダーが必要ってことです。」

「ですので、ガイアメモリ違法所持の対象にならないよう、認められた人間がいるってことです。メモリの毒素に高い抵抗力を持ってる人とか。」

「へぇ～。」

アカネが返事を返しながらパラパラとファイルを見ると、確かに先ほどの球磨川や一も載っている。

「で…だいたい何人おるんや？」

「えっと…十一人でしたっけ。」

「はい。戯言遣い、球磨川、暦、赤木、カイジ、兄さん、姉さん、刃さん、哀川さん…で、私達ですね。」

一が指折り数えると、アカネは驚いた様な顔になる。

「結構少ないんやな…世界っちゅうからもっと多いんかと思ったわ。」

「まぁ、風都以外は全て一人いれば成り立ってますからねー。」

「大暴れですからねぇ……」

マープルと一は、一人の真っ赤な女性を思い出して深い深いため息をつくのだった……。

## Ｉの残光／強盗ライダー（前書き）

事件名：レディオでＱ／狙われたプリンセス（命名：アカネ）
犯人：佐宮忠和（園咲若菜のＤ）　灯屋可里奈（落ち目のタレント）
～所持メモリ～
【ＱＵＩＺ】疑問の記憶　使用者：佐宮忠和
能力：クイズを出し、その問題に対応した現象を起こすことが出来る。（例：「朝は四本足、昼は二本足、夕は三本足。この生き物は何か？」と言えば人が現れる）
また、？型の光弾やＱの文様が刻まれた壁を出すことが可能。
顔に『？』のマークがついたマスクをかぶり、体は白と黒のチェック柄のスーツを着、マントもつけた姿。ほぼ人間。

【ＴＲＡＰ】罠の記憶　使用者：灯屋可里奈
能力：地雷からただの鳴子等の古今東西のありとあらゆる罠を設置可能。
メモリからのエネルギーにより罠の材料を作るため、罠の材料は一切不必要。
だが、弱点として罠を設置してもそれを起動させることは本人にはできない。
地雷などは本人が踏んでも問題無しになるセーフティの様な機能。
なので、彼女は罠を設置後にＱ・Ｄの問題により罠を起動させていた。
体中に鎖が巻き付き、手足の先にトラバサミの様な口がついた姿。

事件概要：若菜姫のファンである佐宮を、仕事を取られて若菜姫を逆恨みしていた灯屋がそそのかし、共にメモリを購入。
その後、トラップ・ドーパント（以下Ｔ・Ｄ）が罠を仕掛け、クイ

ズ・ドーパント（以下Q・D）がその能力で罠を起動させ、様々な被害を及ぼした。
その後、正体に気付いた若菜姫により発見されたQ・Dがその体に仕掛けられていた暴走用の罠により暴走態に変化、ドゥーツのマキシマムによりメモリブレイクされた。
なお、もう一人のドーパントであるT・Dは既にメモリブレイクされている死体となって発見された。
死因は刀傷による物のであり、傷跡から恐らくは幹部級ドーパント等による者に始末されたと思われる。

■　■　■

午前９時　鞍坂探偵事務所。

「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！」

「どわぁっ！？」

一は朝から、前日の事件についての報告書を書き終え、一息ついていた。

だが、突然聞こえたその悲鳴に驚き、ガタリと立ち上がる。

「は…一君、ちょっと……」

と、一が声のした方を見ると、ガレージへの扉の前であぜんとした顔でアカネが手招きをしている。

導かれるままに、一がガレージの方へ入っていくと…

「…なんじゃこりゃあああああああああああああああああああああああ！！！！」

ガレージのリボルギャリーからもうもうと煙が上がり、入っただけで体が汗ばむように暑い。

そして、ゆっくりとリボルギャリーが開いて行くと…その中から灯油ストーブとカッパを着、汗だくになっているマープルが現れた。

「…何やってんですか貴女は!?」

「フフフ…いーちゃん…知らないんですか…?」

マープルは手に持ったダンベルを上下させながら、苦しげな声で言う。

「これがボクシングの名物…減量地獄ですよ…あと少しで…モスキート級に…」

マープルが髪からポタポタと汗を垂らしながら言うと、パタリとその場に倒れる。

「全く…アカネさん、タオルと水お願いします!」

「お、おう!」

一がマープルを抱きかかえながら言うと、アカネはダッシュで事務所の方へ戻る。

「…っあぁもう、素人がボクサーの真似事はお止めなさい!」

「ぁう……若菜姫のラジオでボクサーの減量について言っていたので…つい…」

「全くもう…知識の暴走特急ですね…そのうち死んでしまいますよ

？」

ため息をつきながら一は言い、マープルはぐったりと一の胸に頭を倒す。

「…ほい、水お待たs…どわぁっ！！」

「ぶわっ！？」

と、そこでアカネがバケツで水を持ってくるが…途中で躓き、勢いよく一にぶちまける。

「……っぁーもう！！暴走特急しかいねぇのかよこの事務所はよぉ！！」

一が怒って言うと、アカネも言い返し始め…マープルはそれを聞きながら、ガレージの冷たい床に体を倒す。

「うぁ……あれ…？」

マープルがふとガレージの奥を見ると、そこには何か小さな羽根の生えた子鬼の様ななにかがいた。

「っ！？」

マープルは自分の目を疑い、目をこすってもう一度そこを見るが…そこには、なにもいなかった。

「今の…まさか……違いますよね…きっと…減量の影響…」

マープルは、自分に言い聞かせるようにそう言い、また床に体を押し当てた……。

■　■　■

十数分後　鞍坂探偵事務所。

「きゅぅ……」

マープルはいつもの服に着替え、額に氷嚢を乗せてベッドに倒れていた。

そんなマープルを心配したのか、リビングの方から聞きなれない女性の声がする。

「…あの……そちらの方、大丈夫なんですか？」

「ん？…あぁ、少し遊び過ぎただけなので、おかまいなく。」

その女性が心配して言うが、一は頭をタオルで拭きながらため息をついて言う。

「えっと…牧原莉子さん。職業は銀行員…やな？」

「あ、はい…。」

その女性…牧原はアカネの確認にこたえると、アカネと一の顔を見

て言う。

「実は…仮面ライダーを、見つけて欲しいんです！」

「……。」

「……。」

その言葉を聞き、一とアカネは後ろを向いてひそひそと話しあう。

「…今回はめっちゃ簡単な依頼やな。ここにおるんやで、仮面ライダー。」

「いえ、私以外の仮面ライダーの場合も…まぁ、連絡はつくからいいんですけどね。」

二人がひそひそと話していると、牧原は少し声を荒げて二人に言う。

「仮面ライダーはこの町の敵！最低の犯罪者です！」

「「…え？！」」

一とアカネが驚いて振り返ると、牧原は話を続ける。

「私…見たんです。昨日、仮面をつけた怪人が私の勤めてる銀行から金を奪うのを…」

牧原が思い詰めたような表情で言うと、マープルと一は考え込むように顎に手をあてる。

「…仮面ライダーの…偽物…？」

―…あのクズ野郎。―

と、その時牧原がポツリとそう呟いたのを、アカネは聞き逃さなかった…。

■　■　■

2時間後　風都中央銀行前。

ここは風都でも指折りの大きさの銀行、風都中央銀行。

そこは、現在壁や柱が壊れ、警察官が何人も現場検証をしていた。

「……これを、仮面ライダーが？」

「あぁ。…っつっても確認されてるライダーの仕業じゃねぇみたいだけどな。」

それを見て、茫然としている一に、刃野はため息をつきながら声をかける。

「それは承知していますがね…暦も銀兄さんも哀川さんもやらないでしょうし…」

「勿論俺もな。…一応あいつ等のアリバイはあるから、考えられる

のは二つだ。」

刃野は指を二本立てて一に言う。

「一つは純正メモリとロストドライバーの流出。」

しかし、一は帽子の位置を直しながらそれに反論する。

「ですが、純正メモリ自体、出所が分かりませんし、ドライバーにいたってはマープルしか製造方法を知りませんし、製造は行っていません。」

「ってわけでもう一つ。」

「…自ら『仮面ライダー』を名乗っているドーパント…」

「そう言うことだ。」

刃野はそういうと、いつも持っているツボ押し器を肩にかけてため息をつく。

「マッキーとか右京とか亀山とかメメとか…事情を知ってる奴等や上層部は兎も角、組織のメンツとしては俺は『仮面ライダー』を逮捕しなきゃいけねぇ。」

刃野はそこまで言うと一の肩に手を置き、ニヤリと笑う。

「そこで、だ。暦や銀時は忙しいらしくて無理。潤ちゃんに至ってはそれ以前の問題だ。」

「…なので、私に頼むと？」

一が刃野にそういうと、刃野は一の方をぽんぽんと叩いて笑う。

「そういうこった。とりあえずこっちは現場検証やら情報は集める。見つけんのはお前の仕事だ。頼むぜ？」

「…了解しましたよ。」

そう言うが早く、一は刃野の手を払ってその場から立ち去った…。

■　■　■

数十分後　風都・とある道路。

「……。」

ジェントルーダーで走りながら、左乃宮一は怒っていた。

かつて自分が旦那と慕っていた人物が名乗っていた称号。

自分が憧れた人たちが名乗っていた称号。

それが…、仮面ライダー、なのだ。

それを、ただの悪党が名乗っているのだ。一の怒りは尤もである。

刃野と別れてからすぐに一はガジェットを放ち、警察でも刃野や右京さんが細かい事を調べている。

「……ふむ。」

だが、目星も無く走り回って探すのも効率が悪い。一は一度休憩しつつ、シケードフォンでパピヨンショットの映像を確認する。

すると…そこには、棘付きの鎧をつけ、騎士の様な仮面をつけた白い体の怪人がバイクで走る姿が映っていた。

■　■　■

同じ頃　風都・園咲邸のリビング。

若菜はリビングで冴子と琉兵衛とテーブルを囲みながら、琉兵衛とチェスをしていた。

「……マープルちゃん……」

だが若菜は、ぼんやりとマープル…この前の事件で会った、一人の探偵の事を考えながら、ポツリとそう呟く。

と、そんな若菜を現実に引き戻すかのように、カタリと音が鳴る。

「…チェックメイトだよ、若菜。」

目の前にいた琉兵衛が、ルークの駒を置いてそう言うと、若菜は今の呟きを誤魔化すように顔を逸らして言う。

「まぁ…私の負けね。」

「フフッ…」

琉兵衛の声を聞きながら、若菜はふと腕時計を見て立ち上がる。

「あら、もうこんな時間？お父様、私仕事に行ってきますわ♪」

「うむ、行っておいで、若菜。」

琉兵衛がそう言うと、若菜は忙しそうに走って部屋から出ていく。

…若菜が部屋から出て言った後、琉兵衛はため息をつく。

「…いつまでも、子供だな。困ったものだ…」

琉兵衛はそう言うと、懐から一本の【R】の刻印が刻まれた金色のメモリ…ルークメモリを取り出す。

「これは…若菜の？」

冴子が驚いた様にルークメモリを見て言うと、琉兵衛はゆっくりと立ち上がってワインを手に取る。

「冴子…私達は……何かな？」

琉兵衛がそう問うと、冴子は立ち上がり、かしこまって言う。

「地球に選ばれた、家族です…お父様。」

「そうだ。…お前はその長女だ。若菜の様に、気ままに生きて行く訳にはいかない。」

琉兵衛のその厳かな言葉に、冴子は直立不動の体勢のまま、緊張しながら言う。

「分かっています。ガイアメモリの販売、開発…全ては順調です。」

「そろそろ…新しいメモリも増やしたいね。」

「も、申し訳ありません。その件も、現在進行中です。」

冴子が頭を下げて言うと、琉兵衛は少し笑ってワインを口にする。

「そういえば…今、街で【仮面ライダー】、とやらが出ているそうだね。」

「は、はい。現在メモリ販売を妨害する【仮面ライダー】を様々な手を使って排除するために…」

冴子がそう言うが、琉兵衛はそれを軽く手で制する。

「いや…少し、思い出したのだよ。昔の【仮面ライダー】のことを…」

「昔の【仮面ライダー】…ですか？」

琉兵衛が懐かしそうにそう言うのを、冴子は怪訝そうな顔で聞き返す。

「うむ。…純正化メモリ、という物は知っているね？」

「…えぇ。制御しやすさを重点に置いたメモリで、その代わりパワーは比較的小さいと聞いています。」

「実はだね…純正化メモリとは、我がミュージアムの作品ではないのだよ。」

「…それは、どういう？」

琉兵衛のその言葉に冴子が聞き返すと、琉兵衛は笑って答える。

「…あれは、ガイアメモリを開発している最中に、偶然発見されたのだよ。」

「…偶然、ですか？」

「あぁ。その時我々が保管出来たのが【ＥＸＣＥＥＤ】。他の【仮面ライダー】に渡ったのが【ＣＲＩＭＳＯＮ】【ＪＥＳＴＥＲ】【ＧＥＮＴＬＥＭＡＮ】。」

琉兵衛が指を折ってそう言うのを、冴子は興味深そうに見ている。

「そして…行方不明になった物が一つ。」

「…行方不明…とは？」

「そのままの意味だよ。あのメモリはいきなり飛び去っていった。名前すら確認できていない。」

「飛び去る…？」

冴子はその意味が分からずに琉兵衛に聞き返すが、琉兵衛

「うむ。そして…三本のメモリにより、この町に【仮面ライダー】が生まれたのだよ。」

「…その、【仮面ライダー】とは？」

「……クリムゾン、ジェスター…そして、ジェントルだ。」

琉兵衛はその三人を思い出して言う。

【真紅の記憶】を持ち、圧倒的な力で全てを打破していく、紅色の武神。

【道化の記憶】を持ち、奇策や小技で場を混乱させていく、虹色の手品師。

【紳士の記憶】を持ち、多彩な攻撃で敵を追い詰めていく、黒色の戦士。

「…まぁ、この話はいいだろう。冴子、これからも頼むよ？」

「か、かしこまりました。」

冴子が一礼するのを見て、琉兵衛は笑ってワインをあおった…。

■　■　■

数分後　風都・高速道路。

一はそこでジェントルーダーにまたがり、シケードフォンからの映像を再度確認していた。

「…よし、ここからが近いですかね。」

一はそう言うと、懐からドゥーツドライバーを取り出して腹部に装着し、マープルに話しかける。

「マープル、体の方は大丈夫ですか?」

「はい。…そもそも私、体は使いませんよ?」

マープルは、事務所でソファに横たわりながら答える。

「それもそうですね…では、行きますよ。」

「はーい。」

マープルはそう返すとアッシュメモリを取り出しスイッチを押す。

―ＡＳＨ!―

そして一は上着のポケットからポイズンメモリを取り出しスイッチを押す。

―ＰＯＩＳＯＮ！―

そして、二人はメモリを構えて同時に言う。

「「変身！！」」

マープルがメモリをドライバーの右スロットに装填し、灰色の小さな光と共に消え、一のドライバーの右スロットに転送される。

一はそれを確認するとメモリを右スロットに装填し、次にポイズンメモリを左スロットに装填し、ドライバーを操作する。

―ＡＳＨ！ＰＯＩＳＯＮ！―

ドライバーから電子音声が発せられると同時にメモリの変身メロディが鳴り、一の体を僅かな灰の混じった風とともに紫の光の欠片が包んでいき…一はドゥーツとなる。

『行きますよ。』

ドゥーツはそう言うと、ジェントルーダーのエンジンを吹かして颯爽とその場から走り去った…。

## Ｉの残光／強盗ライダー（後書き）

えー。勘の良いお方はお気づきかもしれませんが、Ｃｒｉｍｓｏｎ・Ｊｅｓｔｅｒ・Ｇｅｎｔｌｅｍａｎ・Ｅｘｃｅｅｄ…で、最後の逃げた一本というのはもちろん最終フォームのアレ。

…まぁ、この五本選んだのは偶然なんですが、それでも結構いい偶然ですよね。

つまり何が言いたいのか分かった方は、よければ感想の方へ。

それでは。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5524n/

仮面ライダードゥーツ

2012年1月4日06時47分発行